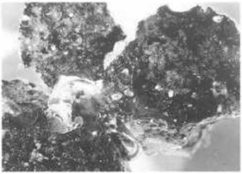
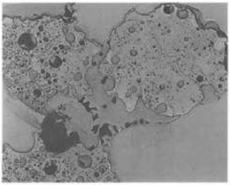
顕微鏡写真

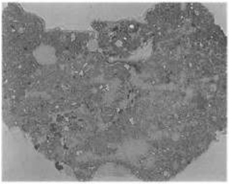
ガラス ×10（1/2縮小）



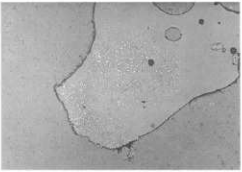
ガラス ×10（1/2縮小）



胎土 ×10（1/2縮小）

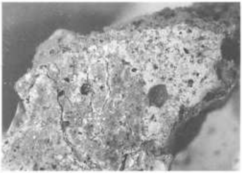


ガラス ×100（1/2縮小）

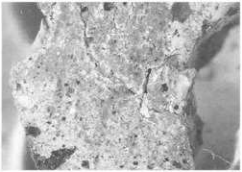


×400（1/2縮小）

胎土 ×10（1/2縮小）



×10（1/2縮小）

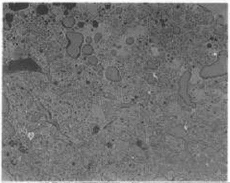


第92図 鍛冶関連遺物の分析調査（長土呂遺跡群）28

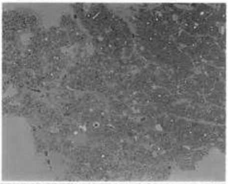
(95-69) 外観写真 (1/2縮小)

顕微鏡写真

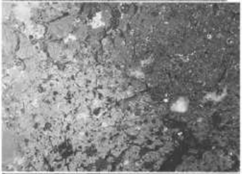
ガラス
×10(1/2縮小)



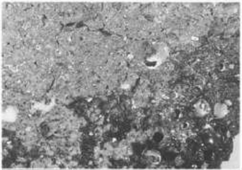
胎土
×10(1/2縮小)



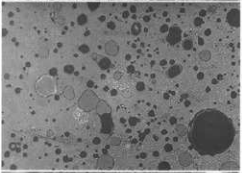
ガラス
×10(1/2縮小)



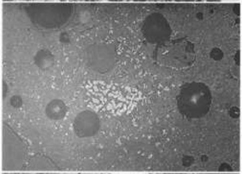
×10
(1/2縮小)



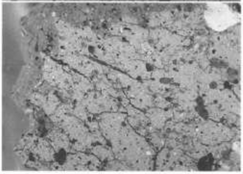
ガラス
×100(1/2縮小)



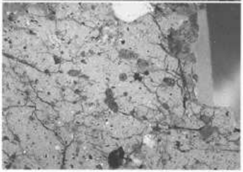
×400
(1/2縮小)



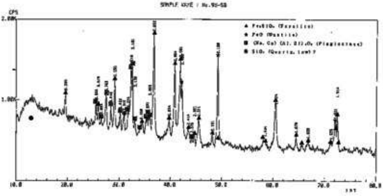
胎土
×10(1/2縮小)

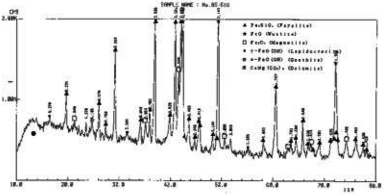


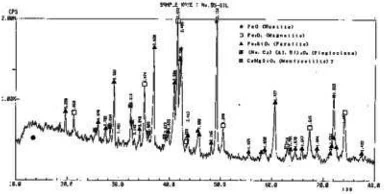
×10
(1/2縮小)

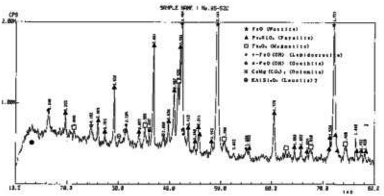


第93図　鍛冶関連遺物の分析調査（長土呂遺跡群）29

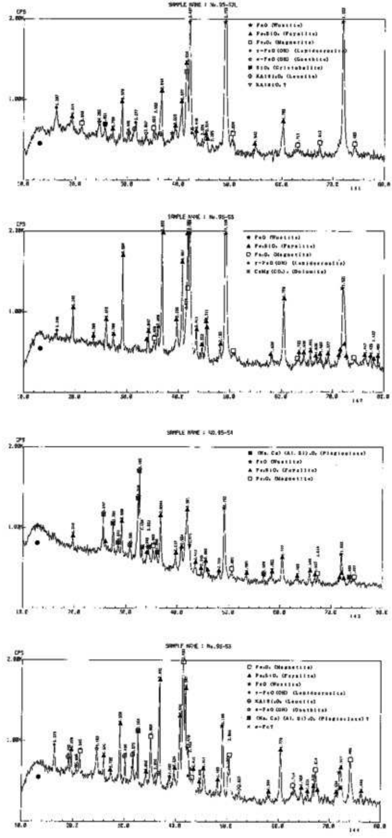




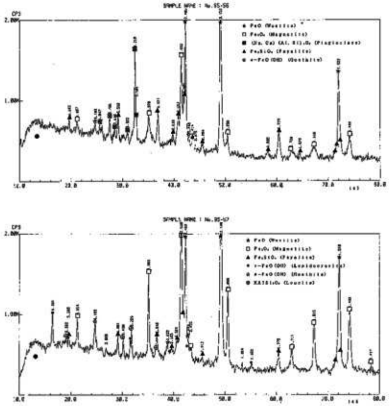




第93図　X線回折による定性分析チャート（1）



第94図　X線回折による定性分析チャート（2）



第95図　X線回折による定性分析チャート（３）

第７表　耐火度試験結果

試料番号	耐火度（SK）	色調	膨　張	試験錐の状況
No.95－68	2 a	茶色	膨　張	ややあばた状
No.95－69	6 a ＋	茶色	膨　張	ややあばた状
試験条件：酸素プロパン炉法				

ゼーゲルコーン温度比較表

温　度（℃）	コーン番　号	温　度（℃）	コーン番　号	温　度（℃）	コーン番　号	温　度（℃）	コーン番　号
600	022	940	08a		3		23
650	021		08	1160	4a	1580	26
670	020	960	07a		4	1610	27
690	019		07	1180	5a	1630	28
710	018	980	06a		5	1650	29
730	017		06	1200	6a	1670	30
750	016	1000	05a		6	0690	31½
790	015a		05	1230	7		31
	015	1020	04a	1250	8	1710	32½
815	014a		04	1280	9		32
	014	1040	03a	1300	10	1730	33
835	013a		03	1320	11	1750	34
	013	1060	02a	1350	12	1770	35
855	012a		02	1380	13	1790	36
	012	1080	01a	1410	14	1825	37
880	011a		01	1435	15	1850	38
	011	1100	1a	1460	16	1880	39
900	010a		1	1480	17	1920	40
	010	1120	2a	1500	18	1960	41
920	09a		2	1520	19	2000	42
	09	1140	3a	1530	20		

注：コーンでは正確な温度の測定はできない。耐火度の数値を概略の温度で示す場合のみ上表の温度が使われる。

第８表　微小硬度計による硬さ試験結果一覧

測定条件

①荷重	200gf
②荷重時間	15 sec.
③測定時間	5 点
④圧子	対面角136° ダイヤモンド正四角錐

測定結果

	硬さ平均値(HV)	c. v. (%)	硬さ最大値／最小値(HV)
95-62	261	12.81	291／214
95-63	457	6.15	490／420
95-64	141	7.82	153／128
95-65	219	1.76	225／215
95-66	137	7.17	153／126
95-67	141	6.80	154／131

第６節　小結

佐久市が主に聖原遺跡として調査し、大規模な律令期の集落の姿があらわれ、しかもその内容たるは想像を絶するような立派なものであった。今回の調査対象域は確かにその一角なのだが、遺構の分布状況はまばらとなり、個々の遺構規模についても総じてひとまわり小さいといえる。その他、掘立柱建物跡の占める割合、遺物そのものの質・量なども劣っている状況であった。全期を通して集落の中心から外れていたと考えられるが、遺跡全体でみるならば、中心部と縁片部の差が明瞭であることから、集落構造をより具体化できる資料となろう。

今回、もっとも古い住居跡は６世紀末葉から７世紀前葉に設定した。これまで、律令期の集落といえば７世紀後半以降を考えるのが一般であったが、これには一考を要し、小規模だがもう少し古い段階から設定しなおしたほうがよさそうだ。浅間山南麓の高位段丘や谷中斜面には、やはり同じような小規模集落が経営されている。こうした一群にあって、成功したものがある時点で律令期集落として転化していく様子が読み取れまいか。

旧河川跡で発見された古墳時代後期の畑跡については、新たな畑作技術の発見と、さらには水田経営だけに頼っていたのではないことを改めて確認することとなり、これも大きな成果といえよう。

その他、特記すべき事項としては古墳時代後期後半の49号竪穴住居跡の構造にある。非常に深く掘り込まれており、幅広の周溝を持つもので、柱穴と周溝間に間仕切り溝を有している。最大の特徴は、壁体に角材を埋め込んだ跡と思われる壁溝または壁柱穴を有しており、住居構造や構築技術の系譜を探る上で興味深い資料となった。

１号鍛冶工房跡については、非常に遺物が多かったのだが、性格上土器の姿がみられなかった。９世紀前半におさまるのか、それとも11世紀代まで降下するのか、残念ながらわからなかった。ただし、我々は土器の編年だけで時期を設定するわけではない。残された鍛冶関連遺物は非常に良好で、故鉄利用の鍛冶業と精錬業から継続される鍛冶業が、同一の工房内の同一の炉の中で操業されており、ほかの遺物もからめてモデル化を図っている。時期がわかるのも、そう遠くはないことだろう。

かつて古墳時代後期のある時点まで中央を流下した大規模な河川跡、また古墳時代末から奈良時代初頭の２号流路、平安時代前半の１号流路、これをもってこの台地から水が流れることはなくなった。現在でも同様である。栗毛坂遺跡群との境界は、明瞭な田切りによって区切られており、下方には蟹沢が流れ、もはや台地上には水をもたらすことがない。当時、栗毛坂遺跡群との堺に小さな谷状のものがあっても、少なくとも９世紀前半までは田切りのようなものが存在しなかったものと考えられる。

第5章　野火附（のびつけ）遺跡

第1節　遺跡の概観

標高744ｍ前後の田切り台地南端に位置する。佐久市・小諸市・御代田町の境が入り組むところで、ここでは小諸市大字御影新田字野火附に所在する。

幅100ｍほどの谷を挟んで、南側には中原遺跡群（『佐久市内その4・小諸市内その2』に所収）が所在し、同じ台地部分の北側一帯には鋳師屋遺跡群に包括される前田遺跡（本書第6節所収及び佐久市教育委員会 1989）や宮ノ反Ａ遺跡群（第7節所収）、あるいは御代田町野火付遺跡（御代田町教育委員会 1985）・小諸市鋳物師屋遺跡（小諸市教育委員会 1988）その他が存在する。また、調査対象範囲からわずか西側の田切り斜面には、かつて野火付古墳が位置していた（小諸市教育委員会 1982）。

この遺跡は、当初未周知で、すでに圃場整備も済んでいた。ただし、一帯は遺跡の密集地であり、多少なりとも遺物が採取できる地点でもあった。用地買収が遅れたため、試掘調査もままならなかったが、平成5年度、長野県教育委員会文化課（現在文化財保護課）が試掘調査を行い、遺跡であることが判明し、日本道路公団東京第二建設局との委託契約の変更を行った。

未周知の遺跡であり、未だその分布範囲は不明である。たとえば御代田町野火付遺跡とは、現状で500ｍほど離れ、一体となるかどうかはわからない。また佐久市鋳師屋遺跡とは約200ｍ離れているからこれも不明のままである。今のところ、これを単独の遺跡として見るしかないが、同じ台地上にある複数の遺跡を総合して“鋳師屋遺跡群”と称しているのだから、これもまた鋳師屋遺跡群野火附遺跡といったほうが適当だろう。鋳師屋遺跡群の南端が明るみに出たということになる。

第2節　調査の概要

用地買収が終了し、平成5年6月14日と15日に長野県教育委員会文化課による試掘調査が行われた。結果、未周知の遺跡であることが判明し、これを野火附遺跡とした。

日本道路公団としては、直ぐにも工事に着工したいとのことであり、6月25日、早々に調査に対応することになった。調査対象面積約4,500㎡である。

遺跡内には2 本の市道及び農道が通過しているが、ともに舗装されており、長期に渡る砂利道による迂回路は適していないとのことで、工事途中に調査することになった。したがって、道路以外の部分を第1次調査、道路部分を第2次調査として行った。

第1次調査では、圃場整備による遺跡の撹乱及びそれによる調査範囲の決定ももくろんで調査に入った。その結果、ほぼ全体に軽石流堆積物上面まで掘り下げられた後、平坦に埋土され、また市道3249号線の北側については軽石流堆積物まで大きく掘り込み遺構は存在しないとの判断に至った。北側については遺跡範囲が定まらなかったが、南側のやや急な斜面には遺構がなく、台地上部に群がる遺構群の展開が認められた。古墳時代の竪穴住居跡13棟、掘立柱建物跡4棟、その他があり、8月26日に調査が終了した。

11月5日から12日、及び12月11日から22日にかけて第2次調査を行った。古墳時代の竪穴住居跡4棟、掘立柱建物跡2棟、その他を確認した。

調査日誌抄

平成5年度

6月14日～15日
長野県教育委員会文化課による試掘調査開始。未周知の遺跡であることが判明。野火附遺跡とする。

6月25日 発掘調査開始。試掘調査で判明した遺構から着手。

7月1日 市道3249号線より北側部分の試掘調査開始。圃場整備事業による攪乱が目立ち、調査範囲を決定。

7月2日 市道3249号線より北側部分の表土剥ぎ開始。

7月3日 市道3249号線より北側部分の表土剥ぎ終了。竪穴住居跡1棟のみ。
市道3249号線より南側部分の表土剥ぎ開始。

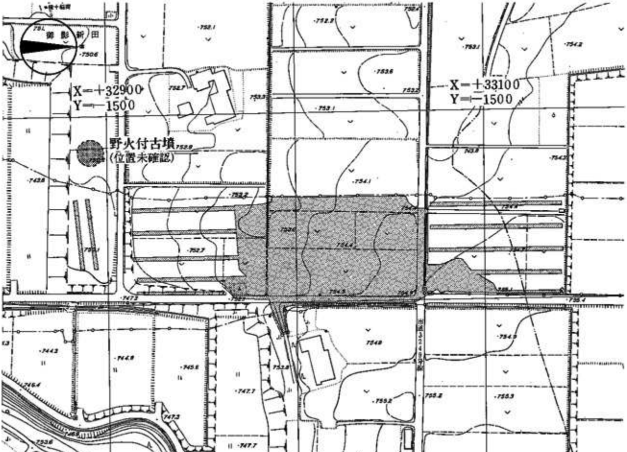
7月10日 表土剥ぎ作業終了。計竪穴住居跡13棟、掘立柱建物跡4棟、その他となる。

7月29日 高所作業車で遺跡全景写真を撮影。

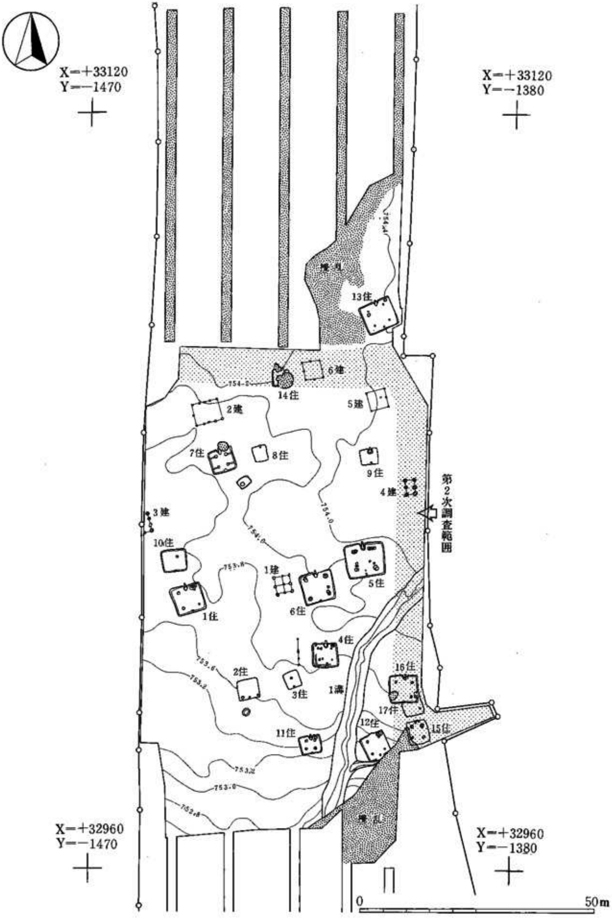
8月26日 第1次調査終了。

11月5日～12日
市道3249号線直下の調査を実施。竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡1棟を確認。

12月11日～22日
遺跡東側の農道直下の調査を実施。竪穴住居跡3棟、掘立柱建物跡1棟を確認。
第2次調査終了。



第1図 調査範囲


X=+33120
Y=−1470
X=+33120
Y=−1380
撹乱
13住
6建
14住
5建
2建
7住
8住
9住
4建
第２次調査範囲
3建
10住
1建
5住
1住
6住
4住
16住
2住
3住
1溝
17住
12住
15住
11住
撹乱
X=+32960
Y=−1470
X=+32960
Y=−1380
0
50m

第２図　遺構配置

第３節　遺構と遺物

1　竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（第３・４図、ＰＬ30・35～38）

７世紀前半段階の住居跡である。

覆土は、周溝を除いて５層に分けているが、１～３層がブロック主体土で人為的な埋め戻し土、ないしは周堤のような盛土が崩落したものと考えている。４層は、一般的に壁際第１層目に認められる、混入物の少ない粘性の高い細砂壌土（黒色土）である。

カマドは、袖下端を掘り残し、以後赤色粘土でつくり上げたものである。袖の先端には、深さ15cm前後のピットを設け、おそらく礫を立石させていたのだろう。これに伴うものかどうかわからないが、整形され、しかも二次焼成を受けた軽石が、床面直上から２点みつかっている。

カマド右脇には、硬質な盛土による周堤をもつ貯蔵穴が存在した。なお、貼床を剥いだところ、その東側の部分にも貯蔵穴らしきピットが存在し、また梯子穴ももうひとつみつかっている。床を貼り替えた時点で、貯蔵穴及び梯子穴を一度つくり直したことが読み取れる。

遺物は、土器についてはとくに記すことはない。ただし、石錘の類をみれば、北東コーナー・東壁中央・出入口部・南西コーナーに認められ、またすべて床面直上であった。

掘方は、中央部及び壁際が一段高いものであった。

2号竪穴住居跡（第５図、ＰＬ31）

遺物はまったく出土していないが、カマドや掘方がなく、また掘り込みも浅いことから、３号竪穴住居跡や10号竪穴住居跡と同じ時期、すなわち４世紀末から５世紀初頭のものと思われる。

覆土は、壁際に粘性の高い黒色細砂壌土がみられ、その上に軽石流堆積物のブロックが主体となる層が堆積している。

住居の主軸方位からみて、南壁中央のピットが梯子穴、南壁両コーナーのものが貯蔵穴と呼ばれるものだろう。

住居跡内の礫は、すべて火山岩質の自然礫であり、床面直上から出土した。人為的な行為であるが、使用された痕跡はない。

3号竪穴住居跡（第５図、ＰＬ31・38）

５世紀初頭の住居跡である。

覆土は、壁際に軽石流堆積物のブロック層が認められるが、これは壁の崩落土と考えたほうがいいだろう。

北壁寄りに炉、南壁中央寄りには梯子穴が認められる。

遺物は、この３点以外、何も出土していない。北壁際の床面直上から出土しており、これを一括遺物とみなし、５世紀初頭という年代を与えた。

4号竪穴住居跡（第５・６図、ＰＬ31・38）

７世紀後葉の遺構である。本跡は、一度作り替えを行っている。

古段階のものは、新段階の貼床を剥いだ時点で確認した。床面自体は残っていないが、掘方として残存し、南西コーナーには周溝が一部残り、あわせて柱穴及び梯子穴が認められた。

新段階のものは、明瞭な掘方をもたず、西壁・南壁側を拡張している。あわせて西側の柱穴及び梯子穴を新たに作り替えている。覆土は周溝を除き２層に分けているが、自然堆積として考えた。

カマドは、新旧とも同一の場所に設けられている。掘方で基底部を床面に出すが、袖自体はすべて赤色粘土で作られていた。この時期の住居としては一般的なものではなく、住居再構築の際、これもまた作り直された可能性もあろう。

貯蔵穴は、北東コーナーに通常のものが見られる。それとは別に北西コーナー付近にも甕の下半部を埋設したものがあり、これも一応貯蔵穴として考えた。なお、後者については新段階の住居で作られたものだろう。

遺物はすべて新段階の住居跡のものである。２がカマドの覆土内、６が埋設土器である。

５号竪穴住居跡（第６・７・８図、ＰＬ31・32・38・39）

７世紀中葉に廃棄された住居跡である。本跡は、カマド位置を変えずに二度の拡張を行っている。

新段階の覆土は、周溝を除き４層に分けているが、３層が粘性の高く不純物の少ない黒色細砂壌土であり、２層が黒色土と軽石流堆積物のブロック層である。また、３層及び４層の壁際の堆積状況をみれば、壁に構造物があったことを想定できる。

カマドは、袖の基底部を掘り残し、先端に長方形に整形された軽石を置き、さらに赤色粘土及び軽石で構築されていた。赤色粘土は貼床上に認められ、順番としては貼床が先となる。

中・古段階の住居跡は、掘方の調査で判明した。床面は残っていないが、掘方として残り、あわせてそれに伴う柱穴及び梯子穴の一部が確認できた。なおＰ$_1$については、軽石流堆積物内に存在する数少ない赤色粘土部分を削り取ったもので、新段階の住居を構築する際に行われたものである。カマドに使用した粘土にでも使おうと思ったのか。

遺物はすべて新段階の住居跡に伴うものである。本来15は、粘土埋設の貯蔵穴として利用されたものか。17は搬入品で、胎土及び調整手法から長土呂遺跡群29号竪穴住居跡６のような丸味をもった底部が想定できる。

６号竪穴住居跡（第９・10図、ＰＬ32・39・40）

７世紀後葉の住居跡である。

覆土は、周溝を除き４層に分類したが、１層を除いては軽石流堆積物及び黒色土ブロックが主体となっているため、人為的な作用があったものと考えられる。なお、２層についてはカマドの崩落土が多量に混入していた。

カマドは、袖の基底部をわずかに掘り残し、貼床を行った後、赤色粘土を用いて本体を構築している。左袖先端には整形された砂岩系の礫を立石させ、またその周辺には同様の礫が床面直上に散在していた。カマドの芯材として利用されたものだろう。

カマド左脇近くには、甕の胴部上半以上を埋設した貯蔵穴が存在した。器の半分ほどしか埋設していないが、残存状況が良く、もしかすると周囲に粘土などによる保護施設が存在したのかもしれない。

柱穴は各々小穴として確認したが、実際には南西隅を除いて複数のピットからなっていた。上屋の建て替えを行った可能性もある。

掘方は、カマド及び住居中央部を除き、一段低く掘り下げられたものであった。南東コーナーの柱穴側

に、深さ−45cmほどのピットが存在したが、対応するものがなく、少なくとも柱穴ではないらしい。
遺物は、8が埋設土器、4は坏身の可能性あり、6は丸底甕地帯からの搬入品、13が弥生時代から古墳時代前期初頭の打製石斧を転用したものである。また12は古墳時代中期初頭のものが混入したのだろう。

7号竪穴住居跡（第11・12図、ＰＬ32・40〜42）

7世紀前葉以前に廃棄された住居である。最近の撹乱によって、北東隅が壊されている。
覆土は、周溝を除き3層に分けたが、2層が軽石流堆積物と黒色土のブロック層、3層が粘性の強い黒色細砂壌土である。
カマドは、袖を地山掘り残しとし、貼床した後、袖先端に無調整の軽石を立石させ赤色粘土で保護し、地山掘り残し部分の上段には白色及び赤色粘土の混土層を盛っている。また煙道部は赤色粘土によるものである。
やや住居主軸寄りに配された柱穴には間仕切り溝が伴っていた。ただし、貼床上面では見つからず、掘方の調査段階で判明した。その理由は不明である。
掘方は、周囲をわずかに低く掘りくぼめたものであった。
遺物は、4が木葉底をもつものだが実測図にある器高は信頼できるものではなく、また6・7は弥生時代から古墳時代前期初頭にかけての打製石斧であり、石錘群と同地点で出土しているためこれに転用したものと考えている。なお、入り口部付近には3層上面に崩れ落ちた石錘群が認められた。

8号竪穴住居跡（第12図）

遺物が一点もなく時期不明である。ただし、北壁には散乱した粘土を伴ったカマドの残骸が残っており、カマド出現期以降の時期であることは確実である。また、本遺跡には古墳時代前期末から中期初頭及び古墳時代後期後半以外の遺構・遺物がなく、本跡のように掘り込みが浅く柱穴や掘方が存在しなくとも、やはり古墳時代後期後半の遺構と考えたほうがいいだろう。

9号竪穴住居跡（第12図、ＰＬ33）

1は木葉底をもち直立可能で、7世紀とみても一見古そうな形態にみえるが、これは床から23cmも浮いている。ビニール袋1袋ほどの土器が拾えており、いわゆる武蔵甕の破片も一定量出ているので、7世紀中葉以降の竪穴住居跡である可能性が高い。
覆土は三角堆積したものであったが、いずれもブロック層が主体となっており、やはり盛土のようなものが常に堆積していたものと思われる。
カマドは、袖部分を掘り残し、以後赤色粘土で構築している。
掘方はない。

10号竪穴住居跡（第13図、ＰＬ33・42）

1が古墳時代前期末葉、2〜5が中期初頭、6〜13が後期後半を中心とした時期のものである。床面中央からやや浮いて一括出土したが、炉を有する遺構なので後期後半にはならない。前期末から中期初頭に廃棄された竪穴住居と考えられる。
覆土は、周溝を除き2層に分類したが、層高が厚いにもかかわらず第2層が粘性の高い黒色細砂壌土であった。この上面付近から遺物が一括して出土し、すくなくとも古墳時代後期後半までは第2層しか堆積していないような穏やかな環境であったらしい。

柱穴・掘方はない。

11号竪穴住居跡（第13・14図、ＰＬ33）

１の存在から６世紀後半から７世紀前半の遺構と考えられる。

覆土は、１層が黒色土ブロック層、２層が軽石流堆積物のブロック層が主体となり、３層が粘性の高い黒色細砂壌土である。また、２層にはカマド崩落土が混入していた。

カマドは袖を地山掘り残しとし、貼床した後赤色粘土で構築している。袖の先端には長方体に整形された軽石を埋め込み、その上に同様の軽石を天井石としていた。なお、図上では天井石がふたつのように記載されているが、これは後に折れたものである。また、南東コーナーの柱穴付近から、一見してカマド石と考えられる軽石が床面から出土しているものの、本跡に伴うものかどうかは不明である。

北東コーナーには貯蔵穴が存在する。

掘方は、周囲が一段深く掘り下げられていた。

遺物は、１・２以外に１袋ほどが採取されている。坏破片がなく、１を以てして年代を決めるほかなかった。

12号竪穴住居跡（第14図、ＰＬ33・43）

７世紀中葉の住居跡である。南東隅には撹乱が入り、また南壁については圃場整備時に削られている。

覆土は１・２層ともブロック層が主体となる。

カマドは煙道部の一部及び燃焼部が残存していた。赤色粘土も散乱していたが、とくに袖として残るものではなかった。また、北東コーナーには周堤を巡らした貯蔵穴が存在し、その周囲から土器が出土している。

掘方はカマド部分を除き全体に浅く掘り下げられており、周囲が一段深いようなことはなかった。

遺物は、２～５が貯蔵穴周辺の床面上から一括出土している。３は正位の状態で出土しているが、これには煮沸痕が明瞭であった。５もやはり正位で出土しており、依存状況からすれば貯蔵穴的な役割をしていたのかもしれない。ただし、粘土などによる保護施設があったかどうかはわからない。また、東壁中央付近から、軽石製のカマド石と思われるものが床面直上から出ている。

13号竪穴住居跡（第15図、ＰＬ33・43）

７世紀前葉の住居跡である。

覆土は、第２層に軽石流堆積物の小ブロックが少量混入していたが、とくに盛土の埋め戻しとは考えにくい。

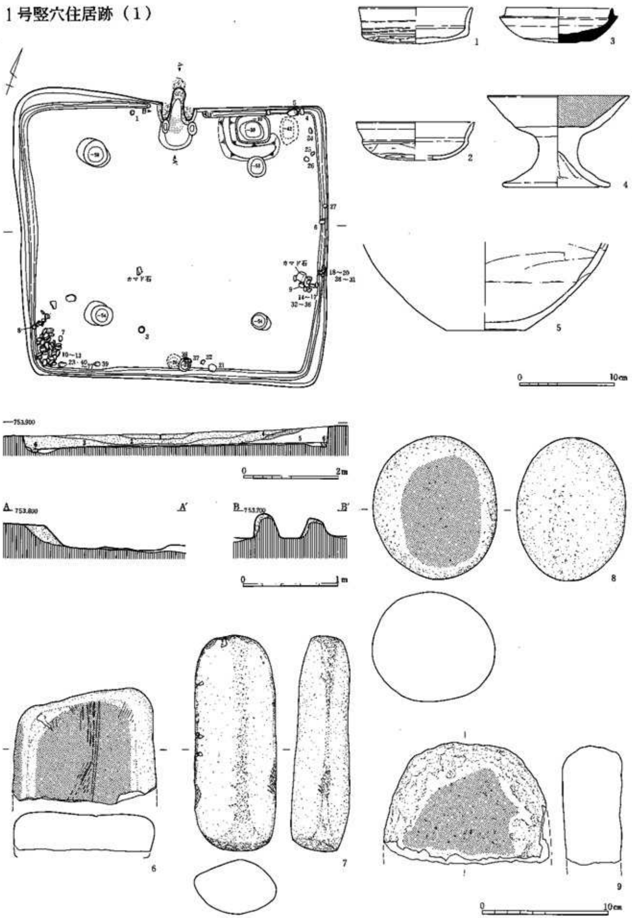
カマドは、地山を掘り残して袖とし、貼床をした後赤色粘土で構築するものであった。袖の先端については左右に差があり、右袖の場合は安山岩系の礫を埋め込み、すべて赤色粘土でカバーしているのに対し、左袖については同じ場所にもかかわらず、掘り残された地山の上に整形された軽石を置いていた。

北東コーナーには貯蔵穴が存在するものの、その上段には床面と同レベルで甕の胴部上半以上が正位で残存していた。これも貯蔵穴としての機能を果していたのだろうが、残念ながら覆土の観察は行わなかった。ただし、土器の外面全体に粘土が付着していたので、これによる保護施設が存在したことが想定できる。

掘方は周囲がわずかに深く、またカマド燃焼部についてはとくに深く掘り込まれていた。

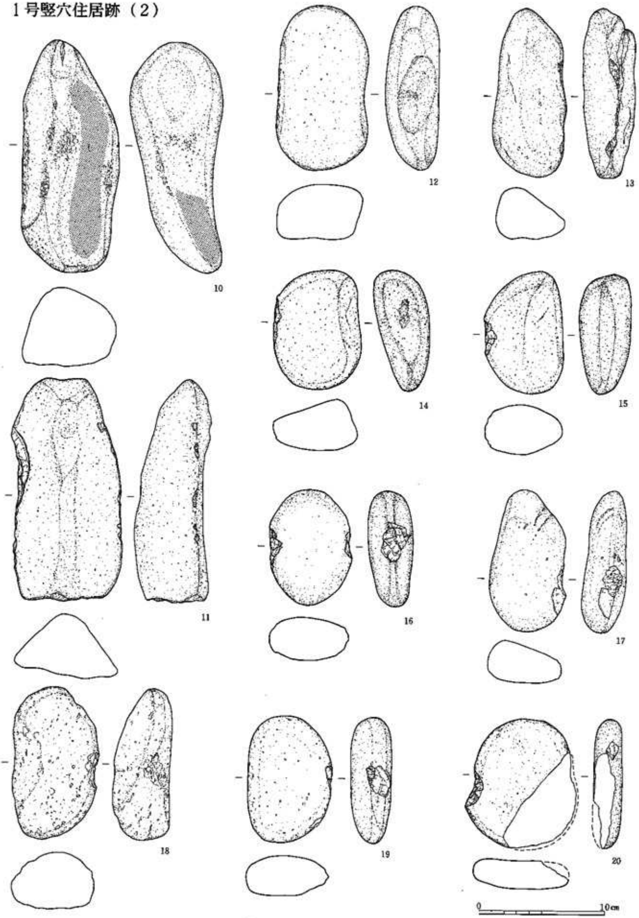
遺物で、７は貯蔵穴の上位にあったもので年代を決めるものではない。また８・９は古墳時代中期初頭

1号竪穴住居跡（1）



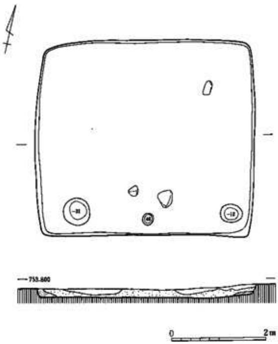
第3図　竪穴住居跡（1）

１号竪穴住居跡（２）

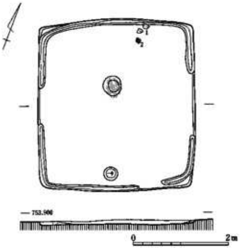


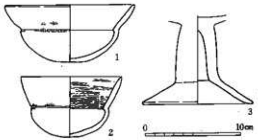
第４図　竪穴住居跡（２）

2号竪穴住居跡

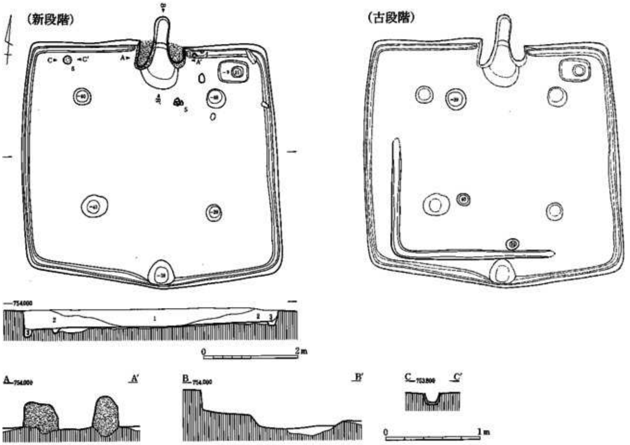


3号竪穴住居跡



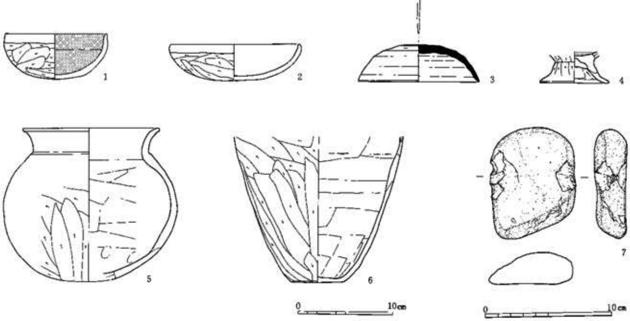


4号竪穴住居跡（1）



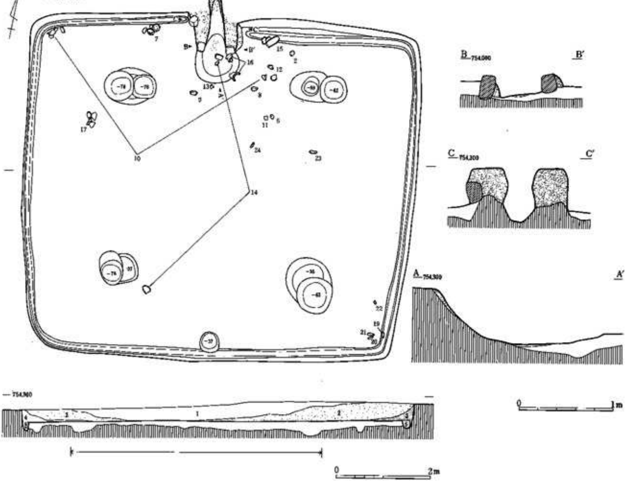
第５図　竪穴住居跡（3）

４号竪穴住居跡（２）



５号竪穴住居跡（１）

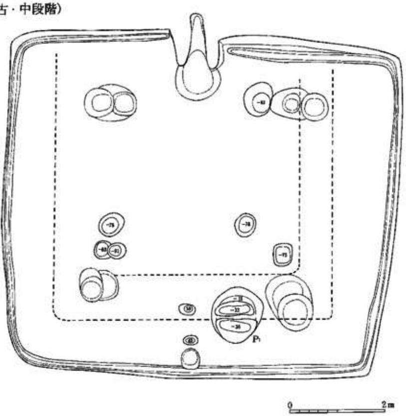
（新段階）

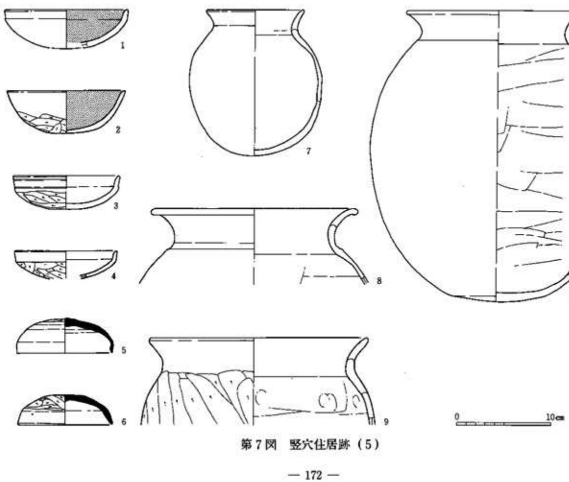


第６図　竪穴住居跡（４）

5号竪穴住居跡（2）

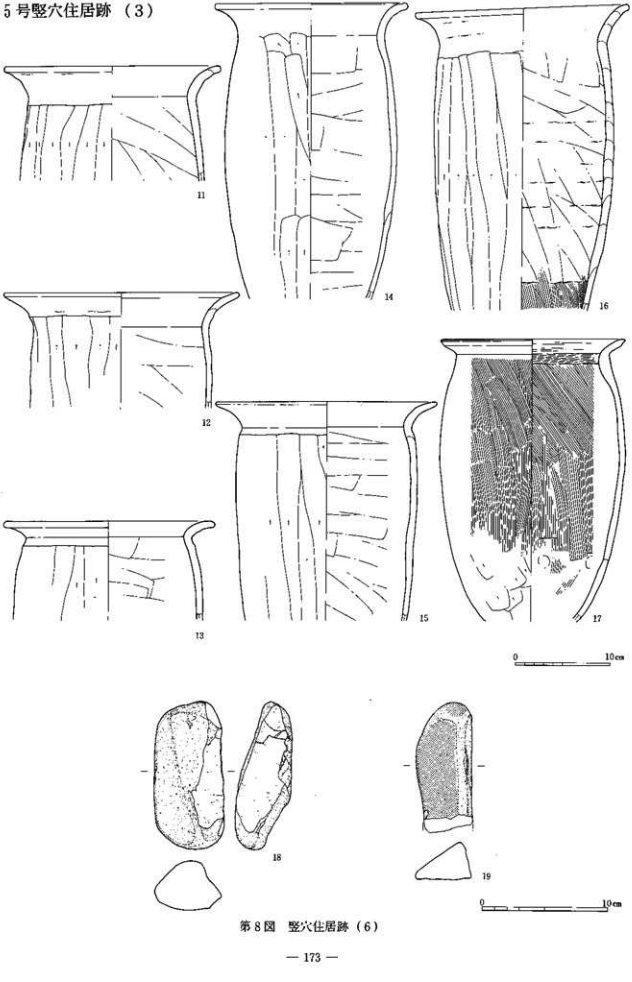
（古・中段階）





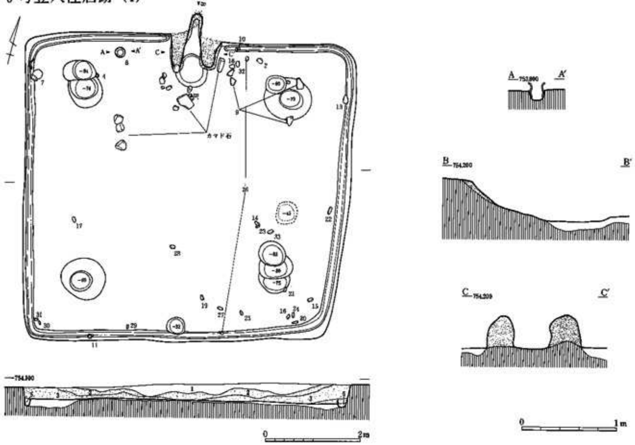
第7図　竪穴住居跡（5）

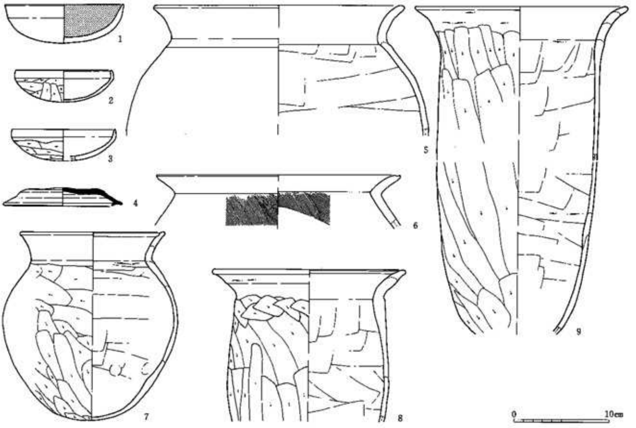
5号竪穴住居跡（3）



第8図　竪穴住居跡（6）

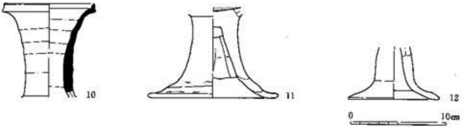
6号竪穴住居跡（1）

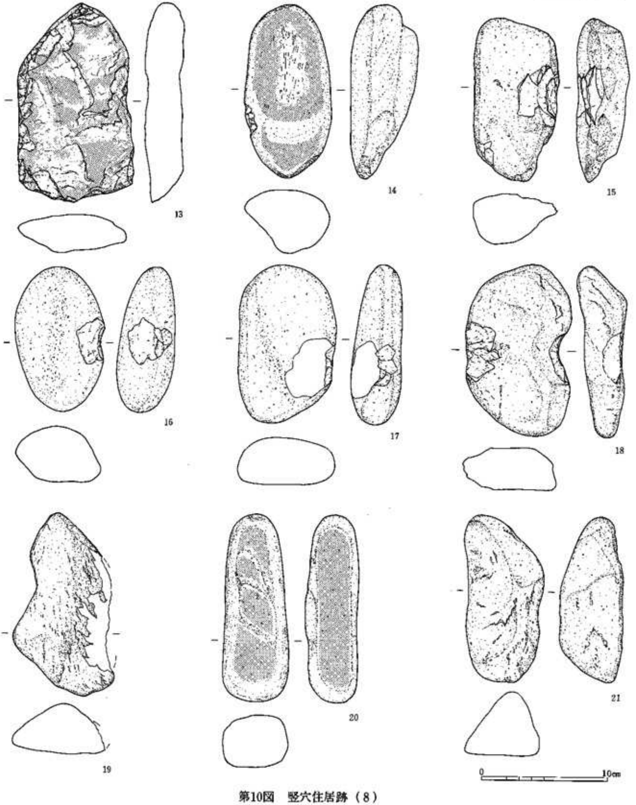




第9図　竪穴住居跡（7）

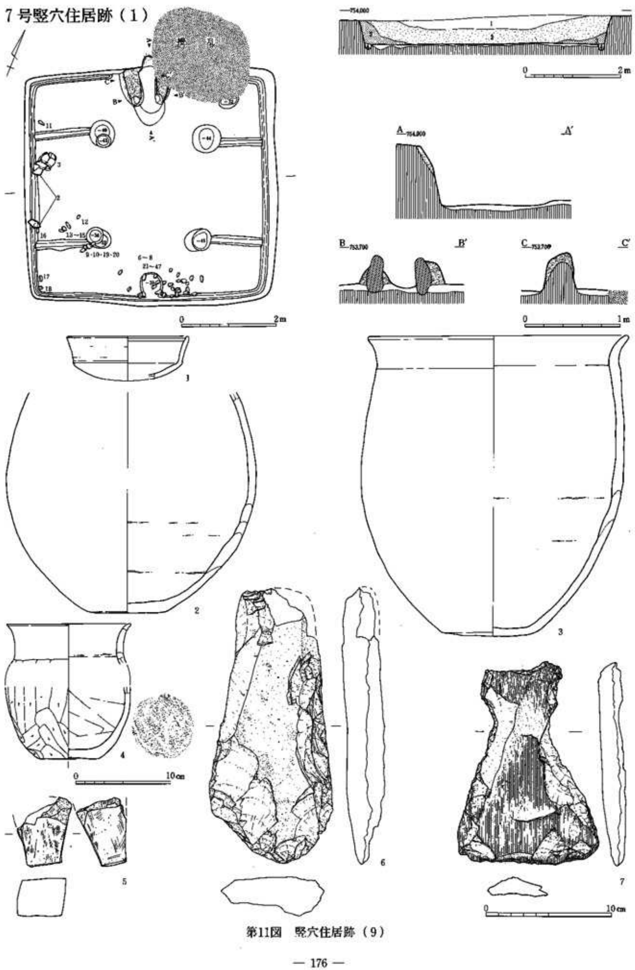
6号竪穴住居跡(2)





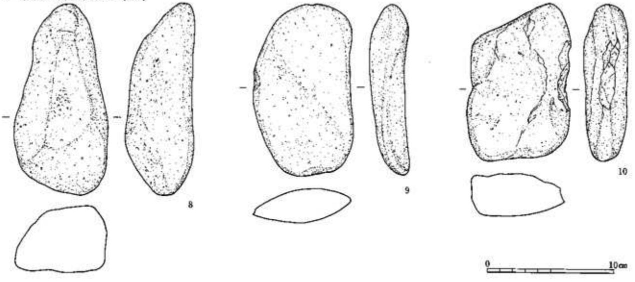
第10図　竪穴住居跡（８）

7号竪穴住居跡（1）

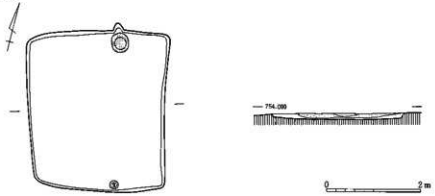


第11図　竪穴住居跡（9）

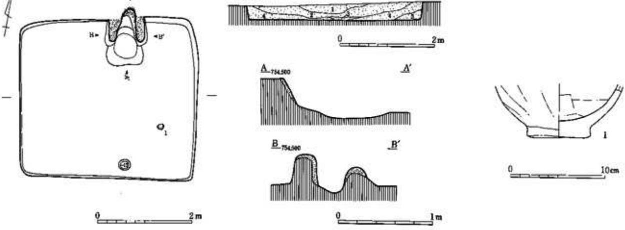
7号竪穴住居跡（2）



8号竪穴住居跡

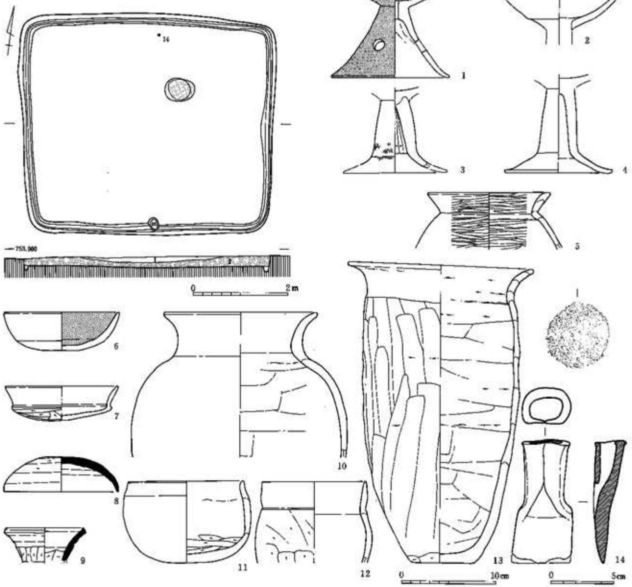


9号竪穴住居跡

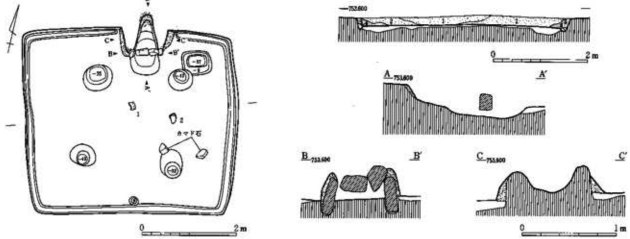


第12図　竪穴住居跡（10）

10 号竪穴住居跡

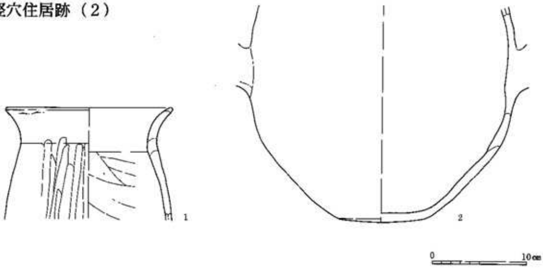


11 号竪穴住居跡（１）

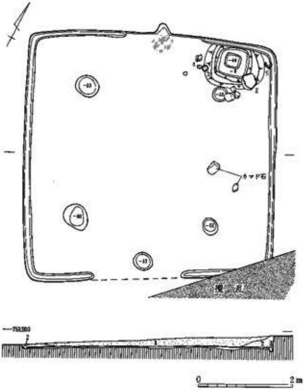


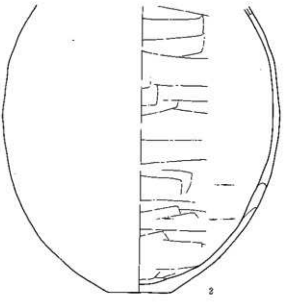
第13図　竪穴住居跡（11）

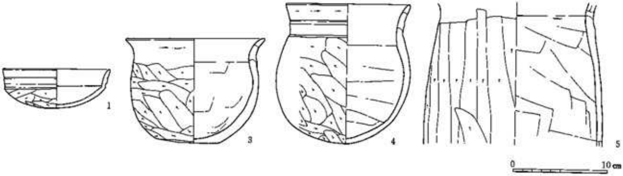
11 号竪穴住居跡（２）



12 号竪穴住居跡

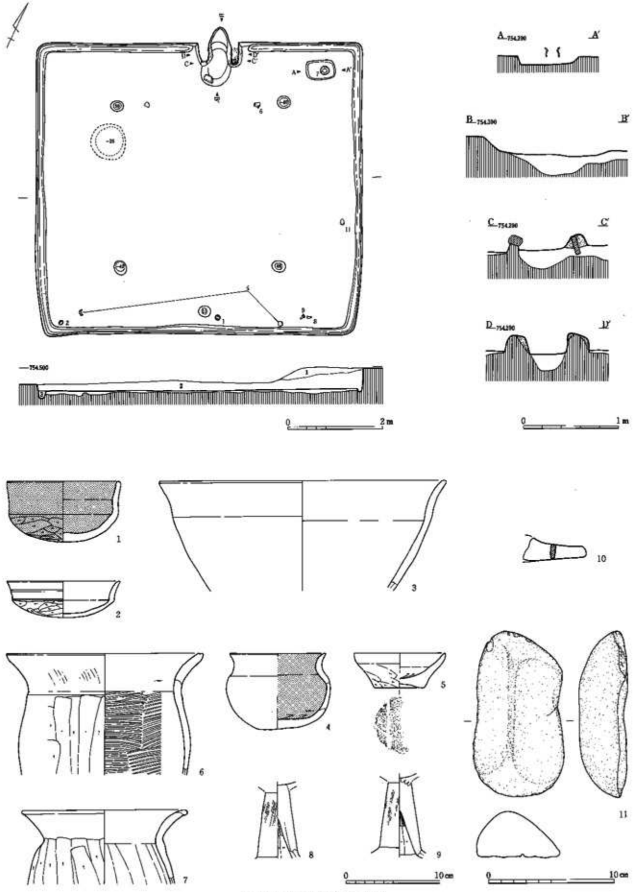






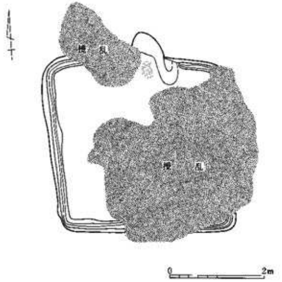
第14図　竪穴住居跡（12）

13号竪穴住居跡

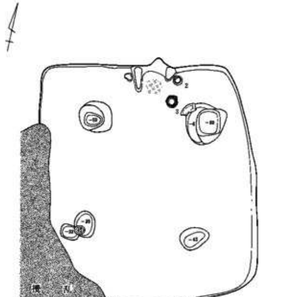


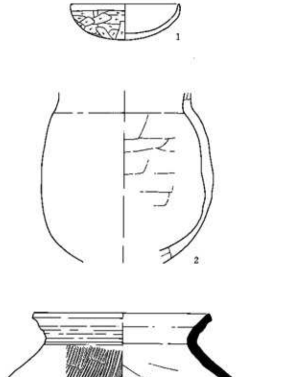
第15図　竪穴住居跡（13）

14 号竪穴住居跡



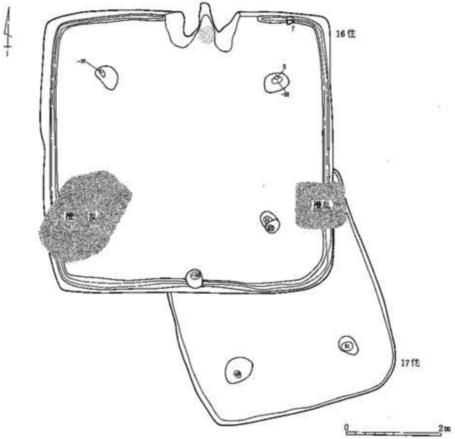
15 号竪穴住居跡



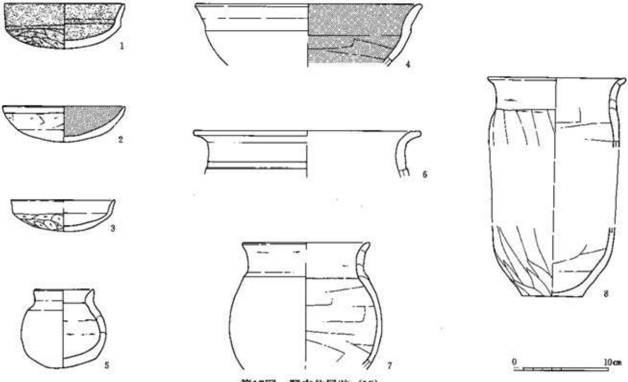


第16図　竪穴住居跡（14）

16・17号竪穴住居跡



16号竪穴住居跡



第17図　竪穴住居跡（15）

のもので、ともに床面直上から出土したが坏部及び脚裾部をきれいに欠いているので、何かに転用したものと考えられる。

14号竪穴住居跡（第16図）

土器の実測資料がないものの、ビニール袋1 袋ほどの遺物が採取されている。時期決定資料に乏しいが、いわゆる武蔵甕の破片が主体となっているので、７世紀中葉以降のものと考えている。

本跡は大部分を壊されているが、調査担当者の判断に拠れば粘土採掘坑だという。しかし、セクションをみれば住居が埋まった後に掘り返されているので、整理担当者はこれを攪乱とした。

覆土及びその他の施設は不明である。カマドを有するが、これについても構造がよくわからない。

15号竪穴住居跡（第16図、ＰＬ43）

７世紀後葉の遺構である。南西隅を攪乱によって壊されている。

覆土は観察しておらず、掘方も下げていない。カマドの構造も不明である。

遺物は、２・３がカマド右脇から出土している。ともに正位で出土し、２は胴部完形、３は胴部上半以上完形であった。貯蔵穴として機能したものだろうか。

16号竪穴住居跡（第17図、ＰＬ43）

７世紀前葉の新しい段階から中葉にかけての住居跡である。17号竪穴住居跡を切ってつくられている。

覆土は不明であり、掘方も調査していない。カマドは、写真をみるかぎり、袖を粘土で構築しているようだが、その芯部は不明である。

遺物は、５が北東隅柱穴内から出土している。８はより古相的なタイプであり、もしかすると17号竪穴住居跡のものかもしれない。

17号竪穴住居跡（第17図）

本跡からは実測可能な遺物は出土していない。10片ほどの土器を採取しているが、７世紀前葉を下限とする古墳時代後期の甕ばかりであった。

覆土・掘方の調査は行っていない。

２　掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡（第18図、ＰＬ34）

２間×２間の総柱式のものである。P_4～P_8は、平面形が小さく深さも浅いのが特徴である。

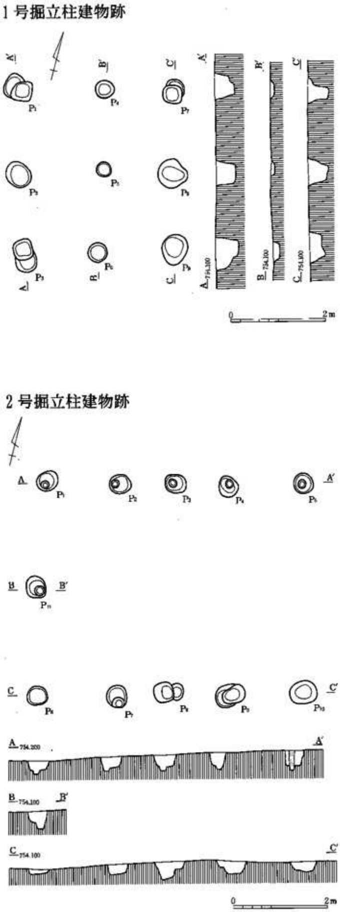
覆土はいずれも同じで、黒色細砂壌土が主体で一部軽石流堆積物のブロック層が混入するものであった。また、柱痕は確認できていない。

遺物は出土していないので時期不明である。

２号掘立柱建物跡（第18図、ＰＬ34）

４間×２間の側柱式のものである。P_2～P_4・P_7～P_9間が近い位置関係にあるのが特徴である。P_{11}と対になるピットはみつからなかったが、本来存在したものだろう。

覆土は１号掘立柱建物跡に等しい。P_5にのみ幅10cmほどの柱痕が判明したが、平面では確認できな



第18図　掘立柱建物跡（1）

かった。

遺物は出土していないので時期不明である。

3号掘立柱建物跡（第19図）

西側が調査区外となっているため、東西が2間以上、南北が3間の側柱式ものとしかいえない。

P_3が最も高い標高で確認できたので、この上端を0とし深さを算出している。

覆土は観察していない。遺物がなく、時期は不明である。

4号掘立柱建物跡（第19図）

3号掘立柱建物跡と同じ理由で、P_4の上端を0とし深さを算出している。

一見、1間×2間の掘立柱建物にみえるが、建物の西側がちょうど第1次と第2次調査の堺となっており、もしかすると2間×2間の総柱式のものであったかもしれない。また、P_4～P_6が若干浅めとなっているので、1号掘立柱建物跡のことを考えれば、逆のことも考えられよう。ただし、P_1～P_4・P_3～P_6間がほかよりも広めとなっているので、1間×2間と考えるのも不思議でない。

覆土は観察していない。遺物がなく、時期不明である。

5号掘立柱建物跡（第19図）

1間×1間を基本とするようだが、東壁のみ2間となるか、それともたまたま土坑と重複するのかわからない。いずれにしても、1間×1間の割りには柱穴間が3.9m前後もあり、しかも小さな掘方しか残っていないので、壮大な建物ではなかったらしい。

深さは、P_5の上端を0とし計算している。

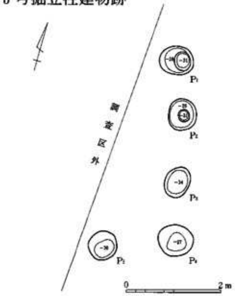
覆土は観察していない。遺物がなく、時期不明である。

６号掘立柱建物跡（第19図）

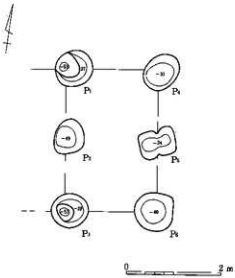
２間×２間の側柱式のものである。これも小さな掘方をとどめるだけで、壮観な建物とはいえない。また、東西列と南北列とでは、95°～96°の角度となっており正確な正方形とはならず、さらにＰ$_4$及びＰ$_5$は東西列よりも若干外に飛び出していた。線対称的な不正６角形を呈している。

深さはＰ$_3$の上端を０とし算出した。覆土は観察していない。遺物もない。

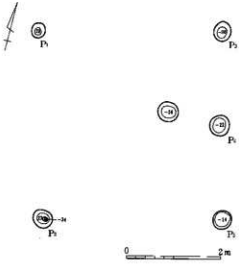
３号掘立柱建物跡



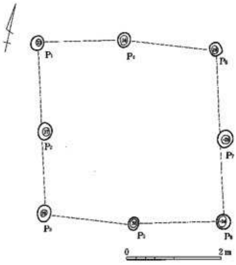
４号掘立柱建物跡



５号掘立柱建物跡



６号掘立柱建物跡



第19図　掘立柱建物跡（２）

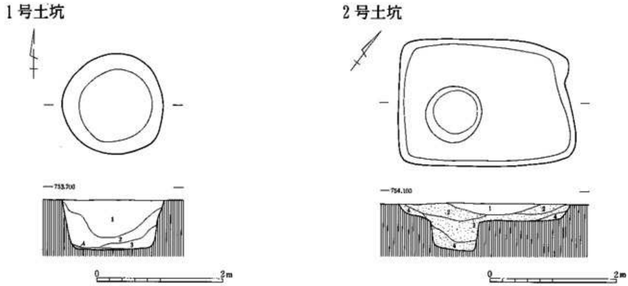
3　土坑

1号土坑（第20図、ＰＬ34）

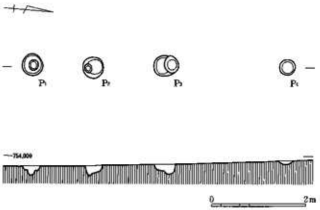
円形に掘られたもので、覆土は自然堆積をしている。ただし、4層のみ砂層が主体となっているため水性堆積物である可能性が高い。使用目的は不明である。土器片がわずかに拾えているが、古墳時代後期後半でも7 世紀初頭を越えるものはない。

2号土坑（第20図、ＰＬ34）

長方形に掘られたあと、さらに円形の土坑が入り込んだものである。セクションをみればわかるように、これらはひとつの遺構として考えられる。第2層以下にはブロック層が主体となり、周辺に盛土が存在していたのかもしれない。使用目的は不明である。遺物も出土しておらず、時期不明である。



第20図　土坑



第21図　1号柵列跡

4　柵列跡

1号柵列跡（第21図）

P_1～P_3が確実に遺構であり、P_4については定かでない。一応、柵列として判断したが、P_1～P_3を掘立柱建物の側柱とすれば、それに対応するものが4号竪穴住居で壊されているという可能性もあろう。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。

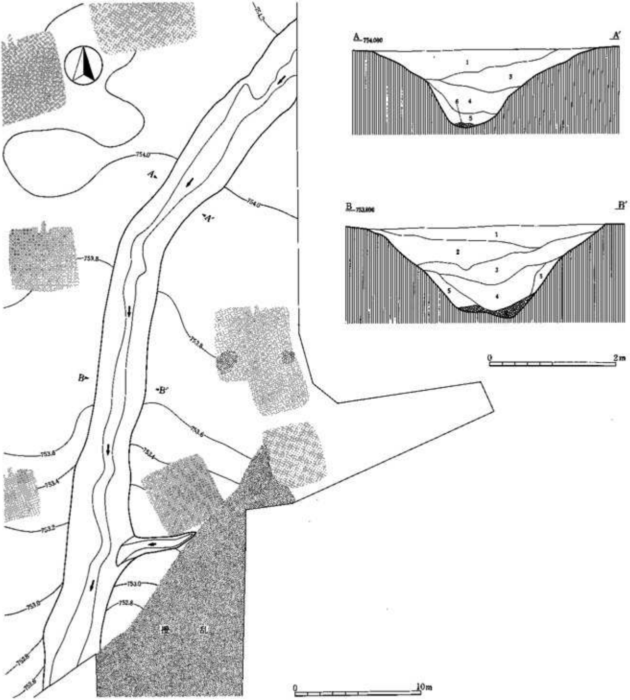
5　溝跡

1号溝跡（第22図、ＰＬ34）

概ね箱薬研掘り状に落ち込んでいるが、これが人為的なものかどうかはわからない。

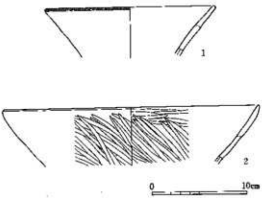
6層には純粋な砂礫層が堆積しており、明らかに流路として機能していることが判明しているものの、その範囲は狭く、また流砂からみれば流れが弱く一過的なものと判断した。5層にも砂の堆積が認められるが、以後自然堆積を繰り返す。1層中から古墳時代後期後半の遺物がわずかに拾えることができた。

以上の内容からすれば、一過的な流れに対しこのような溝状のものが成立するのか、仮に遺構だとすれ



第22図　1号溝跡

ば古墳時代後期後半より前のものであることが確実で、これを必要とする集団が存在したのかという疑問が生じてくる。周辺の調査を行わなければ結論が出ないところであろう。



第23図 遺構外遺物

6 遺構外遺物（第23図）

古墳時代後期後半のものが圧倒的に多いのだが、ここでは希有な弥生時代から古墳時代前期のものだけを取り扱いたい。

1は、13号竪穴住居跡の覆土から出土したもので、口唇部には縄文を付している。弥生時代中期後半のもので唯一の資料であった。

2は、1号土坑から出土したものだが、本跡は古墳時代後期後半に属するため混入したものと考えられる。古墳時代前期の東海系の高坏である。

第4節 小結

古墳時代前期末から中期初頭の集落については、これまでの鋳師屋遺跡群の中には認められなかったものである。鋳師屋遺跡群をさらに遡らせる結果となったが、残念ながら極めて小規模で、しかも短期のうちに終焉を迎えたとしか考えられず、住居の構造自体も一般的な集落に比べると単純極まりない。やはり鋳師屋遺跡群の本当の範疇は、古墳時代後期後半以降のことなのであろう。

古墳時代後期後半の集落自体も、7世紀末葉以降のものがなく、これも短い期間のうちに終わりを遂げたムラと考えている。遺構の重複もただ一か所しか認められておらず、同様に小規模なものであったのだろう。ただし、初期の鋳師屋遺跡群の様相を呈する点は興味深いものがある。これを起点にして、以後鋳師屋遺跡群や周辺に広がるほかの律令期集落が成立したものと考えられる。律令期集落の初期の姿がここでも明らかとなった。

古墳時代後期末から奈良時代初頭には、南斜面に野火付古墳が構築されることになった。これが風水思想にのっとったのかどうか不明だが、背後の尾根頂部には集落を形成するのがまずかったのだろう、これをもって集落は終わりを遂げ、墓域を構成することになった。

第6章　前田（まえだ）遺跡

第1節　遺跡の概観

佐久市・小諸市・御代田町境に位置する通称“鋳師屋遺跡群”の一部に相当する。第5章で記述した野火附遺跡及び第7章の宮ノ反A遺跡群もこれと同様で、田切り地形が発達した中でも、比較的広大な平坦面に立地するものである。

この台地は、田切り地形によって北・西・南方を画され、さらに北東から南西にのびるゆるやかな低地に沿って帯状・島状の微高地がみられる。点々と連なるこの微高地に遺跡が存在しており、これをもって鋳師屋遺跡群と総称している。未だその範囲は不明で、所狭しと遺構が立ち並んだ状態が続いている。

この遺跡群は、かつて長野県営小田井・御影地区圃場整備事業対象地区内に一部該当し、昭和59年度から昭和63年度までの5 年間に約500,000㎡にも及ぶ範囲調査が実施され、内、佐久市・小諸市・御代田町を合わせて120,000㎡ほどの面的調査が行れた。調査の便宜上、小字名を利用して佐久市鋳師屋・前田遺跡（佐久市教育委員会　1985・1988ａ・1988ｂ）、小諸市鋳物師屋遺跡（小諸市教育委員会　1988）、御代田町野火付・前田・十二・根岸遺跡（御代田町教育委員会　1985・1987・1988・1989）などに分かれているが、市町境を取り除けばこうした名称は決して適していない。なお、上信越自動車道建設にともなう調査では、佐久市内に該当することからこれを「前田遺跡」としているが、少なくとも小諸市鋳物師屋遺跡、及び、県道を挟んで隣接する宮ノ反A遺跡群（第7章所収）と同一の遺跡であると考えられよう。

鋳師屋遺跡群からは、これまで5世紀後半から6世紀初頭及び6世紀末葉の小集落も存在しており、これもまた新たなる動態を指し示すものだが、敢えて遺跡の特徴ではない。7世紀後半から始まる大規模集落の出現が目を見張り、以後10世紀初頭をもって画然と姿を消す姿態、すなわち律令期に育まれた計画村落であった点が注目されている。その後、佐久市前田遺跡・鋳師屋遺跡で中世の集落（13世紀～15世紀）も経営されている。

特異視される律令期の集落については、これより南東には数多くみられるが、おそらくその東北端の集落であること、本遺跡周辺を古東山道及び令制東山道が通過したとも考えられること（一志　1956）、奈良時代以後、この内部もしくは東側に長倉駅や長倉牧などが設置されているが、その駅戸郷が取りあえず見当たらないこと、実際に佐久市前田遺跡からは「長倉寺」・「長倉□」という墨書土器が認められること、並びに御代田町野火付遺跡や佐久市前田遺跡では実際に多数の埋葬馬が検出されたことなどから、これを駅戸郷ないしは牧の管理に携わる集団の住まいとみる向きが強い（御代田町教育委員会　1987・1988・1989、堤　1986・1992・1998など）。

第2節　調査の概要

本来、前田遺跡は佐久市分に含まれることから、調査対象範囲は県道借宿・小諸線の両脇に存在した。ところが、圃場整備事業が終了し、従来の境界を使用することが困難となり区画を変更することとなり、県道借宿・小諸線から北側が小諸市分となった。これにより前田遺跡の調査対象面積は4,000㎡から2,000㎡と縮小し、小諸市分は宮ノ反A遺跡群として調査を行った。

なお、当該地はすでに圃場整備事業が終了しているため、当地は発掘調査が終了しているはずであった。実際には、昭和62年度に調査された佐久市前田遺跡C地区の西端部に相当するが、当時の事業設計から地山は削平しないとのことであり、また折からの水害で表土剥ぎをしたまま、再び埋め戻されていた。

平成5年5月6日、圃場整備事業終了後、再度表土剥ぎ作業に着手した。5月12日は、表土剥ぎの最中に遺構検出作業も行い、翌5月13日にはともに終了した。竪穴住居跡6棟・掘立柱建物跡5棟・その他が発見され、また南側の一角には浅い谷状地形が入り込み、遺構分布範囲がこれよりも南側に認められないことも判明した。

5月17日から遺構調査に着手し、5月28日には遺構配置図を作成、6月10日は航空撮影を実施した。6月11日には高所作業車をリースし、全体写真及び各遺構の完掘状態の写真を撮影した。6月14日以降、竪穴住居跡の掘方の掘削も開始し、以下掘立柱建物跡及び土坑の調査を進め、7月2日にコンタ図を作成し、7月6日すべての作業が終了した。

調査日誌抄

平成5年度

5月6日　表土剥ぎ開始。

5月11日　周辺のU字溝から水があふれ、さっそく水害に合う。

5月12日　遺構検出作業に着手。テント設営。

5月13日　表土剥ぎ終了。遺構検出作業終了。竪穴住居跡6 棟・掘立柱建物跡6 棟・その他を検出。

5月17日　遺構掘り下げ作業開始。

5月20日　降水が続き、新たに暗渠及び畦畔から多量の水が入り込む。

5月24日　基準杭設定開始。

5月28日　遺構配置図作成。

6月10日　航空撮影実施。

6月11日　高所作業車リース。写真撮影実施。

7月2日　コンタ図作成。

7月6日　発掘調査終了。

第1図　遺構配置

第３節　遺構と遺物

１　竪穴住居跡

１号竪穴住居跡（第２図、ＰＬ45・47）

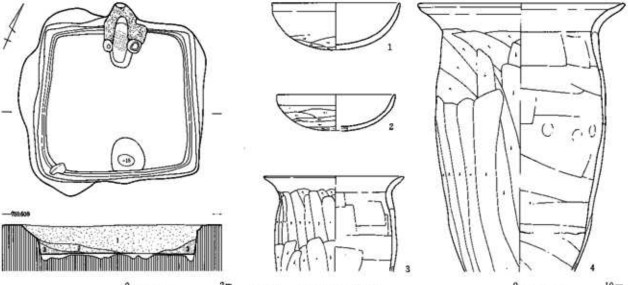
１・２の内屈口縁坏、及び４の甕から７世紀第４四半期頃に廃棄された住居と考えられる。

覆土は、３層が不純物の少ない黒色砂壌土であり、以後黒色土及び軽石流堆積物のブロック層が堆積している。１・２層は、明らかに人為的な埋め戻しと考えられよう。

カマドは、床面構築後、白色粘土を主体につくられており、袖及び煙道部の一部が残存していた。焚口部には礫を立石していた様子が読み取れる。

掘方は、全体に10cm程掘り込んでいるが、とくに特徴はない。梯子穴ともとれるピット、及び周溝は、掘方掘削時に見つかったものである。

遺物の出土量は少なく、とくに床面からの遺物は皆無であった。実測可能な遺物も、すべてカマドから出土したものである。３は頸部外面に粘土が付着していることから、カマド構築材に転用された可能性もあろう。また１は、一見完形のように見えるが、底部中央に内面から穿たれた小孔が認められ、併せて外面中位に焼成痕が顕著に存在するため、坏転じて甑に似た機能も想定できよう。なお、平面図に記してある南東隅にある礫は、床から10cm程浮いたところから出土した軽石の自然礫である。



第２図　１号竪穴住居跡

２号竪穴住居跡（第３図、ＰＬ45・48）

１・３の存在から、９世紀第１四半期後半の公算が大きいが、須恵器坏が出土していないので第２四半期前半という可能性もあろう。

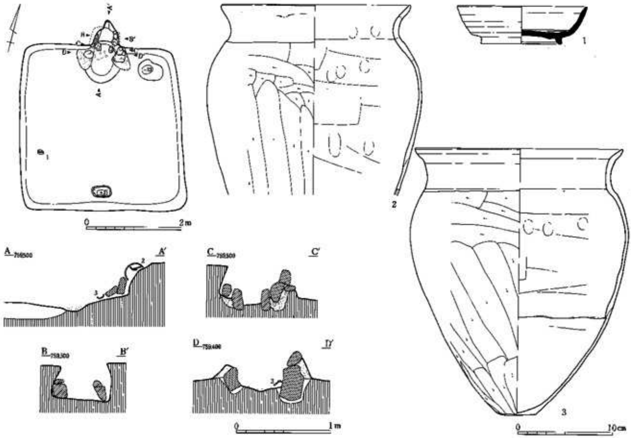
覆土は、三角堆積を基本とした6 層に分類したが、いずれもブロック層ばかりが認められ、やはり人為的な埋め戻しと考えられる。

カマドは天井部を除いて良好に残っており、軽石で組まれたカマド縁片部、及びその周囲を取り囲む粘土で構成されていた。袖部には整形されたものを立石させ、煙道部は平積し、また燃焼部には面取りされた軽石を２個並べている。二つ掛けのカマドであることがよくわかる。なお、２は煙り出しから出土して

いるので煙道部に転用したもの、3もそれよりやや手前の覆土上層部から出ているので、原位置をを保っていないが、煙り出しに利用されたものかもしれない。

出入口部には、上面が床から3cm程浮かせた状態で安山岩質の礫を埋め込んでいたが、これが当時の出入口施設かどうかわからない。住居廃絶時に埋められた可能性もあろう。カマド右側にあるものは、不整形ながら貯蔵穴であろうか。

掘方はカマド部及び北西コーナーを除き、20～30cm程、比較的平坦に掘られていた。



第3図　2号竪穴住居跡

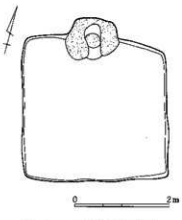
3号竪穴住居跡（第4図、PL46）

奈良時代以降の住居跡であることは確かだが、細かな年代を推定し得る遺物が出土していないので、時期不明と言わざるを得ない。

覆土は観察していないものの、検出面から10～15cm程度で床面に達し、非常に浅めの住居跡である。掘方は、カマド燃焼部及び焚口部に認められるが、住居全体には存在しない。また、カマド以外にはとくに施設がなく、簡便な住居跡である。

カマドは、天井部を除いて良好に残っている。煙道も残存しているため、本来、煙り出し部も残存しているのだろうが検出できなかった。白色粘土と黒色土を混入して構築されている。

遺物は微量で、武蔵甕と須恵器甕の胴部破片が出土しただけである。



第4図　3号竪穴住居跡

4号竪穴住居跡（第5図、ＰＬ46・48）

１・２の存在から８世紀前半に廃棄された住居跡であるが、５を以て第２四半期を中心とした時期ではないかと考えている。

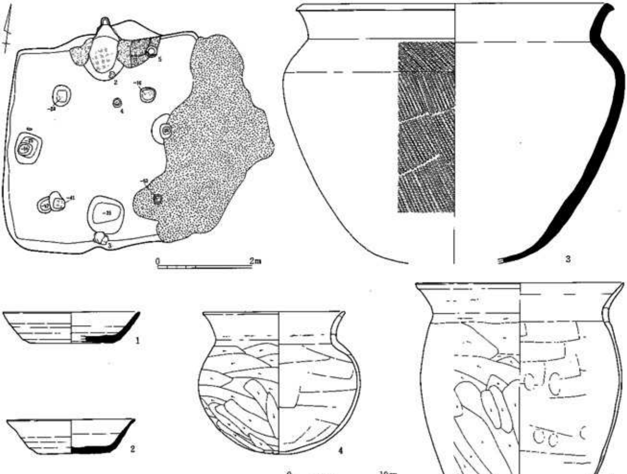
住居東側を粘土採掘坑と２号掘立柱建物跡に切られている。なお、２号掘立柱建物跡は本跡の床面まで達していない。

覆土は、カマド部分を除いて黒色土のブロック層からなり分別できない。明らかに人為的な埋め戻しと考えられる。床は、南側のみ２枚認められているため、張り替え作業を行ったことが確実だが、あわせて柱を２本柱から４本柱に設定し直している。柱については、掘方からしてともに角柱と捉えられており、柱痕が残る南側のものから見れば、４・５寸程度のものが想定できる。

掘方は、住居全体に認められ、10～15㎝で平坦に掘られている。ただし、カマド燃焼部のみ深さ20㎝程度となり特に深い。なお、北東コーナー付近では、明らかに白色粘土を採掘した痕跡が残っており、これをカマドに利用したものと考えられる。

カマドは、床面形成後に白色粘土で袖を形作っていた。また右袖の右側には、袖形成以後、黒褐色粘土を敷き、その上端に合わせるように５の甕を正位に置いていた。一種の貯蔵穴及び棚状施設の発見といえる。

４は完形だが、胴部下位に小孔をもっており、もしかすると一般的な甕とは異なる機能を持ち合わせていたのかもしれない。５は、いわゆる貯蔵穴として機能していたのだが、胴部下半はカマド内から出土しており、貯蔵穴を作る際、胴部下半をカマド構築材に転用したものと思われる。



第５図　４号竪穴住居跡

5号竪穴住居跡（第6図、PL46・48）

本跡は、一度拡張を行っている。構築時期は不明だが、須恵器坏の形態から、9世紀第2四半期でも決して古い段階のものではない時期に廃棄されたものと考えられる。

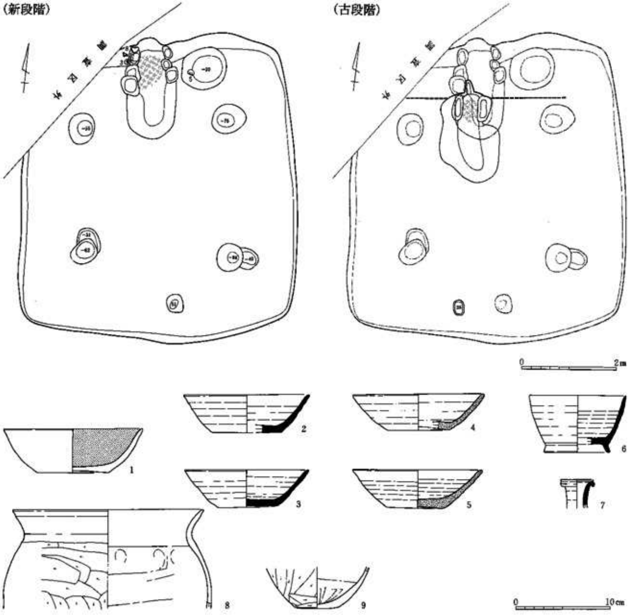
古段階のものは、床面以下のものが残存しているが、柱穴が存在していないので、正確な規模などは不明である。ただし、梯子穴とおぼしきピットが存在するし、また周辺をやや深めに掘り込む掘方の存在でおよそ形態が判明している。それからすれば、住居の東北側だけを拡張した可能性が強いだろう。

カマドは火床部のみが残存していた。燃焼部は床面よりも15～20cm程低く、その両脇にはカマド石を置いたのだろうか、落ち込みが認められた。

出土遺物はない。

新段階の住居跡は、古段階の床に対しておよそ10cm弱盛土して床面が形成されている。覆土は、カマドを除いて3層に分類したが、淘汰がよくブロック状のものは一切認められなかった。

カマドは、石組みのものであることが判明している。石が残るのは左側一番奥であるが、掘方を見れば



第6図　5号竪穴住居跡

ともに3個の石を立石していたのだろう。なお、8はカマド構築材に転用したものであり、時期的には9世紀第1四半期を超えるものではない。

出土遺物はすべて新段階の住居跡から出土した。テンバコ1箱分が出土しているものの、形を成すものが少なく、またほとんどが覆土中から出土している。

6号竪穴住居跡（第7図、PL46・48）

4の須恵器坏の内面底径から9世紀第2四半期の所産と考えているが、隣接する5号竪穴住居跡も第2四半期後半と考えているので、同時には存在しないはずである。9の口縁部、及び坏では土師器が主体となる第3四半期にも一部入り込む時期かもしれない。

本跡は一度住居範囲を拡張している。旧来のものは、床の一部・カマド・梯子穴などが残存しており、おそらく全体を拡張したものらしいが、とくに北壁・東壁を格段と広げている。

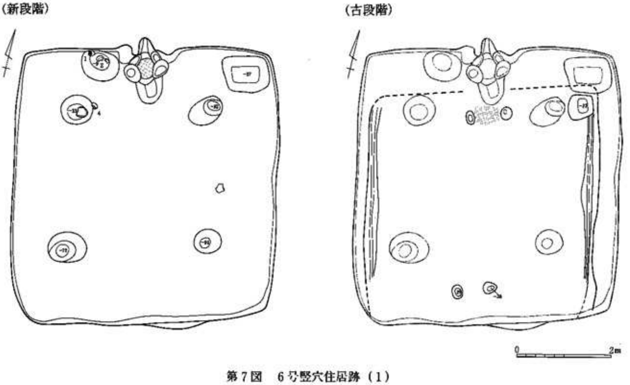
旧住居跡には掘方がない。カマドは、北半が住居拡張の際、掘方として削られているので全体像はわからないものの、袖の焚口部分には礫を立石させていたらしい。出土遺物はない。

新段階のものは、旧来の床面を東・西側に広げ、逆に北・南側を一段下げて拡張し、全体には旧住居の床面より12cm前後高い位置まで貼り床し、床面を構成している。覆土は、黒色土を主体とした単層であるが、褐色土ブロックを多数含んでいるため人為的な埋没土と考えている。

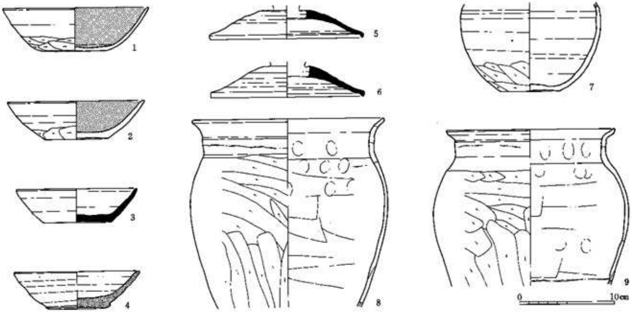
カマドは、少なくとも袖部石組みのものを想定している。袖奥を地山掘り残しとし、燃焼部付近に袖石を立石させた掘り込みが認められた。また、8・9はカマド崩落土から出土しているため、本来、煙道部に転用されたものに違いなかろう。

北東コーナーの柱穴には、床面と同レベルで偏平な割り石を置いていた。礎石状のものともとれるが、ひとつだけなので何とも言いがたい。

出土遺物は、カマド及び貯蔵穴以外には微量である。なお、3は明らかに混入品、4は火襷と黒斑がなく、肉厚並びにざらついた傾向が強い軟質須恵器である。



第7図　6号竪穴住居跡（1）



第8図　6号竪穴住居跡（2）

2　掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（第8図、PL47）

2×3間の側柱式のものである。検出レベルがもっとも高いP₄上端から深さを算出している。いずれも柱痕が明瞭であり、一辺15cm内外の方形柱穴が巡っていた。時期不明である。

2号掘立柱建物跡（第8図、PL47）

2×3間の側柱式のものである。標高がもっとも高いP₁の上端を0とし深さを算出している。4号竪穴住居跡及び粘土採掘坑と重複しており、本跡がもっとも新しい。

掘方の平面形は方形を基本とし、また比較的規模も大きいし、深さもほかの掘立柱建物跡に比べればより深い。比較的壮観な建物であったに違いなかろう。柱痕はすべて判明し、幅17cm前後の方形を呈していた。時期は不明である。

3号掘立柱建物跡（第8図、PL47）

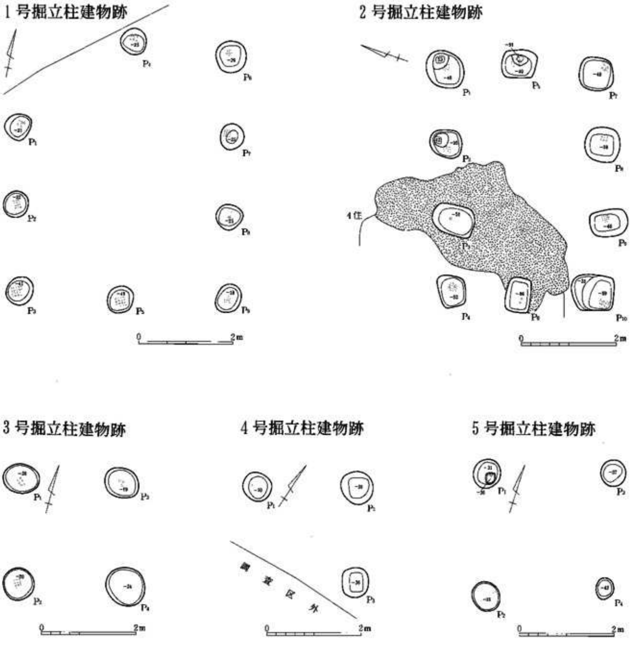
1×1間の側柱式のものである。P₄を除いては柱痕が判明し、およそ幅20cmの方形を呈していた。遺物は出土せず、時期不明である。

4号掘立柱建物跡（第8図）

全体を調査していないが、南側に自然流路が存在するため、おそらく1×1間のもので、南北方向を桁行としていたものと思われる。掘方は方形を基本形とし、またP₁にのみ15cmほどの平面形方形の柱痕が認められた。時期は不明である。

5号掘立柱建物跡（第8図、ＰＬ47）

1×1間の側柱式のものである。西側の掘方にだけ柱痕が認められ、幅20cmで方形を呈していた。時期は不明である。



第9図　掘立柱建物跡

3　粘土採掘坑（第1図）

8世紀第2四半期の4号竪穴住居跡が埋没した後に掘り込まれ、これを再度埋め戻し、以後時期不明の2号掘立柱建物跡によって切られるものである。ただし、2号掘立柱建物跡自体、10世紀以降のものでないことは、本遺跡群に存在することから確実で、したがって8世紀第2四半期から9世紀代のものと考えられる。

深さは、最高で検出面から62cmをはかり、これは住居の掘方よりも10cm程深い。また、住居跡の埋設土を掘り返したにもかかわらず、見事な採取方法で、西側から緩やかな傾斜で掘り始め、住居から外れた東側をオーバーハングさせて抉り取っていた。東壁側には白色粘土がふんだんに認められ、おそらくこうした壁体の状況を知り得た人間が行ったのではないかと考えている。この住居が、まだ完全に忘れさられない内におきたものであろう。

4　土坑（第1図）

調査区周辺には中世の遺構が存在しないため、すべて古代の遺構と考えているが、出土遺物がなく時期不明である。形態は様々だが、とくに記す内容ではない。なお、9～11号土坑には柱痕が認められ、また9号土坑と10号土坑及び10号土坑と11号土坑の軸が直角方向となっているため、掘立柱建物跡の一部である可能性もある。8号土坑や12号土坑も同様で、掘立柱建物跡の一角かもしれない。

第4節　小結

時期が判明したものは竪穴住居跡ばかりであるが、やはり古墳時代後期末から平安時代前葉のものであった。こうした状況は、佐久市や小諸市の調査と変わらず、いかにも遺跡の一端を調査したにすぎない。

ところが、今回の調査は二度目の表土剥ぎを行ったわけだが、そこには重い傷痕が残っていた。埋め戻し時に行われたのだろう重機の爪痕が方々に認められ、一部には竪穴住居跡かとおぼしきものまで確認できた。発掘調査されないまま圃場整備された部分は広域に及んでいる。事業の遂行と文化財保護という難しい問題ではあるが、現地でのより慎重な対応が求められよう。

第7章　宮ノ反A遺跡群

（みやのそり）

第1節　遺跡の概観

第6章で記述したように、本遺跡群も実際には鋳師屋遺跡群の一部に該当する。小諸市鋳物師屋遺跡・佐久市前田遺跡と同様で、また御代田町十二遺跡も同じ微高地上に立地するものである。これから北は、現状で幅100ｍ、深さ20ｍほどの田切り地形が存在し、今では「しなの鉄道」が通過している。向かい合う段丘面には下前田原遺跡群（第8節所収）が営まれている。鋳師屋遺跡群の範囲は、なお拡大しつつあるが、今回調査の対象となった地点は、おそらく遺跡中心部にほど近い箇所の北端部に相当するものと思われる。遺跡群の内容については第5・6章を参照されたい。

調査対象域は、既に県営小田井御影地区圃場整備事業が終了していたが、その終了時点、平成2年の段階で従前の境界の区画変更が行われ、遺跡南端の県道借宿・小諸線以北の小地区を佐久市から小諸市側へ、また遺跡北端の「しなの鉄道」側寄りを小諸市から佐久市へと移譲した。各章で記すように、ここでは市町単位に遺跡名称を与えており、㈶長野県埋蔵文化財センターとしてもそれに融通してきた。したがって、当初とはまったく逆の形であっても、実際には小諸市側の宮ノ反A遺跡群と佐久市側の前田遺跡の両者の発掘といえるかもしれない。

ところで、区画整理事業が行われる以前、調査対象範囲のほとんどの場所を占める小諸市側では、残念ながらここを遺跡として認知しておらず、隈なく圃場整備事業が行われてしまった。現状で認知される宮ノ反A遺跡群は本対象地点より西側約200ｍの地点を東端とし、かつ南西に下る狭長な遺跡群といえる。この遺跡群は、既に宮ノ反遺跡（小諸市教育委員会　1985）や宮ノ反A遺跡群（小諸市教育委員会　1994）として律令期の集落の姿が報告されているが、本来これと同一視されるのかどうか疑問が生じる。本来、今回の対象地域のような地点は佐久市前田遺跡同様鋳師屋遺跡群内部の構造であって、今のところまだ繋がりが認められない従来の宮ノ反A遺跡群と同じ目でみてはいけないであろう。

一方、宮ノ反B遺跡というものが、調査対象地点から東、わずか40ｍほどしか離れていない地点に存在した。畑2枚ほどで、区画整理事業でここは佐久市となったため今はもう消滅している。旧来、ここは佐久市との堺になっているため前田遺跡との関連で考えていたらしい。とすれば、今回の対象範囲はいくら範囲が狭くとも、内容的には宮ノ反B遺跡として認知したほうが適切だったのかもしれない。

圃場整備事業が行われ、あわせて周辺部が大規模に発掘調査されたが、調査対象域周辺は試し掘りされないまま整備事業が進行し、また区画整理事業を行い遺跡名の変更も余儀なくされた。我々としてもいかように対応していいのかわからず、結果的に当時の文化課と道路公団が契約した“宮ノ反A遺跡群”という言葉をそのまま引用した。

第2節 調査の概要

周りの自動車道工事が着実に進むなか、平成5年中途、ようやく地権者の同意を受け発掘調査に対応することとなった。周辺は圃場整備事業が済んでいることから大規模な発掘調査が行われているが、前節でも紹介したように、ここでは一切立ち入ることがなかった。9月1日から試掘調査を始めると、夥しい量の律令期集落の姿が露となり、全面的な調査が必要となった。

9月3日から表土剥ぎを開始した。調査対象範囲はすべて圃場整備がすんでいるので、いわゆる黒色土以上は一度除去されており、したがって始めから軽石流堆積物上面まで否応なく下げざるをえなかった。

用地内にプレハブなどの施設を設けたこと、ならびに未だ残件が存在したことなどから9月18日に第1次表土剥ぎが終了した。ちなみに、以後、プレハブ用地・残件部分を第2次表土剥ぎとしているが、調査の段階からすれば、県道借宿・小諸線から排水路の間は11月2日にJVに明け渡したし、また排水路北側については11月16日以降新規のプレハブ用地として埋め戻すなど3次に分けて行った。

以前から中世の遺構が北端部に存在することが知られていたのだが、9月28日、中世の堀跡が確認され居館跡であることが判明した。以後、第2次表土剥ぎで遺構が密集することがわかった。

11月14日の夕方には、突如集中豪雨が到来し、発掘現場で切断したU字溝から水が溢れだした。現場全体が河川の如き状況となり、あわせてセクションベルトの崩壊や残された遺物の喪失や損壊、カマドや壁の崩落といったことも起きている。

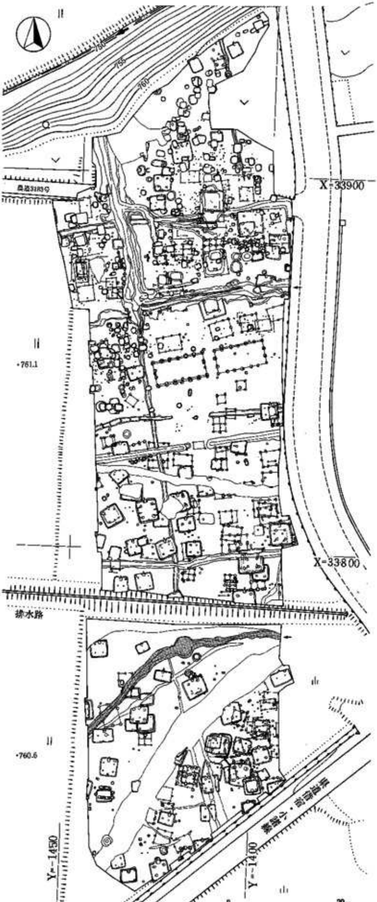
11月20日以降、最終的に最後の第2次表土剥ぎを行った。3間×6間の掘立柱建物跡が2棟確認でき、その背後にも2間×4間の掘立柱建物跡が列をなして検出できた。以前から存在が確認できていた溝の一群は、実はこれを取り囲むもので、古代官衙跡であることが証明できた。

12月18日には現地説明会、12月27日には航空撮影を行い、1月6日にすべての作業が終了した。調査面積10,000m²である。

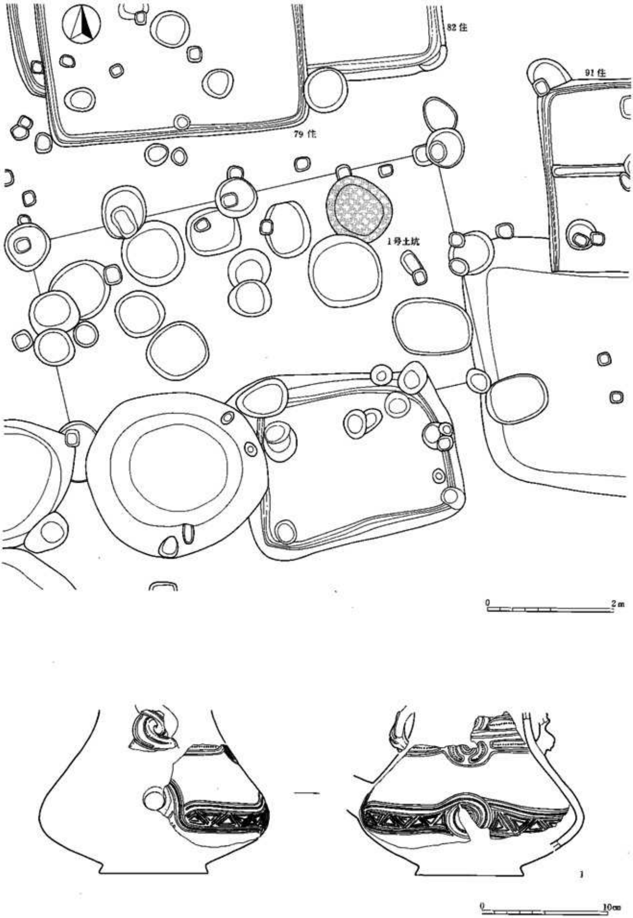
調査日誌抄

平成5年度

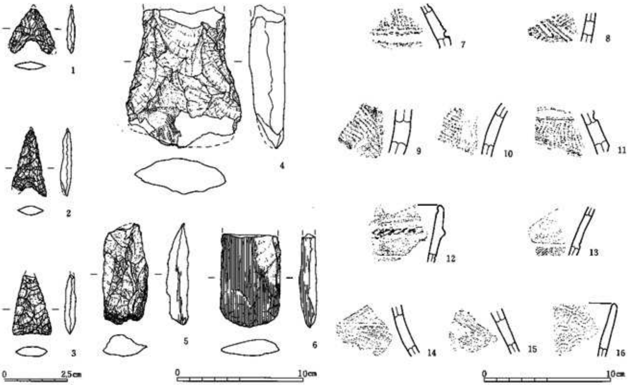
9月1日	試掘調査開始。竪穴住居跡数棟を検出。
9月2日	試掘調査継続。竪穴住居跡を多数検出し、夥しい量の律令期集落であることが判明。
9月3日	南隅から表土剥ぎを再開。
9月13日	作業員を投入。
9月18日	一部中世の遺構が存在していることが判明。建物跡が存在することが判明。第1次表土剥ぎ終了。
9月20日	基準杭設定開始。
9月28日	中世の居館跡の存在が判明。
10月8日	排水路から農道3183号線間の残件部分の表土剥ぎ開始。
10月12日	表土剥ぎ終了。掘立柱建物跡多数検出。
10月13日	農道3183号線北側の表土剥ぎに着手。
10月15日	表土剥ぎ終了。中世の遺構が密集。
11月2日	県道借宿・小諸線から排水路間の調査が終了し、JVに明け渡す。
11月14日	集中豪雨のため、調査区全体が水没。ベルト・遺物などかなりの量喪失。
11月16日～	排水路北側を埋め戻し、新しいプレハブの建設を再開。
11月20日	旧プレハブ用地内の表土剥ぎに着手。
11月23日	周囲を溝に囲まれた大規模な掘立柱建物跡が存在することが判明。周囲の状況からすれば古墳時代後期から奈良時代にかけての官衙跡と判断。
11月26日	表土剥ぎ作業終了。
11月30日	農道3183号線下の表土剥ぎに着手。
12月1日	第2次表土剥ぎ終了。
12月18日	現地説明会を開催。見学者100名。
12月27日	航空撮影を実施。器材撤収開始。
1月6日	すべての作業が終了。



第1図　調査範囲



第2図 1号土坑



第3図　遺構外遺物

第3節　遺構と遺物

1　弥生時代以前の遺構と遺物

1号土坑（第2図）

唯一、縄文時代の遺構である。ほかにも存在するのだろうが、遺物がなく確認できていない。

直径1.2ｍ前後の円形の土坑であり、深さは、現状で約30cmをはかる。若干なべ底状を呈する。覆土は観察していない。覆土中層に注口土器の破片が存在した。これ以外に遺物は出土していない。

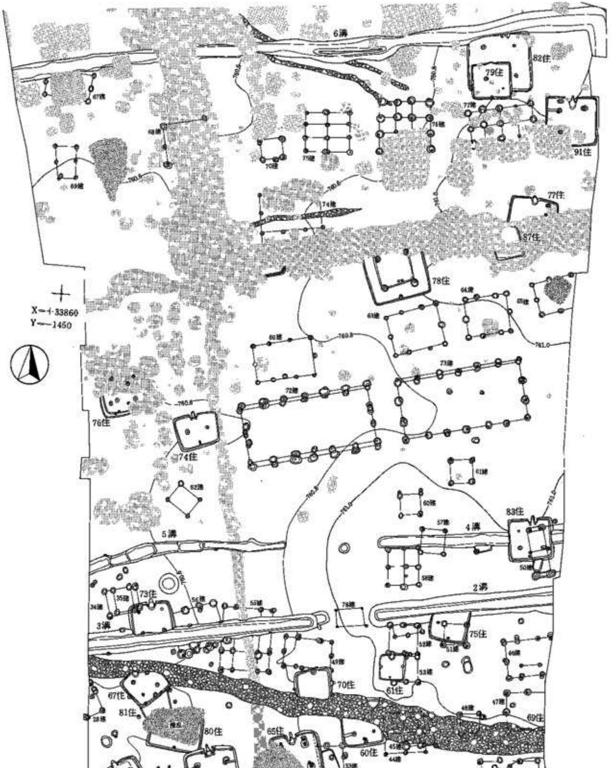
後期前葉堀之内II式の時期である。

遺構外遺物（第3図）

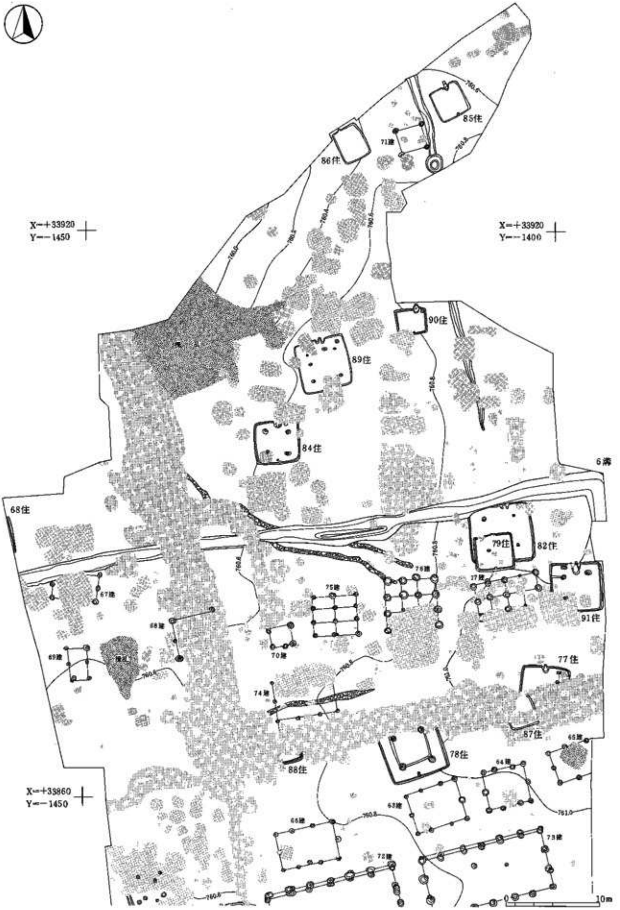
出土量は非常に少ない。提出した遺物を除けば、数点の土器破片が存在するに過ぎない。

1～3は縄文時代の打製石鏃、4～6はやはり縄文時代の打製石斧である。7・8は縄文時代前期後葉の土器破片であるが型式名は不明である。9～11は縄文時代中期後葉加曽利Ｅ式から後期初頭称名寺式にかけてのものだろう。12・13は縄文時代後期前葉の堀之内式のものであるが、おそらくII式の所産であろう。16は弥生時代後期後半の甕形土器の可能性が最も高いが、古墳時代前期初頭に下ることも考えられよう。

第4図　古代の遺構配置（1）



第5図　古代の遺構配置（2）



第６図　古代の遺構配置（３）

2　古墳時代後期から平安時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（第7図、ＰＬ56）

出土遺物からみると7世紀前葉あるいは中葉とも捉えられるが、出土状況がわからず細かな時期は不明である。

覆土は、周溝部分を除き多少なりとも軽石流堆積物ないし黒色土のブロック層が混入したものであった。掘方は周囲が若干深めとなり、とくに南側が一段深かった。

カマドは、地山掘り残しの袖の一部が残存し、煙り出し部には赤色粘土を張り付けていた。カマド周辺には整形された軽石3個が床面から出土しているが、本来カマドの構築材として利用されたものだろう。住居中央には深さ53cm程の柱穴らしきものが存在する。そのすぐ南西側に軽石の自然礫が床面から2個出土している。

2号竪穴住居跡（第7・8図、ＰＬ65）

7世紀後葉頃の住居跡である。3・4号竪穴住居跡と切り合うが、本跡がもっとも新しい。

覆土は、4層が黒色土の単純層、1・2層が軽石流堆積物と黒色土のブロック層である。掘方は周囲がわずかに深めとなり、とくに南東コーナーがさらに深めとなる。

カマドは右袖のみ良好に残っていた。袖奥は地山掘り残しとし、焚き口部には長方体に整形された軽石を置き全体を黄色粘土で覆っていた。また、煙り出し部には赤色粘土を充塡している。

出土遺物のうち、5・8は貯蔵穴内に正位で埋設されていた。1は群馬県側からの搬入品と考えられる。3は、丸底甕域からの搬入品であろう。

3号竪穴住居跡（第7・8図）

7世紀中葉の住居跡か。2号竪穴住居跡に切られ、4・5号竪穴住居跡を切っている。

覆土は、最初の堆積である7層が黒色土、つづく3～6層が軽石流堆積物・黒色土のブロック層である。掘方は、周縁部と中央部が浅く、また柱穴部分はとくに深めとなる。

4号竪穴住居跡（第7・8図、ＰＬ65）

7世紀前葉から中葉にかけての所産である。2・3号竪穴住居跡と重複するが、もっとも古い遺構である。

覆土は、壁際に堆積する3層が黒色土であり、壁の構築材として何らかの関係があったことを想定させる。分厚く堆積する1層は、黒色土と軽石流堆積物のブロック層であった。掘方は全体に浅めだが、周縁部がわずかに深かった。

出土遺物のうち、3は明らかに有段口縁坏分布範囲からもたらされた土器であり、また2の土器についても佐久地方では認められないものである。

5号竪穴住居跡（第7図）

遺物は土器破片すら出土しておらず、時期不明である。ただし、3号竪穴住居跡にその大半を切られているので、古墳時代後期後半であることには違いなかろう。

6号竪穴住居跡（第9図、ＰＬ56）

7世紀前葉を中心とした時期に廃棄された住居である。

覆土は、4層が黒色土であり、1・2層については純軽石流堆積物・黒色土のブロック層であり、明らかに人為的な埋め戻しと考えた。掘方は、周囲がわずかに深くなり、とくに南西コーナーがより深めとなっていた。なお、カマド付近には、掘方から底部に赤色粘土を張り付けた小土坑が検出されている。

カマドは、袖を地山掘り残しとし、以後床面を形成した上で赤色粘土で覆っていた。焚き口部には軽石を置いていたのだろう、その痕跡がピットとして残っていた。燃焼部の掘方底面には黒色土が充填されていた。

7号竪穴住居跡（第10図、ＰＬ56・65）

7世紀中葉頃に廃棄された住居跡か。住居北側を等しくしながらも、その他3方を拡張している。

覆土は、5層が黒色土、1層が黒色土ブロック層を多く混入、3層が軽石流堆積物ブロック層を部分的に混入するものである。掘方は、周縁部が一段深く、段差は明瞭である。ただし、カマド部分は掘方をもっていない。

カマドは、新旧の住居とも同じものを利用している。袖は地山掘り残し、床面形成後赤色粘土で覆ったものである。煙り出し部も同様に赤色粘土を充填していた。

2は、群馬県側からの搬入品、3・7も西からの搬入品と考えられよう。

8号竪穴住居跡（第10図）

提示した資料だけではよくわからないが、カマドから武蔵甕の破片が出土しているので、7世紀中葉以降ということはまちがいない。また、8世紀以降でないことは確実である。掘立柱建物跡と重複しているが、その先後関係は不明である。

覆土は、5層が黒色土、ほかは2層を除いて軽石流堆積物のブロック層を主体とするものである。掘方は周縁部が浅く、内部が極端に深くなるもので、その差は明瞭であった。　カマドは袖を地山掘り残し→床面形成→赤色粘土被覆という順番をたどっている。

9号竪穴住居跡（第11図、ＰＬ65）

提示した出土遺物では細かな時期はわからないが、覆土中から、7世紀末から8世紀初頭と目される群馬産の須恵器蓋の破片が出土している。

覆土は、ほかの住居跡と違い、第2層に砂の層が堆積していた。掘方は、周縁部が深く、とくに柱穴部分が深めとなっていた。

カマドは、左袖の一部が残存しており、板状の安山岩系の礫を立石させ、その外側を赤色粘土で覆っていた。

10号竪穴住居跡（第11図）

図化していないが、8世紀第1四半期を中心とした武蔵甕の破片が出土している。

覆土は、1層のみが純粋な軽石流堆積物のブロック層であった。掘方は周囲がわずかに深く、とくに南壁際が一段深かった。

11号竪穴住居跡（第11図、ＰＬ66）

ＴＫ－209の新段階からＴＫ－217古段階の須恵器が出土しているが、ほかの出土土器をみても武蔵甕や内屈口縁坏が認められないので、やはり7 世紀前葉という表現が適当であろう。

12号竪穴住居跡（第12図、ＰＬ56・66）

須恵器坏の内面底径から、9世紀第1四半期を中心とした時期と思われるが、その中でもけして新しいものではない。掘立柱建物跡と重複するが、本跡の方が新しい。

覆土は、粘質の細砂壌土が堆積し、奈良時代以前の住居跡とは一見して異なっている。掘方も異質で、貼床するためだけの深さでしかない。

カマドは石袖の一部が残存していた。長方体に整形された軽石を並べ、その外側を赤色粘土で被覆するもであった。カマド内には遺物が多数残っており、住居廃絶時に祭祀が行われたことを物語っている。

13号竪穴住居跡（第12図、ＰＬ56・66）

7世紀代の竪穴住居跡であろうが、武蔵甕の破片も出土しているので、中葉以降としておきたい。

覆土は、2層だけが黒色土のブロック層を多量に混入するものであった。掘方は周縁部が深めとなっていた。

カマドは、地山掘り残しとし、その上部及び煙り出し部に赤色粘土を被覆していた。

1の遺物は、関東地方からの搬入品と考えられるが地域は不明である。

14号竪穴住居跡（第13図）

時期比定できる資料は少ないが、覆土中には8世紀代の武蔵甕破片が多数認められた。なお、15・16号竪穴住居跡と重複するが、16号竪穴住居跡を切り、15号竪穴住居跡とは新旧関係をつかんでいない。

覆土は、2層が軽石流堆積物のブロック層が主体となるものである。掘方は周縁部が深めとなるものである。

15号竪穴住居跡（第13図）

本跡から出土遺物がなく、時期不明である。ただし、16号竪穴住居跡を切っているので8世紀初頭以後であることには違いない。

覆土は、黒色の細砂壌土である。

16号竪穴住居跡（第13図）

7世紀末葉から8世紀初頭の年代が与えられよう。14・15号竪穴住居跡と重複し、もっとも古い。

覆土は、6層が黒色土、つづく5層が軽石流堆積物ブロック主体土である。

17号竪穴住居跡（第13図、ＰＬ66）

提示していないが、回転ヘラケズリの須恵器坏が2点伴っており、8世紀中葉でも、比較的古い段階に位置するものと思われる。なお、38号竪穴住居跡と切り合い、本跡のほうがより新しい。

覆土は、3層がいわゆる黒色の細砂壌土であり、以後安定した土層が堆積している。掘方は、周縁部が高く、段を成すところに周溝状の落ち込みが存在し、そこから内部が一段下がるものであった。建て替えの可能性もあるが、カマドや柱穴は存在しなかった。

袖は、38号竪穴住居跡の覆土内に構築されているので、整形された軽石と橙色粘土でできている。また、焚き口部の天井石も崩壊した状態で残存していた。

出土遺物のうち、状況はあまりよくないが、4は煙道部に転用されたものである。

18号竪穴住居跡（第14図、ＰＬ66）

7世紀後半の住居跡である。

覆土は、5層が黒色を呈し不純物が少なく粘性の高い細砂壌土、3・4層がブロックを主体とするものである。掘方は、周縁10～20cmが高めとなり、ほかにカマド燃焼部も高めだった。

カマドは橙色粘土でつくられており、右袖には直方体に整形された軽石を埋め込んでいた。燃焼部には多角形に整形された軽石を支脚石として利用しており、7などは本来これに掛けられていたものかもしれない。

北西コーナーの柱穴脇には、整形を受けた軽石が床面から出土しているが、本来カマド石として利用されたものだろう。梯子穴右脇には、やはり床面から安山岩質の偏平な礫が出土しているものの、とくに使用痕は認められなかった。

19号竪穴住居跡（第15図、ＰＬ56・67）

武蔵甕・内屈口縁坏は存在せず、あわせて全体に古い様相を呈するものである。時期設定は困難だが、7世紀でも比較的古い段階以前の遺構ではないかと考えている。

覆土は、3層が黒色の細砂壌土、1層が黒色土のブロックを多分に含むものであった。掘方は存在するが、とくに特徴は認められない。カマドは、地山掘り残しで袖とし、焚き口部に軽石の自然礫を置き、さらに天井部にやはり軽石の自然礫を置いて焚き口部を構成したらしい。

2はカマド構築材に転用したものか。4は、その遺存状況から貯蔵穴として機能していたものかもしれない。

20号竪穴住居跡（第15図、ＰＬ57・67）

遺物は非常に少量であったが、7世紀後半から8世紀初頭という年代を考えている。

覆土は、4層が不純物が少なく粘性の高い黒色を呈する細砂壌土、以後ブロック層が主体となるものであった。掘方は、周縁が深めだったが、とくに北側及び西側が深くなっていた。

カマドすべて白色粘土と橙色粘土の混合土からなっており、床面形成後構築し、左袖については長方体に整形された軽石を途中まで埋め込んでいた。

1は、中信地方からもたらされたものか。

21号竪穴住居跡（第16図、ＰＬ67）

7世紀後葉の住居跡である。

覆土は、3層が黒色の細砂壌土、間層を挟んで1層がブロックを主体とするものである。掘方は、全体に深めだが周溝部分とカマド部分が若干浅かった。また、住居奥側が周溝部分よりも突出しているが、ここには掘方が存在せず、覆土もブロック層からなり、明らかに住居内の様相とは異なっていた。本来、棚状の施設が存在していたのかもしれない。

カマドは、地山掘り残しで袖の基部を作出し、床面形成後、橙色粘土を被覆し袖を形作っている。燃焼部には、直方体に整形された軽石を支脚石として立石させていた。

2～5は、丸底甕域からの搬入品である。

22号竪穴住居跡（第16図）

初期の内屈口縁坏を伴っていることから、もっとも古くみれば7世紀中葉、若干新しくみても後葉でも比較的古い段階に納まるものだろう。なお、4号掘立柱建物跡と切り合い、本跡のほうが古い。

覆土は、壁際に堆積する4層が黒色の細砂壌土で、2層が黒色土のブロックを主体にするものであった。掘方は、住居中央部と周溝部分が一段高く、また掘方の時点で、袖の一部を掘り残していることも判明した。

23号竪穴住居跡（第16図）

7世紀代の遺構だが、その中でも比較的古い段階のものと思われる。本跡からは、提示資料以外なにも出土していない。

覆土は、3層が黒色の細砂壌土で、1層が黒色土と軽石流堆積物のブロック層主体のもので、明らかに人為的な埋没土と考えられる。掘方は全体に浅めであるが、西壁及び南壁際が若干深くなっていた。カマドは壊されているものの、周囲には橙色粘土が散乱してしており、カマドの崩落土と考えられる。

24号竪穴住居跡（第17図、ＰＬ68）

8世紀前葉の産物である。

掘方は、周縁部が深めとなっている。カマドは、一部、袖を地山掘り残しとしているが、基本的に床面形成後、橙色粘土で袖を構築している。燃焼部内には2本の多角形柱の軽石を置き、支脚石としている。P_1・P_2が本跡の柱穴だろう。

カマドの燃焼部から、4～6が一括して出土している。

25号竪穴住居跡（第17図）

遺物は出土しておらず時期不明である。ただし、24号竪穴住居跡に切られているので、8世紀前葉以前であることは確かである。

P_3・P_4が柱穴の一部と思われる。

26号竪穴住居跡（第17図）

伴出遺物から古墳時代後期のものと考えられるが、細かな時期は設定できない。なお、27号竪穴住居跡を埋め戻し、本跡を構築したものと思われる。

覆土は、ブロックを一切含まないものであった。掘方は存在するが、とくに特徴はない。カマドがなく、一般的な住居とは使い方が違うものと思われる。

27号竪穴住居跡（第17図）

出土遺物はないが、26号竪穴住居跡の建て替え前の住居と考えているので、やはり古墳時代後期の所産であろう。

覆土は、軽石流堆積物の小ブロックが主体となり、人為的な埋め戻しと考えた。住居規模・掘方・柱穴位置など26号竪穴住居跡の在り方に近い。おそらくカマドも存在しなかったものと思われる。

28号竪穴住居跡（第18図、ＰＬ68）

８世紀中葉に廃棄された遺構である。本遺構は、一度拡張がなされている。

覆土は、いずれもブロック層が主体となっており、人為的な埋め戻しと考えられる。また３層には砂質土の堆積が認められた。掘方は中央部がやや浅めとなっていたが、周縁部が極端に浅く、これにより古段階と新段階との壁体の差を確認した。

カマドは、ほかに例をみないほど立派なもので、方形に掘り込んだ後、黒色土と軽石流堆積物のブロック層で周囲を版築し、内部に灰色粘土を充塡し袖や天井部としているらしい。また、構造はわからないが、左袖の一部には橙色粘土が、両側にはピットが存在していた。

29号竪穴住居跡（第18図）

実測可能なものはないが、土師器甕は8 世紀中葉から９世紀第１四半期のものがみられ、須恵器坏では糸切り後周縁ヘラケズリするもの１点・手持ちヘラケズリするもの３点が出土しているので、８世紀後半でも、より中葉に近い時期の産物と考えられる。

本遺構は、一度建て替えを行っている。旧来の遺構の床面から10数cm上がったところに、新しく床を設定し、全体的に壁面を拡幅するものであった。カマドは、新段階のもので、燃焼部に想定される部分に長方体に整形された軽石を黒色土の上に立石するものであった。ただし、図右側については倒れていたものと思われる。焚き口部には礫を立たせるためのピットが存在していた。

30号竪穴住居跡（第18図）

実測資料はないが、古い段階の内屈口縁坏、それと武蔵甕が出土しているので、７世紀中葉ないしは後半でもより中葉に近い時期と考えておきたい。

本跡は、建て替えを行った住居である。

31号竪穴住居跡（第19図、ＰＬ57・68）

７世紀前葉以前のものと思われる。なお、２号竪穴住居跡と重複し、本跡のほうが古い。

覆土は、２層が黒色土と軽石流堆積物のブロック層であった。掘方は全体に浅い。カマドは、地山掘り残しで袖の基部とし、床面を形成した後、橙色粘土を用いて袖を形作っている。焚き口部分には、上面を調整した軽石が埋め込まれ、おそらく天井部の形態と一連のものとなっていたものと思われる。燃焼部には、整形痕のある軽石を支脚石として立石させていた。柱穴は、おそらく２本柱だろう。

32号竪穴住居跡（第19図）

８世紀中葉から後葉のものである。須恵器坏は、残念ながら含まれていなかった。11号掘立柱建物跡と重複するが、本跡のほうが新しい。これは調査区外とのセクションで確認したことなのでまちがいない。

カマドは、焚き口部にピットを設け、左側には直方体に整形された軽石を置いていた。

33号竪穴住居跡（第20図、ＰＬ69）

７世紀前葉以前の産物である。９・10号掘立柱建物跡と重複し、本跡のほうが古い。

掘方は、周縁が浅く、内部が深いものであったが、とくに南側の両コーナーがやや深くなっていた。カマドは、焚き口部にピットを設け、左側には整形された軽石を置いていた。煙り出し部分には白色粘土を敷き詰めており、その一部が残存していた。

覆土内には、遺物とともに整形を受けた多量の軽石が床面から浮いた状態で検出されている。多くはカマドに利用されたものと思われるが、すべて本跡に伴うものかどうかは不明である。

34号竪穴住居跡（第20図）

７世紀後葉の時期である。土坑に切られているが、セクションからすると、南側に隣接するものと対になり、実際には大形の掘立柱建物跡になるかもしれない。

35号竪穴住居跡（第21図、ＰＬ69）

７世紀中葉の産物だが、武蔵甕及び内屈口縁坏は一切認められなかった。したがって、より前半に近い時期のものと考えられる。

覆土は、２層を除きブロック層が主体であった。掘方は、周溝部分と住居中央部を除き深かった。

36号竪穴住居跡（第21図）

８世紀中葉から後葉の住居跡であるが、須恵器坏がなく時期設定ができない。37・42号竪穴住居跡と切り合い、本跡のほうが新しい。

覆土は、とくに変化が認められず一般的な自然堆積と考えられる。掘方は、周囲が若干深めとなり、とくに南壁側が一段深かった。カマドは42号竪穴住居跡の覆土中につくられているので、当初から床面構築後、橙色粘土で袖を形成していた。P_1～P_4が柱穴、P_5が梯子穴と考えられる。

37号竪穴住居跡（第21図）

遺物が出土していないので時期不明だが、36号竪穴住居跡に切られているので、８世紀後葉以前のものであることはまちがいない。

４層が覆土だが、とくに変化は認められない。掘方は確認していない。P_6～P_9が柱穴だろう。

38号竪穴住居跡（第22図、ＰＬ70）

８世紀前半の諸様相を呈している。ちなみに、覆土中の須恵器坏の底部破片をみても、回転糸切りを呈するものは1 点もなかった。本跡は、17号竪穴住居跡・12号掘立柱建物跡に切られ、39・40・41号竪穴住居跡を切っている。

本跡は、柱穴が新旧２段階認められ、わずかながら壁体を拡張したものと思われる。また、二段掘り状の掘方を呈していたので、これを拡張住居の痕跡と考えれば、さらに回数は増えてくるものと考えらえる。以下、新段階の住居跡のみ記述する。

覆土は、２層に黒色土のブロック層がわずかに混入していたが、全体に砂壌土が堆積しており自然的なものと判断した。掘方は、住居中央が明瞭に掘りくぼめられていたが、これを拡張住居の残骸と考えても、その時に柱穴は存在しない。掘方の一種であろうか。カマドは、地山掘り残しで袖の基部を作出し、その上部に長方体に整形された軽石を立石させ、床面形成後、橙色粘土で被覆し袖を構築している。

39号竪穴住居跡（第22図、ＰＬ70）

１は７世紀前葉以前と考えているが、P_6から出土しており、本跡に伴うものかどうか不明である。覆土中からの遺物では、残念ながら細かな時期設定できる資料はない。なお、38号竪穴住居跡に切られ、40号竪穴住居跡を切っている。

覆土は、1・2層がブロック主体の土層であった。掘方は、北西コーナー付近がやや深めだった。

40号竪穴住居跡（第22図）

1以外には出土遺物がなく時期設定が困難だが、ヘラケズリの在り方から7世紀でも古い段階以前の所産ではないかと考えている。41号竪穴住居跡を切り、38・39・42号竪穴住居跡に切られている。

覆土は観察してない。掘方は、5～10㎝の深さを有しており、比較的平坦に掘削されるものであった。カマドは北西コーナー側に位置していたものと考えられ、橙色粘土が散乱していた。

住居中央から、安山岩質の偏平な礫が床面から出土しているが、使用痕は認められなかった。

41号竪穴住居跡（第22図）

38・39・40・42・46号竪穴住居跡に切られており、重複関係の中ではもっとも古いものである。出土遺物はないが、7世紀前葉以前の存在であることは疑う余地がないものと思われる。

比較的大形の住居跡と考えられるが、切り合いがひどく、また西側に暗渠が存在するため、明確な平面形すら確認することができなかった。柱穴やカマドも確認していない。

42号竪穴住居跡（第23図、ＰＬ70）

7世紀後葉に廃棄された住居跡である。36号竪穴住居跡によって切られ、40・41号竪穴住居跡を切っている。

覆土は、3層が粗粒の茶褐色土、2層が軽石流堆積物ブロック主体土である。掘方は、周縁部がわずかに深めとなっていた。カマドは、41号竪穴住居跡の覆土内につくられているため、床面構築後、安山岩質の礫を袖の芯材とし、以後肌色粘土で被覆したものである。燃焼部には、軽石の自然礫を支脚石とて立石させていた。梯子穴は36号竪穴住居跡のカマドによって壊されていた。

43号竪穴住居跡（第23図）

出土遺物はない。ただし、横長の平面形態をとり、あわせて2本柱となることから、7世紀でも比較的古い段階に位置付くことはまちがいない。なお、46号竪穴住居跡に切られ、44号竪穴住居跡を切っている。

覆土は2層に分層したが、いずれも細砂壌土で自然堆積と考えられる。掘方は、全体に5㎝程掘り込まれていた。カマドは、本来周溝が途切れた部分に位置するのだろうが、46号竪穴住居跡の掘方が入り込み明確に確認できなかった。

44号竪穴住居跡（第23図）

実測可能なものはないが、7世紀でも古い段階であることは確かである。住居構造から同様の時期と考えた43号竪穴住居跡に切られているのだから、これからみても確かなことだろう。ほかに46号竪穴住居跡にも切られている。

45号竪穴住居跡（第23・24図、ＰＬ57・70）

7世紀初頭に廃棄されたものか。なお、13・14号掘立柱建物跡と重複し、本跡のほうが古い。

覆土は、2層が堆積した後、ここで一度火を焚いており、焼土・炭化物層が認められた。以後、ブロック層主体の1層が堆積している。掘方は、住居中央部・周溝部・カマド部分が高くなっていた。カマドは、地山掘り残しで袖の基部を作り出し、床面構築後、焚き口部には安山岩質の自然礫を置き、内部に黒色

土・その周囲に橙色粘土を張り付けて袖を構築するものであった。間仕切り溝がみつかっているが、これは掘方で確認されたものである。

住居中央から、安山岩質の自然礫2点が出土した。ともに焼成を受けていたが使用痕は認められなかった。

46号竪穴住居跡（第24図、ＰＬ71）

7世紀末葉から8世紀初頭に廃棄された遺構と考えられる。41・43・44号竪穴住居跡を切り、10号掘立柱建物跡に切られている。

拡張住居である。カマドの位置を変えずに三方を大きく広げている。床面レベル差は10cmにも満たない。出土遺物は、すべて新段階の住居跡のものである。以下、新段階の住居跡の記述のみ行う。

覆土は、1層だけだったが、ブロックは混入していなかった。掘方はわずかに認められる。カマドは、床面形成後、橙色粘土で袖が構築されていた。カマド周辺には、長方体に整形された軽石のカマド石が散乱していた。

47号竪穴住居跡（第25図、ＰＬ57・71）

7世紀中葉段階に廃棄されたものと思われる。

覆土は、3層が不純物が少なく粘性の高い黒色の細砂壌土、2層が軽石流堆積物のブロックを主体的に含むものである。掘方は、住居中央部及び周溝部が高く、またカマド燃焼部については一切認められなかった。カマドは、袖を地山掘り残しとし、以後橙色粘土で被覆する。焚き口部には、礫を置いたと思われるピットが確認されている。燃焼部には、六角柱に整形された軽石を支脚石として利用していた。

出土遺物のうち、3は丸底甕域からもたらされたものである。

48号竪穴住居跡（第25図、ＰＬ71）

7世紀中葉でも、より前半に近い所産か。

覆土は、壁際に堆積する6層が黒色の細砂壌土、2・3・5層にブロック層が認められる。掘方は、住居中央部と周溝部がやや高くなっており、逆にカマド部分は深めとなっていた。カマドは、地山掘り残しで袖の基部を作出し、床面形成後、周囲に橙色粘土を張り付け、煙り出し部に火山岩を置き、袖を形作っている。燃焼部には、五面体に整形された軽石を支脚石として置いていた。

6・7は、本来、周囲を粘土で押設した貯蔵穴として利用されたものであろう。また、1・5は在地の土器である。

49号竪穴住居跡（第26図、ＰＬ72）

7世紀後葉の所産である。26号掘立柱建物跡に切られているが、31号掘立柱建物跡とは不明である。

覆土は、安定した砂壌土が堆積しており自然堆積と思われる。掘方は全体に深めだが、住居中央部・周溝部・カマド部分が高く、とくにカマド燃焼部については掘方は一切認められなかった。カマドは、地山掘り残しで袖の基部を作出し、床面形成後、橙色粘土で袖を構築している。先端部にはピットを設けており、おそらく礫を立石させていたのだろう。火山岩の礫がカマド南側から多数出土しているが、こうしたものがカマド石として利用されいたものと思われる。煙り出し部にも、同様に礫の利用が認められた。

遺物の出土状態については、極めて人為的な行為と見做されるが、意図は不明である。なお、11は丸底甕域からの搬入品、6は同地域の甑形土器である。

50号竪穴住居跡（第27図、ＰＬ57・72）

７世紀後半に廃棄されたものである。54号竪穴住居跡を切り、１号溝に切られる。掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。

本跡は、床面を等しくしながら、少なくとも２度に渡る建て替えを行っていることが、柱穴の位置で確認できた。

覆土は、周溝内に黒色の細砂壌土、以後いくつかの間層をおきながらブロック層が認められた。また、４層上面では一度火が焚かれており、薄い炭化物層を認めた。掘方は、住居中央部・周溝部・カマド部分が高く、燃焼部に至っては一切存在しなかった。カマドは、地山掘り残しで袖の基部とし、以後橙色粘土で被覆し袖全体を構築している。

４は有段口縁坏で搬入品、５は飛鳥皿Ｂ、７・８は丸底甕域からの搬入品である。

51号竪穴住居跡（第27図）

出土遺物がわずかで、時期設定できる資料がない。カマド内から出土した土師器甕から、７世紀代のものとしておこう。

カマドは、地山掘り残しで基礎を形作った上に、燃焼部を中心としたところに黒色土を敷き、全体に橙色粘土を被覆しながら構築している。焚き口部にはピットが認められたので、先端には礫を配していたに相違ない。

52号竪穴住居跡（第27図）

遺物が出土しておらず時期不明である。軽石流堆積物をわずかに削ったところを床面とし、また、南東隅にはカマドの残骸とおぼしき焼土が存在していた。もしかすると、ここでは唯一発見された古代末の住居跡かもしれない。

53号竪穴住居跡（第28図、ＰＬ57・72）

７世紀末頃に廃棄された住居であろう。掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係はわかっていない。

本跡は、掘方で発見された柱穴の配置状況からして、少なくとも２度に渡る建て替えが行われたものと思われる。

覆土は、５層が黒色の細砂壌土、１層がブロック層で人為的な埋設土と考えられる。掘方は全体に深めだが、その中で住居中央部・周溝部・カマド部分が若干高くなっていた。カマドは、床面形成後、左袖に安山岩質の自然礫、右袖に調整された軽石を配し、その周囲を白色粘土で覆っている。煙り出し部には土器が置かれているが、煙突として用いられたのか、それとも単に補強材なのかわからない。燃焼部には、六角形に調整された軽石が倒れながらも残存していた。なお、燃焼部については下部の住居跡のものも確認できた。

54号竪穴住居跡（第28図、ＰＬ57）

土器は実測可能なものがないが、概ね７世紀中葉の所産である。50号竪穴住居跡に切られている。掘立柱建物跡とは新旧関係を把握していない。

覆土は、４層が不純物が少なく粘性の高い黒色の細砂壌土、２層がブロックを多量に含むものであった。掘方は、全体に浅めだが、住居中央部及び周溝部がさらに高かった。

55号竪穴住居跡（第29図、ＰＬ57）

７世紀前葉以前のものと考えられる。30号掘立柱建物跡と切り合うが、新旧関係はわかっていない。

覆土は、２層に若干軽石流堆積物のブロックを含んでいるが、全体に安定した細砂壌土が認められ、自然堆積と捉えられる。掘方は、住居中央部・周溝部・カマド部分が高く、取り分けカマド部分についてはほとんど認められず台状に飛び出していた。カマドは、地山を掘り残した上に橙色粘土を被覆して袖を構築していた。焚き口部にはピットを設け、右袖には長方体に整形された軽石を埋め込んでいた。

56号竪穴住居跡（第29図、ＰＬ58・72）

７世紀中葉に比定される。

覆土は、３・４層がブロック主体土である。掘方は、住居中央部・周溝部・カマド部分がわずかに高くなっていた。カマドは、左袖にはそれが認められなかったが、地山を掘り残し、床面形成後橙色粘土で被覆し袖を構築するものであった。支脚には７を逆転して利用している。

４は内湾口縁坏で搬入品、８は丸底甕域からの搬入品である。

57号竪穴住居跡（第30図、ＰＬ72）

７世紀中葉に廃棄された住居跡である。29号掘立柱建物跡と重複するものの、新旧関係は把握していない。なお本跡は、掘方から旧段階の柱穴を確認し、建て替えを行ったことが判明している。

覆土は、２層が軽石流堆積物の小ブロックを多分に含むものであった。掘方は、住居中央部と周溝部が高くなるものであった。カマドは、地山をわずかに掘り残して袖の基礎とし、以後灰色粘土を被覆して袖を形作っている。焚き口部には、左に甕形土器11を、倒れているものの右に直方体の軽石を有しており、また燃焼部には黒色土を充填した後、六角形に整形された軽石を支脚石として立石させていた。

58号竪穴住居跡（第31図、ＰＬ73）

７世紀前葉かそれ以前のものと思われる。62号竪穴住居跡に切られている。29号掘立柱建物跡とも重複するが、新旧関係は把握していない。

掘方は全体に浅く、またこれといって特徴がない。カマドは、地山を掘り残し、その上に橙色粘土を張り付けて袖とし、左袖先端には軽石が埋め込まれていた。

出土遺物のうち、５や６などは明らかに意図的な行為が読み取れる。

59号竪穴住居跡（第32～35図、ＰＬ58・73～76）

７世紀後葉に廃棄された住居跡である。カマドは当時の生活のままだったし、北東コーナー付近には祭祀の跡らしいものが存在した。それ以外にも取り分け遺物量が多く、好材料となった。

掘方は、図面右のような構成になっている。梯子穴やカマドの残骸とおぼしき焼土も確認できているので、もしかすと拡張住居かもしれないが、柱穴が存在しないこと、ならびに新段階の梯子穴に対して掘方を気にするような住居がこれまでなかったことから、これを二段掘り特有の存在とみて住居の新旧関係は考えなかった。

カマドは、貼床をした後に橙色粘土で袖を作出し、焚き口部には直方体に整形された軽石を配し、さらに天井部には土師器甕を連結させてカマド本体としていた。カマド内には２個の土師器甕が掛かり、右側が括り付けの小形甕、左側が移動可能な大形甕であった。支脚は存在していない。

北東コーナーからは、祭祀の場所であろうか、長方体に整形された軽石の上に数点の土器が乗せられて

いた。なおこの時、9の須恵器蓋は身として利用されており、その南から出土した10の須恵器蓋もまた身として利用されていた。

14・15はいわゆる飛鳥の土器。37～40は丸底甕域からの搬入品である。

60号竪穴住居跡（第35図）

7世紀前葉以前の所産と思われる。

覆土は、3・4層に黒色土のブロック層を多分に含んでいた。掘方は、住居中央部と周溝部が一段高いものであった。

南西コーナーの柱穴近くには、整形を受けた軽石製のカマド石が床面から5㎝程浮いた状態で出土している。

61号竪穴住居跡（第36図）

実測可能な土器はない。坏片は一切認められず、数片の甕破片から読み取るしかないのだが、それでも7世紀代としかいいようがない。52・53号掘立柱建物跡を切って構築されている。

覆土は、2層が黒色の細砂壌土である。掘方は浅く掘られており、またとくに特徴は認められない。カマドは、掘立柱建物柱跡の覆土中につくられているため、すべて橙色粘土で構築されている。焚き口部には調整された軽石を配したと思われ、それらが散乱していた。

62号竪穴住居跡（第36図、PL76）

1以外には時期決定できる資料がなく、細かな設定は困難である。ヘラケズリの状態からすれば、7世紀段階においてもそれほど新しいものとは思えないのだが、取り敢えず7世紀代としておく。なお、58号竪穴住居跡を切っている。

掘方は全体に浅く、また特徴も見当たらない。カマドは、焚き口部左に直方体の軽石、右に四角錐の自然の軽石を置き、袖から煙り出し部については橙色粘土を敷設している。燃焼部には、六角柱の軽石を支脚に利用していた。また、その下部には黒色土を充塡した小土坑が存在した。

63号竪穴住居跡（第36図、PL76）

遺物量は少ないが、提示したもの以外に、直立可能な土師器甕や7世紀中葉特有の坏蓋模倣坏などが出土している。住居の平面形態が横長になると予想されることもあわせて、7世紀中葉頃の所産と考えておきたい。

覆土は、4層が黒色の細砂壌土であり、3層が見事なブロック層で人為的な埋設土と思われる。掘方は存在するが、特徴はない。カマドは、地山を若干掘り残して袖の基部とし、その上部に橙色粘土を張り付け袖全体を構成している。

64号竪穴住居跡（第37図、PL58）

7世紀末葉から8世紀初頭にかけて廃棄された住居である。72号竪穴住居跡を切って構築されている。

掘方は、住居中央部と周溝部が高く、取り分け東側両コーナー付近がとくに深かった。カマドは、地山を掘り残した上に橙色粘土を張り付け袖とし、先端部にはピットが設けられ礫を配していたものと思われる。また内部には六角柱に整形された軽石を埋め込み、袖両端脇には支柱痕が認められた。柱穴は、掘方はそれなりに大きいのだが、柱自身は小規模で、しかも角材が予想される。

出土遺物のうち、14は意図的な行為であり、しかもその上に礫で蓋をしたような恰好になっている。また６は搬入品と考えているが、少なくとも飛鳥地方ないしはその影響力を強く受ける地域ではない。

65号竪穴住居跡（第38図、ＰＬ77）

７世紀末葉から８世紀初頭の所産である。66号竪穴住居跡を切って構築されていることは確かだが、33号掘立柱建物跡との新旧関係は把握していない。

なお本跡は、掘方から旧段階の住居跡の柱穴が確認され、同一の床面レベルでカマド位置を変えずに、三方の壁を拡張していることが判明した。

覆土は、５層が黒色の細砂壌土であり、その他は全体に粗粒であるが夾雑物をほとんど含まない。掘方は全体に深いが、住居中央部と周溝部が若干浅い。またカマド部分には、黒色土を充填した小土坑が存在した。カマドは、この小土坑の上に構築されており、基本的には橙色粘土でつくられ、煙り出し部まで完全に残っていた。袖部には調整された軽石と土器破片を補強材として挿入させていた。内部には14を逆位にして支脚に利用していた。袖両脇には角柱材用の支柱痕が認められる。柱穴の柱自体は小さく、しかも角柱が想定可能である。古段階のものも同様である。

66号竪穴住居跡（第38図）

出土遺物はないが、65号竪穴住居跡に切られているので７世紀代以前の住居であることは確かである。

掘方はないが、堅緻な床面が検出できた。また、軽石流堆積物上面を床とし、一般的な住居とは性格が違うものと考えられる。

67号竪穴住居跡（第39図、ＰＬ77）

提示された遺物では細かな時期はわからないが、４・５の胎土は７世紀後葉以後には認められないもので、やや不安定ながら６についても直立可能なものである。したがって、７世紀中頃前後の時期と広く捉えておきたい。なお、浅い81号竪穴住居跡に切られて構築している。

掘方は、住居中央部と周溝部が高くなっていた。カマドは、燃焼部が残るのみで橙色粘土が散乱している状態であった。なお、２を正位の状態で支脚に利用していた。

７は、丸底甕域からの搬入品である。

68号竪穴住居跡（第39図）

当初、中世の竪穴建物跡として調査したのだが、覆土が異なること、規模が大きいこと、掘方を有することから、途中からこれを竪穴住居跡として認定替えを行った。

出土遺物がなく、時期不明である。

69号竪穴住居跡（第39図）

遺物が出土していないので時期不明である。

左側に認められる出っ張り部分に橙色粘土が認められ、おそらくこれがカマドになるものと思われる。小形の住居であろう。

70号竪穴住居跡（第40図、ＰＬ77）

提示資料以外では、土師器甕は武蔵甕が主流だが、古墳時代的な名残を呈するものも小量あり、須恵器

坏では明らかに8世紀代の口縁が外反するものが出現している。したがって、本跡を8世紀初頭に設定したい。

覆土は、2層及び柱穴内の4層にブロック層が数多く認められた。掘方は、住居中央部と周溝部が全体に高い。カマドは、橙色粘土が散乱するのみで、完全に崩壊したものと思われる。右側に存在する火山岩は、カマド石として利用されたものか。

1は、意図的な廃棄の行い方である。

71号竪穴住居跡（第40図）

提示した以外には数点の破片しかなく、時期の詳細は不明である。7世紀代としておきたいが、直立可能な2の底部からすれば少なくとも後葉以後のものではない可能性が高い。なお、59号掘立柱建物跡及び1号溝に切られている。

覆土は、すべて黒色の細砂壌土である。掘方は、全体に住居中央が高めだった。図面上方にみられる出っ張り部分に橙色粘土が散乱しており、これがカマドの残骸と考えられる。北東コーナー付近には貯蔵穴が認められ、周りの床面と同じレベルで1が正位の状態で置かれていた。本来、1は口縁部まで残存していたのだろうが、床面が浅いため圃場整備の段階で削られてしまった。

72号竪穴住居跡（第40図、ＰＬ77）

提示した以外の資料はごくわずかだが、およそ7世紀後葉の所産と思われる。なお、64号竪穴住居跡に切られている。

覆土は、2層が黒色の細砂壌土、1層が軽石流堆積物のブロック層である。掘方は、住居中央部・周溝部・本来カマドが存在したと思われる図面上方部が高くなっていた。

1・2とも、須恵器口縁部が床面及びピット内から完形で出土し、やはり意図的な行為が読み取れる。

73号竪穴住居跡（第41図、ＰＬ77）

提示した資料以外では、武蔵甕が一定量混入しており、したがって7世紀後半代としておきたい。34・35号掘立柱建物跡及び3号溝に切られている。

覆土は、2層に分けられたがともに粗粒で、第1層には黒色土のブロック層が含まれていた。掘方は、住居中央が方形基段状に盛り上がっていた。カマドは、地山を掘り残し袖の基部を作出し、床面形成後、焚き口部に直方体に調整された軽石を配し、以後橙色粘土で被覆するものであった。

10・11は、丸底甕域からもたらされたものである。

74号竪穴住居跡（第41図、ＰＬ58・78）

提示した資料では詳細時期は不明であるが、全体の遺物をみても武蔵甕や内屈口縁坏は一切認められなかった。住居の平面形態が横長となっており、しかも2本柱であることから、少なくとも7世紀中葉を越えることがないとみておきたい。

覆土は、2・4層にブロック層が認められる。掘方は、住居中央部とカマド部分が高くカマド燃焼部については一切認められなかった。カマドは、地山掘り残しで袖の基部を作りだし、貼床した後、橙褐色粘土を張り付け袖全体を形作っている。焚き口部には、礫を埋め込むためのピットが確認された。

75号竪穴住居跡（第42図、ＰＬ78）

遺物は非常に少なく、唯一土師器鉢口縁１点のみ参考資料となった。これだけでは時期決定ができないので、取り敢えず７世紀代としておきたい。なお、51号掘立柱建物跡及び２号溝によって切られている。

覆土は、すべてブロック層からなり人為的な埋め戻しではないかと考えた。掘方は全体に浅めだったが、周辺がわずかに深くなっていた。

76号竪穴住居跡（第42図、ＰＬ78）

１は、須恵器盤の模倣品であることから、７世紀後半以降の存在といえる。

本跡は、掘方から古段階の住居跡を確認した。柱穴らしきものも確認したが、中世の遺構と絡むため繋がり方がよくわからず、したがって住居規模すら不明のままである。

77号竪穴住居跡（第43図）

７世紀前葉を中心とした所産である。

カマドは、地山を掘り残し、橙色粘土を張り付け袖を構築している。なお、２は有段口縁坏で搬入品である。

78号竪穴住居跡（第43図）

７世紀前葉に廃棄された遺構と考えられる。

掘方から、拡張前の住居跡を確認した。

新段階の住居跡の覆土は、３層が黒色の細砂壌土、ほかがブロック層である。掘方は存在するものの、浅めで、また特徴がない。旧段階の掘方は一般的なもので、住居中央部が高くなっていた。

２は、比企型坏で搬入品である。

79号竪穴住居跡（第44図）

９世紀第２四半期後半から第３四半期にかけての所産である。82号竪穴住居跡を切って構築されている。

覆土は暗褐色の細砂壌土、掘方は認められていない。３～４はカマドから出土しているので、本来煙り出し部に利用されたものだろう。２は軟質須恵器で、黒斑をもたないものである。

80号竪穴住居跡（第44図）

提示資料以外には10片程の土器破片しか出土しておらず、詳細な時期決定はできない。取り敢えず７世紀前葉を中心とした段階としておこう。なお。64号竪穴住居跡に切られている。

掘方らしきものはなく、１～２㎝程度の貼床が認められただけである。

81号竪穴住居跡（第44図）

遺物がなく時期不明である。67号竪穴住居跡を切っている。

覆土は暗褐色の細砂壌土が堆積している。掘方は存在するが、これといって特徴は見当たらない。柱穴やカマドなども存在せず、一般の竪穴住居とは性格が異なるのか、それとも古代末の住居なのかどちらかであろう。

82号竪穴住居跡（第45図、ＰＬ78）

6世紀後葉に廃棄されたものか。79号竪穴住居跡・6号溝に切られている。

覆土は、3層が黒色細砂壌土・2層が暗褐色細砂壌土・1層が黒色土ブロック主体土である。掘方は存在するが、冬期のため観察不能であった。カマドは、橙色粘土を袖とし、先端に長方体に調整された軽石を埋め込み、その前方には天井石の崩落と思われる軽石が散在していた。内部は多角柱の軽石を支脚に利用するものであった。

出土遺物のうち、7～9は奈良時代のものである。どうしてこのようなものが出土してしまうのか不明だが、虚言なく報告しておこう。

83号竪穴住居跡（第45図、ＰＬ79）

7世紀第4四半期に廃棄された住居跡である。50号掘立柱建物跡及び4号溝に切られている。

覆土は、3層が黒色の細砂壌土、2層は純粋な黒色土のブロック層であり人為的な埋め戻しと考えられる。掘方は存在するが、冬期であるがために図化することができなかった。カマドは、地山を掘り残し、その上に橙色粘土を被覆しており、先端には礫を埋め込むためのピットを設けていた。

84号竪穴住居跡（第46図、ＰＬ59・79）

6世紀後葉段階の産物か。

覆土及び掘方は観察していない。カマドは、地山を掘り残し、以後橙色粘土を張り付けて袖とし、焚き口部には、左側に調整を受けた軽石・右側に安山岩質の自然礫を埋め込んでいた。また多角形に整形された軽石を支脚石として利用したらしいが、焚き口部左側に移動していたものと思われる。

85号竪穴住居跡（第46図）

6世紀後葉から7世紀前葉のものと思われる。

覆土及び掘方は、冬期のため観察不可能だった。袖は橙色粘土に拠るものである。

86号竪穴住居跡（第46図）

遺物がなく時期不明である。ただし、橙色粘土が散乱するカマドの痕跡を残しているので、6世紀から10世紀までの間の遺構であることはまちがいない。周辺の遺構から考えるなら、6世紀後葉から7世紀前葉の竪穴住居跡である公算が大きい。なお、覆土と掘方の観察は行っていない。

87号竪穴住居跡（第46図）

遺物が出土しておらず、時期はまったく不明である。なお、覆土及び掘方の観察は行っていない。

88号竪穴住居跡（第46図）

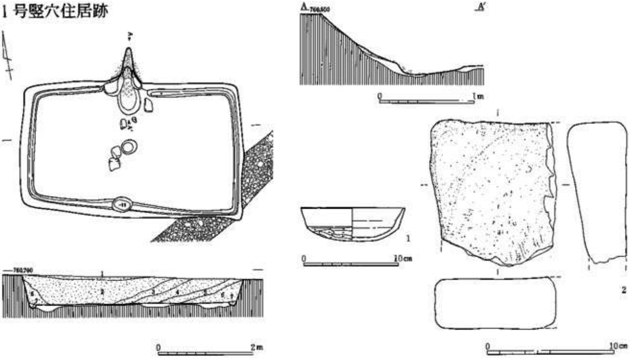
遺物が出土しておらず、時期はまったく不明である。なお、覆土及び掘方の観察は行っていない。

89号竪穴住居跡（第47図、ＰＬ59）

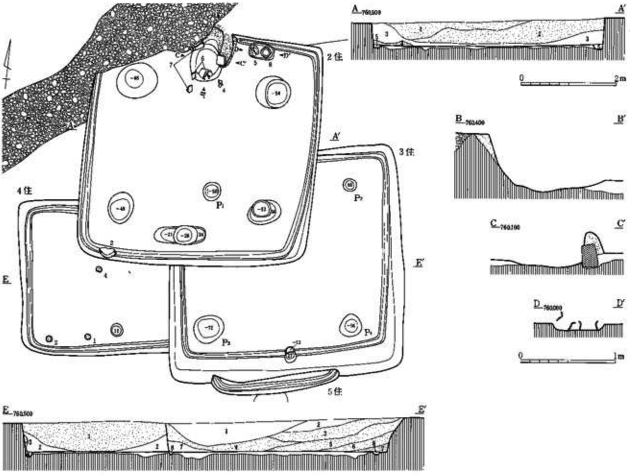
7世紀前葉以前の所産と思われる。

覆土及び掘方は冬期厳寒中の発掘のため、観察不可能であった。カマドは、地山を掘り残し、薄く橙色粘土を張り付け袖とするものであった。

1号竪穴住居跡

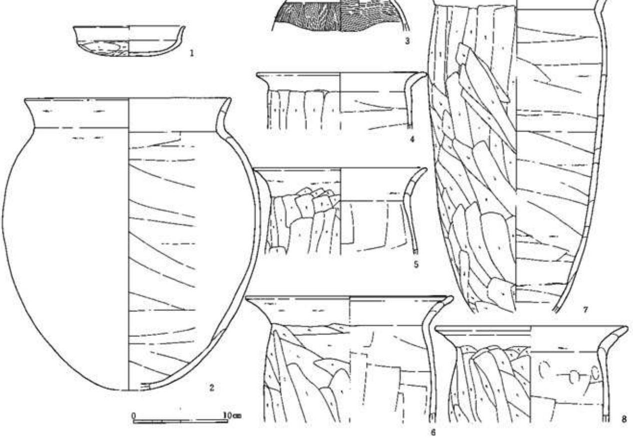


2·3·4·5号竪穴住居跡

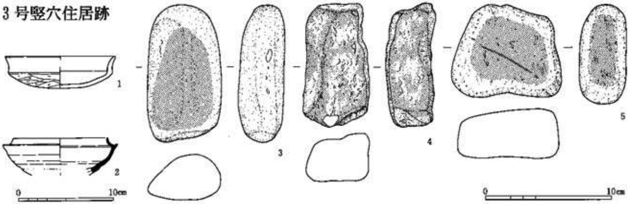


第7図　竪穴住居跡（1）

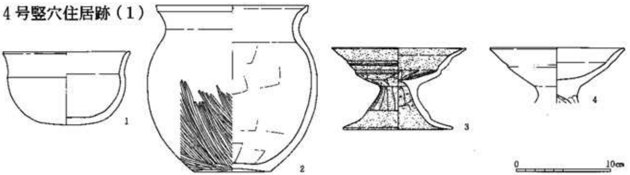
2号竪穴住居跡



3号竪穴住居跡

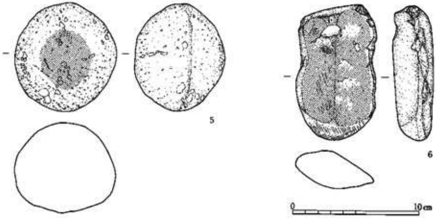


4号竪穴住居跡（1）

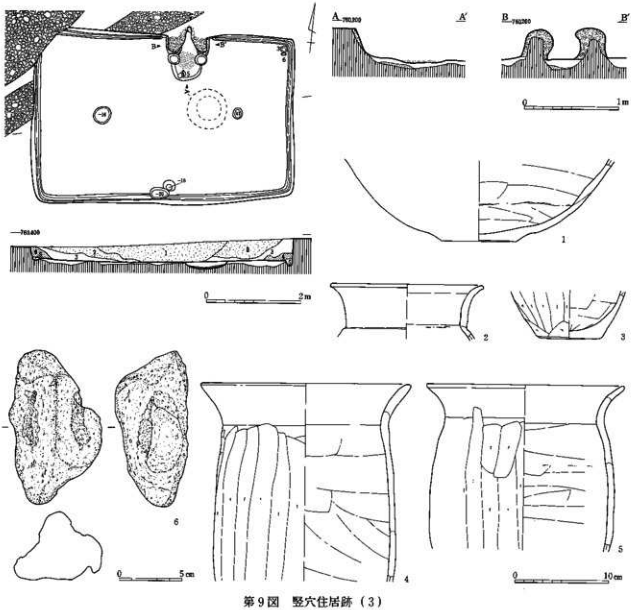


第8図 竪穴住居跡（2）

４号竪穴住居跡（２）

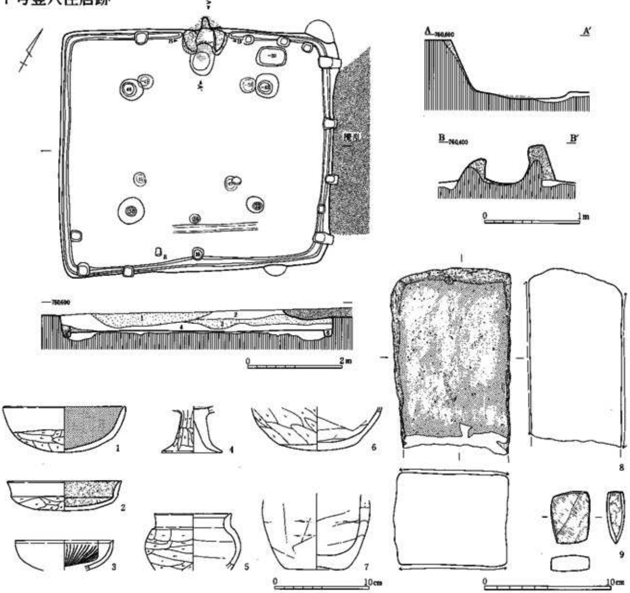


６号竪穴住居跡

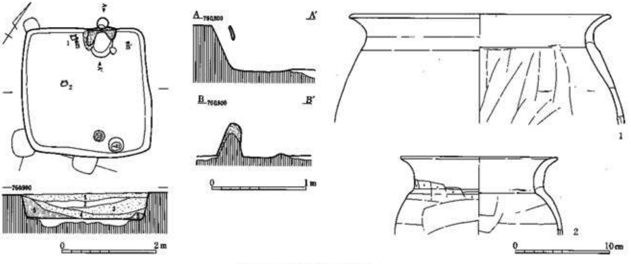


第９図　竪穴住居跡（３）

7号竪穴住居跡

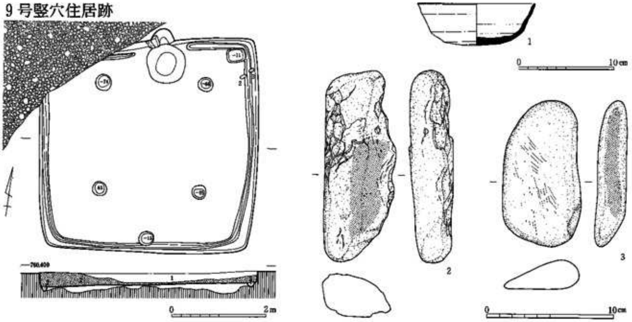


8号竪穴住居跡

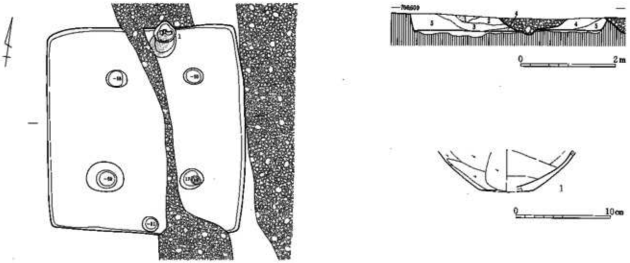


第10図 竪穴住居跡（4）

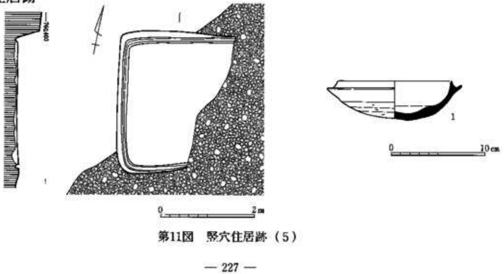
9号竪穴住居跡



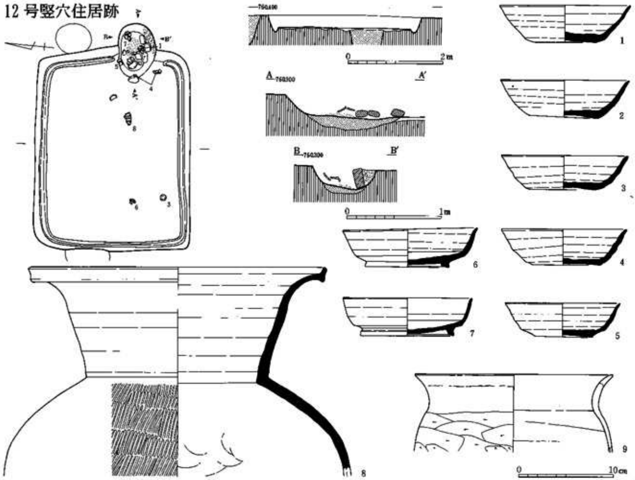
10号竪穴住居跡

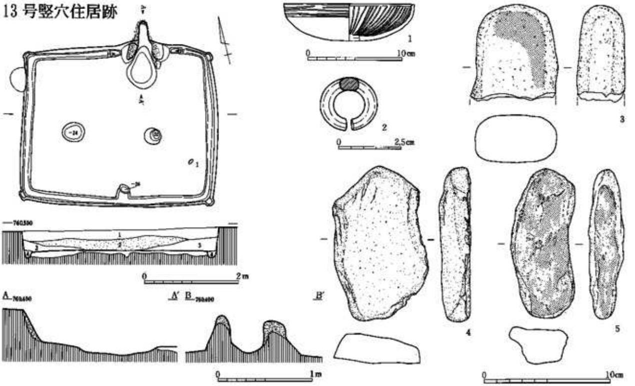


11号竪穴住居跡



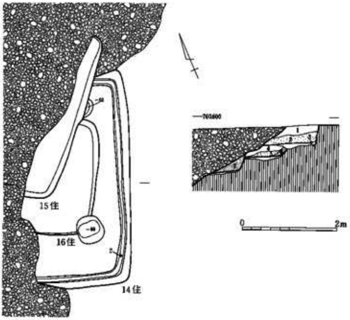
第11図　竪穴住居跡（5）



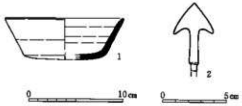


第12図　竪穴住居跡（６）

14·15·16 号竪穴住居跡

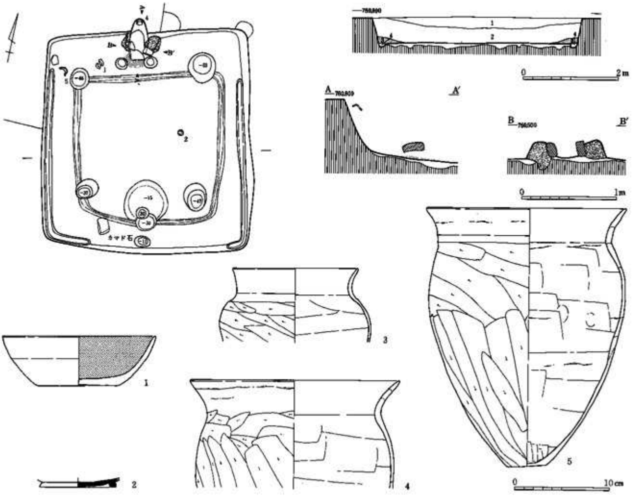


14 号竪穴住居跡



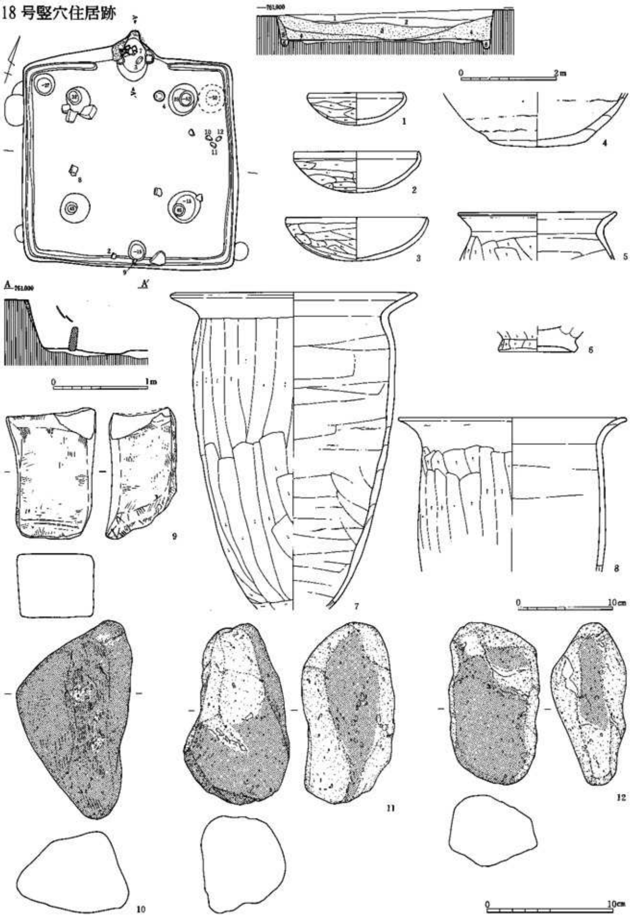
16 号竪穴住居跡

17 号竪穴住居跡



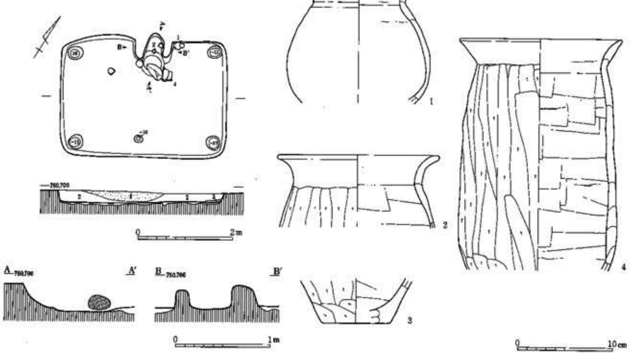
第13図　竪穴住居跡（7）

18号竪穴住居跡

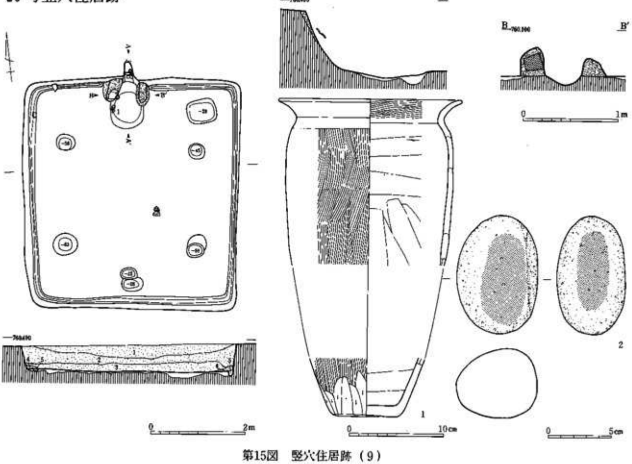


第14図　竪穴住居跡（８）

19号竪穴住居跡

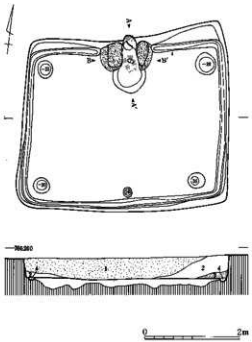


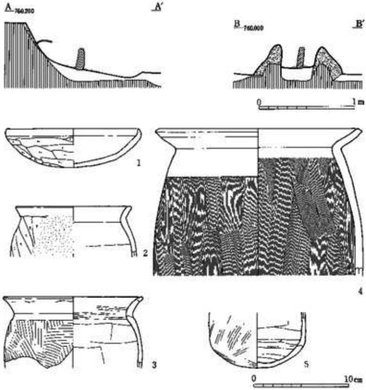
20号竪穴住居跡



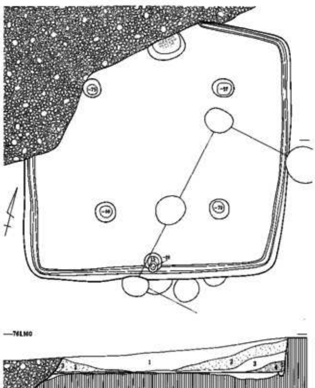
第15図　竪穴住居跡（9）

21号竪穴住居跡

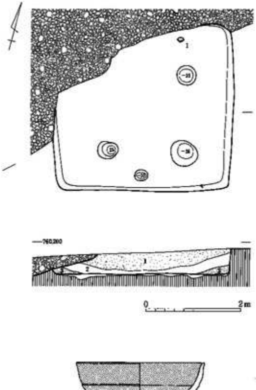




22号竪穴住居跡

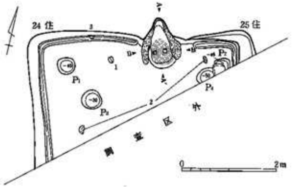


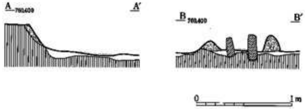
23号竪穴住居跡



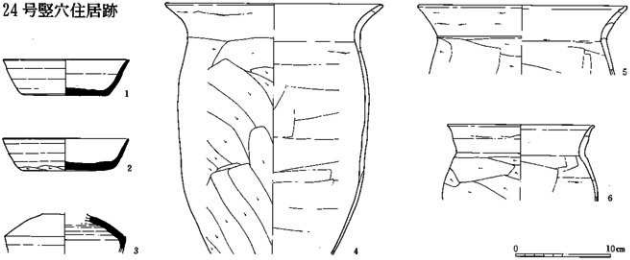
第16図　竪穴住居跡（10）

24･25 号竪穴住居跡

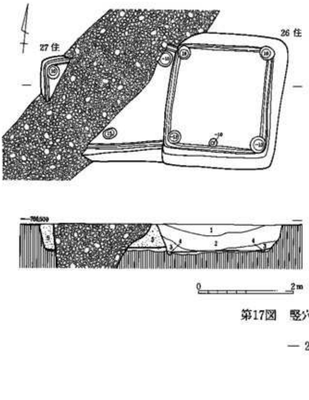




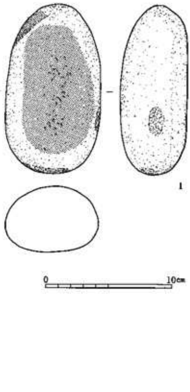
24 号竪穴住居跡



26･27 号竪穴住居跡

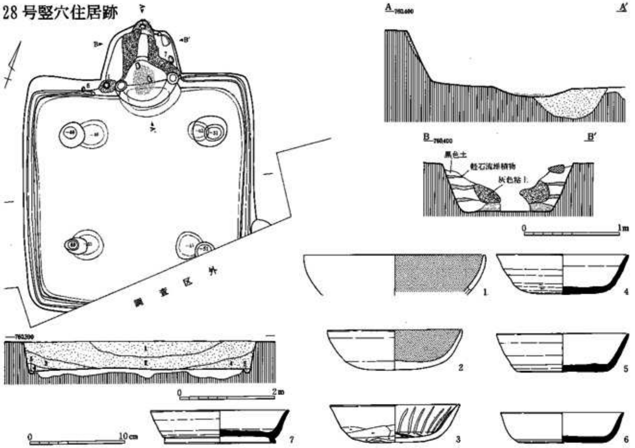


26 号竪穴住居跡

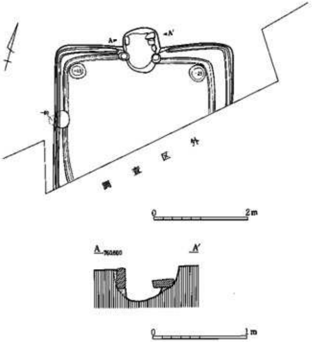


第17図　竪穴住居跡（11）

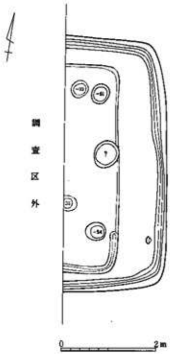
28号竪穴住居跡



29号竪穴住居跡

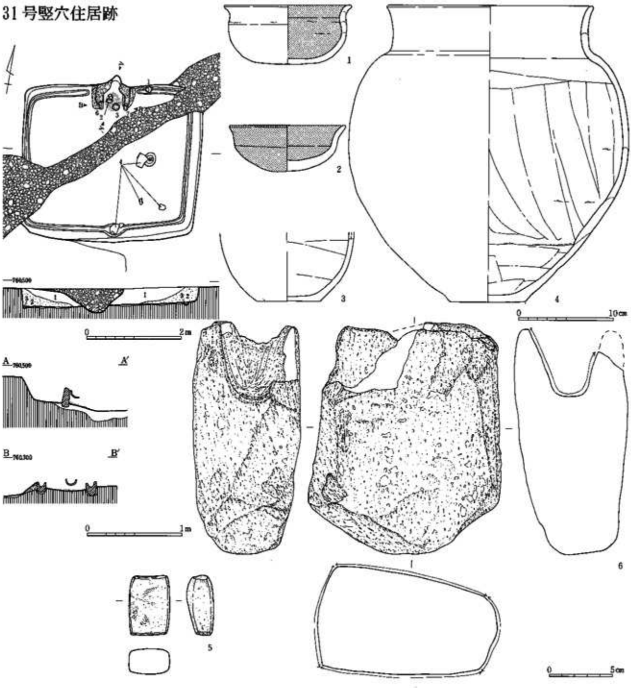


30号竪穴住居跡

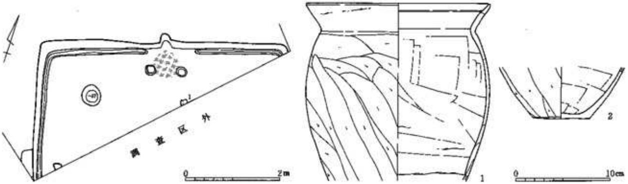


第18図 竪穴住居跡 (12)

31号竪穴住居跡

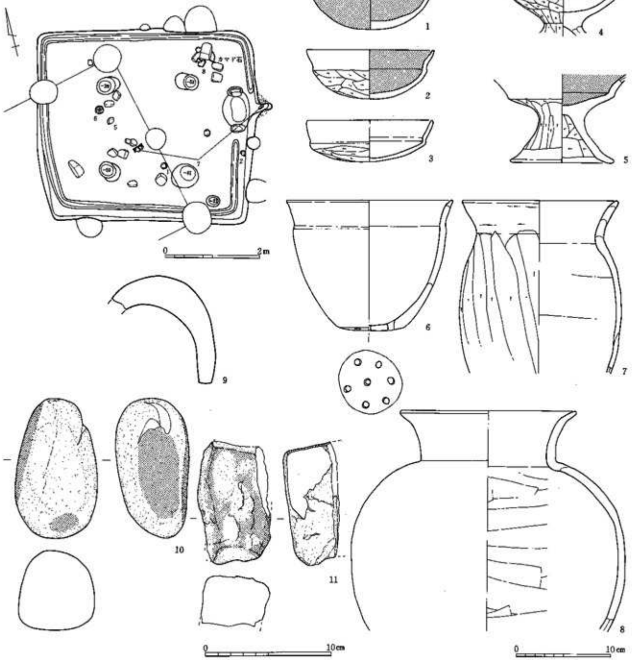


32号竪穴住居跡

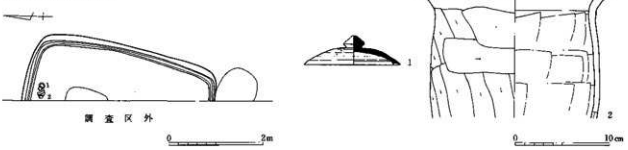


第19図　竪穴住居跡 (13)

33号竪穴住居跡

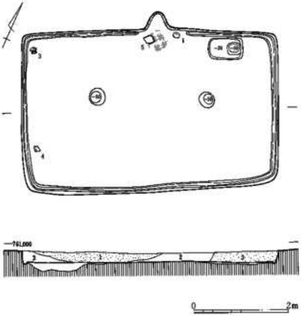


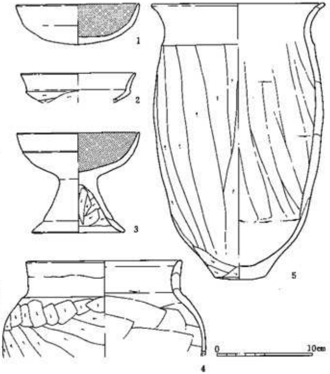
34号竪穴住居跡



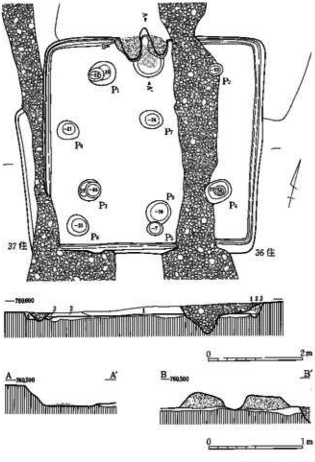
第20図 竪穴住居跡 (14)

35 号竪穴住居跡

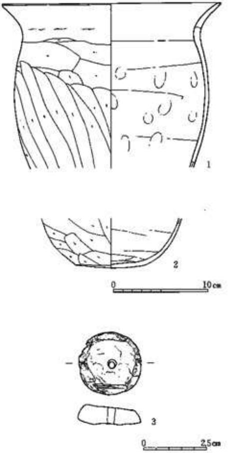




36・37 号竪穴住居跡

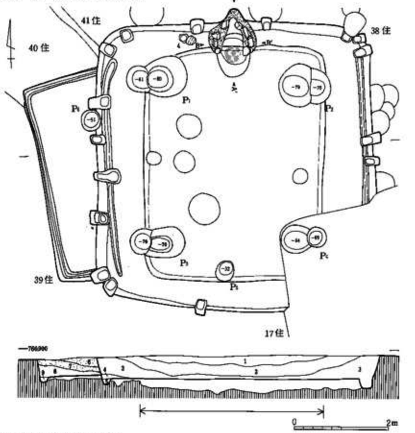


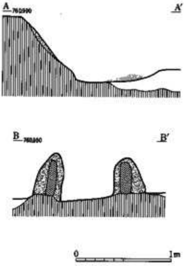
36 号竪穴住居跡



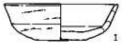
第21図　竪穴住居跡（15）

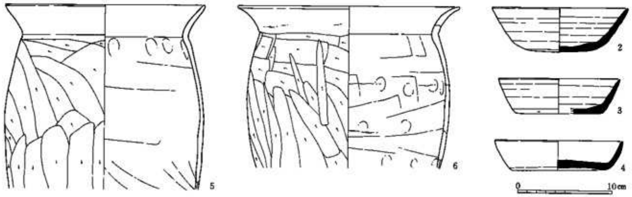
38・39号竪穴住居跡



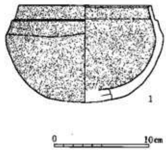


38号竪穴住居跡

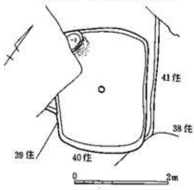




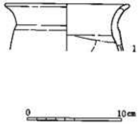
39号竪穴住居跡



40・41号竪穴住居跡

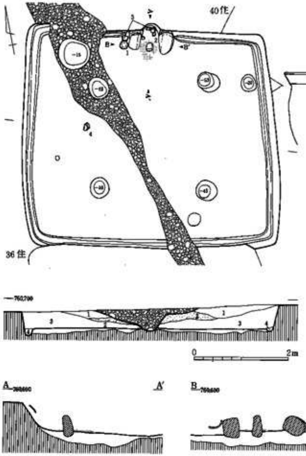


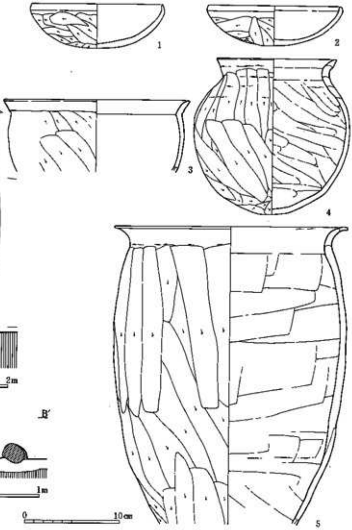
40号竪穴住居跡



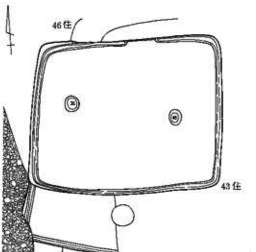
第22図 竪穴住居跡（16）

42号竪穴住居跡

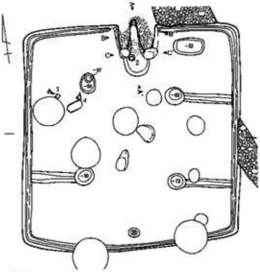




43·44号竪穴住居跡

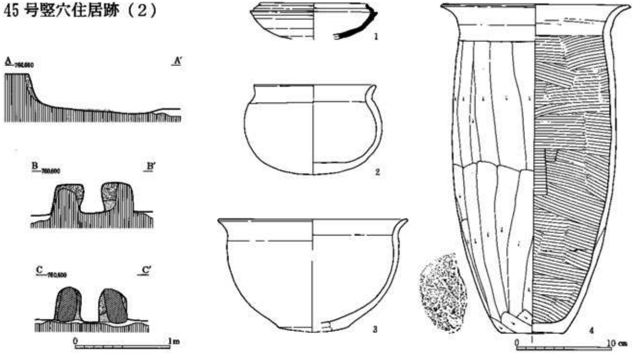


45号竪穴住居跡（1）

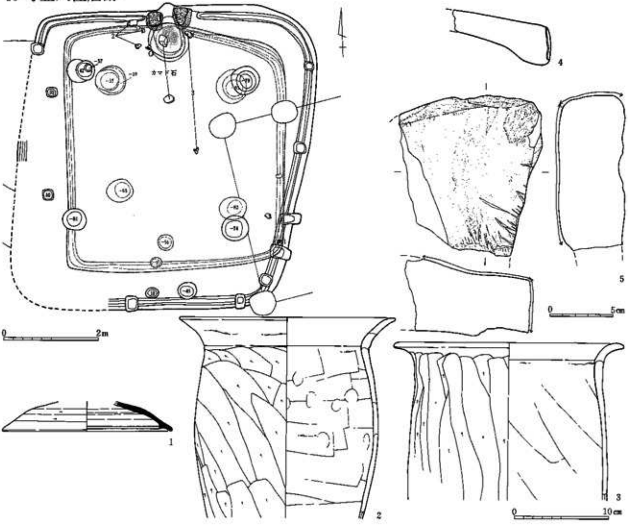


第23図　竪穴住居跡（17）

45号竪穴住居跡（２）

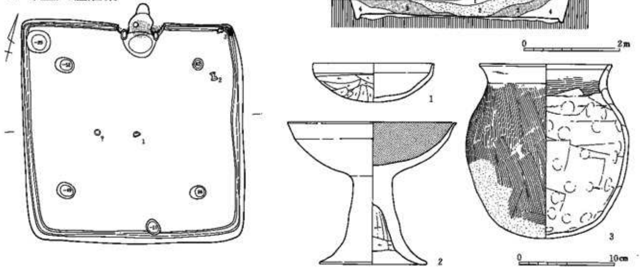


46号竪穴住居跡

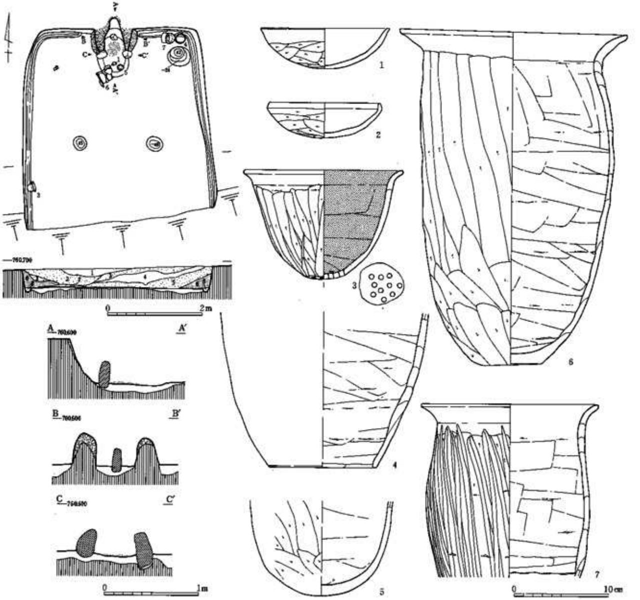


第24図　竪穴住居跡（18）

47号竪穴住居跡

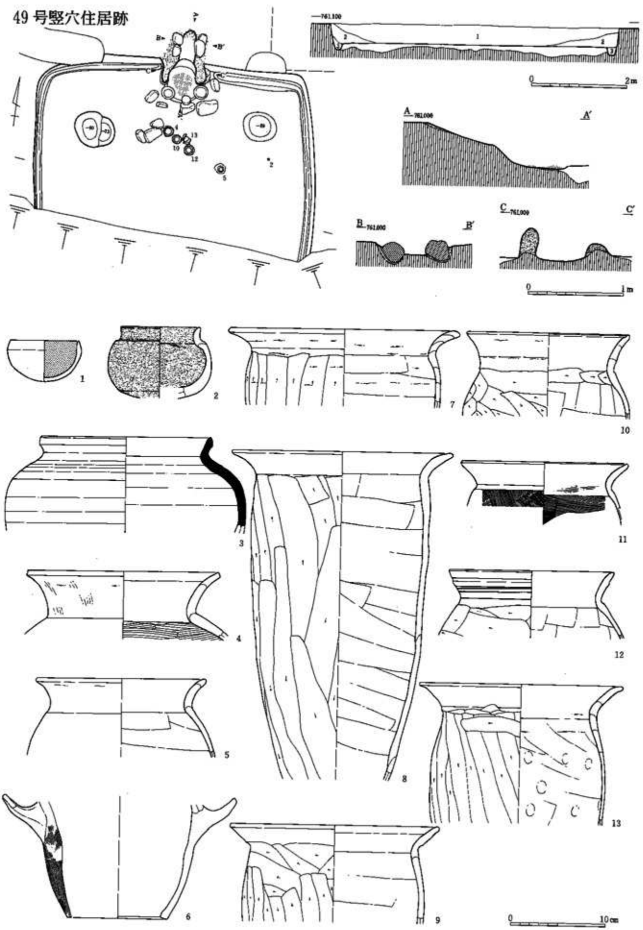


48号竪穴住居跡



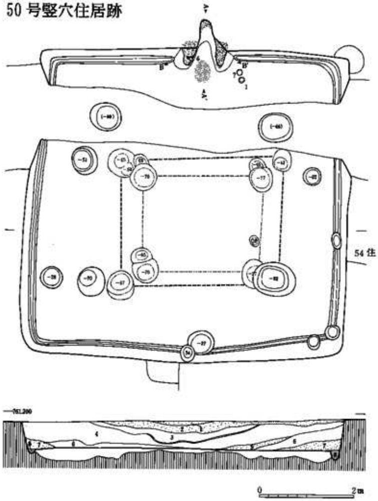
第25図　竪穴住居跡（19）

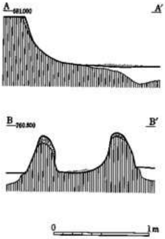
49号竪穴住居跡

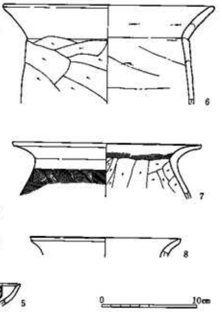


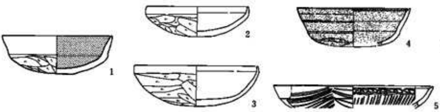
第26図　竪穴住居跡（20）

50号竪穴住居跡

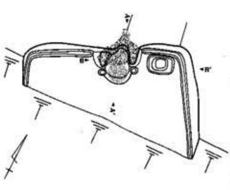


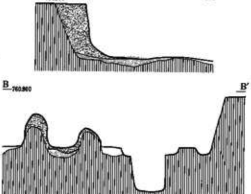






51号竪穴住居跡

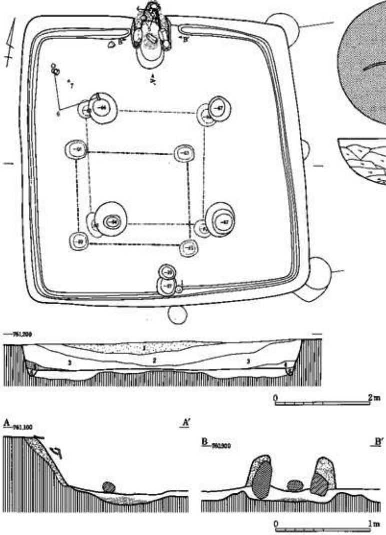


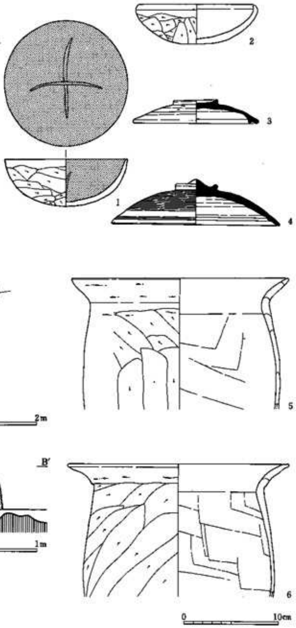


52号竪穴住居跡

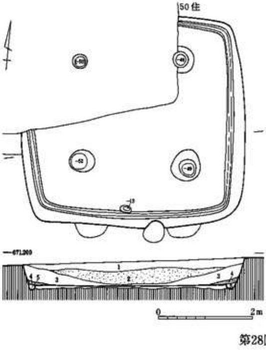
第27図　竪穴住居跡 (21)

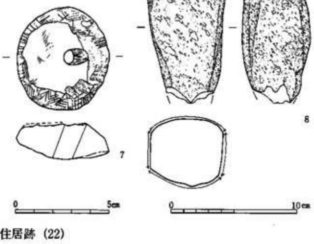
53 号竪穴住居跡





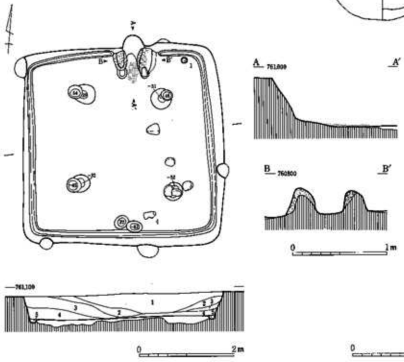
54 号竪穴住居跡

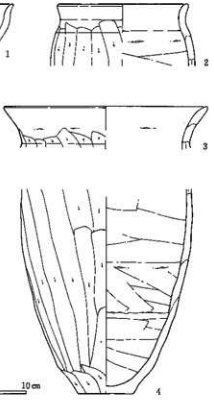




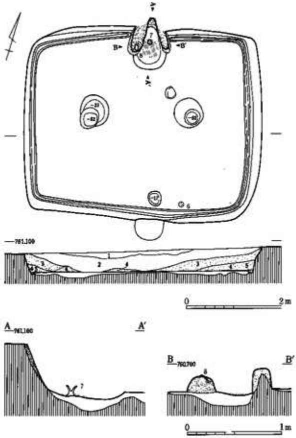
第28図　竪穴住居跡（22）

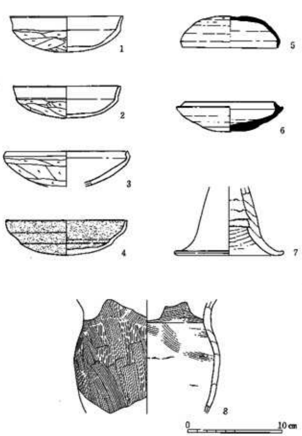
55 号竪穴住居跡





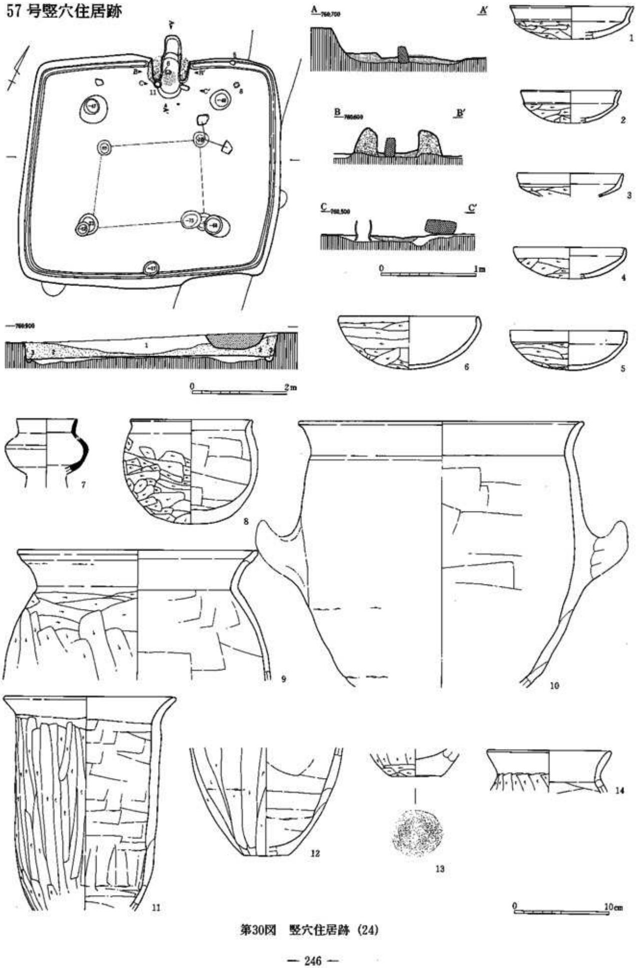
56 号竪穴住居跡





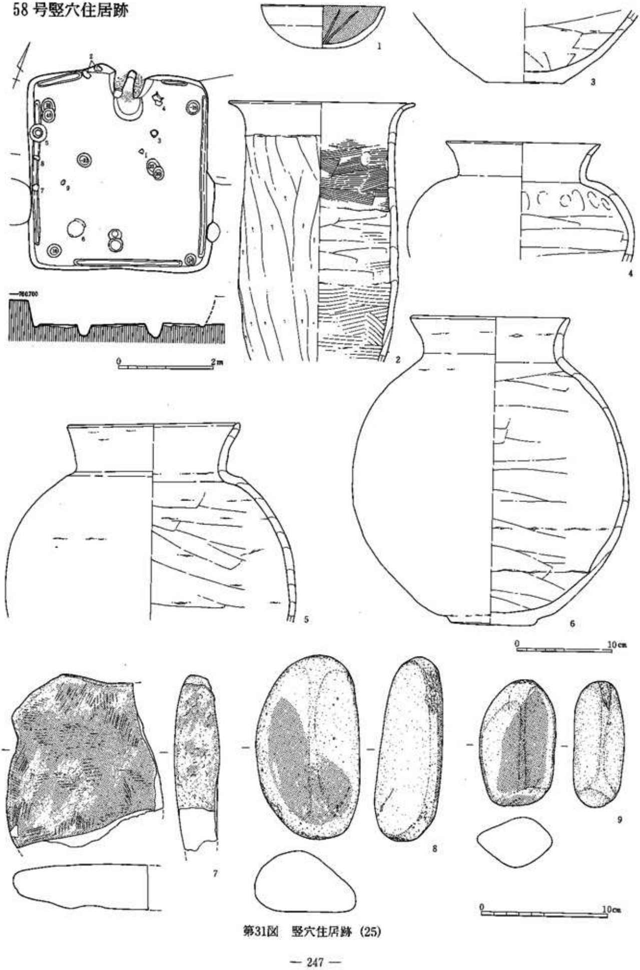
第29図　竪穴住居跡（23）

57号竪穴住居跡



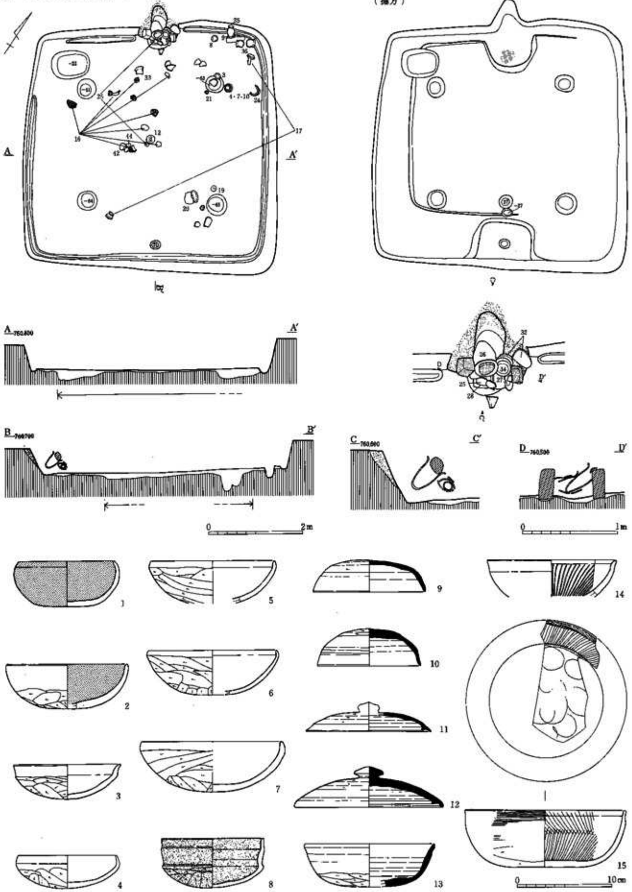
第30図 竪穴住居跡（24）

58号竪穴住居跡



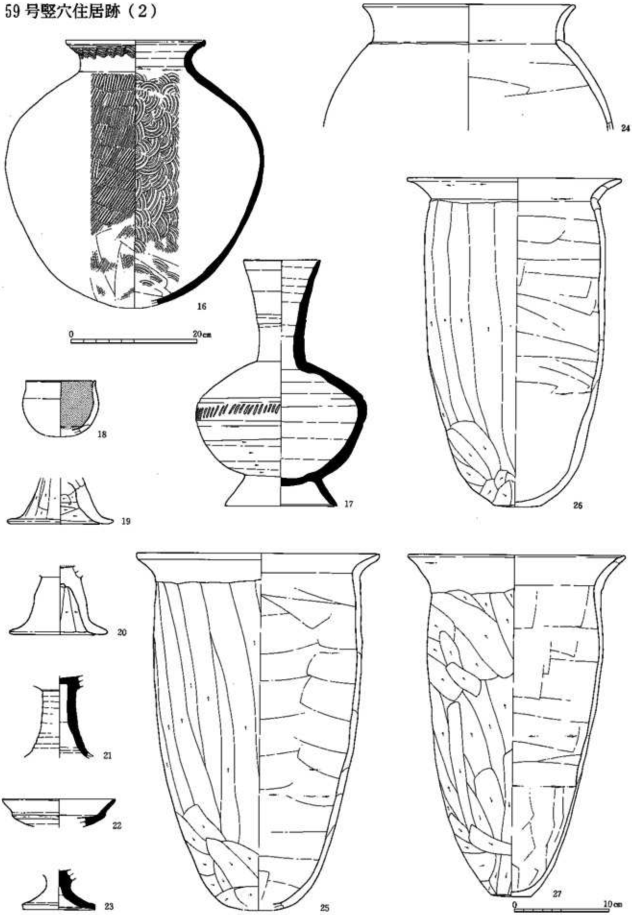
第31図　竪穴住居跡 (25)

59号竪穴住居跡（1）



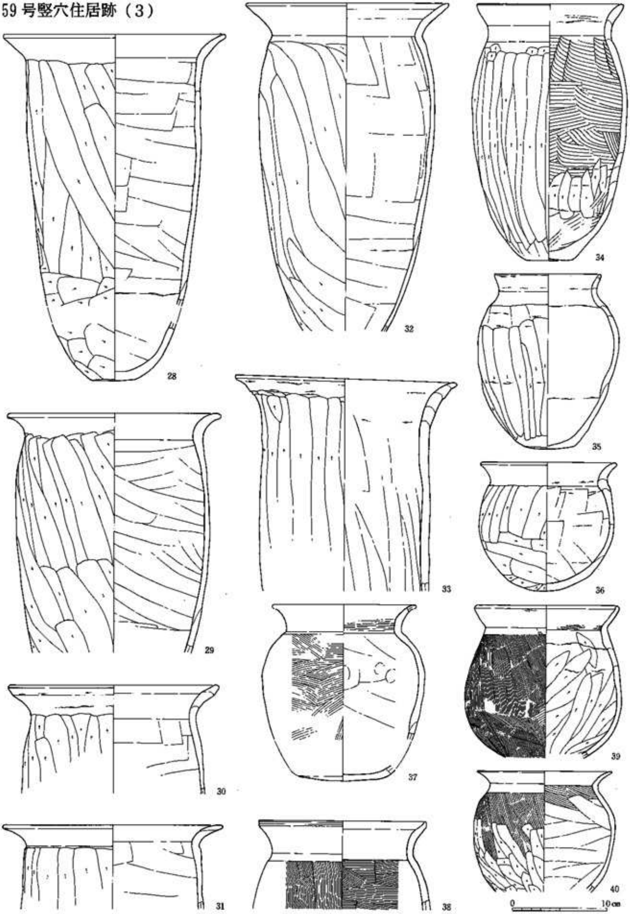
第32図 竪穴住居跡（26）

59号竪穴住居跡（2）



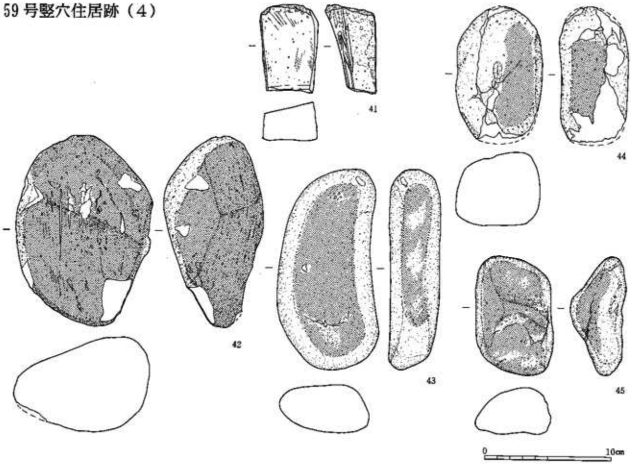
第33図　竪穴住居跡 (27)

59号竪穴住居跡（3）

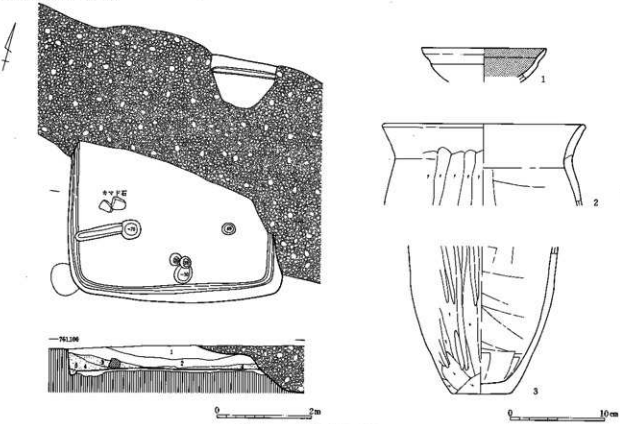


第34図 竪穴住居跡（28）

59 号竪穴住居跡（４）

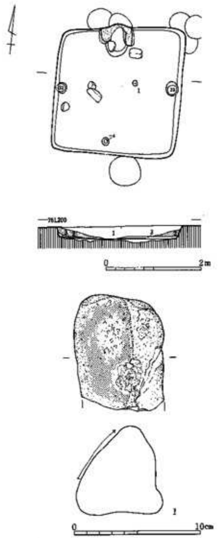


60 号竪穴住居跡

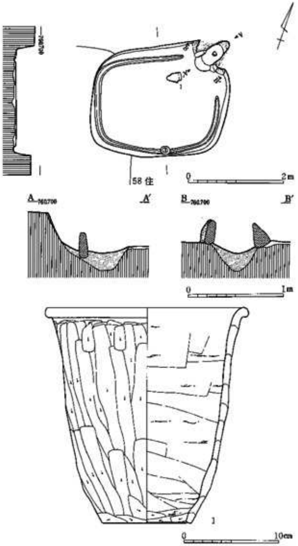


第35図　竪穴住居跡（29）

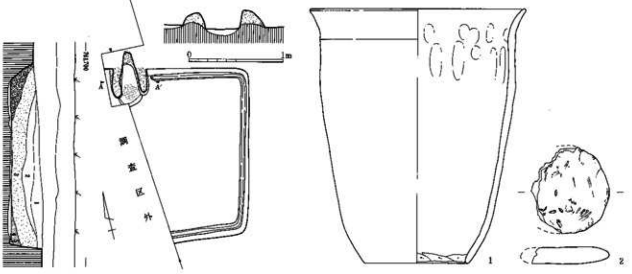
61号竪穴住居跡



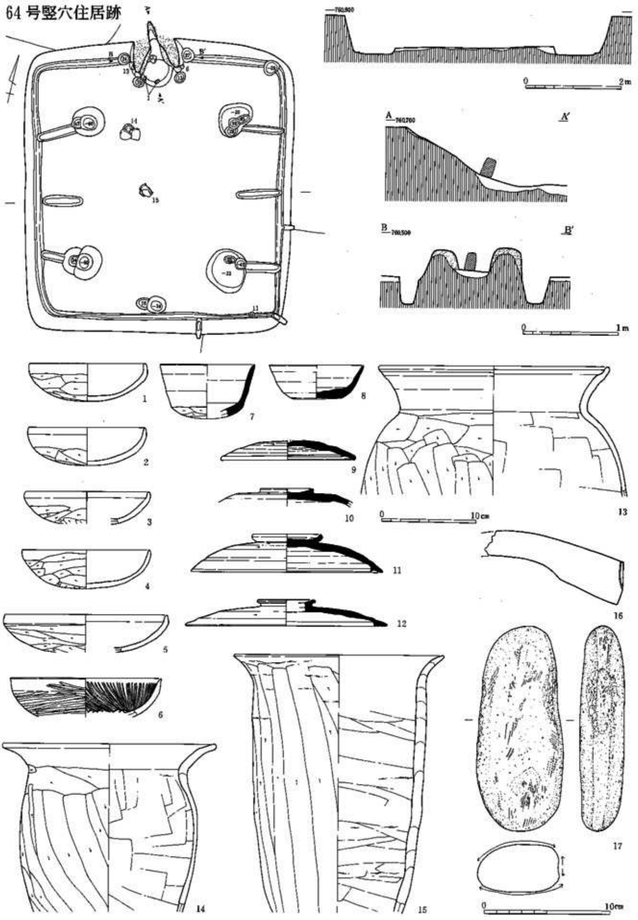
62号竪穴住居跡



63号竪穴住居跡

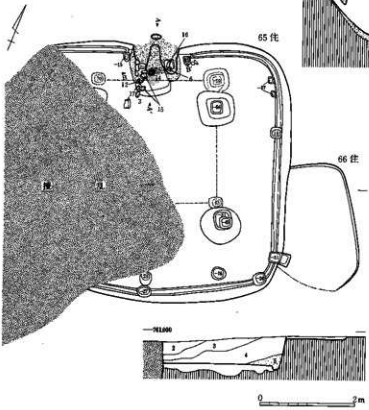


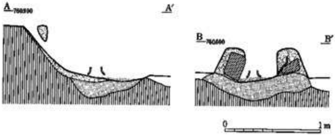
第36図　竪穴住居跡（30）



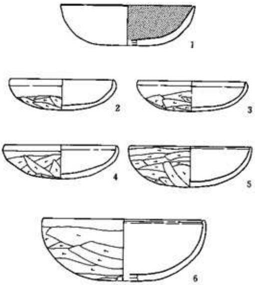
第37図　竪穴住居跡（31）

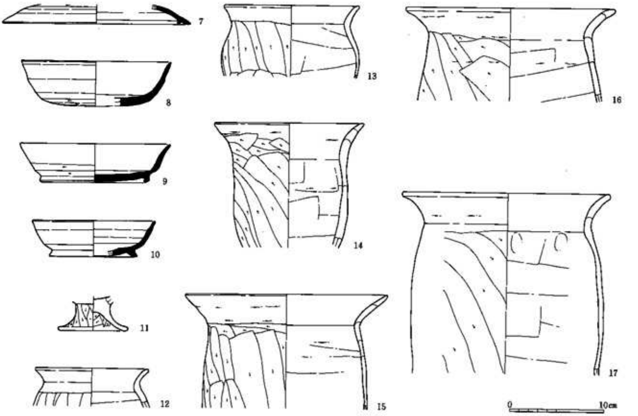
65·66号竪穴住居跡





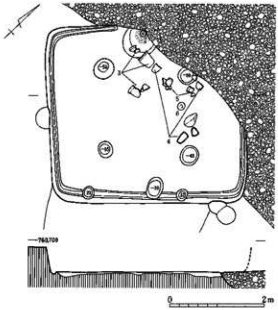
65号竪穴住居跡

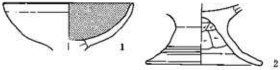


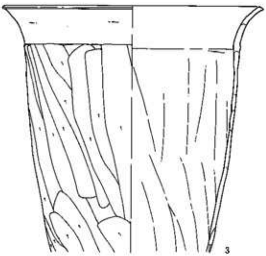


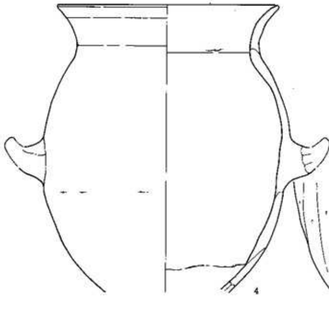
第38図　竪穴住居跡（32）

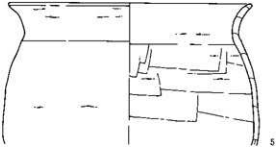
67号竪穴住居跡

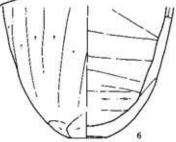


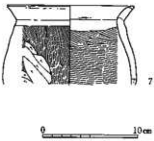




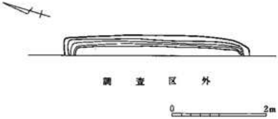




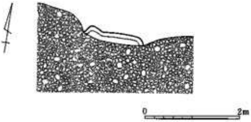




68号竪穴住居跡

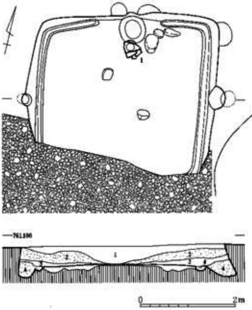


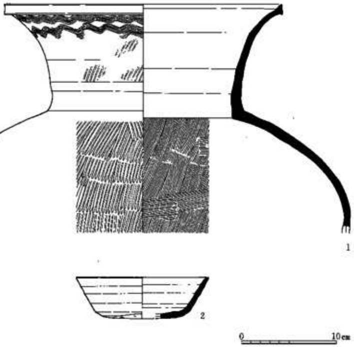
69号竪穴住居跡



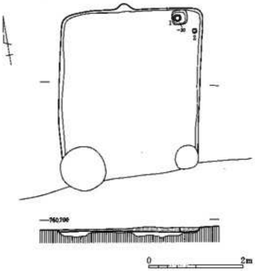
第39図　竪穴住居跡（33）

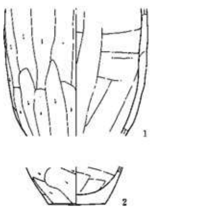
70号竪穴住居跡



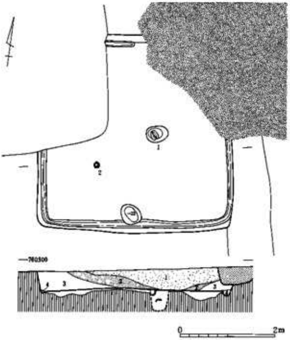


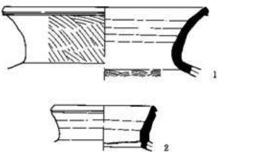
71号竪穴住居跡





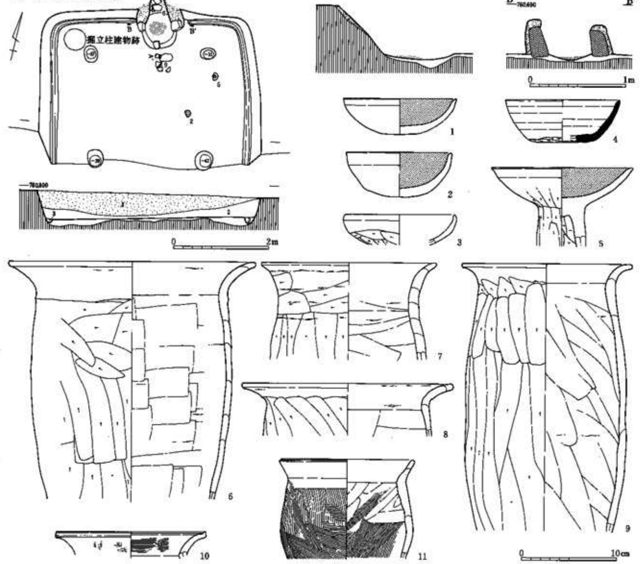
72号竪穴住居跡



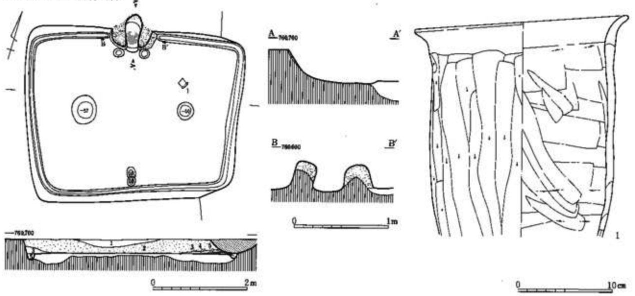


第40図　竪穴住居跡（34）

73号竪穴住居跡

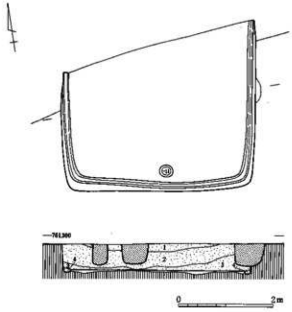


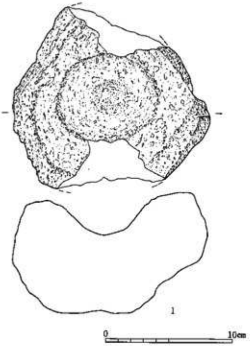
74号竪穴住居跡



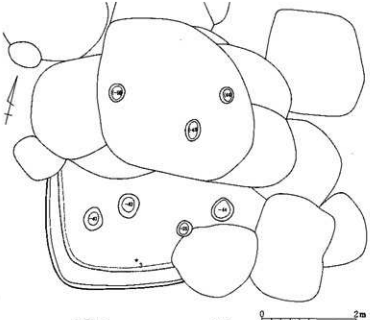
第41図　竪穴住居跡（35）

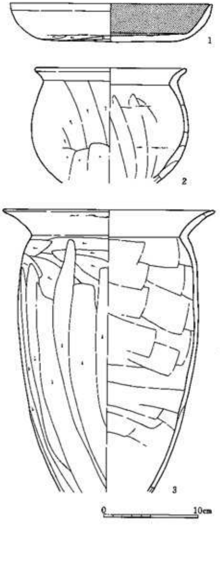
75号竪穴住居跡

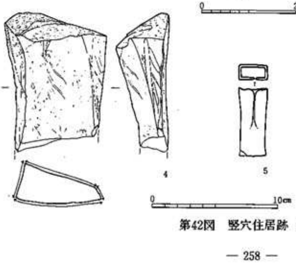




76号竪穴住居跡

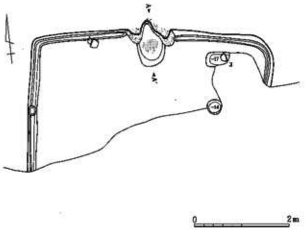


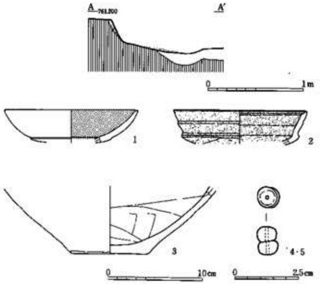




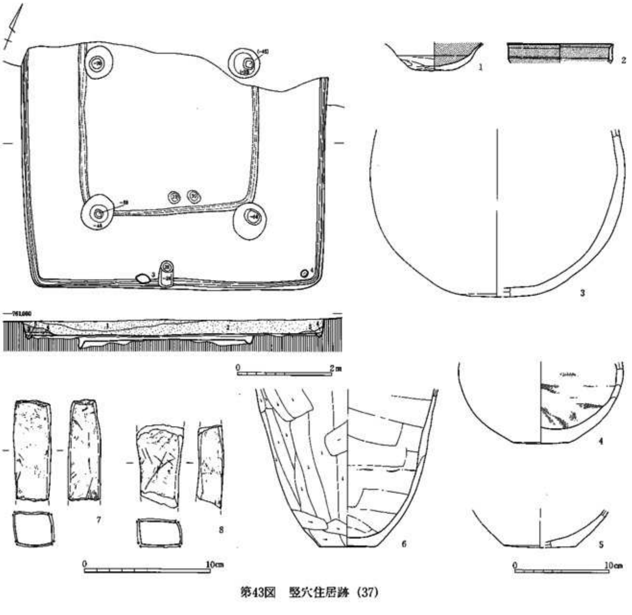
第42図　竪穴住居跡（36）

77 号竪穴住居跡



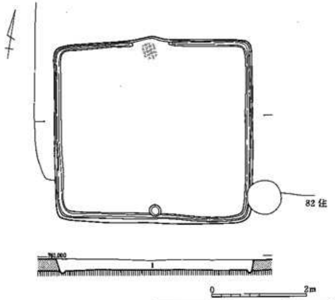


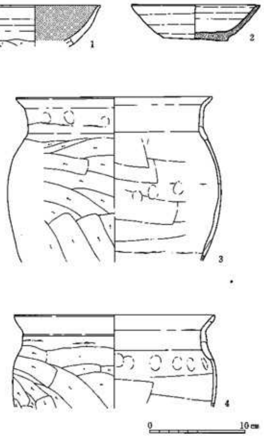
78 号竪穴住居跡



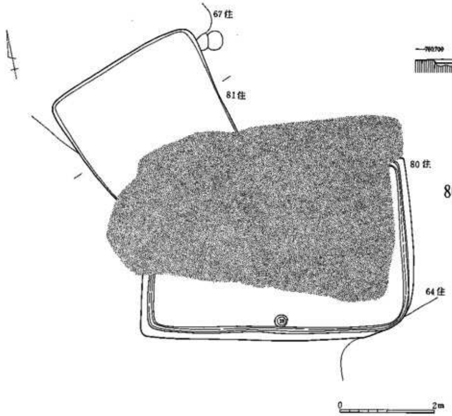
第43図　竪穴住居跡 (37)

79号竪穴住居跡

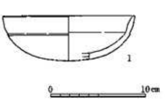




80･81号竪穴住居跡

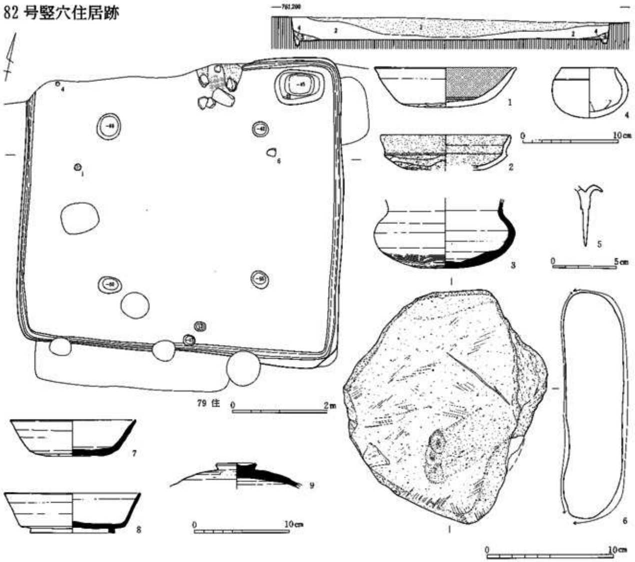


80号竪穴住居跡

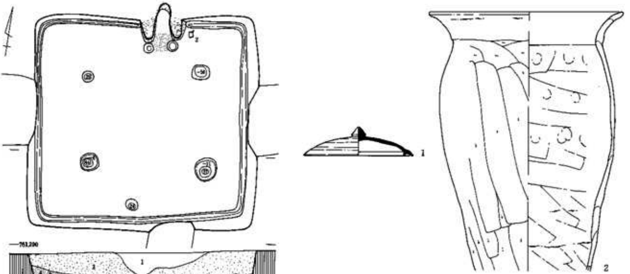


第44図 竪穴住居跡 (38)

82 号竪穴住居跡

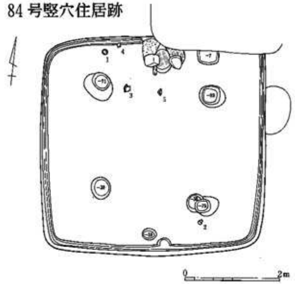


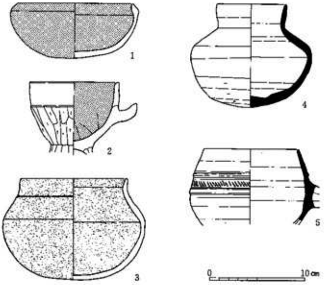
83 号竪穴住居跡



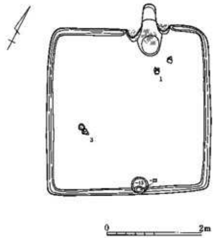
第45図　竪穴住居跡（39）

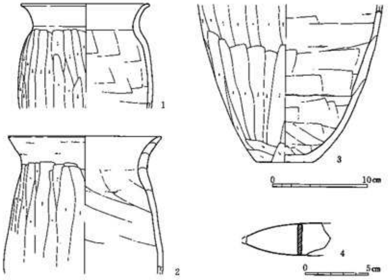
84 号竪穴住居跡



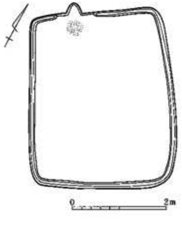


85 号竪穴住居跡

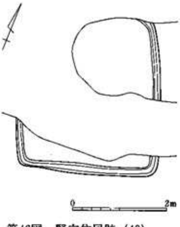




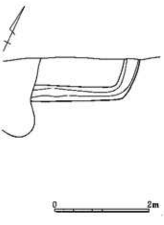
86 号竪穴住居跡



87 号竪穴住居跡

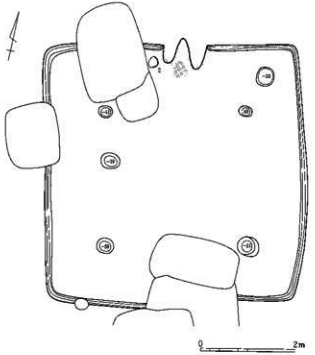


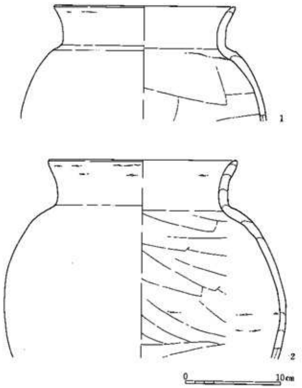
88 号竪穴住居跡



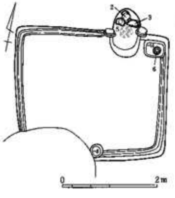
第46図 竪穴住居跡 (40)

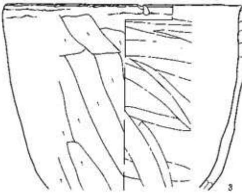
89号竪穴住居跡

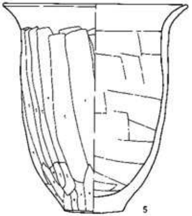


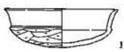


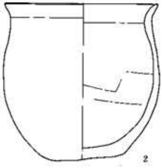
90号竪穴住居跡

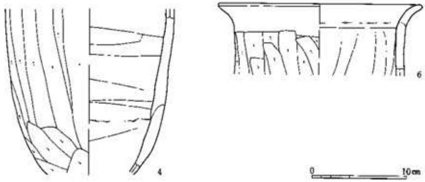






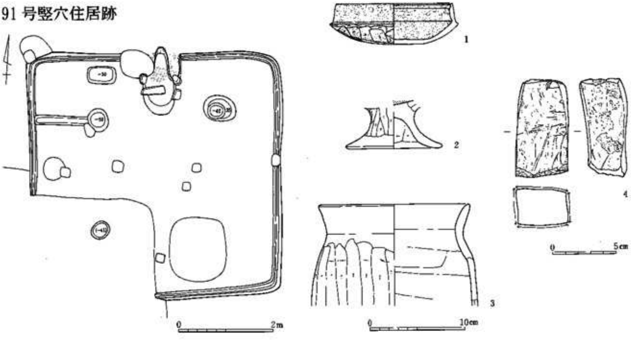






第47図　竪穴住居跡（41）

91号竪穴住居跡



第48図　竪穴住居跡（42）

90号竪穴住居跡（第47図、ＰＬ79）

7世紀前葉を中心とした時期に廃棄された遺構と考えられる。

覆土及び掘方の観察は残念ながら行っていない。カマドは、壁際に焚き口部があり、調整された軽石を左右に埋め込んでいた。燃焼部にはおよそ3個の土器が掛けられていたようだが、状況はよく判別できない。北東コーナーには貯蔵穴が存在し、2の土器が埋設されていた。

91号竪穴住居跡（第48図）

6世紀後葉から7世紀初頭に廃棄されたものである。

覆土及び掘方は、冬期発掘のため確認できなかった。カマドは、地山を掘り残し、以後橙色粘土を被覆して袖とし、先端には調整された軽石を埋め込んでいた。また、天井石（軽石）が落下している状況であった。

(2) 掘立柱建物跡（第49～65図）

柱穴の標高は、もっとも高位置の上端を0として算出してある。したがって、実際には10cmの深さしかなくとも、もっとも高位置の柱穴から10cm低ければ、その時は20cmという値ににる。なお、複数の掘立柱建物跡が記されている場合は、各々の掘立柱建物跡間で行っている。

掘立柱建物跡の時期については、出土遺物がほとんどないに等しく不明なものが多い。ただし、竪穴住居跡や溝などの切り合い関係で多少想定可能なものもある。ちなみに、竪穴住居跡との切り合いは第3節2－(1)に記述してあるし、古代の官衙跡の区画施設である1～6号溝とでは、これを切る掘立柱建物跡が存在しなかった。ただし、24・26・50号掘立柱建物跡のような溝持ちの形態のものは、おそらく平安時代と考えられえられ、本来、溝よりも新しいものと思われる。

県道借宿・小諸線～排水路

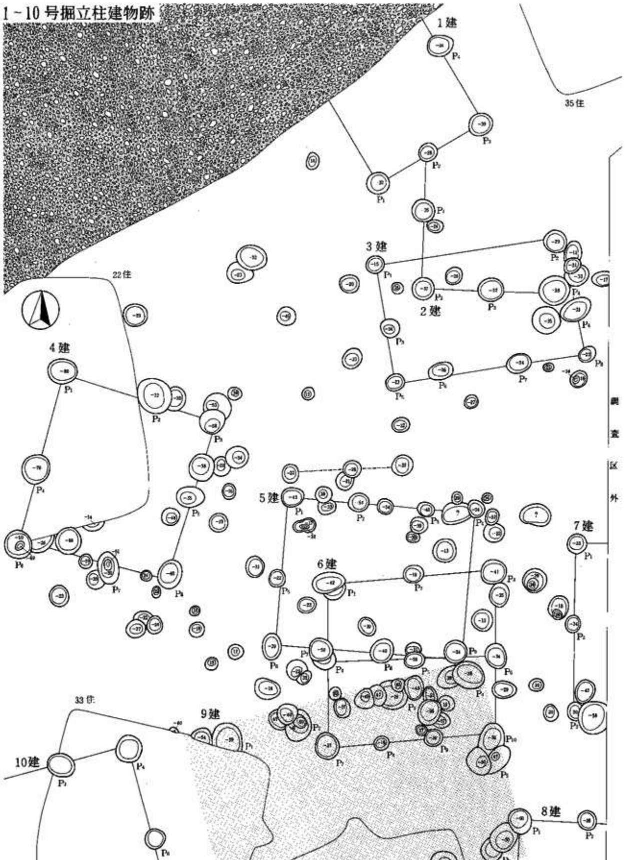
南東隅に集中して認められる。ここは微高地状となっているため、竪穴住居跡の分布も目立った状態にある。調査段階で確認されたものは少なく、多くは整理時点で検討し、掘立柱建物跡として認定した。したがって、本来、竪穴住居跡よりも新しいものについては少数しか確認していないし、また掘立柱建物跡そのものの認定に若干無理を生じているかもしれない。正確な掘立柱建物跡の実数及び形態は、残念ながら不明のままとなってしまった。

排水路～北端部

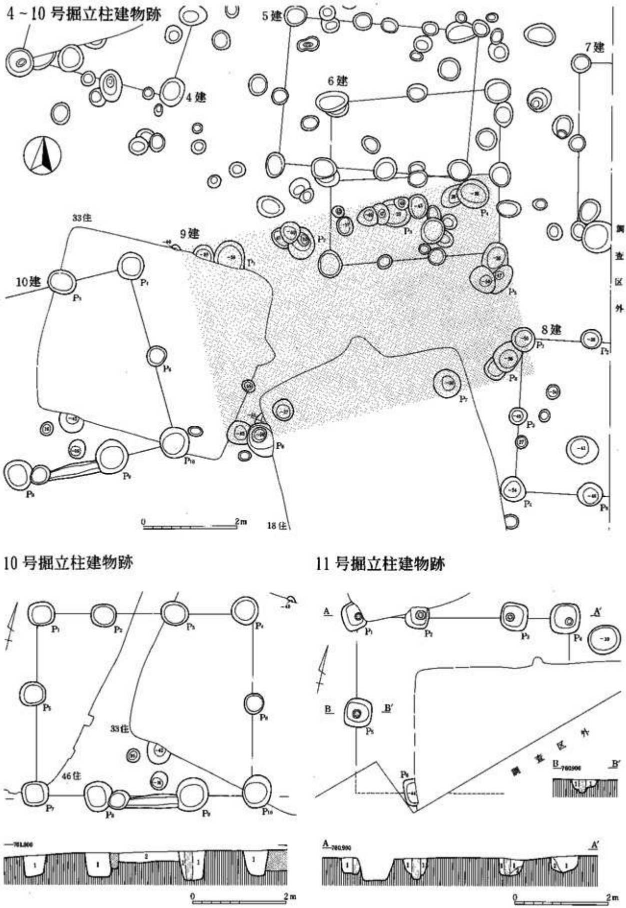
2・3号溝から南端は、概ね竪穴住居跡と分離するように東側に位置している。ここでも、29・32・36・40・59号掘立柱建物跡など、若干構造に今一つ無理が生じているものもあり、それ以外に49号竪穴住居跡西側や53号竪穴住居跡周辺についても掘立柱建物跡ができうる可能性がある。

2・3号溝から6号溝間については、後述するが官衙跡の内部に相当する。東西に主軸をとる3間×6間の平地式建物である主屋（72号掘立柱建物跡）、その東側に同等の脇屋（73号掘立柱建物跡）を設け、ともに角柱の存在が予想されたが、72号掘立柱建物跡については掘方のみで柱痕は確認できなかった。また、それぞれわずか北側に移動している。その北側にはおそらく時期差が存在するのだろう、通常規模の主屋（66号掘立柱建物跡）と脇屋群（63～65号掘立柱建物跡）が建ち並んでいる。6号溝南側には、これに伴う倉庫跡群75～77号掘立柱建物跡（それぞれ角柱を伴う）が南側を揃えて並んでいる。34・35・78についても同期のものと考えているが、それ以外については時期が異なるか、ないしは時期不明としかいえない。

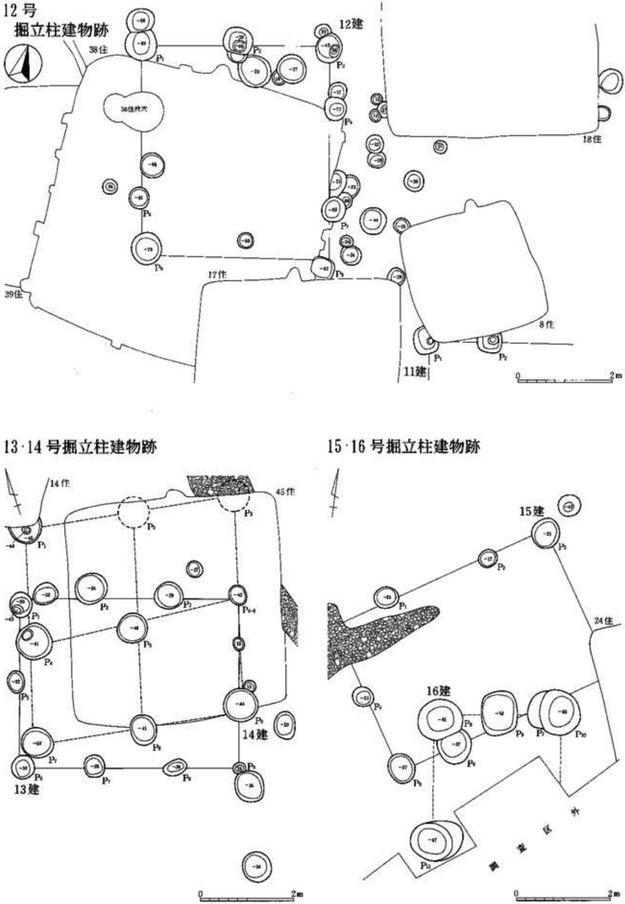
6号溝以北については、1棟のみ確認できた。1間×1間の簡素なものである。周囲の竪穴住居跡は6世紀後葉から7世紀前葉のものであり、おそらく当該期の所産であるに違いない。



第49図 掘立柱建物跡（1）

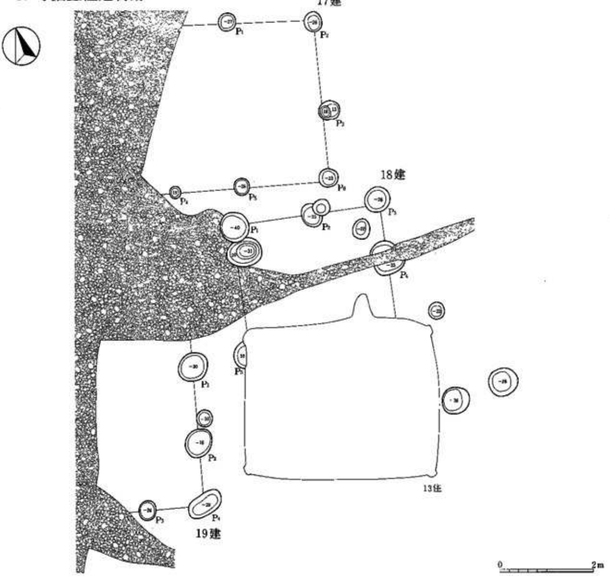


第50図　掘立柱建物跡（2）

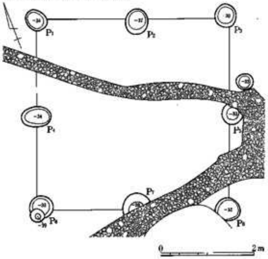


第51図　掘立柱建物跡（3）

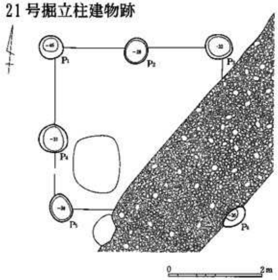
17～19号掘立柱建物跡



20号掘立柱建物跡

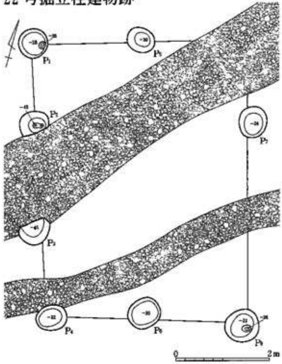


21号掘立柱建物跡

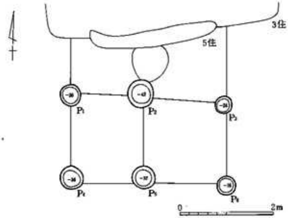


第52図　掘立柱建物跡（４）

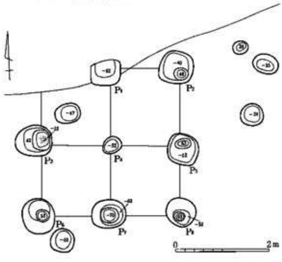
22号掘立柱建物跡



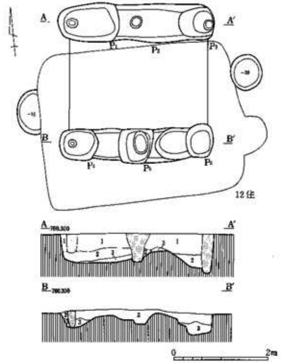
23号掘立柱建物跡



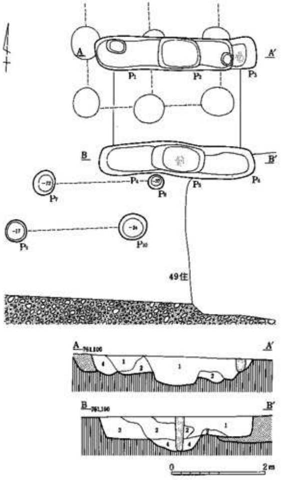
25号掘立柱建物跡



24号掘立柱建物跡

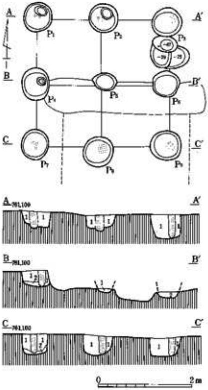


26号掘立柱建物跡

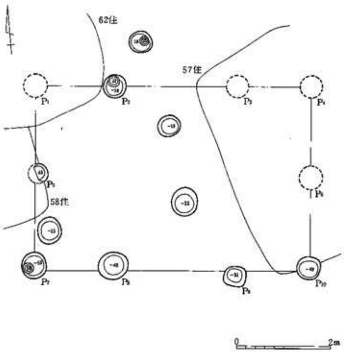


第53図　掘立柱建物跡（5）

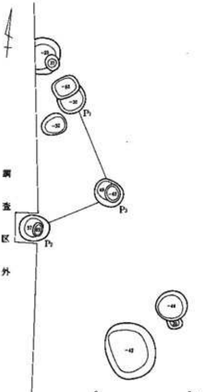
27号掘立柱建物跡



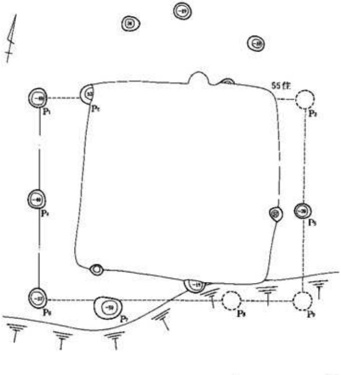
29号掘立柱建物跡



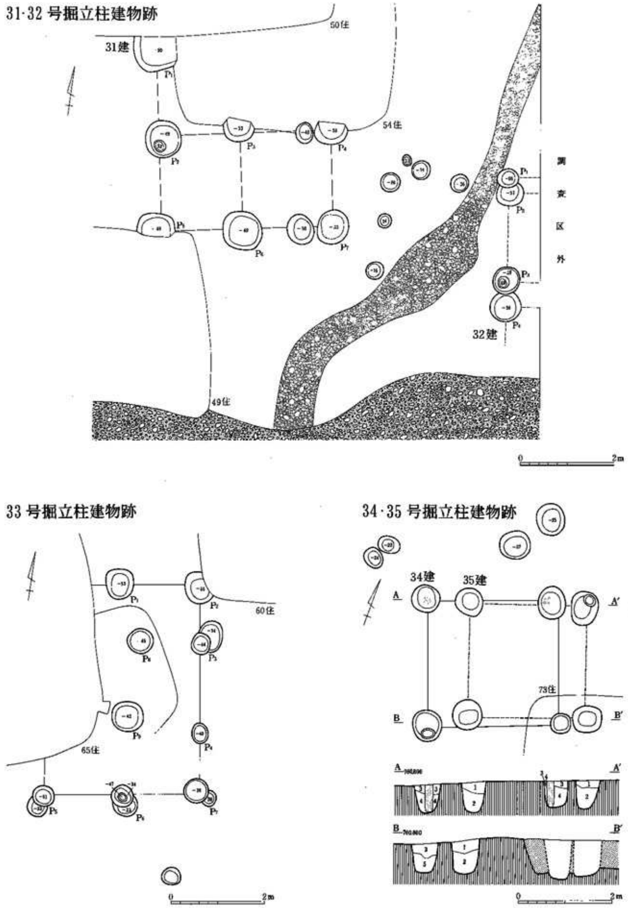
28号掘立柱建物跡



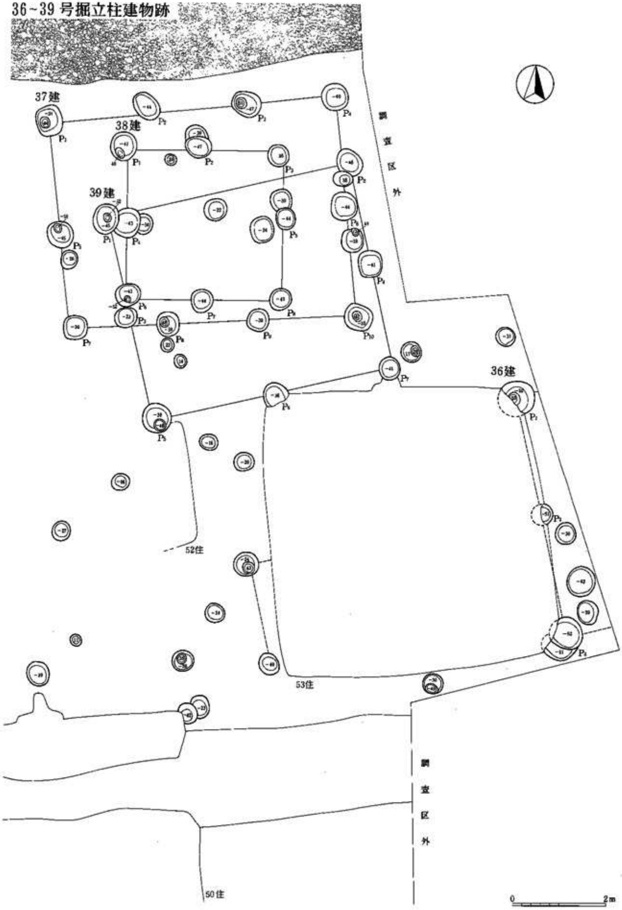
30号掘立柱建物跡



第54図　掘立柱建物跡（6）

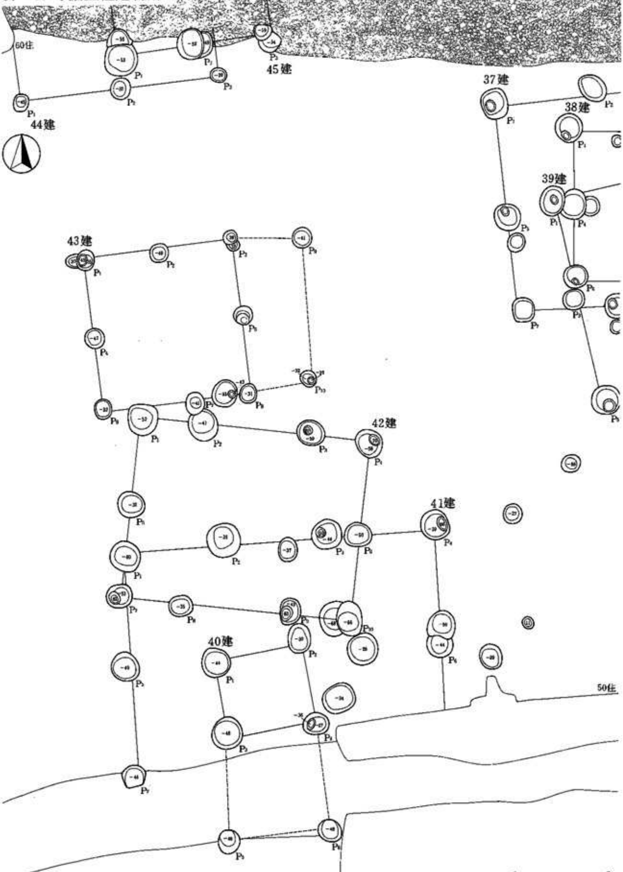


第55図　掘立柱建物跡（７）



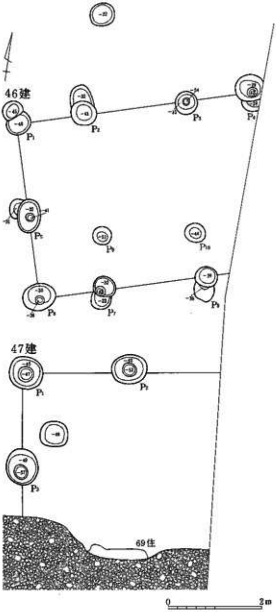
第56図　掘立柱建物跡（８）

37～45号掘立柱建物跡

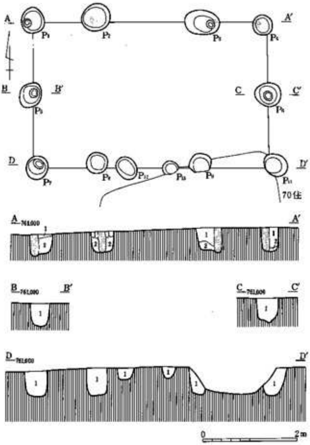


第57図　掘立柱建物跡（９）

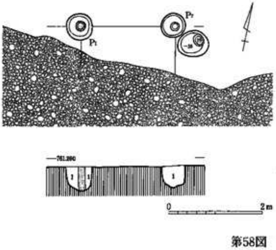
46·47号掘立柱建物跡



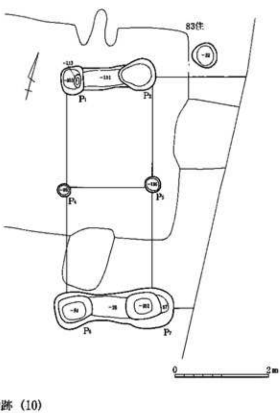
49号掘立柱建物跡



48号掘立柱建物跡

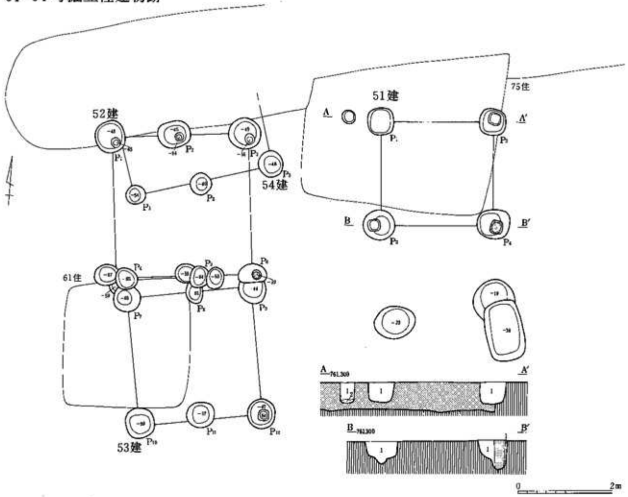


50号掘立柱建物跡

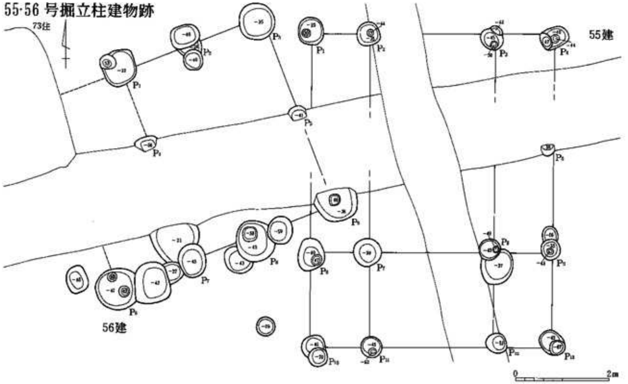


第58図　掘立柱建物跡（10）

51~54号掘立柱建物跡

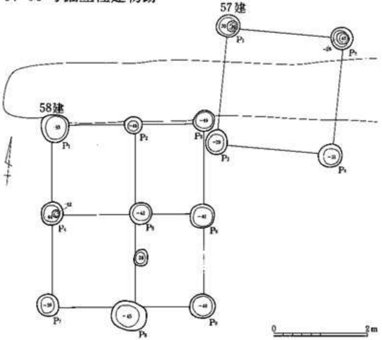


55·56号掘立柱建物跡

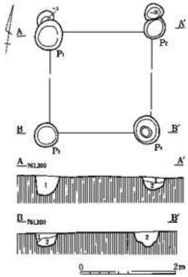


第59図 掘立柱建物跡 (11)

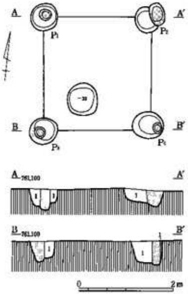
57・58号掘立柱建物跡



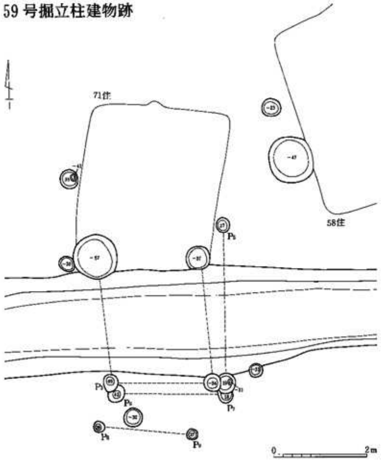
60号掘立柱建物跡



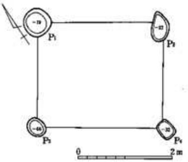
61号掘立柱建物跡



59号掘立柱建物跡

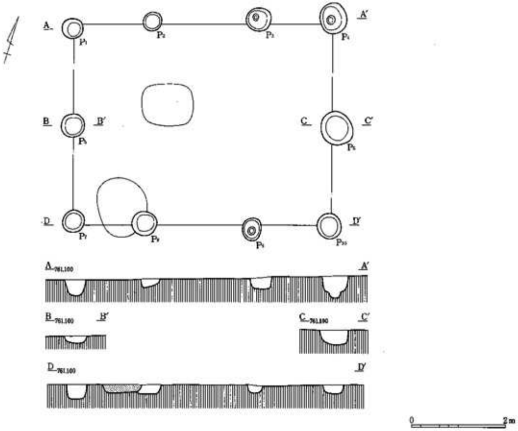


62号掘立柱建物跡

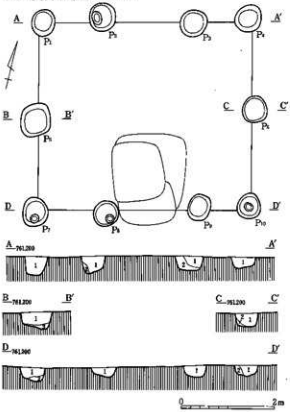


第60図　掘立柱建物跡 (12)

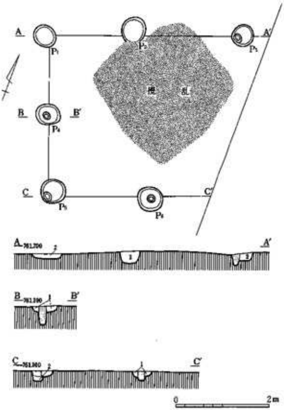
63号掘立柱建物跡



64号掘立柱建物跡

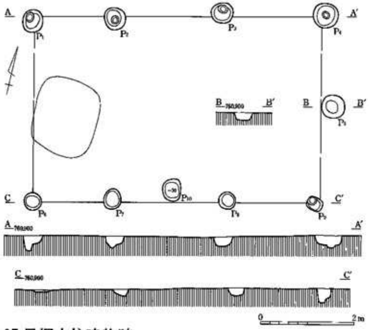


65号掘立柱建物跡

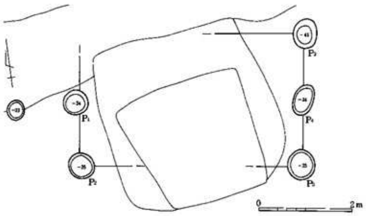


第61図　掘立柱建物跡（13）

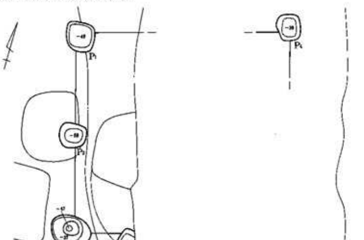
66 号掘立柱建物跡



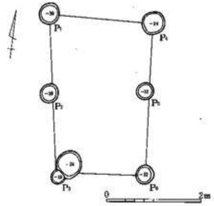
67 号掘立柱建物跡



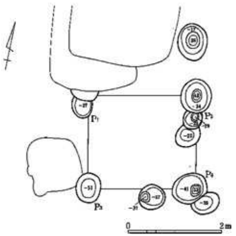
68 号掘立柱建物跡



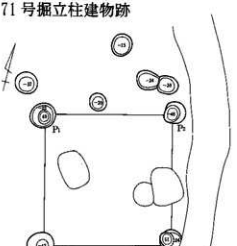
69 号掘立柱建物跡



70 号掘立柱建物跡

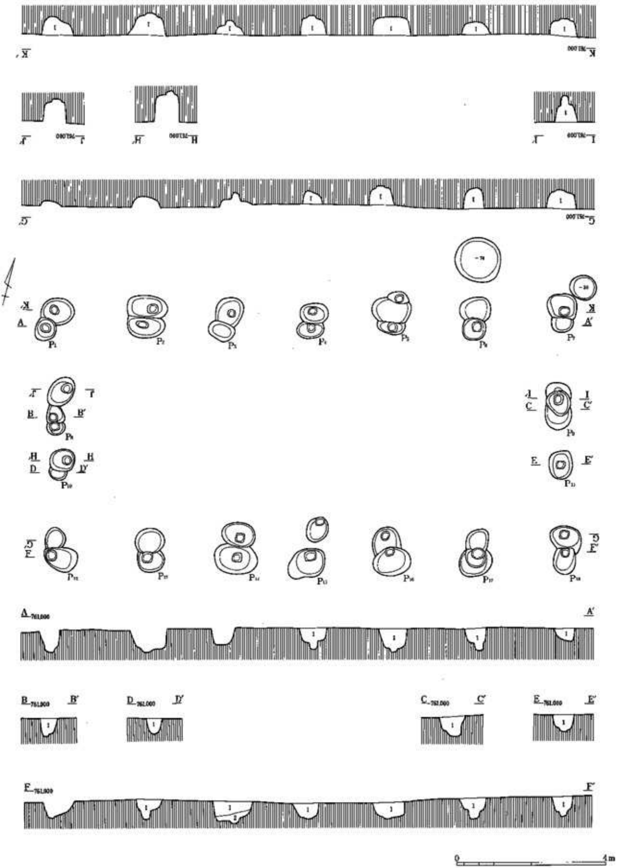


71 号掘立柱建物跡



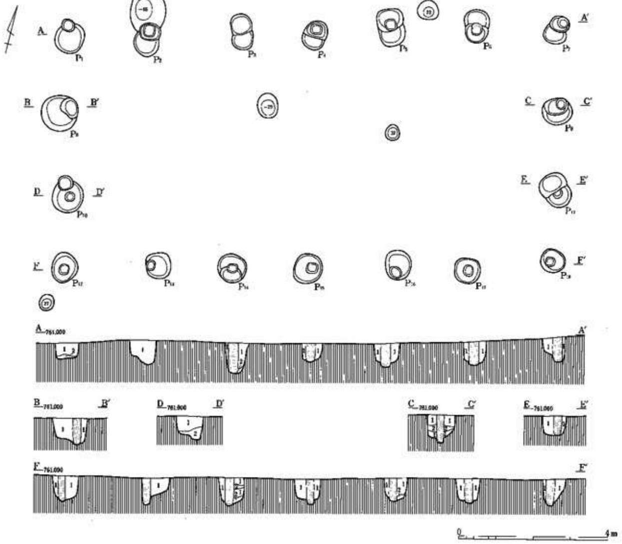
第62図　掘立柱建物跡 (14)

72号掘立柱建物跡

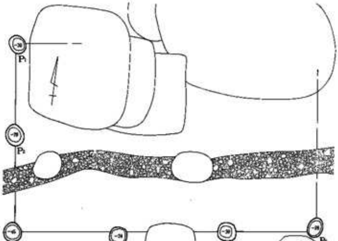


第63図　掘立柱建物跡（15）

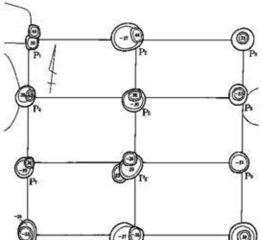
73 号掘立柱建物跡



74 号掘立柱建物跡

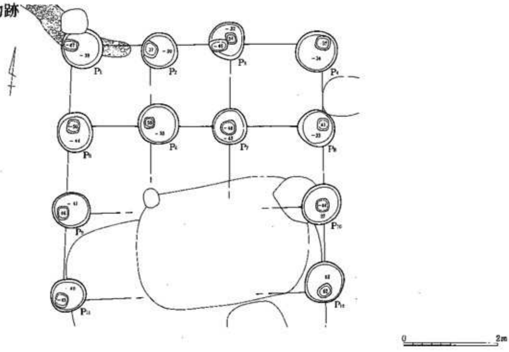


75 号掘立柱建物跡

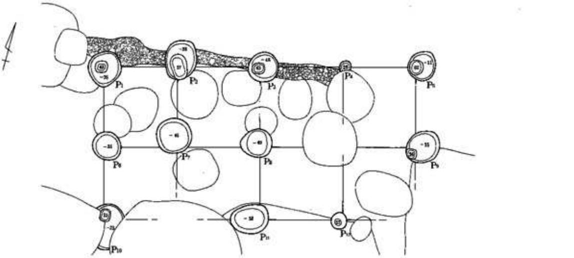


第64図　掘立柱建物跡（16）

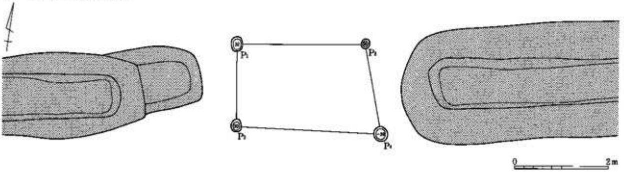
76号掘立柱建物跡



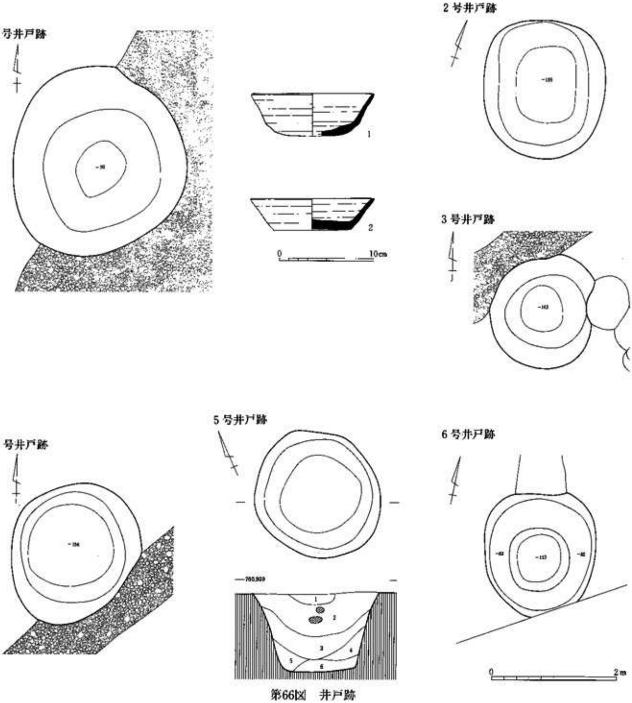
77号掘立柱建物跡



78号掘立柱建物跡



第65図 掘立柱建物跡 (17)



第66図　井戸跡

(3) 井戸跡

1号井戸跡（第66図）

8世紀前半に廃棄されたものである。東側を旧御影用水によって切られているが、およそ直径3m程の略円形を呈している。断面は箱薬研状である。勇水地点に築かれており、土層観観察は行えなかった。

2号井戸跡（第66図）

出土遺物はないが、明らかに1号井戸跡に類似した覆土を呈していたので古代のものと考えられる。南北長2.2m、東西長2.0mをはかり、長方形を呈する。箱薬研状の断面だが、勇水地点に位置しており、断

面観察は不可能であった。

3号井戸跡（第66図）

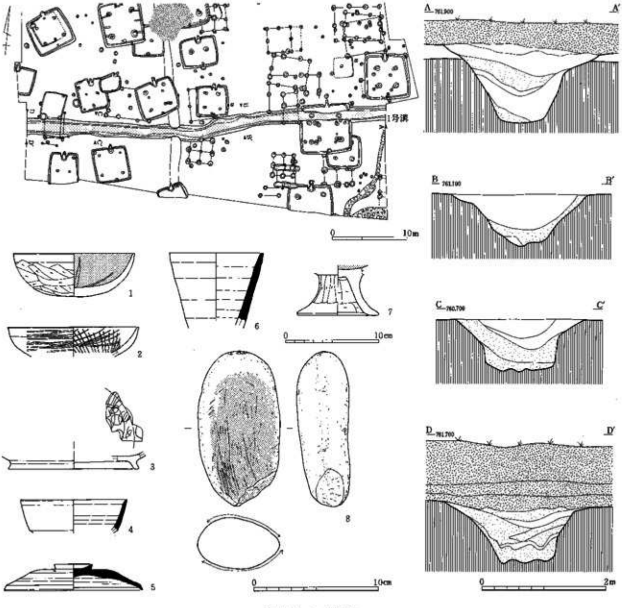
出土遺物はないが古代のものと思われる。直径は最大で1.85mをはかる略円形のもので、断面形態は箱薬研状を呈する。勇水地点に位置しており、断面観察は不可能であった。

4号井戸跡（第66図）

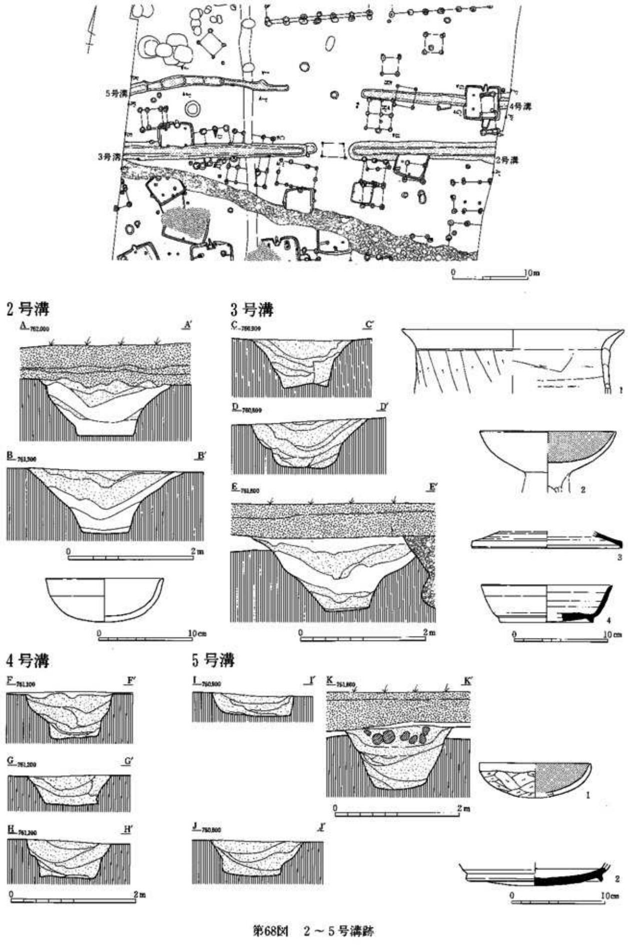
出土遺物はないが古代のものと思われる。直径2.1m前後で略円形を呈し、断面は箱薬研状である。勇水地点に位置しており、断面観察は不可能であった。

5号井戸跡（第66図）

遺物はないが古代のものと思われる。最大で直径2.1mをはかる略円形で、断面はわずかに箱薬研状を



第67図　1号溝跡


5号溝
4号溝
3号溝
2号溝
0
10m
2号溝
A
A'
B
B'
0
2m
0
10cm
3号溝
C
C'
D
D'
E
E'
0
2m
1
2
3
4
0
10cm
4号溝
F
F'
G
G'
H
H'
0
2m
5号溝
I
I'
J
J'
K
K'
0
2m
1
2
0
10cm

第68図　２～５号溝跡

呈する。６層は、不純物の少ない黒褐色の細砂壌土であり、その他の土層をみても湧水が認められた形跡はない。

６号井戸跡（第66図）

遺物はないものの、覆土から古代のものと考えられる。最大長2.0ｍ前後と思われる略円形を呈し、断面形は二段掘り状となっている。冬期厳寒中の調査のため残念ながら断面の調査は行えなかった。

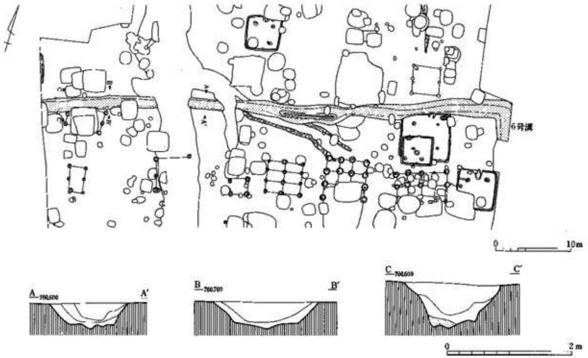
(4)　溝跡

１号溝から６号溝は、後述する官衙跡の屋敷地を区画するもので、およそこれらの時間的な先後関係、ならびにその実年代が見えつつある。

１号溝跡（第67図）

８世紀前半に相当する。竪穴住居跡や掘立柱建物跡すべてを切っている。

最高で幅2.5ｍ、深さ1.1ｍをはかり、箱薬研状の断面を呈する。屋敷地南側を東西に走っているのだが、調査対象域に陸橋部は存在しなかった。覆土は自然堆積したものと考えているが、セクションＡ－Ａ'及びＣ－Ｃ'をみると、北側に土塁が存在していたものと思われる。



第69図　６号溝跡

2・3号溝跡（第68図、ＰＬ59）

細かな時期は設定できないが、3号溝の出土遺物から概ね8世紀前半に廃棄されたものと思われる。すべての遺構を切って構築されている。

もっとも直線的に走り、また規模もやや大きい。セクションＥ－Ｅ'でみると、推定幅約3.0ｍをはかり、深さは1.2ｍ程であった。断面形態は箱薬研状、2号・3号溝間に陸橋部をもつ。覆土は自然堆積と考えており、またセクション図では判断できないが、調査時においては北側に土塁の存在が想定できた。

4・5号溝跡（第68図、ＰＬ59）

5号溝の出土遺物から、7世紀末葉から8世紀初頭に廃棄されたものと思われる。すべての遺構を切っていると判断したが、おそらく50号掘立柱建物跡だけは本跡より新しいものと思われる。

2・3号溝と同様で、並行に走り、同様の位置に陸橋部を有している。ただし、規模が小さく、5号溝に至っては土坑を連続させた恰好のような状態で、しかも大きく北側へと歪んでいる。4号溝で幅約1.4ｍ、深さ最大で0.75ｍをはかり、5号溝に至ってはまちまちであるが、より西側に行くほど深さを増す傾向があり、セクションＫ－Ｋ'では幅1.75ｍ、深さ1.0ｍをはかっている。覆土は、いずれもブロック層が主体となっており、土塁を人為的に埋め戻したものと考えられる。なお、セクションＫ－Ｋ'の覆土上層には火山岩質の自然礫が多数存在していた。

6号溝跡（第69図）

出土遺物は一切なく時期不明である。ただし、古代のどの遺構よりも新しく、しかも中世の遺構の覆土とは大きく異なることでここに掲載した。また実際には、古代官衙跡の区画施設であることは間違いないことだろう。

最大で幅1.65ｍ、深さ0.7ｍをはかる。底面中央が若干窪んでいるが、これは水の浸食によるものか。覆土は自然堆積と考えられる。本来、土塁が存在していたと考えられるが、確認できなかった。北東端部では南側直角方向に折れる箇所が確認でき、方形囲繞施設である公算が高くなった。なお、中央近くには溝が浅く二股に分かれる部分が存在した。おそらく、裏への抜け道が存在したのだろう。

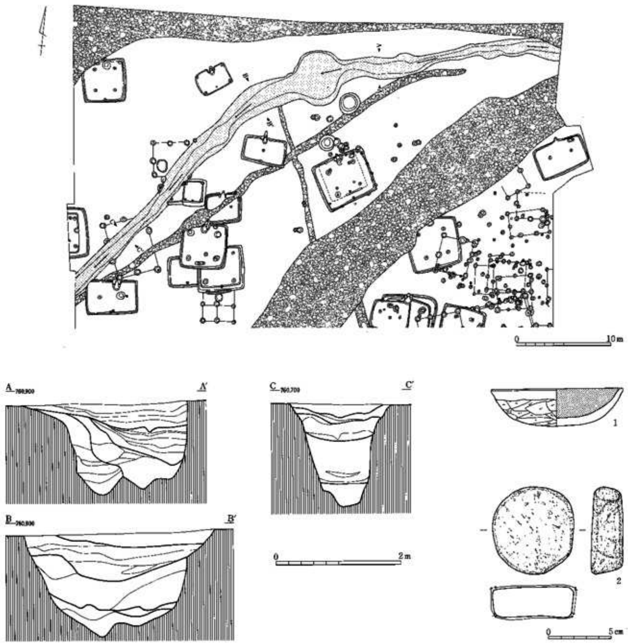
⑸　流路跡

1号流路跡（第70図、ＰＬ55）

遺物はわずかビニール袋ひとつしかでていないが、8世紀後半以降のものはまったく認められない。あらゆる遺構を切ってつくられているので、6号竪穴住居跡以後、すなわち7世紀中葉以後の産物であることは間違いない。おそらく、居館跡とほぼ時間をともにするものではないかと考えている。

形態からして、本跡は人工の河川と考えられる。しかも管理が行き届いており、人間の掌を超えるような礫は一切含まれておらず、比較的細かな砂礫のみで埋まっていた。調査対象域の中央にも、堰状遺構が存在している。規模や時間的経過は不明だが、4回に分かれて埋没したものと思われる。

1は出土場所不明、2は堰状遺構底部から出土した。



第70図　１号流路跡

(6) 官衙跡

区画施設の正面施設である４・５号溝間は人為的に埋め戻されたもので、７世紀末葉から８世紀初頭、２・３号溝間は自然埋没で大きくみて８世紀前半とみた。区画施設は２時期認められるのである。

一方、内部の官衙跡群は２間×３間の一般的な掘立柱建物跡と３間×６間の非常に大規模な掘立柱建物跡に分類可能だが、両者は互いに切り合ってはいないものの、近接した位置関係にあることから、これについても時間的な先後関係があるのではないかと考えている。

官衙跡群については、どちらが先でどちらが後かという問題が生じてくるが、通常規模の一群はとくに

尺を用いていない、若しくは命名された尺を利用していないかのどちらかで、一方大形の一群は6.0m×13.5mを平均規模とし、要するに唐尺の20尺×45尺という値が出てくる。唐尺使用のものを新段階とみておきたい。

旧官衙跡

4号溝は7世紀第4四半期の竪穴住居跡を切っており、また、廃棄されたのが7世紀末から8世紀初頭のことである。一世代に渡り使用されたものと思われる。

6号溝、4・5号溝を方形囲繞施設とするもので、東西に長い屋敷地が想定できる。66号掘立柱建物跡が主屋、63～65号掘立柱建物跡が脇屋である。77号掘立柱建物跡は、唐尺を使用しておらず、しかも75・76号掘立柱建物跡と軒先方向が若干ことなるため、おそらくこの時期の倉庫であったのではないかと考えている。

方形囲繞施設内に竪穴住居群は存在しないが、倉庫跡以外の掘立柱建物跡は不明である。

門状の施設は存在しない。望楼跡も認められなかったが、調査区外に存在するのかもしれない。

4・5号溝の陸橋部を出ると、方向を揃えて64・65・70号竪穴住居跡が建ち並んでいたはずで、また住居構造から61号竪穴住居跡も、70号竪穴住居跡と並んで建っていたのではないかと考えている。陸橋部から出ると、まず61・70号竪穴住居の隙間をかいくぐり、右手に64・65号竪穴住居をみ、左側にはおそらく掘立柱建物が存在したのだろう、そうした光景が読み取れるのである。

新官衙跡

8世紀前半に相当する。これも一世代限りの使用回数である。

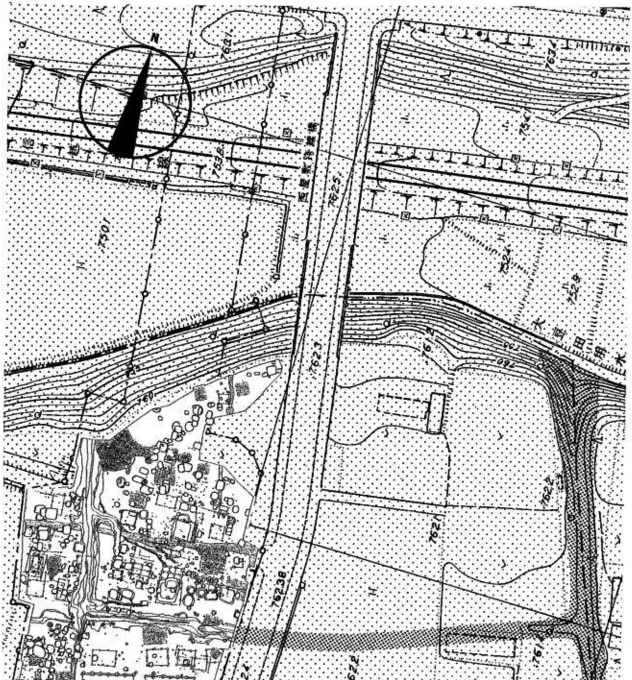
6号溝はそのまま区画溝として使用し、ここから60m、唐尺でいう200尺離したところに2・3号溝を設けている。72号掘立柱建物跡が主屋、73号掘立柱建物跡が脇屋となり、ともに唐尺を使用している。また、互いの距離を3.0m、唐尺でいう10尺の位置に離している。76号掘立柱建物跡は唐尺を使用した倉庫跡と考えられ、そこから西に3m（唐尺=10尺）離れて位置する75号掘立柱建物跡についても、南北長を見れば唐尺が看取され軒先方向が揃っていることなどから、これについても倉庫跡と考えている。

方形囲繞施設内の南西隅にある34・35号掘立柱建物跡は、73号竪穴住居跡の貼床を切り、1間×1間の掘立柱建物としては非常に深い柱穴の掘方を呈していた。したがって、本跡を望楼跡と認定した。

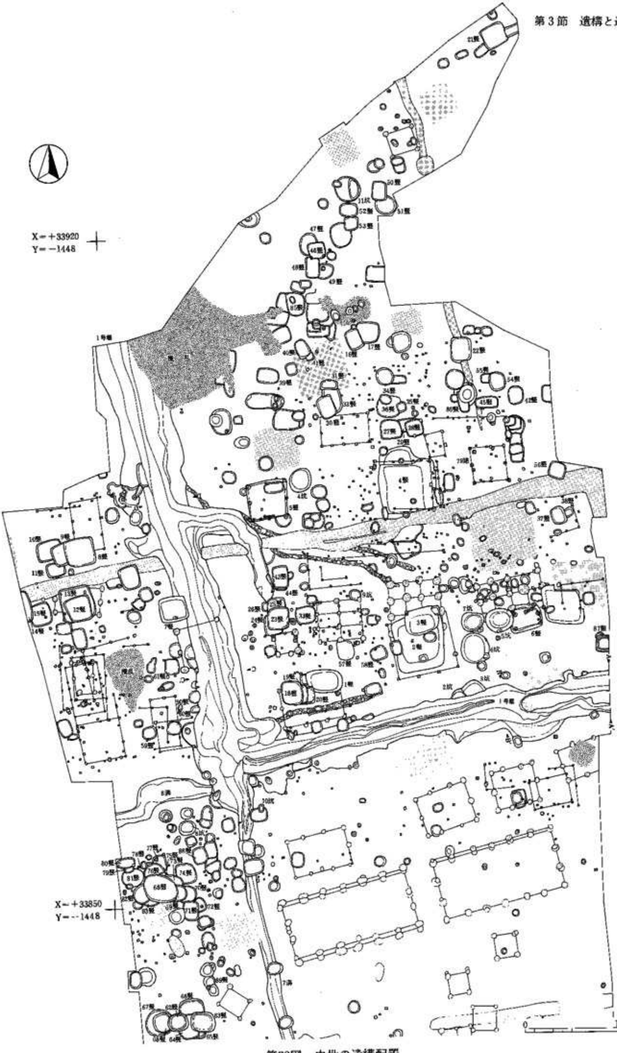
2・3号溝の陸橋部間にあるものは、いわゆる門状の施設である。掘方を持たず、角材をそのまま打ち込んだもので、正確には門になるやどうやもわからない。

方形囲繞施設内に竪穴住居跡は存在しないが、倉庫跡群や望楼跡以外の掘立柱建物跡は不明である。

1号溝は、2・3号溝から30m、唐尺の100尺の位置にありこの時期のものと考えており、出土遺物からいっても問題ない。2・3号溝と1号溝間には竪穴住居跡は存在しないが、掘立柱建物跡については不明である。陸橋部が存在しないが、うまく把握できなかった40号掘立柱建物跡南側や59号掘立柱建物跡などが土橋として活用されたのかもしれない。



第71図　中世の居館跡



第72図　中世の遺構配置

3　中世の遺構と遺物

中世戦国期の居館跡を北端部で確認した。北側の急崖を自然の要害として利用し、その他三方を空堀で囲んだものである。新発見のものであるが、未発掘部分においても実際には堀に沿って落ち込みが認められるので、およそ規模が判明した。第73図に示すように、内法で東西長120ｍ強をはかり、北側については浸食を受けているものと思われるが、それでも優に80ｍをこえている。また、東側にも７号溝、あるいはそれより規模の大きいものが走っていることもわかる。

遺物はわずかしか出ていないが、13世紀から認められる。これらは中国陶磁で、本来この時期まで遡りえるのかどうかわからない。15世紀中頃には退去しているらしい。

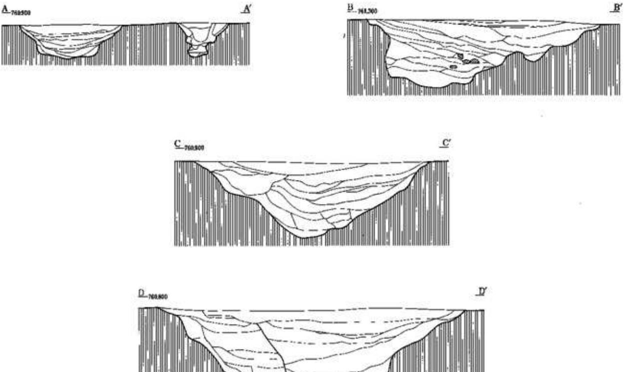
(1)　堀

1号堀（第72・73図、ＰＬ60・61）

幅は概ね５ｍ、深さは北西隅に行くほど深くなり、最高では２ｍを優にこえている。南東隅は二股に分かれており、しかも浅い。セクションＤ－Ｄ'をみると、一度掘り返した痕跡が認められるが、ほかでは捉えられなかった。

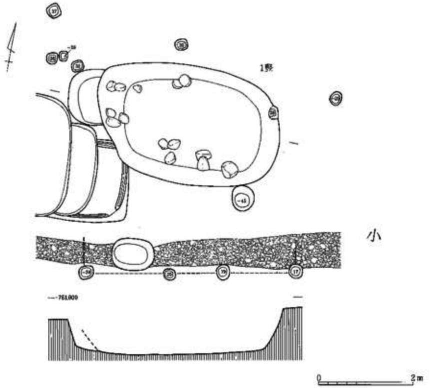
覆土は、いかようにも捉えられ、人為的なのか自然埋没なのかもよくわからない。おそらく両者が混在すものではなかろうか。また、堀の内側には土塁が想定でき、覆土に軽石流堆積物のブロック層が多分に含まれていた。

覆土中層には砂層が薄く堆積しており、その中にウマ・ウシの獣骨がやや散乱した状態でみつかり、時折イヌの骨類も確認できた。

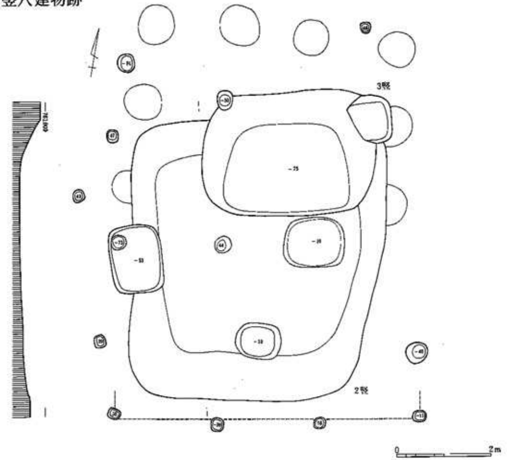


第73図　１号堀断面

1号竪穴建物跡

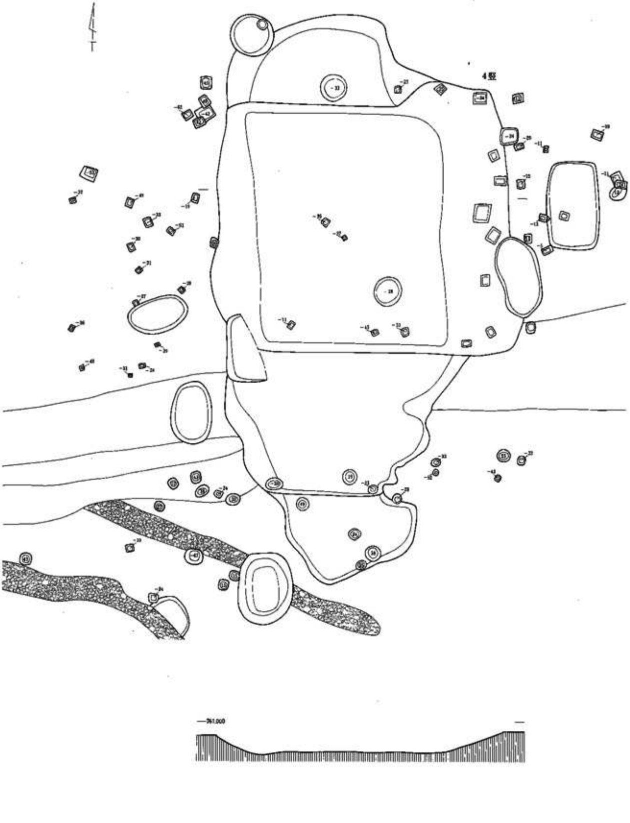


2·3号竪穴建物跡



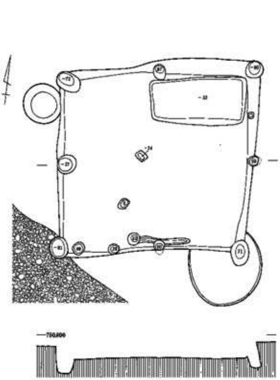
第74図　竪穴建物跡（１）

4号竪穴建物跡

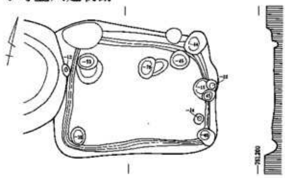


第75図　竪穴建物跡（2）

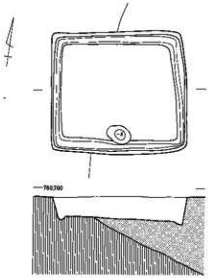
5号竪穴建物跡



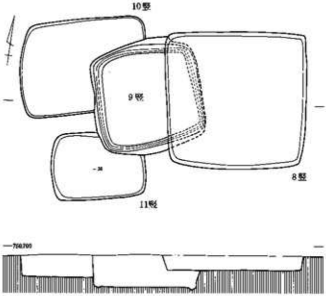
6号竪穴建物跡



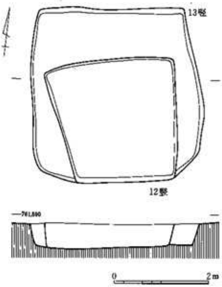
7号竪穴建物跡



8～11号竪穴建物跡

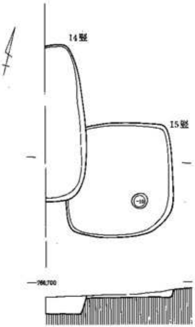


12・13号竪穴建物跡

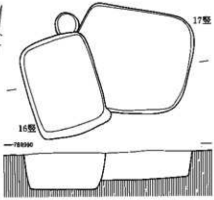


第76図　竪穴建物跡（３）

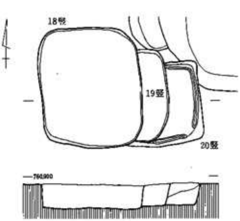
14・15 号竪穴建物跡



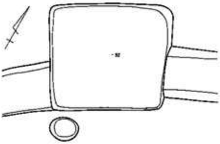
16・17 号竪穴建物跡



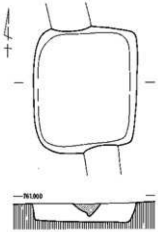
18～20 号竪穴建物跡



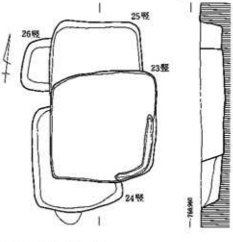
21 号竪穴建物跡



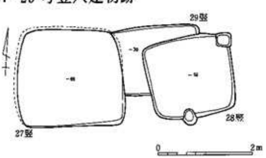
22 号竪穴建物跡



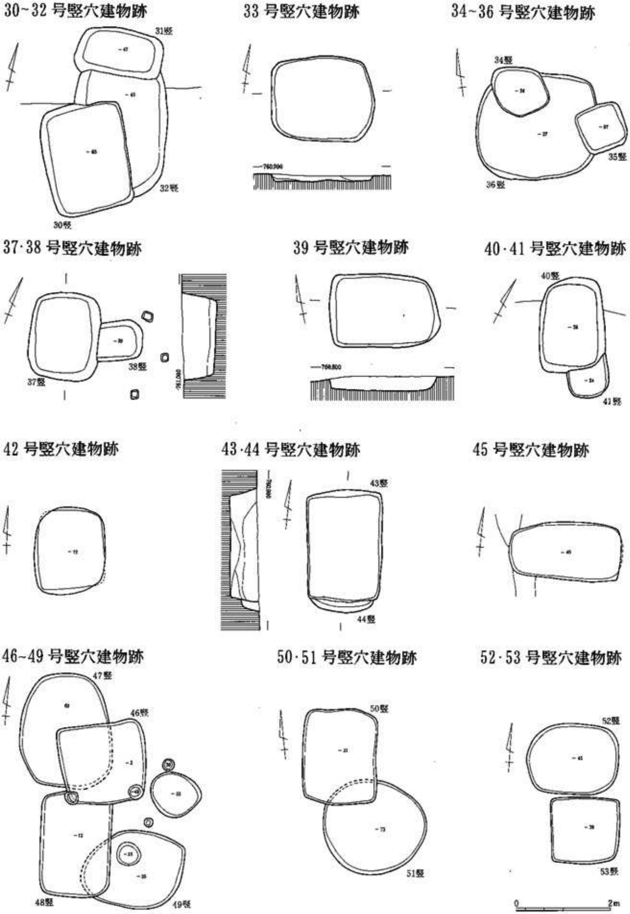
23～26 号竪穴建物跡



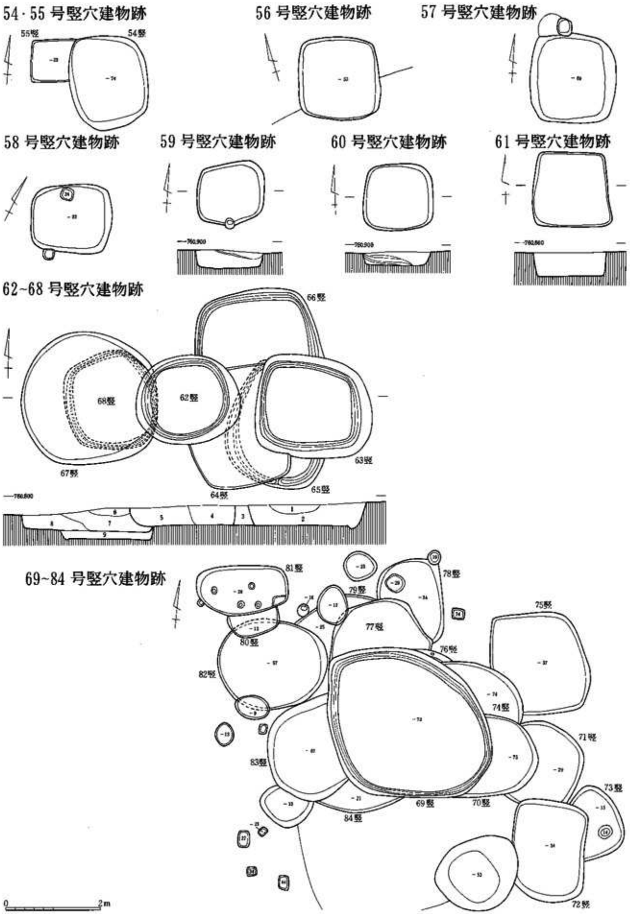
27～29 号竪穴建物跡



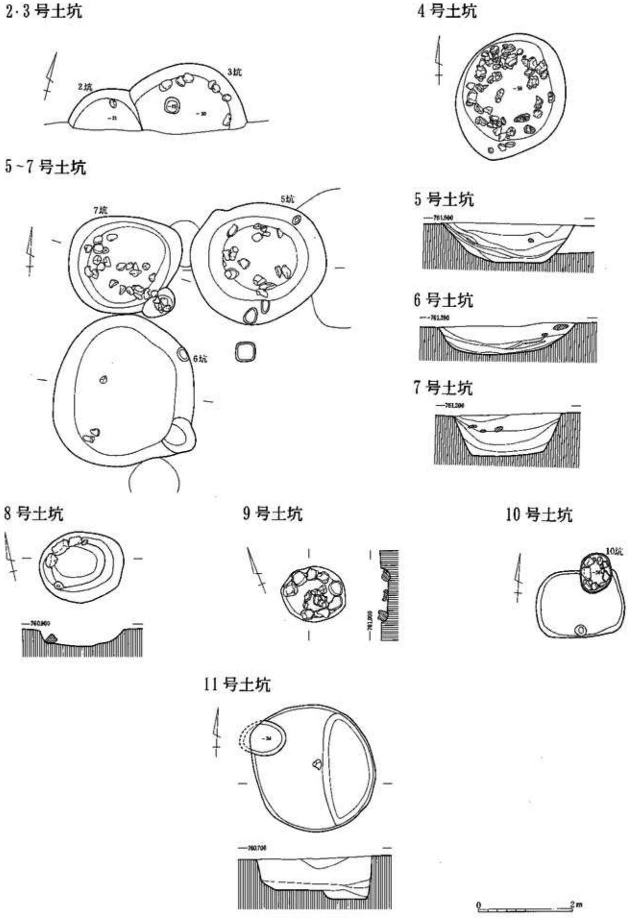
第77図　竪穴建物跡（４）


30~32 号竪穴建物跡
31竪
32竪
30竪
33 号竪穴建物跡
34~36 号竪穴建物跡
34竪
35竪
36竪
37·38 号竪穴建物跡
37竪
38竪
39 号竪穴建物跡
40·41 号竪穴建物跡
40竪
41竪
42 号竪穴建物跡
43·44 号竪穴建物跡
43竪
44竪
45 号竪穴建物跡
46~49 号竪穴建物跡
47竪
46竪
48竪
49竪
50·51 号竪穴建物跡
50竪
51竪
52·53 号竪穴建物跡
52竪
53竪
0
2m

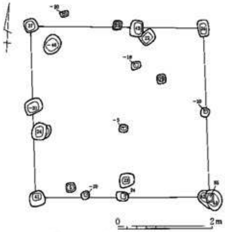
第78図　竪穴建物跡（５）


54・55号竪穴建物跡
55竪
54竪
56号竪穴建物跡
57号竪穴建物跡
58号竪穴建物跡
59号竪穴建物跡
60号竪穴建物跡
61号竪穴建物跡
62~68号竪穴建物跡
66竪
68竪
62竪
63竪
67竪
64竪
65竪
69~84号竪穴建物跡
81竪
79竪
78竪
77竪
75竪
80竪
76竪
82竪
74竪
71竪
83竪
73竪
69竪
70竪
84竪
72竪
0
2m

第79図　竪穴建物跡（6）


2·3号土坑
2坑
3坑
4号土坑
5~7号土坑
7坑
5坑
6坑
5号土坑
6号土坑
7号土坑
8号土坑
9号土坑
10号土坑
10坑
11号土坑
0
2m

第80図　土坑



第81図　掘立柱建物跡

(2) 竪穴建物跡（第74～79図、ＰＬ62・63）

遺構の認定に当たっては、平面形方形を基本形態とし、一辺１ｍ以上のものを指している。本来、上屋構造を持つか否かという点が問題となるところだが、それを証明する手立てはない。おそらく、一部には土坑やほかの機能に携わったものが含まれている可能性が高い。なお、１～４号竪穴建物跡を除いては、ほぼ人為的に埋め戻しが行われたもと思われる。火床はない。

また、１～４号竪穴建物跡の場合、スロープ状の壁面を呈し、覆土も基本的に自然埋没している。掘立柱建物跡の内部に設けられた大形土坑とも捉えられるかもしれず、一般的にいう竪穴建物跡とは正確が違うのではないかと考えている。今回、掘立柱建物跡が明確に捉えられなかったことから、ここに掲載した。推測だが、人が住まう場所ではなく、馬や牛の飼育場所ではないかと考えている。

(3) 土坑（第80図、ＰＬ64）

多数検出されたが、その代表的なものだけ紹介しておく。また、もっとも多いのは、一辺１ｍにも満たない方形の土坑だが、これについては省略する。

１～７号土坑は、大形で円形を呈し、断面はナベ底状を呈している。覆土は自然堆積をなし、中層から上層にかけて火山岩質の礫が散乱したものが多い。

８～10号土坑は、小形で平面形態円形、周囲に配石を有している。

11号土坑は、大形で円形を呈するが、底部に施設を有するものである。覆土は人為的な埋め戻しが行われている。

(4) 掘立柱建物跡

79号掘立柱建物跡（第81図、ＰＬ64）

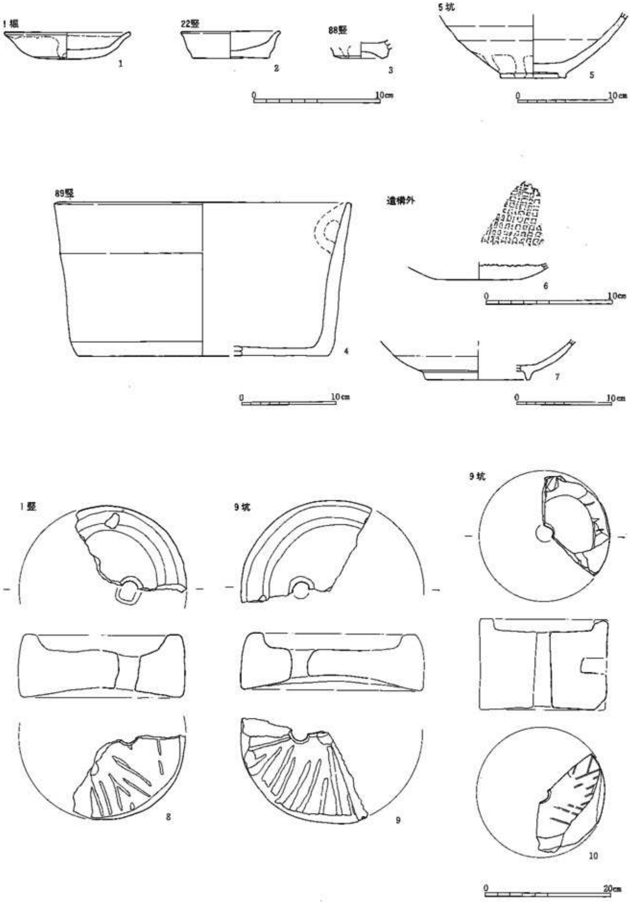
数ある候補の中でも、これが唯一掘立柱建物跡として認定されたものである。

２×２間の側柱式のもので、南北・東西長ともに3.70ｍをはかる。角材を打ち込んだものである。

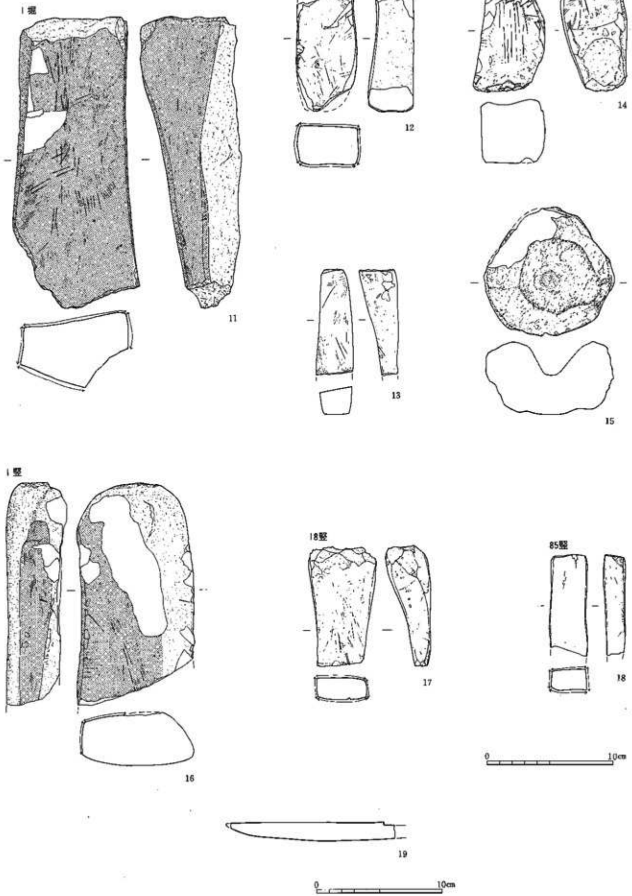
(5) 出土遺物

土器・陶磁器類（第82図、ＰＬ80）

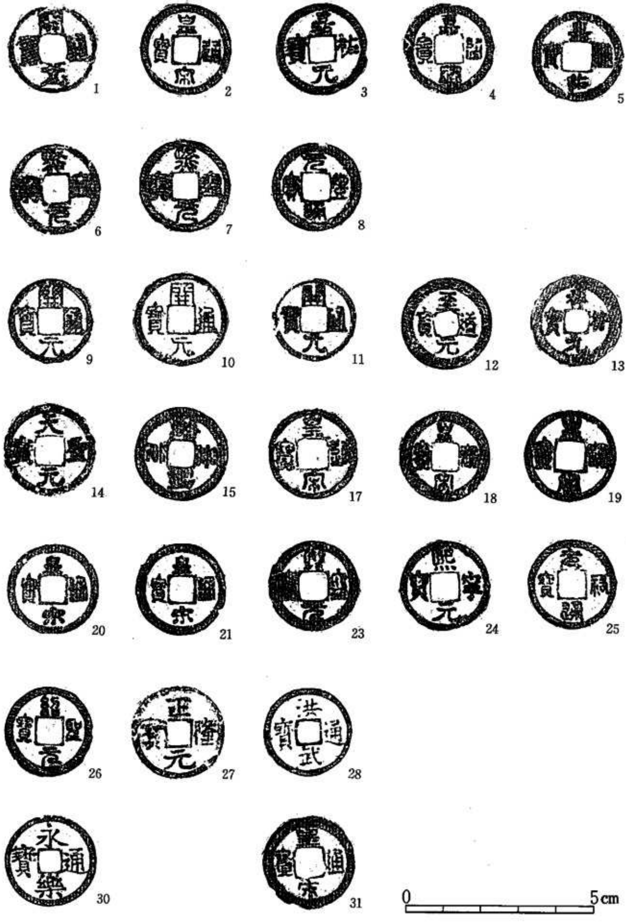
ＰＬ80-1は、龍泉窯蓮弁紋碗で13世紀に位置付く。ＰＬ80-2は、在地のすり鉢だが産地や時期は不明。ＰＬ80-3（第82図１）は、緑釉小皿で古瀬戸後期様式で15世紀に該当する。ＰＬ80-4は、中国産の青磁であるが窯式名はわからない。13世紀前半のもので画花紋碗の一群といえる。ＰＬ80-5（第82図２）はかわらけ。ＰＬ80-6は、龍泉窯雷紋碗で15世紀中頃の所産。ＰＬ80-7は龍泉窯だが時期不明。ＰＬ80-8は古瀬戸の水注であり、14世紀に位置付く。ＰＬ80-9（第82図３）も古瀬戸の天目茶碗で15世紀代のものである。ＰＬ80-10 は中国産の青磁で15世紀前半のものである。ＰＬ80-11 は、龍泉窯蓮弁紋碗で13世紀に位置付く。第82図４は内耳土器で15世紀中頃に相当するものと思われる。ＰＬ80-12（第82図５）は古瀬戸の平碗



第82図　中世出土遺物（1）



第83図　中世出土遺物（2）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
17
18
19
20
21
23
24
25
26
27
28
30
31
0
5cm

第84図　銭貨拓影

第1表 銭貨一覧

番号	名称	時代	初鋳年(西暦)	読み方	重量(g)	出土地点	備考
1	開元通宝	唐	武徳4年(621)	対	3.0	1号堀	3枚接着
2	皇宋通宝	北宋	宝宋2年(1039)	〃	3.0	〃	
3	嘉祐元宝	〃	嘉祐元年(1056)	廻	3.2	〃	
4	〃	〃	〃	対	3.7	〃	
5	〃	〃	〃	〃	2.5	〃	
6	熙寧元宝	〃	熙寧元年(1068)	廻	2.5	〃	
7	〃	〃	〃	〃	3.2	〃	
8	元豊通宝	〃	元豊元年(1078)	〃	2.8	〃	
9	開元通宝	唐	武徳4年(621)	対	2.8	22号竪穴建物跡	
10	〃	〃	〃	〃	2.3	〃	
11	〃	〃	〃	〃	1.5	〃	
12	至道元宝	北宋	至道元年(995)	廻	3.0	〃	2枚接着
13	祥符元宝	〃	大中祥符元年(1008)	〃	2.5	〃	
14	天聖元宝	〃	天聖元年(1023)	〃	2.8	〃	
15	景祐元宝	〃	景祐元年(1034)	〃	3.1	〃	
16	皇宋通宝	北宋	宝宋2年(1039)	対	(1.8)	〃	
17	〃	〃	〃	〃	3.2	〃	
18	〃	〃	〃	〃	3.2	〃	
19	〃	〃	〃	〃	2.7	〃	
20	〃	〃	〃	〃	3.2	〃	
21	〃	〃	〃	〃	3.3	〃	
22	嘉祐元宝	〃	嘉祐元年(1056)	廻	(1.9)	〃	
23	〃	〃	〃	〃	2.7	〃	
24	熙寧元宝	〃	熙寧元年(1068)	〃	3.2	〃	
25	元祐通宝	〃	元祐元年(1086)	〃	2.9	〃	
26	紹聖元宝	〃	紹聖元年(1094)	〃	3.3	〃	
27	正隆元宝	金	正隆3年(1158)	〃	2.4	〃	
28	洪武通宝	明	洪武元年(1368)	対	3.3	〃	
29	不明				(1.7)	〃	
30	永楽通宝	明	永楽6年(1408)	対	3.5	29号竪穴建物跡	
31	皇宋通宝	北宋	宝宋2年(1039)	〃	2.5	86号竪穴建物跡	

で14世紀後半。ＰＬ80-13（第82図７）・14は中国産の青磁だが、窯式や時期など不明である。ＰＬ80-15（第82図６）は古瀬戸のおろし皿で14世紀から15世紀の年代が与えられる。

石臼類品（第82図、ＰＬ80）

１号竪穴住居跡から粉挽き臼の上臼（安山岩）、９号土坑から粉挽き臼の上臼（安山岩）及び茶臼の上臼（安山岩・直径（204）mm　高さ144 mm・ふくみ５mm　芯棒孔直径30mm・回転方向左）が出土した。

砥石・その他（第83図、ＰＬ80）

11は安山岩・16は砂岩でともに置き砥石、12・14は砂岩でできており荒砥石、13・17・18は緻密な凝灰岩でできているので仕上砥と思われる。15は用途不明の軽石製品である。

金属製品（第83図）

刀子１点だけが出土した。

銭貨（第84図、ＰＬ81）

34枚の渡来銭が出土した。内訳は、中国の唐銭１種６枚・北宋銭９種24枚・金銭１種１枚・明銭２種２枚・判読不明銭１枚である。

22号竪穴建物跡からまとまって出土したほか、１号堀の覆土中・29号竪穴建物跡・86号竪穴建物跡からも出土した。

４　時期不明の遺構と遺物

(1)　陥し穴

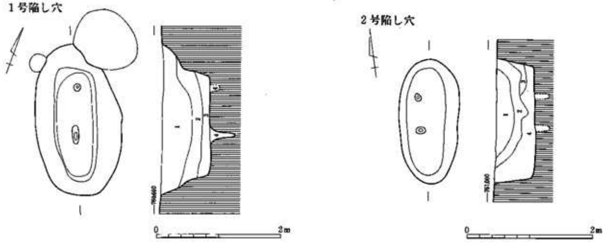
第４章－第３節－９と同じように、ここでも時期不明の遺構としておきたい。

１号陥し穴（第85図）

長さ2.45ｍ、幅1.4ｍ前後、深さ0.85ｍをはかる。北側を中世の土坑に切られている。逆茂木は２個検出され、打ち込まれたものであった。

２号陥し穴（第85図）

長さ2.0ｍ、幅0.95ｍ、深さ0.60ｍ強をはかる。逆茂木は２個検出されたが、埋め込みの方法はわからなかった。



第85図 陥し穴

第4節 小結

調査されないまま圃場整備が行われた地点であったが、いざ蓋を開けてみると、律令初期に栄えた初期鋳師屋遺跡群の中枢と、あわせて中世の居館跡が出現したのである。

初期鋳師屋遺跡群は6世紀後葉からその出現をみている。これまで、この時期の竪穴住居跡はただ1棟のみの発見であったが、一応の規模で分布していることが判明した。

つづいて7世紀初頭・中葉・後葉という段階がひっきりなしに存続したようで、佐久地方にとって、これまで立ち遅れてきた6世紀後葉から7世紀代の土器編年については好適な材料となりえよう。

7世紀第4四半期の竪穴住居跡を切るようなかたちで、突如、官衙跡の出現をみている。区画溝内からは竪穴住居を追い去り、陸橋部前面だけに数棟の住居を配している。8世紀前半には規模を拡大し、こうした住居さえも見当たらなくなる。親子二代に跨がるものと考えているが、こうした古墳時代後期末葉から奈良時代前半にかけての官衙跡自体、長野県下では初めてのことなで様々な興味深い事実が浮かびつつある。

ところで、この官衙跡は一体何を司るものだったのであろうか。西方の遺物は出ているが、これは周辺の律令期の計画村落でも同等のことがいえる。実をいうと、まったくなにも出土していないのである。規模からみて少なくとも郡衙ではない。それ以下の類で、郷衙や駅家関係の郷衙、あるいはさらにそれ以下という答えが出てくるが、いずれにしてもすべては憶測を超えるものではない。

この官衙跡が廃棄されると、人々はここに立ち入ることはなかったようで、9世紀にならなければ竪穴住居を構えることはしなっかた。周辺も状況も似たようなもので、けっして集落の中心になることはなかったらしい。

中世の居館跡については、これえまで文献には登場しなかった城砦的居宅であり、これもまた貴重な発見であった。

第8章　下前田原遺跡群・長野原遺跡

（しもまえだはら・ながのはら）

第1節　遺跡の概観

下前田原遺跡群は佐久市大字小田井、長野原遺跡は小諸市大字平原に所在する。実際には同一の遺跡であるが、市堺に位置するため行政区画によって別の名称が与えられている。公団との契約では、それぞれ別に結ばれているものの、ここでは分離する必要性が見つからないため同時に報告する。

遺跡は、浅間南麓の緩斜面に位置している。他章で報告した遺跡と同じように、南西に降下する台地部分に相当する。幅100ｍ程の田切り谷を挟んで、南側に宮ノ反Ａ遺跡群（第7章）、北側に赤沼遺跡（第9章）が分布する。現在では、調査対象範囲の東側にTDK千曲川テクニカルセンターや藤総業などの工業地帯になっているが、一般には荒涼とした畑作地帯が営まれている。

遺跡の範囲は、尾根軸でみればおよそ1,400ｍ、幅は最大で500ｍをはかる。比較的規模の大きい遺跡であるが、もはや弥生時代や律令の計画村落をつくるには標高が高すぎるし、逆に縄文時代にとっては標高が低すぎるという欠点がある。至って遺構分布の少ない遺跡といえる。これまで2度にわたる調査が行われているが、昭和47年度に行われたものでは、古墳時代後期後半の下前田原古墳群後原1・2号墳及び中世の居館跡を調査し（佐久市教育委員会　1972）、さらに本来調査対象範囲となるべく調整池の範囲を、昭和57年度調査しており縄文時代の土坑らしきものが発見されているらしい（未報告）。その他、すでに消滅してしまったが、後期後半の長野原塚古墳が存在した。一般には、後期後半の終末期古墳が構築される場所であり、その他、縄文時代以後の小規模な遺物散布地として周知されている。

第2節　調査の概要

調査対象範囲の中央にTDK千曲川テクニカルセンターの駐車場が存在し、即調査できるような状況ではなく、またその南側には佐久市教育委員会が調査した調整池、さらに南側の台地縁片部は未買収地となっていた。したがって、調査可能な北半部を第1次として調査し、以後、問題が解決しだい、南半部を2次調査する予定であった。

第1次調査は無事終了したが、第2次については中々決着がつかず、代わりに調整池の代替地の調査まで行うという結果になった。ようやく駐車場部分と調整池代替地を調査できたものの、未だ未買収地は解決せず、これについては翌年の冬に対応した。結果的に、第3次まで調査を行ったことになる。

平成4年4月9日、第1次調査として表土剥ぎを開始した。遺構の分布が希薄であることから、始めから全面剥ぎを試みた。結局4月13日には終了し、結果的には遺構・遺物とも検出できなかった。

第2次調査は、同年12月21日に試掘調査として行った。TDK千曲川テクニカルセンター駐車場、及びその西側に広がる調整池代替地を同時に行った。計13本のトレンチを設定したが、ここでも遺構・遺物とも認められなかったため、面的に広げることなく調査を終了させた。

第3次調査は、平成6年1月14日から開始した。試掘調査から開始したのだが、竪穴住居跡を検出し、面的に広げたところ、計3棟の古墳時代後期の竪穴住居跡が確認できた。1月21日、すべての調査が終了した。

調査日誌抄

平成４年度

４月９日　表土剥ぎ開始。

４月13日　表土剥ぎ終了。作業員を投入し検出作業に入る。

４月14日　遺構・遺物とも検出できず。

５月７日～８日

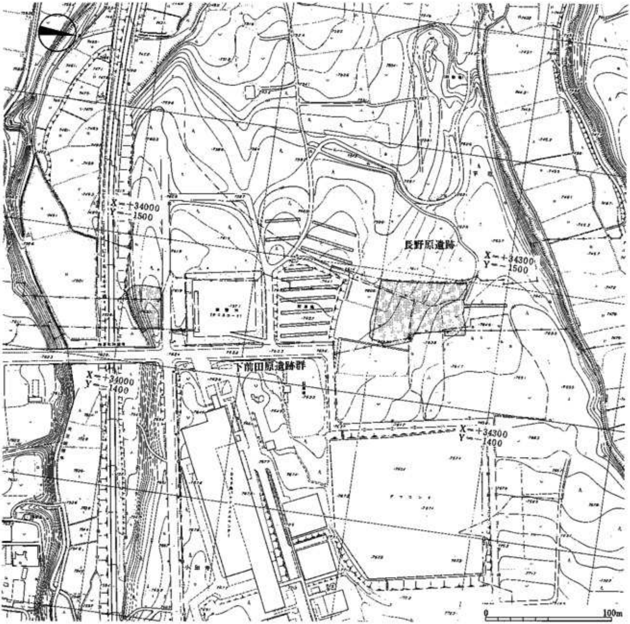
コンタ図作成。第1 次調査終了。

12月21日　第２次調査開始。ＴＤＫ駐車場・調整池代替地を試掘。遺構・遺物ともなく終了。

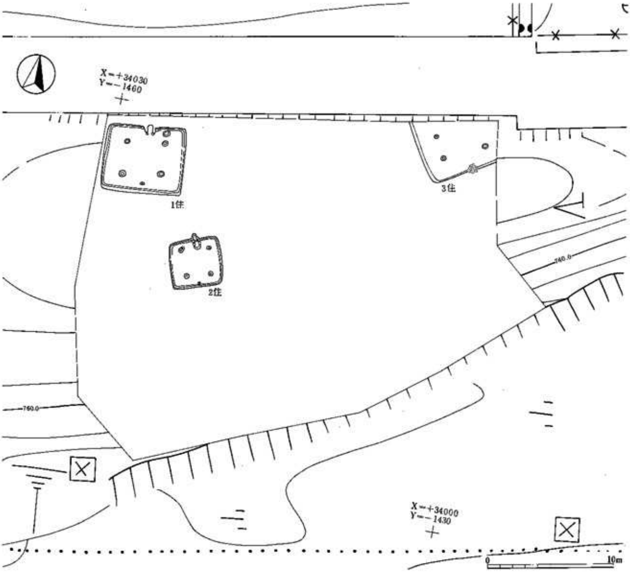
平成５年度

１月14日　第３次調査開始。表土剥ぎを行い古墳時代後期の竪穴住居跡３棟を検出。

１月21日　調査終了。これを以て、下前田原遺跡群・長野原遺跡の調査はすべて終了する。



第１図　調査範囲



第2図　遺構配置

第3節　下前田原遺跡群の遺構と遺物

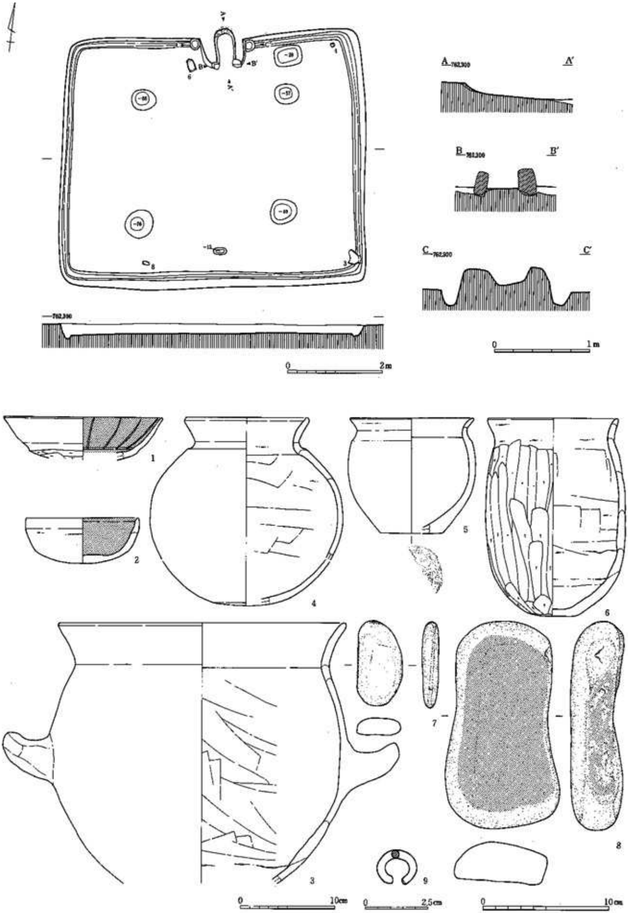
1　竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（第3図、ＰＬ83）

1の土師器坏の存在から、6世紀後葉頃に廃棄された住居跡と考えられる。

覆土は単層で、軽石流堆積物のブロックを多分に含んだ暗褐色細砂壌土からなる。カマドは、袖を地山掘り残しとし、焚口部には調整を受けた軽石を立石させていた。火床部は特に段を持たないが、床面よりも若干高めに設定しており、また煙り出し部分には赤色粘土を張り付けていた。カマド左右には壁に沿うように、深さ20cm弱の2本の柱穴が確認された。掘方は基本的にないが、カマド縁片部にのみ認められている。

出土遺物は非常に少ない。実測した遺物を除けば、わずかビニール袋ひとつしか出ていない。



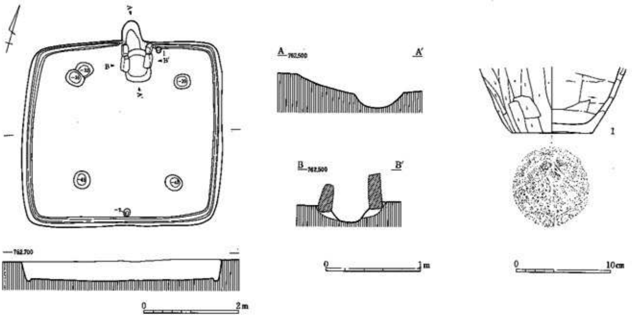
第3図　1号竪穴住居跡

２号竪穴住居跡（第４図、ＰＬ83）

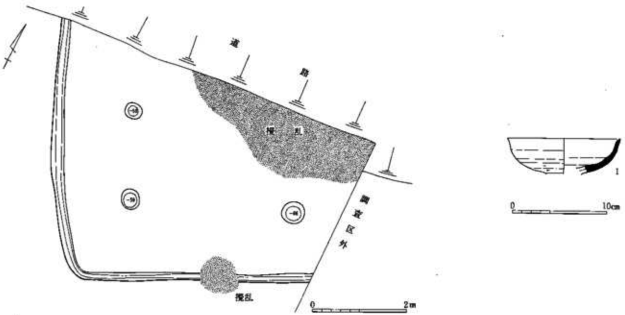
１の甕底部破片以外には実測可能なものがなく、古墳時代後期のものであることは確かだが、７世紀前葉以前のものとしかいえない。ただし、１号竪穴住居跡とほぼ等しい時期のものではないかと考えている。

覆土は単層で、１号竪穴住居跡のものに等しい。カマドは、袖に調整を受けた軽石を、左右２個づつ立石させ、壁との隙間に赤色粘土を張り込んでいた。火床部はない。掘方は一切なかった。

遺物は、１を除いては極めて微量である。少なくとも時期が判明するものは１点もなかった。



第４図　２号竪穴住居跡



第５図　３号竪穴住居跡

3号竪穴住居跡（第5図）

実測可能なものは、1の須恵器高坏だけであり、古墳時代後期のものとしかいえない。ただし、2号竪穴住居跡同様、1号竪穴住居跡と近い位置にあるのではないかと考えている。

住居東縁片が調査区外となり、また北半部を既存道路によって破壊されていた。ただし、南側の柱穴が残存しているので、およそ東西が6.6m前後であることが判明している。比較的規模の大きい竪穴住居である。

覆土は単層で、これも1号竪穴住居跡に等しい。わずかながら掘方が認められたが、特に起伏がなく平坦に掘られていた。

遺物は微量で、1以外は数点の土師器破片しか出ていない。

第4節　小結

これまでの調査では、縄文時代の土坑、終末期古墳、中世の館跡の存在が明らかとなっていた。ところが今回の調査では、ちょうど律令の世の中を迎えるか迎えない頃の集落の姿が読み取れた。実はこうした傾向は以前にも認められ、例えば県埋文センターが調査した栗毛坂遺跡群A地区（県埋文センター1991）や中金井遺跡群（県埋文センター 1998）もそうで、主に浅間南麓一帯でも、その後一般には人々が住まうことを嫌う場所に設けている。出土遺物が非常に少ないこと、ましてや前後する時期の遺物がまず見当たらないことが端的に表現しているものと考えられる。その理由はなおも不明だが、こうした段階を踏まえて、例えば鋳師屋遺跡群などの律令期の計画村落が生まれたのである。今後、一考を要することであろう。

第9章　赤沼遺跡

あかぬま

第1節　遺跡の概観

小諸市大字平原字赤沼に所在する。浅間火山南麓の田切りに挟まれた、南西に下る台地上に位置しており、幅300m弱、長さ450mほどが遺跡範囲となっている。ただし、遺跡東端は御代田町との境界となり御代田町は、ここを古墳時代後期後半の“下原古墳群”を有することで、範囲を明確にしないまま下原古墳群遺跡として称している。

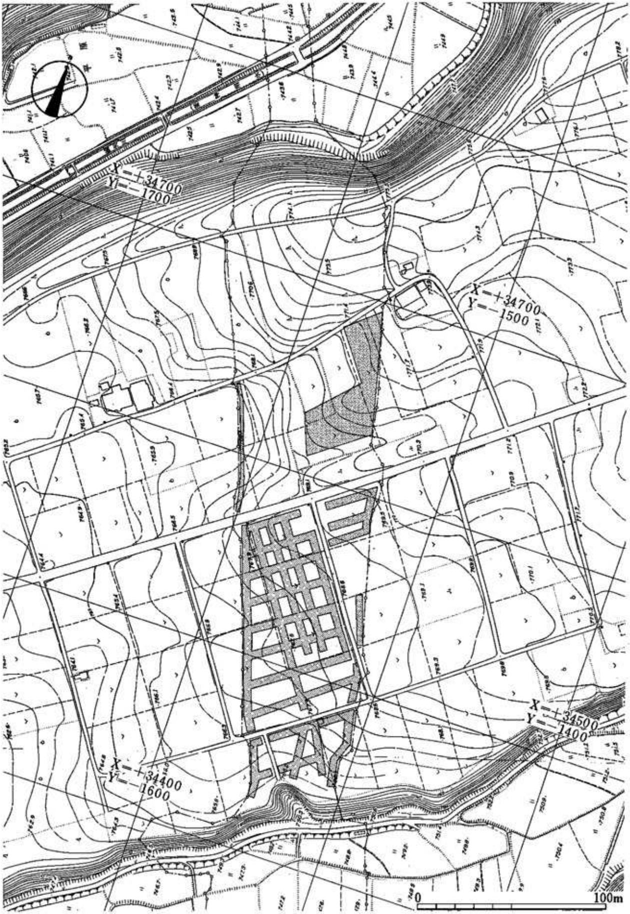
遺跡内は、かつて昭和初期に八幡一郎氏による下原古墳群以外は調査されたことがない。当時の様相とほぼ同じで、畑・果樹園などがそのままの状態で営まれている。南側の台地上には下前田原遺跡群・長野原遺跡（第8章）、北側には三子塚遺跡群（『小諸市内その3』平成11年度発刊予定）が位置している。台地上には遺跡群が広がるところだが、付近の遺跡群同様、この場所では佐久平北縁に認められる律令期の計画村落や、浅間南麓の丘陵地帯に存在する縄文時代の大集落とは縁がなく、比較的小規模な展開しか想定できない。昭和49年に出版された『小諸市誌』考古編（小諸市誌編纂委員会　1974）では加曽利E式土器や打製石斧が表採され、さらに昭和62年の分布調査報告書（小諸市教育委員会　1987）では平安時代の遺物も採取されているらしい。しかしながら㈶長野県埋蔵文化財センターとしては、事前踏査を行っているものの、残念ながら遺物は採集できなかった。

第2節　調査の概要

上信越自動車道は、小諸市分における遺跡中心部を南北に通過することとなり、約7,000㎡が調査対象面積となった。平成4年4月13日に調査を開始し、面的調査やトレンチ調査を行い、4月20日には全域に行き渡ったものの、縄文時代早期初頭の局部磨製石鏃1点と同中期初頭の土器片3点が出土しただけであり、遺構は皆無であった。これをもって調査を終了させた。

第3節　結語

これまで縄文時代中期後様及び平安時代の遺物しか採集できなかったが、今回の調査で、わずかながら縄文時代早期初頭や同中期初頭の遺物が認められた点は、新たな利用時期の発見である。ところが、全面的な調査を行ってはいないものの、やはり遺構の存在がなく、利用方法については疑問が残る。少なくとも集落として経営されたものではないことは確からしい。狩猟場、あるいはキャンプサイト的な遺跡ではないかと考えられる。



第１図　調査範囲

第3章～第9章の引用参考文献

一志　茂樹　1957　『御代田の古代史を探る』

小諸市教育委員会　1982　『野火付古墳』

〃　1985　『宮ノ反』

〃　1987　『小諸市遺跡詳細分布調査報告書』

〃　1988　『鋳物師屋』

〃　1994　『東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原』

小諸市誌編纂委員会　1974　『小諸市誌考古編』

㈶長野県埋蔵文化財センター　1991　『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2』

〃　1998　『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書1』

佐久市教育委員会　1972　『下前田原古墳等発掘調査概報』

〃　1985　『鋳師屋遺跡』

〃　1988　『鋳師屋遺跡II』

〃　1989　『前田遺跡』

佐久市志編纂委員会　1995　『佐久市志歴史編（一）』

桜井　秀雄　1998　「3　南平遺跡にみられる二種の陥し穴」『南平遺跡発掘調査概報』原村教育委員会

堤　　隆　1986　「野火付遺跡における平安時代の埋葬馬をめぐって」『信濃』38-4

〃　1992　「信濃国佐久郡における奈良・平安時代の集落構造」『長野県考古学会誌』64

〃　1998　「第三章　奈良・平安時代」『御代田町誌歴史編上』御代田町誌編纂委員会

保坂　康夫　1990　『丘の公園第5遺跡発掘調査報告書』山梨県教育委員会

御代田町教育委員会　1985　『野火付遺跡』

〃　1987　『前田遺跡』

〃　1988　『十二遺跡』

〃　1989　『根岸遺跡』

第1表　栗毛坂遺跡群　古代遺構観察表

遺構番号	主軸方向	主軸長(m)	副軸長(m)	壁高(m)	備　考
1号竪穴住居跡	N-15°-W	3.60	3.06	0.20	
2号竪穴住居跡	N-9°-W	4.25	4.10	0.35	
3号竪穴住居跡	N-26°-W	4.50	3.90	0.60	自然流路を切る
4号竪穴住居跡	N-33°-E			0.15	自然流路に切られる
5号竪穴住居跡	N-19°-W	2.69	3.00	0.43	
1号掘立柱建物跡	N-21°-W	3.96	3.24		
2号掘立柱建物跡	N-21°-W	4.40	4.00		

第2表　長土呂遺跡群　古代遺構観察表

遺構番号	主軸方向	主軸長(m)	副軸長(m)	壁高(m)	備　考
1号竪穴住居跡	N-55°-W	3.72	3.74	0.63	
2号竪穴住居跡	N-15°-W	5.61	5.04	0.17	3・4号掘立柱建物跡を切る
3号竪穴住居跡	N-30°-W	5.13	5.61	0.67	10・12号掘立柱建物跡に切られる
4号竪穴住居跡	N-23°-W	3.80	3.92	0.63	
5号竪穴住居跡	N-39°-W	3.84	3.92	0.69	13号掘立柱建物跡に切られる
6号竪穴住居跡	N-29°-W	5.05	5.79	0.67	
7号竪穴住居跡	N-6°-W	3.02	3.25	0.22	
8号竪穴住居跡	N-22°-W	4.27	4.90	0.71	
9号竪穴住居跡	N-26°-W	2.56	2.86	0.90	
10号竪穴住居跡	N-23°-W	4.68	4.96	0.55	24号竪穴住居跡を切り、18号竪穴住居跡に切られる
11号竪穴住居跡	N-6°-W	3.52	3.59	0.61	20号竪穴住居跡を切り、14号竪穴住居跡・15号掘立柱建物跡に切られる
12号竪穴住居跡	N-22°-W	2.73	3.50	0.65	
13号竪穴住居跡	N-14°-W	4.90	4.86	0.30	
14号竪穴住居跡	N-13°-W	4.47	4.27	0.79	
15号竪穴住居跡	N-29°-W	3.48	4.50	0.30	21号竪穴住居跡を切る
16号竪穴住居跡	N-24°-W	5.40	4.54	0.41	
17号竪穴住居跡	N-29°-W	5.48	5.28	0.31	18・19号竪穴住居跡に切られる
18号竪穴住居跡	N-9°-W	4.53	4.47	0.67	19号竪穴住居跡を切る
19号竪穴住居跡	N-26°-W		3.67	0.32	17号竪穴住居跡を切り、18号竪穴住居跡に切られる
20号竪穴住居跡	N-2°-W	4.80	4.89	0.57	24号竪穴住居跡を切り、11号竪穴住居跡・15号掘立柱建物跡に切られる
21号竪穴住居跡	N-25°-W	2.70	3.20	0.31	
22号竪穴住居跡	N-45°-W	4.38	4.02	0.18	23号竪穴住居跡を切る
23号竪穴住居跡	N-48°-W	4.11	4.17	0.83	22号竪穴住居跡に切られる
24号竪穴住居跡	N-28°-W	4.18	4.43	0.72	10・24号竪穴住居跡に切られる
25号竪穴住居跡	N-38°-W	3.62	4.38	0.59	35・39号竪穴住居を切る
26号竪穴住居跡	N-13°-W	2.18	2.86	0.72	2号掘立柱建物跡に切られる
27号竪穴住居跡	N-7°-W	3.62	4.30	0.67	
28号竪穴住居跡	N-24°-W	3.62	4.79	0.28	
29号竪穴住居跡	N-28°-W	5.92	5.74	0.63	
30号竪穴住居跡	N-24°-W	3.41	3.48	0.46	
31号竪穴住居跡	N-27°-W	3.87	3.93	0.79	33・34号竪穴住居跡に切られる
32号竪穴住居跡	N-23°-W	5.90	5.00	0.44	42・43号竪穴住居跡を切る
33号竪穴住居跡	N-32°-W	3.07	3.12	0.44	31号竪穴住居跡を切り、34号竪穴住居跡に切られる
34号竪穴住居跡	N-34°-W	4.46	4.62	0.66	31・33号竪穴住居跡を切る
35号竪穴住居跡	N-46°-W	4.90	5.20	0.67	39・40号竪穴住居跡を切る
36号竪穴住居跡	N-36°-W	4.15	4.41	0.74	
37号竪穴住居跡	N-43°-W	5.08	4.42	0.20	
38号竪穴住居跡	N-26°-W	3.34	3.54	0.46	
39号竪穴住居跡	N-15°-W	3.89	3.95	0.77	25・35号竪穴住居跡に切られる
40号竪穴住居跡	N-26°-W	4.89		0.71	35号竪穴住居跡に切られる
41号竪穴住居跡	N-36°-W	4.87	4.48	0.32	44号竪穴住居跡に切られる
42号竪穴住居跡	N-1°-W	3.88	3.50	0.21	43号竪穴住居跡を切り、32号竪穴住居跡に切られる

遺構番号	主軸方向	主軸長(m)	副軸長(m)	壁高(m)	備考
43号竪穴住居跡	N-27°-W	2.78		0.60	32・42号竪穴住居跡に切られる
44号竪穴住居跡	N-33°-W	2.77	3.00	0.34	41号竪穴住居跡に切られる
45号竪穴住居跡	N-23°-W	3.17		0.33	46号竪穴住居跡に切られる
46号竪穴住居跡	N-32°-W	3.18	3.18	0.29	45・47号竪穴住居跡を切る
47号竪穴住居跡	N-21°-W			0.45	46号竪穴住居跡に切られる
48号竪穴住居跡	N-8°-W	4.10	4.43	0.24	
49号竪穴住居跡	N-10°-W	5.43	5.81		
50号竪穴住居跡	N-30°-W	3.44	2.90		1号鍛冶工房跡に切られる
51号竪穴住居跡	N-39°-W	3.37	3.50	0.37	
52号竪穴住居跡	N-31°-W	2.47	2.14	0.43	
1号掘立柱建物跡	W-27°-S	4.70	3.75		
2号掘立柱建物跡	W-9°-S	7.00	4.50		26号竪穴住居跡を切る
3号掘立柱建物跡	W-2°-S	4.30	3.65		2号竪穴住居跡に切られる
4号掘立柱建物跡	W-13°-S	1.65	1.40		2号竪穴住居跡に切られる
5号掘立柱建物跡	W-5°-S	3.80	3.50		
6号掘立柱建物跡	W-22°-S	2.30	1.70		
7号掘立柱建物跡	W-23°-S	2.00	1.80		
8号掘立柱建物跡	W-43°-S	3.00	2.10		
9号掘立柱建物跡	W-10°-S	4.25	3.55		
10号掘立柱建物跡	W-3°-S	2.00	1.85		3号竪穴住居跡を切り、11号掘立柱建物に切られる
11号掘立柱建物跡	W-3°-S	2.70	2.40		10号掘立柱建物跡を切る
12号掘立柱建物跡	W-3°-S	2.60	2.50		3号竪穴住居跡を切る
13号掘立柱建物跡	W-22°-S	4.25	4.05		5号竪穴住居跡を切る
14号掘立柱建物跡					7号竪穴住居跡に切られる
15号掘立柱建物跡	W-10°-S	5.10	3.70		11・20号竪穴住居跡を切る
16号掘立柱建物跡	W-26°-S	3.75	2.80		
17号掘立柱建物跡	W-20°-S	3.00	2.70		
18号掘立柱建物跡	W-5°-S	2.50	1.90		
19号掘立柱建物跡	W-30°-S		3.30		

第3表 野火附遺跡 古代遺構観察表

遺構番号	主軸方向	主軸長(m)	副軸長(m)	壁高(m)	備考
1号竪穴住居跡	N-18°-W	5.63	6.31	0.33	
2号竪穴住居跡	N-12°-W	4.03	4.52	0.22	
3号竪穴住居跡	N-23°-W	3.64	3.22	0.10	
4号竪穴住居跡	N-5°-W	4.96	5.30	0.40	
5号竪穴住居跡	N-10°-W	7.25	8.20	0.47	
6号竪穴住居跡	N-16°-W	6.43	6.80	0.43	
7号竪穴住居跡	N-19°-W	4.78	5.04	0.72	
8号竪穴住居跡	N-14°-W	3.30	2.80	0.14	
9号竪穴住居跡	N-7°-W	3.25	3.66	0.38	
10号竪穴住居跡	N-7°-W	4.50	5.17	0.25	
11号竪穴住居跡	N-13°-W	3.89	4.44	0.35	
12号竪穴住居跡	N-27°-W	5.06	5.36	0.29	
13号竪穴住居跡	N-24°-W	6.12	6.94	0.52	
14号竪穴住居跡	N-5°-W	3.46	3.50	0.40	
15号竪穴住居跡	N-15°-W	4.97	4.53	0.20	
16号竪穴住居跡	N-5°-W	5.88	6.00	0.39	17号竪穴住居跡を切る
17号竪穴住居跡	N-20°-W		4.17		16号竪穴住居跡に切られる
1号掘立柱建物跡	W-10°-S	3.45	3.38		
2号掘立柱建物跡	W-14°-S	5.45	4.55		
3号掘立柱建物跡	N-15°-S	3.78			
4号掘立柱建物跡	W-8°-S	3.00	1.95		

遺構番号	主軸方向	主軸長(m)	副軸長(m)	壁高(m)	備　　考
5号掘立柱建物跡	N-15°-W	3.97	3.86		
6号掘立柱建物跡	W-8°-S	3.80	3.60		

第4表　前田遺跡　古代遺構観察表

遺構番号	主軸方向	主軸長(m)	副軸長(m)	壁高(m)	備　　考
1号竪穴住居跡	N-27°-W	3.05	2.89	0.77	
2号竪穴住居跡	N-13°-W	3.23	3.16	0.36	
3号竪穴住居跡	N-12°-W	2.97	2.96	0.20	
4号竪穴住居跡	N-4°-W	3.56	3.72	0.25	2号掘立柱建物跡・粘土採掘坑に切られる
5号竪穴住居跡	N-2°-W	6.00	5.65	0.37	
6号竪穴住居跡	N-13°-W	5.52	5.53	0.28	
1号掘立柱建物跡	N-12°-W	5.21	4.40		
2号掘立柱建物跡	W-18°-S	4.85	3.30		粘土採掘坑・4号竪穴住居跡を切る
3号掘立柱建物跡	N-10°-W	2.19	2.19		
4号掘立柱建物跡	N-27°-W	2.20	2.20		
5号掘立柱建物跡	N-17°-W	2.67	2.53		

第5表　宮ノ反A遺跡群　古代遺構観察表

遺構番号	主軸方向	主軸長(m)	副軸長(m)	壁高(m)	備　　考
1号竪穴住居跡	N-9°-E	2.31	4.20	0.49	
2号竪穴住居跡	N	4.43	4.59	0.68	3・4号竪穴住居跡を切る
3号竪穴住居跡	N-6°-W	4.47	4.62	0.57	2号竪穴住居跡を切り、4・5号竪穴住居跡に切られる
4号竪穴住居跡	N-6°-W	3.07	3.10	0.70	2・3号竪穴住居跡に切られる
5号竪穴住居跡	N-6°-W	4.14	4.36	0.05	3号竪穴住居跡に切られる
6号竪穴住居跡	N-2°-W	3.28	5.22	0.43	
7号竪穴住居跡	N-26°-W	4.64	5.40	0.43	
8号竪穴住居跡	N-28°-W	2.45	2.47	0.44	
9号竪穴住居跡	N-7°-W	4.10	4.23	0.37	
10号竪穴住居跡	N-7°-W	4.16	4.04	0.39	
11号竪穴住居跡	N-7°-W	2.56		0.48	
12号竪穴住居跡	N-3°-W	2.78	3.80	0.22	24号掘立柱建物跡を切る
13号竪穴住居跡	N-14°-E	3.27	4.05	0.50	
14号竪穴住居跡	N-20°-E	4.27		0.35	16号竪穴住居跡を切る
15号竪穴住居跡	N-41°-E	3.49		0.91	16号竪穴住居跡を切る
16号竪穴住居跡	N-26°-E	2.28		0.60	14・15号竪穴住居跡に切られる
17号竪穴住居跡	N-13°-W	4.48	4.23	0.66	38号竪穴住居跡を切る
18号竪穴住居跡	N-18°-W	4.31	4.37	0.66	
19号竪穴住居跡	N-29°-W	2.37	3.38	0.22	
20号竪穴住居跡	N-4°-E	4.35	4.20	0.61	
21号竪穴住居跡	N-6°-W	3.40	4.23	0.48	
22号竪穴住居跡	N-14°-W	5.23	5.55	0.71	4号掘立柱建物跡を切る
23号竪穴住居跡	N-15°-W	3.34	3.64	0.57	
24号竪穴住居跡	N-17°-W	4.98	4.20	0.59	25号竪穴住居跡を切る
25号竪穴住居跡	N-17°-W		4.59	0.44	24号竪穴住居跡に切られる
26号竪穴住居跡	N	2.03	1.89	0.55	27号竪穴住居跡を切る
27号竪穴住居跡	N	1.90	2.60	0.50	26号竪穴住居跡に切られる
28号竪穴住居跡	N-16°-W	4.60	4.75	0.58	
28号竪穴住居跡	N-16°-W	4.30	4.29	0.58	
29号竪穴住居跡	N-14°-W		3.74	0.36	
29号竪穴住居跡	N-14°-W		3.18	0.55	
30号竪穴住居跡	N-3°-W	4.28		0.25	
31号竪穴住居跡	N-5°-W	3.18	3.68	0.37	
32号竪穴住居跡	N-15°-W		5.06	0.57	11号掘立柱建物跡を切る

遺構番号	主軸方向	主軸長(m)	副軸長(m)	壁高(m)	備考
33号竪穴住居跡	N-13°-E	3.88	4.45	0.56	9・10号掘立柱建物跡に切られる
34号竪穴住居跡	N-13°-E	3.88		0.64	
35号竪穴住居跡	N-25°-W	3.30	5.36	0.28	
36号竪穴住居跡	N-10°-W	4.46	4.55	0.29	37・42号竪穴住居跡を切る
37号竪穴住居跡	N-19°-W			0.12	36号竪穴住居跡に切られる
38号竪穴住居跡	N	5.78	5.56	0.50	39~41号竪穴住居跡を切り、17号竪穴住居跡・12号掘立柱建物跡に切られる
39号竪穴住居跡	N-11°-W	4.05		0.33	40号竪穴住居跡を切り、38号竪穴住居跡に切られる
40号竪穴住居跡	N-43°-W	2.42	1.83	0.19	41号竪穴住居跡を切り、38・39・42号竪穴住居跡に切られる
41号竪穴住居跡	N-41°-W			0.26	38~40・42・46号竪穴住居跡に切られる
42号竪穴住居跡	N-7°-E	4.35	5.13	0.46	40・41号竪穴住居跡を切り、36号竪穴住居跡に切られる
43号竪穴住居跡	N-6°-E	3.18	3.98	0.35	44号竪穴住居跡を切り、46号竪穴住居跡に切られる
44号竪穴住居跡	N-6°-E			0.09	43・46号竪穴住居跡に切られる
45号竪穴住居跡	N-8°-E	4.60	4.48	0.36	13・14号掘立柱建物跡に切られる
46号竪穴住居跡(新)	N	6.00	5.58	0.35	41・43・44号竪穴住居跡を切り、10号掘立柱建物跡に切られる
46号竪穴住居跡(旧)	N	5.10	4.59	0.49	
47号竪穴住居跡	N-13°-W	4.45	4.44	0.48	
48号竪穴住居跡	N		3.82	0.41	
49号竪穴住居跡	N-6°-W		5.89	0.43	26号掘立柱建物跡に切られる
50号竪穴住居跡	N-6°-W	6.20	6.50	0.71	54号竪穴住居跡を切り、1号溝に切られる
51号竪穴住居跡	N-25°-W		3.46	0.64	
52号竪穴住居跡	N-8°-W			0.05	
53号竪穴住居跡	N-6°-W	5.56	5.48	0.71	
54号竪穴住居跡	N-5°-W	4.13	4.36	0.52	50号竪穴住居跡に切られる
55号竪穴住居跡	N-7°-W	3.93	3.88	0.57	
56号竪穴住居跡	N-14°-W	3.78	4.73	0.51	
57号竪穴住居跡	N-24°-W	4.63	5.19	0.56	
58号竪穴住居跡	N-16°-W	4.09	3.67	0.53	62号竪穴住居跡に切られる
59号竪穴住居跡	N-30°-W	4.73	5.10	0.58	
60号竪穴住居跡	N-10°-W	4.68	4.30	0.55	
61号竪穴住居跡	N	2.62	2.47	0.27	52・53号掘立柱建物跡を切る
62号竪穴住居跡	N-14°-W	2.15	2.71	0.35	
63号竪穴住居跡	N-11°-E	3.33		0.66	
64号竪穴住居跡	N-13°-W	5.58	5.27	0.66	72号竪穴住居跡を切る
65号竪穴住居跡	N-19°-W	5.03		0.59	66号竪穴住居跡を切る
66号竪穴住居跡	N-28°-W			0.02	65号竪穴住居跡に切られる
67号竪穴住居跡	N-45°-W	3.63	4.50	0.58	
68号竪穴住居跡	N-15°-W			0.55	
69号竪穴住居跡	N-2°-W			0.16	
70号竪穴住居跡	N-9°-W		3.62	0.50	
71号竪穴住居跡	N-7°-E		2.83	0.09	59号掘立柱建物跡・1号溝に切られる
72号竪穴住居跡	N-8°-W	3.91	4.02	0.42	64号竪穴住居跡に切られる
73号竪穴住居跡	N-14°-W		4.23	0.63	34・35号掘立柱建物跡・3号溝に切られる
74号竪穴住居跡	N-19°-W	3.31	4.35	0.40	
75号竪穴住居跡	N-7°-E		3.96	0.59	
76号竪穴住居跡	N-21°-W			0.34	
77号竪穴住居跡	N-7°-E		4.95	0.33	
78号竪穴住居跡	N-17°-W		6.33	0.37	
79号竪穴住居跡	N-7°-W	3.75	4.14	0.22	82号竪穴住居跡を切る
80号竪穴住居跡	N-2°-E		5.56	0.56	64号竪穴住居跡に切られる
81号竪穴住居跡	N-25°-W		3.10	0.05	67号竪穴住居跡を切る
82号竪穴住居跡	N-9°-W	6.00	6.62	0.62	79号竪穴住居跡・6号溝に切られる
83号竪穴住居跡	N-10°-W	4.24	4.43	0.70	50号掘立柱建物跡・4号溝に切られる
84号竪穴住居跡	N-5°-W	4.45	4.65	0.44	
85号竪穴住居跡	N-29°-W	3.46	3.37	0.26	

遺構番号	主軸方向	主軸長(m)	副軸長(m)	壁高(m)	備考
86号竪穴住居跡	N-27°-W	3.67	2.98		
87号竪穴住居跡	N-20°-W		2.70	0.33	
88号竪穴住居跡	N-14°-W		0.12		
89号竪穴住居跡	N-14°-W	5.35	5.50	0.13	
90号竪穴住居跡	N-10°-W	2.50	3.10	0.23	
91号竪穴住居跡	N-6°-W	4.97	5.24	0.49	
1号掘立柱建物跡	N-29°-W		2.55		
2号掘立柱建物跡	N	2.86	2.86		
3号掘立柱建物跡	W-8°-S	4.13	2.56		
4号掘立柱建物跡	W-77°-S	3.50	3.30		22号竪穴住居跡に切られる
5号掘立柱建物跡	N-89°-W	3.95	3.20		
6号掘立柱建物跡	W-7°-S	3.60	3.55		
7号掘立柱建物跡	W-88°-S	3.60			
8号掘立柱建物跡	W-70°-S	3.25			
9号掘立柱建物跡	W-13°-S				33号竪穴住居跡を切る
10号掘立柱建物跡	W-10°-S	4.30	3.90		33・46号竪穴住居跡を切る
11号掘立柱建物跡	W-73°-S	4.53			32号竪穴住居跡に切られる
12号掘立柱建物跡	N-10°-W	4.60	4.10		38号竪穴住居跡を切る
13号掘立柱建物跡	N-11°-W	4.60	3.70		45号竪穴住居跡を切る
14号掘立柱建物跡	N-1°-W	4.50	4.50		45号竪穴住居跡を切る
15号掘立柱建物跡	W-30°-S				
16号掘立柱建物跡	N-4°-W	2.60	2.60		
17号掘立柱建物跡	W-80°-S	3.54	3.32		
18号掘立柱建物跡			3.20		
19号掘立柱建物跡	W-80°-S				
20号掘立柱建物跡	W-73°-S		4.05		
21号掘立柱建物跡	W-3°-S	3.60	3.50		1号流路に切られる
22号掘立柱建物跡	N-20°-W	5.89	4.22		1号流路に切られる
23号掘立柱建物跡	N-4°-W		3.33		
24号掘立柱建物跡	N-84°-W	2.96	2.60		12号竪穴住居跡に切られる
25号掘立柱建物跡	N-3°-W	3.15	3.10		1号溝に切られる
26号掘立柱建物跡	W-1°-N	2.65	2.35		49号竪穴住居跡を切る
27号掘立柱建物跡	W-2°-S	2.80	2.70		
28号掘立柱建物跡	N-24°-W				
29号掘立柱建物跡	W-3°-N	5.85			
30号掘立柱建物跡	N-80°-W				
31号掘立柱建物跡	N-5°-W		3.75		
32号掘立柱建物跡	N-5°-W				
33号掘立柱建物跡	N-8°-W	4.38	3.25		
34号掘立柱建物跡	W-12°-S	2.73	2.70		73号竪穴住居跡を切る
35号掘立柱建物跡	W-13°-S	2.52	2.40		73号竪穴住居跡を切る
36号掘立柱建物跡	N-13°-W	5.27			
37号掘立柱建物跡	W-5°-S	6.15	4.50		
38号掘立柱建物跡	W-1°-S	3.27	3.20		
39号掘立柱建物跡	W-13°-S	5.33	4.50		
40号掘立柱建物跡	W-14°-S	1.75	1.55		
41号掘立柱建物跡	W-6°-S	7.25			1号溝に切られる
42号掘立柱建物跡	N-7°-W	4.95	3.80		
43号掘立柱建物跡	W-6°-S	4.71	3.23		
44号掘立柱建物跡	N-6°-W		4.30		
45号掘立柱建物跡	N-6°-W		3.25		
46号掘立柱建物跡	W-13°-S	5.07	3.82		
47号掘立柱建物跡	W-8°-S				
47号掘立柱建物跡	W-8°-S				

遺構番号	主軸方向	主軸長(m)	副軸長(m)	壁高(m)	備考
48号掘立柱建物跡	N-6°-W				
49号掘立柱建物跡	N-88°-W	5.05	3.10		
50号掘立柱建物跡	W-17°-S		4.90		83号竪穴住居跡を切る
51号掘立柱建物跡	W-4°-S	2.43	2.30		
52号掘立柱建物跡	N-6°-W	3.00	2.96		61号竪穴住居跡に切られる
53号掘立柱建物跡	W-5°-S	2.80	2.63		61号竪穴住居跡・2号溝に切られる
54号掘立柱建物跡	N-14°-W		2.98		2号溝に切られる
55号掘立柱建物跡	N-2°-W				3号溝に切られる
56号掘立柱建物跡	N-20°-W		3.30		3号溝に切られる
57号掘立柱建物跡	N-2°-W	2.50	2.46		
58号掘立柱建物跡	N-5°-W	3.98	3.33		4号溝に切られる
59号掘立柱建物跡	N-1°-W	3.50	2.50		71号竪穴住居跡を切る
60号掘立柱建物跡	N-12°-W	2.25	2.20		
61号掘立柱建物跡	N-8°-W	2.40	2.25		
62号掘立柱建物跡	N-55°-W	2.61	2.26		
63号掘立柱建物跡	W-18°-S	5.53	4.12		
64号掘立柱建物跡	W-13°-S	4.60	4.10		
65号掘立柱建物跡	W-20°-S		3.38		
66号掘立柱建物跡	W-13°-S	6.50	3.85		
67号掘立柱建物跡	W-7°-S	4.60	2.80		
68号掘立柱建物跡	W-74°-S	4.56	4.27		
69号掘立柱建物跡	N-2°-W	3.50	2.25		
70号掘立柱建物跡	W-73°-S	2.47	1.76		
71号掘立柱建物跡	N-25°-W	2.83	2.73		
72号掘立柱建物跡	W-75°-S	10.80	4.86		
73号掘立柱建物跡	W-77°-S	10.46	4.93		
74号掘立柱建物跡	W-83°-S	6.46	4.00		
75号掘立柱建物跡	W-84°-S	4.53	4.13		
76号掘立柱建物跡	N-5°-W	5.30	5.00		
77号掘立柱建物跡	W-75°-S	6.66	3.26		
78号掘立柱建物跡	W-10°-S	3.10	1.73		

第6表　下前田原遺跡群　古代遺構観察表

遺構番号	主軸方向	主軸長(m)	副軸長(m)	壁高(m)	備考
1号竪穴住居跡	N-3°-W	4.76	5.96	0.35	
2号竪穴住居跡	N-16°-W	3.60	3.83	0.78	
3号竪穴住居跡	N-30°-W			0.15	

第7表　栗毛坂遺跡群　古代遺物観察表

挿図番号	種類	残存	色調	大きさ(cm)	特徴	出土位置	備考
1住－1	土師器	口縁部1/8欠	にぶい黄橙	口16.4 底7.9 高5.3	回転ナデ・底部回転糸切り→内面入念なミガキ	床直	内面黒色処理 破損後の二次焼成痕あり
〃－2	土師器	1/3残	橙	口(14.0) 底(7.2) 高4.3	回転ナデ・底部手持ちヘラケズリ→内面ミガキ	＋10cm	内面黒色処理
〃－3	土師器	完形	にぶい橙	口13.8 底6.6 高3.7	〃	床直	内面黒色処理 灯明皿に転用
〃－4	土師器	口縁部1/8欠	橙	口13.5 底6.0 高4.3	回転ナデ・底部回転糸切りの後周縁部手持ちヘラケズリ→内面ミガキ	床直	内面黒色処理 灯明皿に転用
〃－5	土師器	口縁部破片	橙		回転ナデ・内面ミガキ	＋8cm	内面黒色処理 墨書土器
〃－6	須恵器	口縁部1/3欠	浅黄	口14.0 底7.3 高3.3 内底6.9	回転ナデ、底部回転糸切り	床直	
〃－7	須恵器	口縁部1/4欠	灰	口13.4 底6.1 高3.4 内底6.6	〃	床直	
〃－8	土師器	底部完形	橙	底5.6	回転ナデ・底部手持ちヘラケズリ→内面ミガキ	床直	内面黒色処理 焼成後外側から穿孔
〃－9	須恵器	胴部1/4残	灰		回転ナデ→胴部下位外面回転ヘラケズリ	床直	
〃－10	須恵器	底部完形	暗赤褐	脚9.2	回転ナデ・底部回転糸切り→胴部外面回転ヘラケズリ	床直	
〃－11	土師器	3/4残	橙	口20.4 胴22.2 底4.2 高(27.7)	口縁部ヨコナデ、胴部以下外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	床直 カマド内	
〃－12	土師器	胴部上位以上ほぼ完形	橙	口20.3 胴(22.5 以上)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	床直 カマド内	外面全体に粘土付着 竈道部に転用？
〃－13	土師器	口縁部3/4残	橙	口18.3	〃	床直 カマド内	
3住－1	土師器	完形	橙	口14.6 底5.8 高4.2	回転ナデ・底部回転ヘラケズリの後手持ちヘラケズリ→内面ミガキ	床直	内面黒色処理
〃－2	須恵器	完形	灰	口14.7 高5.6	回転ナデ、天井部外面回転糸切りの後周縁部回転ヘラケズリ	床直	
〃－3	須恵器	口縁部1/4残	灰	口(13.0)	回転ナデ	床直	墨書土器
〃－4	須恵器	1/3残	にぶい黄橙	口(14.0) 底(7.0) 高3.7 内底(7.3)	回転ナデ、底部回転糸切り	＋28cm	
〃－5	須恵器	ほぼ完形	灰黄	口14.0 底7.0 高3.4 内底6.6	〃	床直	
〃－6	須恵器	口縁部2/3欠	灰	口(13.8) 底6.0 高3.7 内底6.3	〃	床直	
〃－7	須恵器	ほぼ完形	灰	口12.7 底6.5 高3.5 内底6.3	〃	＋4cm	
〃－8	須恵器	2/3残	灰	口13.4 底6.4 高3.8 内底7.0	〃	カマド天井部	軟質須恵器
〃－9	土師器	胴部中位以上1/4残	橙	口(20.9) 胴(23.7)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド天井部	胴部中位外面に粘土付着
〃－10	土師器	胴部上半以上1/2残	にぶい橙	口11.4 胴13.8	〃	床直	
4住－1	土師器	口縁部7/8欠	にぶい黄橙	口(14.0) 底5.8 高4.7	回転ナデ・底部回転糸切り→内面ミガキ		内面黒色処理
〃－2	土師器	口縁部2/3欠	にぶい黄褐	口(14.0) 底5.5 高4.7	回転ナデ→体部下半以下回転ヘラケズリ・内面ミガキ	床直	内面黒色処理
〃－3	土師器	完形	橙	口13.8 底7.0 高3.7	回転ナデ・底部回転糸切り→内面ミガキ	床直	
〃－4	須恵器	口縁部7/8欠	灰	口(14.2) 底5.5 高3.7 内底5.7	回転ナデ、底部回転糸切り	床直	
〃－5	須恵器	口縁部1/3欠	灰	口14.0 底5.8 高3.7 内底5.4	〃	床直	
〃－6	須恵器	完形	灰	口13.0 底5.8 高3.3 内底4.8	〃	床直	軟質須恵器 灯明皿(に転用？)
〃－7	須恵器	ほぼ完形	灰	口12.6 底6.2 高3.5 内底4.3	〃	カマド内	軟質須恵器 灯明皿(に転用？)
〃－8	須恵器	口縁部7/8欠	にぶい黄橙	口(14.6) 底6.4 高3.9 内底5.5	〃	床直	軟質須恵器
〃－9	須恵器	口縁部3/4欠	にぶい黄橙	口(14.4) 底5.7 高4.3 内底6.1	〃	床直	軟質須恵器
〃－10	土師器	胴部上位以上1/4残	明赤褐	口(20.0) 胴(23.0)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	床直	破損後の二次焼成痕あり
〃－11	土師器	1/4欠	橙	口18.6 底7.6 高10.0	回転ナデ、体部下位以下外面手持ちヘラケズリ	カマド内	破損後の二次焼成痕あり
〃－12	土師器	体部以上1/4残	橙	口(18.6)	回転ナデ、体部下位外面手持ちヘラケズリ		11と同一個体か？
5住－1	須恵器	完形	灰	口14.2 底6.6 高3.8 内底7.2	回転ナデ、底部回転糸切り	床直	
〃－2	須恵器	口縁部2/3欠	灰	口(13.5) 底7.0 高3.5 内底6.6	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ		
〃－3	須恵器	1/2残	灰	口(13.4) 底6.9 高3.8 内底6.6	回転ナデ、底部回転糸切り		
〃－4	須恵器	口縁部1/3欠	灰	口13.2 底6.2 高3.6 内底6.9	〃	床直	
〃－5	須恵器	口縁部1/3残	灰	口(17.0)	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ		
〃－6	土師器	完形	明黄褐	口9.2 高2.7	口縁部ヨコナデ・底部外面ヘラケズリ・底部外面及び内面ミガキ	床直	内面黒色処理 灯明皿
〃－7	土師器	1/2残	橙	口20.7 胴(21.5) 底5.5 高(27.5)	口縁部ヨコナデ、胴部以下外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内 床直	
〃－8	土師器	底部欠	橙	口21.2 胴23.2	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	床直	口縁部歪み顕著

第8表　長土呂遺跡群　古代遺物観察表

挿図番号	種類	残存	色調	大きさ(cm)	特徴	出土位置	備考
遺構外-1	打製石鏃	基部欠		幅1.8 厚0.4			(1.10g) 黒曜石
〃-2	打製石鏃	完形		長2.5 幅1.5 厚0.3			0.77g 黒曜石
〃-3	打製石鏃	基部欠					(0.39g) 黒曜石
〃 4	磨製石鏃	完形		長3.4 幅1.9 厚0.2			1.44g 粘板岩
〃-5	打製石斧	刃部欠					(31.57g)千枚岩質粘板岩
〃 6	打製石斧	両端欠					(26.54g) 粘板岩
〃-7	打製石斧	基部欠					(30.33g) 粘板岩
〃-8	打製石斧	基部欠					(29.56g)千枚岩質粘板岩
〃-9	打製石斧	基部欠					(40.45g) 石質不明
1住-1	土師器	1/3残	橙	口(13.0) 体(7.8) 高(4.0)	口縁部ヨコナデ、体部以下外面ヘラケズリの後雑なミガキ、内面暗文	+4cm	畿内地域からの搬入品
〃 2	須恵器	ほぼ完形	オリーブ黄	口13.0 高4.7 内底7.7	回転ナデ、底部回転ヘラ切り	+5cm	
〃-3	須恵器	ほぼ完形	暗灰黄	口13.0 高4.2 内底8.5	〃	床直	
〃-4	須恵器	1/2残	黄灰	口(12.4) 高4.0 内底8.1	〃	+38cm	
〃-5	鉄鏃	完形(鋒状関部欠)		長17.2		床直	
2住-1	土師質	1/3残	にぶい黄褐	口(9.2) 底(5.0) 高1.9	回転ナデ、底部外面ヘラケズリ?		
〃-2	土師質	1/3残	橙	口(8.2) 底(5.2) 高1.6	回転ナデ、底部回転糸切り		
〃-3	土師質	1/2残	橙	口(8.4) 底5.6 高1.6	〃		
〃-4	土師質	2/3残	橙	口8.4 底5.9 高1.7	〃		
〃-5	土師質	完形	灰褐	口8.4 底6.3 高2.0	〃	+10cm	
〃-6	土師質	1/3残	橙	口(8.0) 底(5.0) 高(2.8)	〃		
〃-7	土師質	口縁部1/4残	橙	口(10.2)	回転ナデ		
〃-8	土師質	底部完形	橙	底6.4	回転ナデ、底部回転糸切り		
〃-9	土師質	底部完形	にぶい黄橙	底7.0	〃	床直	
〃-10	銅製鉈尾		周縁部・鋲欠	長2.9 幅2.6		+14cm	中央に後からの穿孔あり
〃-11	丸玉	完形	灰オリーブ	長1.0 厚0.8			1.26g 滑石
〃-12	ガラス小玉	完形	コバルトブルー	長0.5 厚0.4			0.13g
3住-1	土師器	ほぼ完形	淡黄	口11.6 体10.1 高5.3	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→全面ヨコミガキ→内面暗文	カマド内	全面煤けた黒色処理
〃-2	土師器	1/3残	浅黄橙	口(11.9) 体(10.6) 高(4.7)	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→内面ヨコミガキ	カマド内	内面黒色処理
〃-3	土師器	1/2残	にぶい黄橙	口(12.4) 体(11.7) 高4.1	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ	+8cm	橙色土器
〃-4	土師器	1/2残	橙	口(12.2) 体(12.0) 高(4.7)	〃	貯蔵穴内	橙色土器
〃-5	土師器	1/2残	黒褐	口(12.8) 高3.8	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、内面暗文		全面煤けた黒色処理
〃 6	土師器	頸部以下1/3残	にぶい橙	底(8.0)	口縁部ヨコナデ・胴部以下外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→胴部内面を除いてミガキ	カマド内 床直	破損後の二次焼成痕あり カマド構築材に転用?
〃-7	土師器	1/4残	橙	口(20.0) 胴(17.0)	口縁部ヨコナデ、胴部以下外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	実測図器高は信頼できず 胴部中位以下に粘土付着
〃-8	土師器	底部完形 胴部下半1/4残	明黄褐	底3.4	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ	貯蔵穴内	
〃-9	管玉	完形	オリーブ黒	長2.6 厚1.0		カマド内	3.96g 石材不明 実測図下折損後再研磨
〃 10	石製品	一部残			側面3面に研磨痕あり	カマド内	(53.60g) 軽石
〃-11	石製品	完形		長5.6 幅4.0 厚1.3	表裏に研磨痕・側面に磨耗痕あり	カマド内	16.41g 軽石
4住-1	土師器	口縁部・底部3/4欠	浅黄橙	口(21.7) 高(31.6)	口縁部ヨコナデ・胴部以下外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→胴部内面を除きミガキ	カマド内	破損後の二次焼成痕あり カマド構築材に転用
〃 2	耳環	完形(芯材のみ)		外径1.6 外縦1.5 鉄幅0.2			3.97g
5住-1	土師器	1/2残	にぶい赤褐	口(12.1) 高4.9	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→全面ヨコミガキ		内面黒色処理
〃-2	土師器	完形	赤褐	口10.9 体10.5 高3.8	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ	+32cm	橙色土器
〃-3	土師器	完形	橙	口10.8 高3.4	〃	+8cm	橙色土器
〃-4	土師器	2/3残	橙	口19.1 高6.6	〃	+3cm	内屈口縁坏
〃-5	須恵器	完形	灰オリーブ	口11.4 高3.6 内底8.2	回転ナデ、底部回転ヘラ切り	-2cm	
〃-6	須恵器	口縁部1/2欠	灰	口13.8 高4.0 内底8.7	回転ナデ、底外面手持ちヘラケズリ		
〃-7	須恵器	口縁部1/3欠	灰	口13.8 高3.9 内底7.7	〃		
〃-8	須恵器	完形	灰オリーブ	口7.4 体9.2 高3.2	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ	床直	
〃-9	須恵器	底部欠	灰	口15.2 高(9.1)	回転ナデ、体部下半以下外面手持ちヘラケズリ	床直	
〃-10	土師器	脚裾部3/4・坏部欠	橙	脚(8.1)	脚裾部ヨコナデ、脚部内面上半部及び外面ヘラケズリ、坏部内面ミガキ		坏部内面黒色処理
〃-11	土師器	胴部上半以上1/5欠	橙	口12.0 高14.1	口縁部ヨコナデ・胴部以下外面ヘラケズリ・胴部外面を除き入念なミガキ	床直 カマド内	
〃-12	土師器	口縁部1/4残	浅黄橙	口(22.2)	口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→胴部外面ミガキ	カマド内	全面に粘土付着 カマド構築材に転用

挿図番号	種類	残存	色調	大きさ(cm)	特徴	出土位置	備考
〃-13	土師器	口縁部3/4残	にぶい褐	口13.6	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ		
〃-14	土師器	口縁部2/3残	にぶい橙	口(13.5)	〃		
〃-15	土師器	胴部上半完形	橙		〃	+2cm	口縁部内面に擦れた痕跡あり。何かに転用？
〃-16	土師器	底部欠	にぶい橙	口21.8 胴18.7	〃	+4cm	胴部中位外面に粘土付着
〃-17	土師器	胴部上半以上完形	にぶい黄橙	口22.2 胴18.0	〃	床直	
〃-18	土師器	口縁部1/3残	にぶい黄橙	口(21.8)	〃	カマド内	外面に粘土付着
〃-19	土師器	口縁部・底部欠	にぶい橙		胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	胴部中位外面に粘土付着
〃-20	土師器	底部完形	橙		外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ		丸底甕域からの搬入品
〃-21	土師器	胴部上半以上欠	浅黄		胴部外面上半及び胴部内面ハケ、胴部外面下半ヘラケズリ		丸底甕域からの搬入品
〃-22	丸玉	完形	黒褐	長0.8 厚0.6			0.87g 滑石
〃-23	石製品	一部欠		長7.5 幅7.1 厚4.2	中央に磨耗痕あり		(117.2g) 砥石
〃-24	砥石	一部欠		厚2.6		+4cm	(658.9g) 安山岩
6住-1	土師器	3/4残	にぶい橙	口12.2 体10.1 高4.1	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→全面入念な細かいヨコミガキ	床直	全面煤けた黒色処理 内湾口縁坏(搬入品)
〃-2	土師器	体部上半以上1/3残	にぶい橙	口(25.0)	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→内面入念なヨコミガキ	カマド内	内面黒色処理 破損後の二次焼成痕あり カマド構築材に転用？
〃-3	土師器	胴部1/3・底部欠	にぶい黄橙	口24.2	口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→全面ミガキ	+18cm	
〃-4	土師器	胴部下位以下欠	橙	口16.0	〃	床直	底部一線で欠損
〃-5	土師器	1/2残	にぶい黄橙	口(24.2) 底(12.5) 高(33.0)	口縁部ヨコナデ・胴部以下外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→口縁部内面及び胴部以下外面ミガキ	床直	
〃-6	土師器	胴部下半3/4残	明黄褐		外面ヘラケズリ・内面ヘラナデ→全面ミガキ	北東隅柱穴内覆土上層	表赤褐顔者
〃-7	土師器	底部1/2欠	明赤褐	口24.6 高23.7	口縁部ヨコナデ、体部以下外面ヘラケズリ、体部内面ヘラナデ	床直	内面黒色処理
〃-8	土師器	胴部1/3・底部欠	にぶい橙	口14.1	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	+14cm	丸底甕域からの搬入品
〃-9	土師器	底部欠	にぶい褐	口16.5	〃	+2cm	
〃-10	土師器	胴部上位以上1/3残	にぶい橙	口(23.2)	〃	カマド内	
〃-11	土師器	胴部中位以上3/4残	橙	口22.3	〃	床直 カマド内	胴部中位外面に粘土付着 破損後の二次焼成痕あり
〃-12	土師器	口縁部1/3欠	浅黄橙	口20.5 底5.9 高38.5	口縁部ヨコナデ、胴部外面以下ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド右袖	カマド構築材に転用
〃-13	土師器	胴部中位以上ほぼ完形	橙	口22.8	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	+5cm カマド内	破損後の二次焼成痕あり
〃-14	土師器	胴部中位以上ほぼ完形	明黄橙	口23.1	〃	−15cm カマド内	破損後の二次焼成痕あり 外面全体に粘土付着 カマド構築材に転用？
〃-15	刀子	刃部一部残					
〃-16	臼玉	一部欠		長1.4 厚0.7		+18cm	(1.60g) 滑石
〃-17	砥石	完形		長19.5 幅5.5 厚6.2		床直	696.2g 安山岩
8住-1	土師器	1/3残	橙	口(14.2) 体(8.4) 高(4.5)	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→外面ミガキ→内面暗文		鏡川流域からの搬入品
〃-2	須恵器	1/3残	灰白	口(14.0) 高(3.5)	回転ナデ、底部回転ヘラ切り	+35cm	
〃-3	須恵器	口縁部1/2欠	灰オリーブ	口(13.6) 高4.1 内底8.5	〃	カマド内	
〃-4	須恵器	1/3残	灰白	口(13.2) 高(3.6)	〃	−5cm	
〃-5	須恵器	3/4残	灰	口13.6 高2.9 内底9.2	回転ナデ、底部外面回転糸切り	右袖密着	
〃-6	須恵器	1/3残	暗赤灰	口18.0 高2.6	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ		
〃-7	須恵器	4/5残	黒	口16.5 体13.2 台12.8 高3.7	回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ	+30cm	
〃-8	土師器	1/2残	橙	口(14.8) 胴14.2 高(13.6)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	
〃-9	土師器	完形	にぶい橙	口12.6 胴15.5 高13.6	〃	床直	
〃-10	鉄製品	一部残		幅0.5 厚0.3		+6cm	
〃-11	刀子	関部		刃部幅1.4			
〃-12	石製品	一部残		長7.6 厚2.8 孔(1.0)			(38.7g) 軽石
〃-13	砥石	一部残		幅(6.7)			(26.12g) 千枚岩
9住-1	土師器	胴部1/3欠	橙	口20.7 底9.4 高33.8	口縁部ヨコナデ・胴部以下外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→全面ミガキ	−25cm	
〃-2	土師器	口縁部1/3残	橙	口(21.2)	ヨコナデ		胴張甕
〃-3	刀子	関部・切先欠					
10住-1	土師器	1/4残	橙	口(12.8) 高(4.3)	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→内面暗文		鏡川流域からの搬入品
〃-2	須恵器	口縁部1/4欠	灰オリーブ	口14.4 底8.0 高4.0 内底8.6	回転ナデ、底部回転糸切り	床直	
〃-3	須恵器	ほぼ完形	暗オリーブ	口13.2 体10.8 台9.3 高3.3	回転ナデ、底部回転糸切りの後周縁回転ヘラケズリ	床直	

挿図番号	種類	残存	色調	大きさ(cm)	手法	出土位置	備考
〃-4	土師器	口縁部1/3残	褐	口(20.5)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	+8cm	
〃-5	土師器	口縁部1/3残	明赤褐	口(21.0)	〃		
〃-6	土師器	口縁部1/2残	暗赤褐	口10.0	〃	+8cm	
〃-7	鉄鏃	茎部欠		鏃身部長6.5 鏃身幅0.3		+28cm	
〃-8	刀子	完形		全長16.4 身部長11.0 身部幅2.1		床直	
〃-9	砥石	一部残					(34.0g) 凝灰岩
〃-10	石製品	完形		長16.1 幅12.8 厚3.9	全面に研磨痕・中央一か所に敲打痕あり	−18cm	380.2g 軽石
〃-11	敲き石？	完形		長17.3 幅6.7 厚4.6	上下両端に打ち欠き痕あり	床直	695.4g 安山岩
11住-1	土師器	1/3残	にぶい黄褐	口(14.0) 底(6.8) 高4.9	回転ナデ、内面ミガキ、底部回転糸切りの後周縁部手持ちヘラケズリ	+3cm	内面黒色処理
〃-2	須恵器	1/2残	灰オリーブ	口13.0 底7.7 高3.5 内底6.3	回転ナデ、底部回転糸切り	+8cm	
〃-3	須恵器	完形	灰オリーブ	口16.8 高3.5	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ	カマド内	
〃-4	須恵器	高台部欠	灰	口16.0	回転ナデ、底部・体部下位外面回転ヘラケズリ	床直	
〃-5	土師器	口縁部1/4残	橙	口(24.0)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ		
〃-6	土師器	胴部中位以上1/4残	にぶい黄橙	口(21.0) 胴(22.0)	〃		胴部中位外面に粘土付着
〃-7	鎌	完形		長16.2 基部幅2.8		+17cm	基部角113°前後
12住-1	土師器	1/5残	にぶい黄橙	口(13.0) 体(11.0)	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→内面ヨコミガキ		内面黒色処理
〃-2	土師器	9/10残	にぶい褐	口21.8 高29.5	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	煮沸痕顕著 胴部下位付近に粘土付着
〃-3	土師器	胴部以上1/2残	にぶい橙	口(24.0)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面下位ハケ及び中位以上ヘラナデ	カマド内	胴部下位付近に粘土付着 破損後の二次焼成痕あり カマド構築材に転用？
〃-4	石製品	完形		長7.9 幅6.3 厚2.6	表裏面に溝あり	カマド内	73.4g 軽石
13住-1	土師器	胴部ほぼ完形 口縁部1/3残	にぶい赤褐	口(21.5) 胴20.4	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	
〃-2	土師器	口縁部1/2残	明赤褐	口20.4	〃	カマド内	
〃-3	鑿か鉄鏃？	一部欠		長6.9 幅2.3 厚1.2			
〃-4	鉈？	両端欠					実測図上端の形態はやや不鮮明
〃-5	石製品	一部欠		長4.5 幅4.3 厚4.7			(103.34g) 凝灰岩
14住-1	須恵器	口縁部一部欠	暗灰黄	口16.0 高3.2	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ	−30cm	
〃-2	刀子	完形		全長18.1 身部長11.8 身部幅1.6		+8cm	
〃-3	石製品	一部欠		長16.3 幅(11.2) 厚4.0	表裏面研磨痕あり		(305.5g) 軽石
15住-1	土師器	1/3残	橙	口15.4 底(8.0) 高5.5	回転ナデ→底部外面手持ちヘラケズリ・内面ミガキ	カマド内	内面黒色処理 破損後の二次焼成痕あり カマド構築材に転用？
〃-2	須恵器	2/3・つまみ部欠	灰オリーブ	口(13.3)	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ		
〃-3	須恵器	口縁部1/3欠	灰オリーブ	口16.4 高3.8	〃		
〃-4	須恵器	口縁部3/4欠	灰白	口(12.5) 体部8.6 高4.1 内底実測不可	回転ナデ、体部外面手持ちヘラケズリ	カマド内	
〃-5	須恵器	口縁部2/3欠	黄灰	口15.6 体12.0 台10.5 高7.1	回転ナデ、底部回転糸切り	カマド内	
〃-6	鉄製品	一部残					
16住-1	砥石	完形		長19.0 幅5.3 厚3.3		床直	533.2g 凝灰岩
17住-1	土師器	2/3残	にぶい橙	口13.7 底9.3 高4.2	口縁部ヨコナデ・体部以下ヘラケズリ→内面暗文	床直	鏑川流域からの搬入品
〃-2	須恵器	1/2残	灰オリーブ	口(14.2) 底8.1 高3.8 内底8.5	回転ナデ、底部回転糸切り	+10cm	
〃-3	須恵器	口縁部1/2欠	灰白	口13.4 底8.6 高3.6 内底7.2	〃	床直	
〃-4	須恵器	1/2残	灰	口13.0 底8.4 高3.2 内底6.7	〃		
〃-5	須恵器	胴部下半以下3/4残	灰	底15.0	胴部外面タタキの後底部付近手持ちヘラケズリ 胴部内面タタキの後底部付近ヘラナデ	−7cm	
〃-6	土師器	胴部中位以上2/3残	明褐	口23.7 胴22.8	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	外面全体及び口縁部内面に粘土付着 煙道部に転用
〃-7	土師器	胴部上位以上1/2残	橙	口(22.1) 胴(23.1)	〃	カマド内	煙道部に転用？
〃-8	土師器	胴部中位以上2/3残	にぶい赤褐	口21.5 胴20.2	〃	カマド内	煙道部に転用？
〃-9	土師器	胴部上位以上1/2残	橙	口20.4 胴(20.5以上)	〃		
〃-10	銅製巡方	一部欠		長2.4 幅2.7 厚0.5 孔長0.4 孔幅1.7		+8cm	
〃-11	鉄製品	一部欠		幅0.4 厚0.6		+21cm	
18住-1	須恵器	口縁部1/8欠	オリーブ黄	口(13.4) 底6.0 高4.1 内底6.2	回転ナデ、底部回転糸切り		墨書土器(赤外線観察)
〃-2	須恵器	1/2残	灰白	口13.4 底6.0 高3.8 内底6.0	〃		軟質須恵器
〃-3	須恵器	口縁部1/6・底部欠	オリーブ黄	口13.6 内底6.2	回転ナデ		軟質須恵器
〃-4	須恵器	口縁部1/4残	灰白	口(14.0) 底(7.0) 高4.1 内底(6.0)	回転ナデ、底部回転糸切り		軟質須恵器

挿図番号	種類	残存	色調	大きさ(cm)	特徴	出土位置	備考
〃 5	土師器	胴部以上1/2残	にぶい橙	口19.7 胴(20.4)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	
〃-6	土師器	胴部以上1/3残	赤褐	口20.4 胴22.5	〃	カマド内	
〃-7	土師器	底部完形	にぶい赤褐	底4.8	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ		
〃-8	刀子	切先残				+10cm・	
〃-9	(鉄)針	一部欠		幅0.5 厚0.4		+15cm	
〃 10	鏃	一部欠		長9.8 耗度 幅0.6 厚0.4		周溝内	
19住-1	鉄製品	一部残		幅0.4 厚0.5		床直	
20住-1	須恵器	口縁部1/3欠	オリーブ灰	口13.6 底7.6 高3.8 内底8.8	回転ナデ、底部回転糸切りの後周縁部回転ヘラケズリ	床直	
〃 2	土師器	口縁部1/3残	橙	口(20.2)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ		
〃-3	土師器	口縁部1/4残	明赤褐	口(20.0)	〃		
〃-4	鉄鏃	両端欠				+18cm	
21住-1	土師器	口縁部1/2残	明赤褐	口(14.0) 胴(15.6 以上)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ		胴部内面を除き粘土付着 煙道部に転用?
〃-2	土師器	胴部中位以上3/4残	橙	口21.0 胴19.9	〃	カマド内	〃
〃-3	土師器	胴部上半以上1/2残	橙	口21.0 胴21.6	〃		
22住-1	土師質	完形	にぶい黄褐	口9.0 底5.1 高3.3	回転ナデ、底部回転糸切り	床直	灯明皿に転用
〃-2	土師質	完形	黒褐	口6.0 高4.0	指オサエ		
〃-3	刀子	両端欠		身部幅2.1			
23住-1	土師器	1/3残	橙	口(14.0) 高(4.4)	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		内屈口縁坏
〃-2	土師器	1/2残	赤褐	口18.7 高7.8	口縁部ヨコナデ・体部以下ヘラケズリ→底部外面を除き入念なヨコミガキ		
〃-3	土師器	2/3残	にぶい橙	口12.1 底(8.0) 高14.0	口縁部ヨコナデ、胴部内面ヘラナデ、底部外面回転糸切り、胴部外面調整なし		煮沸痕あり 模倣な土器
〃-4	土師器	1/3残	橙	口(18.8) 高31.8	口縁部ヨコナデ・胴部外面以下ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→全面ミガキ	+10cm	煮沸痕あり
〃-5	土師器	胴部中位以上完形	橙	口15.0	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	+5cm	胴部中位外面に粘土付着 模倣な土器
〃 6	土師器	胴部上半以上完形	にぶい赤褐	口21.3	〃	+5cm	外面全体に粘土付着 カマド構築材に転用?
〃 7	土師器	口縁部1/3残	橙	口(23.0)	〃		
〃-8	土師器	ほぼ完形	橙	口14.2 高14.0	〃	+5cm	破損後の二次焼成痕あり 模倣な土器
24住-1	刀子	茎部欠		身部長7.8 身部幅1.3		+66cm	関部形態は不明
25住-1	土師器	1/2残	にぶい橙	口(14.6) 底7.7 高4.7	回転ナデ→底部外面手持ちヘラケズリ・内面ミガキ		内面黒色処理 墨書土器
〃-2	土師器	1/2残	黄橙	口14.2 底6.4 高4.4	〃		内面黒色処理 墨書土器(赤外線観察)
〃-3	須恵器	1/2残	灰白	口(14.3) 底8.4 高3.8 内底7.0	回転ナデ、底部回転糸切り		
〃 4	須恵器	口縁部2/3欠	にぶい黄	口(14.2) 底7.4 高3.8 内底7.3	〃		
〃-5	須恵器	1/2残	灰オリーブ	口(14.0) 底6.0 高4.2 内底8.0	〃		
〃 6	須恵器	口縁部1/6欠	灰オリーブ	口13.2 底7.0 高4.2 内底7.9	〃	床直	
〃-7	須恵器	口縁部2/3欠	灰	口(13.2) 底6.7 高3.7 内底8.1	〃	床直	
〃 8	須恵器	1/2残	灰	口(13.2) 底7.9 高4.2 内底7.8	〃		
〃-9	須恵器	口縁部3/4欠	明黄褐	口(13.1) 底6.3 高3.9 内底6.6	〃		
〃 10	須恵器	口縁部1/3欠	灰オリーブ	口17.0 高3.8	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ	+10cm	
〃-11	須恵器	口縁部3/4欠	黒褐	口(16.5) 高4.2	〃		
〃 12	須恵器	完形	灰	口15.2 高3.4	回転ナデ、天井部外面回転糸切りの後周縁部回転ヘラケズリ	床直	
〃-13	須恵器	1/2残	灰	口(14.8) 体12.0 台10.6 高6.1	回転ナデ、底部回転糸切りの後周縁部回転ヘラケズリ	床直	
〃-14	須恵器	底部完形	灰オリーブ	体11.4 台9.9	回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ	床直	
〃 15	須恵器	頸部3/4残	オリーブ黒		回転ナデ	カマド内	構築材に転用?
〃-16	須恵器	肩部1/4残	オリーブ黒		回転ナデ、内外面タタキ	+5cm	
〃 17	土師器	胴部1/3欠	にぶい黄橙	口16.0 高19.0	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	カマド構築材に転用?
〃-18	刀子	両端欠		身部幅1.1		+13cm	
〃-19	火打石?	完形?		長3.4 幅2.0 厚1.5			10.21g 玉髄(石英)
26住-1	土師器	胴部上半ほぼ完形	にぶい橙		口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	-5cm	外面全体及び頸部内面に粘土付着 カマド構築材に転用?
〃 2	土師器	底部1/2残	橙	底5.0	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ		外面全部に粘土付着 破損後の二次焼成痕あり カマド構築材に転用?
27住-1	須恵器	口縁部1/5欠	灰青	口19.4 高3.6	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ	床直	
〃-2	土師器	脚裾部一部で欠	橙	口12.2	口縁部及び脚裾部ヨコナデ・脚部内面及びその他外面ヘラケズリ→坏部入念なヨコミガキ	床直	坏部内面黒色処理 欠損部を研磨(再利用)

挿図番号	種類	残存	色調	大きさ(cm)	特徴	出土位置	備考
〃-3	須恵器	口縁部1/4欠	浅黄	口21.8 高19.3	回転ナデ、胴部外面タタキ	床直	
〃-4	須恵器	口縁部1/3欠	灰	口8.8 底6.4 高11.3	回転ナデ、胴部下半回転ヘラケズリ、底部外面手持ちヘラケズリ	床直	
〃-5	土師器	頸部から胴部1/4残	橙		口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→全面雑なミガキ	カマド内	煮沸痕あり カマド構築材に転用？
〃-6	土師器	口縁部1/6欠	にぶい黄橙	口11.0 底6.6 高7.1	口縁部ヨコナデ、体部以下外面ヘラケズリ	床直	煮沸痕あり
〃-7	土師器	底部2/3残	明褐	底7.2	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ		
〃-8	土師器	胴部下半以下完形	明赤褐		〃	+18cm	欠損部を研磨(再利用)
〃-9	土師器	胴部中位以上1/2残	にぶい褐	口22.4 胴20.7	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	
〃-10	鉄製品			長(1.7) 幅(7.3) 厚(0.2)			木質付着
〃-11	石製品	一部欠？		長9.4 幅4.9 厚3.0	3孔穿孔		(43.3g) 軽石
28住-1	須恵器	完形	灰	口7.3 体9.7 高2.8	回転ナデ→天井部外面回転ヘラケズリ	床直	
〃-2	土師器	口縁部3/5残	にぶい黄橙	口22.4	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ		
〃-3	土師器	1/3残	橙	口(20.4) 底5.3 高12.8	口縁部ヨコナデ、その他ヘラナデ	カマド内	底部外面にヘラ記号あり
〃-4	土師器	胴部上半以上1/3残	にぶい黄橙	口(16.2)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ		
〃-5	土師器	1/3残	灰白	口(12.7) 底(6.3) 高16.2	口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	平底だが西方からの搬入品 破損後の二次焼成痕あり カマド構築材に転用？ 胴部下半に粘土付着
29住-1	土師器	ほぼ完形	黒褐	口11.2 体10.2 高3.3	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ	床直	有段口縁坏か？ 全面煤けた黒色処理
〃-2	須恵器	1/3残	黒	口(9.2) 高5.0	回転ナデ、底部外面手持ちヘラケズリ		
〃-3	土師器	体部上半以上1/3残	橙	口(13.0)	口縁部ヨコナデ、体部外面調整痕なし、体部内面ヘラナデ	カマド内	
〃-4	土師器	口縁部1/4欠	橙	口12.4 底7.5 高7.0	口縁部ヨコナデ、体部外面調整痕なし、底部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラナデ	床直	稚拙な土器
〃-5	土師器	口縁部1/2残	にぶい黄橙	口20.0	口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→口縁部外面を除きミガキ	カマド内	
〃-6	土師器	胴部下半以下ほぼ完	にぶい黄橙		胴部上半ハケ→胴部下位外面ヘラケズリ・内面ヘラナデ	カマド内	長岡丸底圏域からの搬入品 破損後の二次焼成痕あり カマド構築材に転用？
〃-7	土師器	胴部上半以上3/4残	にぶい橙	口14.0	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	カマド内	稚拙な土器
〃-8	石製品	完形		長15.7 幅4.8 厚3.7	1面のみ磨り面あり		408.2g 安山岩
〃-9	耳環	完形		外縦1.8 外横1.9 決幅0.2		覆土	金環
〃-10	土製品	一部欠	橙	長2.0 厚0.7			(1.92g)
30住-1	須恵器	口縁部1/4欠	オリーブ灰	口13.7 底6.5 高4.3 内底7.4	回転ナデ、底部回転糸切り	カマド内	
〃-2	須恵器	口縁部9/10欠	灰白	口(13.0) 底7.0 高3.9 内底6.6	〃	床直	
〃-3	土師器	口縁部1/3残	にぶい赤褐	口(20.4)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	煙道部最上段	外面全体に粘土付着
〃-4	土師器	胴部中位以上3/4残	明赤褐	口21.0 胴21.0	〃	煙道部最下段	外面全体に粘土付着
〃-5	土師器	胴部中位以上3/4残	にぶい橙	口21.8 胴21.5	〃	煙道部中段	外面全体に粘土付着
31住-1	土師器	ほぼ完形	黄橙	口17.4 底7.1 高28.8	口縁部ヨコナデ、胴部以下外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	
32住-1	土師質	高台部1/2残	にぶい橙	脚8.0	回転ナデ、底部回転糸切り		
〃-2	鉄鏃	両端欠					
〃-3	砥石	一部残					(80.1g) 凝灰岩
33住-1	土師器	底部1/2残	明赤褐	底5.5	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ	カマド内	内外面粘土付着 カマド構築材に転用？ 底部外面にヘラ記号あり
〃-2	火打石？	完形？					114.99g 玉髄（石英）
34住-1	須恵器	口縁部1/10欠	灰オリーブ	口13.6 底7.4 高3.6 内底8.3	回転ナデ、底部回転ヘラ切りの後手持ちヘラケズリ		
〃-2	須恵器	口縁部1/2欠	灰オリーブ	口14.2 高3.1	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ	床直	
〃-3	土師器	胴部中位以上2/3残	にぶい赤褐	口19.7 胴19.0	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	煙道部下から1番目	外面全体に粘土付着
〃-4	土師器	胴部中位以上ほぼ	橙	口20.2 胴21.2	〃	煙道部下から2番目	口縁部外面に粘土付着
〃-5	土師器	胴部中位以上ほぼ	明赤褐	口20.7 胴22.0	〃	煙道部下から3番目	外面全体に粘土付着
〃-6	土師器	胴部中位以上完形	橙	口21.2 胴20.8	〃	煙道部下から4番目	口縁部外面に粘土付着
〃-7	土師器	胴部上半以上1/3残	橙	口(22.0) 胴(23.3)	〃	煙道部下から5番目	外面全体に粘土付着
〃-8	土師器	胴部上半以上1/3残	橙	口(20.4) 胴(20.6)	〃	カマド内	
〃-9	刀子	身部・茎部端欠		幅1.1		+12cm	
〃-10	毛抜き型鉄製品？	一部残		幅0.5 厚0.1		+8cm	

挿図番号	種類	残存	色調	大きさ(cm)	特徴	出土位置	備考
〃-11	鉄製品	一部欠					
35住-1	土師器	体部上半以上1/3残	にぶい黄橙	口(13.8)	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		内面黒色処理
36住-1	土師器	完形	橙	口13.8 底10.0 高4.3	口縁部ヨコナデ・体部以下外面ヘラケズリ→内面暗文		畿内流域からの搬入品
〃-2	須恵器	口縁部1/2欠	灰	口14.5 高4.0 内底8.7	回転ナデ、底部回転ヘラ切り	+28cm	
〃-3	須恵器	完形	暗灰黄	口12.6 底8.3 高3.6 内底7.9	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	床直	
〃-4	須恵器	口縁部一部欠	にぶい赤褐	口9.0 脚5.2 高3.7	回転ナデ、底部回転ヘラ切り		
〃-5	須恵器	完形	灰	口18.5 高2.8	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ	+14cm	
〃-6	須恵器	口縁部1/3残	暗緑灰	口(12.0)	回転ナデ		
〃-7	須恵器	胴部3/4残	灰		回転ナデ→胴部下位外面回転ヘラケズリ→文様	床直	
〃-8	土師器	ほぼ完形	浅黄橙	口10.8 底4.9 高10.1	口縁部ヨコナデ、胴部以下外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	床直	
〃-9	土師器	胴部中位以上1/3残	橙	口(26.0)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	床直	外面全体に粘土付着 カマド構築材に転用?
〃-10	土師器	胴部中位以上完形	橙	口22.9	〃	床直	胴部上半外面に粘土付着 胴部一定線で欠落 貯蔵穴に転用か?
〃-11	土師器	口縁部1/2残	にぶい橙	口(24.0)	〃		
〃-12	土師器	胴部中位以上完形	にぶい橙	口23.0 胴20.2	〃	床直	胴部中位外面に粘土付着
〃-13	土師器	胴部中位以上完形	橙	口22.8 胴19.6	〃	床直	胴部外面に粘土付着
〃-14	土師器	口縁部1/3残	橙	口(21.9)	〃		外面全体に粘土付着 カマド構築材に転用?
37住-1	灰釉陶器	脚部1/4残	灰白	脚(6.0)	回転ナデ→灰釉		東濃産(光ヶ丘1号窯式)
〃-2	須恵器	胴部中位以上1/3残	黒	口(14.4)	回転ナデ		
39住-1	土師器	胴部中央以下一部欠	にぶい黄橙	口19.0 底(6.0) 高26.1	口縁部ヨコナデ、胴部以下外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	床直	金雲母混入 粘土異質(搬入品?) 胴部中位外面に粘土付着
40住-1	土師器	口縁部1/3欠	にぶい橙	口13.0 体11.7 高4.9	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		橙色土器
〃-2	土師器	1/2残	褐灰	口(13.4) 体10.7 高4.9	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→暗文		内外面煤けた黒色処理
〃-3	土師器	口縁部1/3残	橙	口(18.4)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ		
〃-4	土師器	胴部中位以上1/3残	赤褐	口(20.0)	〃		胴部外面に粘土付着
〃-5		一部残				床直	(2.4g) 滑石
41住-1	土師質	口縁部1/5残	橙	口(13.8)	回転ナデ		
〃-2	土師質	底部2/3残	橙	底7.2	回転ナデ、底部回転糸切り		
42住-1	土師器	口縁部1/3残	橙	口(14.0)	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→内面入念なミガキ		
〃-2	土師器	口縁部4/5欠	にぶい黄褐	口(15.4) 脚10.0 高13.7	口縁部及び脚裾部ヨコナデ・その他外面及び脚部内面ヘラケズリ→口縁部外面及び坏部内面入念なミガキ	床直	坏部内面黒色処理
〃-3	土師器	1/3残	浅黄	口(16.0) 底7.0 高(14.4)	口縁部ヨコナデ・胴部以下外面ヘラナデ・胴部内面ヘラナデ→口縁部内面ミガキ	床直	
〃-4	土師器	口縁部1/2残	にぶい黄褐	口(21.0)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	床直	
43住-1	石製品	完形		長6.6 幅7.2 厚3.5		+32cm	76.2g 軽石
44住-1	須恵器	完形	浅黄	口13.6 底7.2 高3.4 内底6.5	回転ナデ、底部回転糸切り	床直	黒青土器
〃-2	土師器	ほぼ完形	橙	口11.2 胴12.5 底5.3 高10.3	口縁部ヨコナデ、胴部以下外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	床直	
45住-1	須恵器	口縁部5/6欠	灰オリーブ	口(14.0) 底6.6 高4.2 内底6.3	回転ナデ、底部回転糸切り	カマド内	
〃-2	須恵器	1/2残	灰オリーブ	口(13.8) 底6.6 高3.8 内底6.3	〃	カマド内	
〃-3	須恵器	口縁部1/2欠	灰	口17.8 高3.6	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ	カマド内	
〃-4	須恵器	1/2残	にぶい赤褐	口(13.8) 脚8.0 高6.3	回転ナデ、底部回転糸切り		
〃-5	土師器	胴部中位以上1/4残	にぶい褐	口(22.0) 胴(21.8)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	
〃-6	土師器	胴部上位以上1/3残	橙	口(21.0) 胴(21.2)	〃		
〃-7	石製品	完形		長7.4 幅4.4 厚1.3	両面に磨耗痕あり		27.3g 砥石
46住-1	須恵器	1/2残	灰	口(14.4) 底7.2 高3.6 内底6.5	回転ナデ、底部回転糸切り		
〃-2	須恵器	口縁部1/4欠	灰	口14.2 底7.7 高3.8 内底6.8	〃		
〃-3	須恵器	口縁部1/2欠	にぶい黄橙	口14.0 底7.0 高4.0 内底6.9	〃		
〃-4	須恵器	口縁部9/10欠	灰	口(13.0) 底7.2 高4.0 内底7.3	〃		
〃-5	須恵器	1/2残	オリーブ灰	口13.0 底7.0 高3.7 内底6.4	〃		
〃-6	須恵器	口縁部7/8欠	灰	口(12.9) 底7.3 高3.9 内底7.1	〃		軟質須恵器
〃-7	須恵器	1/4残	黒	口(14.8) 脚(10.6) 高3.6	〃	カマド内	
〃-8	須恵器	完形	灰	口15.0 脚10.1 高6.5	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	カマド内	
〃-9	須恵器	胴部以上ほぼ完形	灰	口9.0	回転ナデ		
〃-10	土師器	口縁部1/2残	にぶい赤褐	口(20.0) 胴(20.4以上)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	
〃-11	土師器	口縁部1/3残	にぶい褐	口(20.0) 胴(21.7以上)	〃		

挿図番号	種類	残存	色調	大きさ(cm)	特徴	出土位置	備考
49住-1	土師器	1/2残	橙	口(13.8) 高4.9	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		内屈口縁坏
〃-2	土師器	1/4残	明赤褐	口(13.6) 高4.1	〃		内屈口縁坏
〃-3	須恵器	完形	灰	口11.0 高3.3	回転ナデ、天井部外面無調整	床直	
〃-4	須恵器	1/2残	黄灰	口9.4 高3.8	〃		
〃-5	須恵器	口縁部1/3欠	暗青灰	口9.0 高3.2	回転ナデ、底部外面無調整		
〃-6	須恵器	胴部上半のみ2/3残	灰		回転ナデ・文様		
〃-7	土師器	坏部1/2・脚裾部欠	橙	口(16.0)	回転ナデ?・坏部底部外面回転ヘラケズリ→脚部内面を除き入念なミガキ		坏部内面黒色処理 回転台使用?
〃-8	土師器	胴部3/4残	橙		口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→余面粗いミガキ	カマド内	外面に粘土付着 カマド構築材に転用
〃-9	土師器	胴部中位以上ほぼ完形	橙	口21.0	口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→胴部外面ミガキ・口縁部は不明	カマド内	破損後の二次焼成痕あり カマド構築材に転用
〃-10	土師器	口縁部1/3残	橙	口(22.0)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ		外面全体に粘土付着 カマド構築材に転用?
〃-11	土師器	口縁部1/3残	橙	口(22.5)	〃		外面全体に粘土付着 カマド構築材に転用?
〃-12	土師器	胴部中位以上1/2残	にぶい褐	口19.8	〃	カマド内	破損後の二次焼成痕あり カマド構築材に転用
〃-13	土師器	胴部中位以上1/2残	橙	口(22.4)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケ後下半ヘラケズリ、胴部内面ハケ	カマド内	破損後の二次焼成痕あり 内外面に粘土付着 カマド構築材に転用 長野丸底甕域からの搬入品
〃-14	土師器	胴部上半以上1/4残	灰白	口(13.0)	口縁部ハケ後ヨコナデ、胴部外面ハケ、胴部内面ヘラナデ		丸底甕域からの搬入品
〃-15	鉄製品	完形		長4.4 幅1.6 厚0.1			
〃-16	刀子	両端欠		刃幅1.3			関部形態不明
〃-17	刀子	両端欠		刃幅1.5			
〃-18	紡錘車	完形		長3.9 厚2.0			46.21g 石材不明
〃-19	石製品	完形		長8.3 幅7.7 厚4.2	一面のみ研磨痕あり		73.9g 軽石
〃-20	石製品	完形		長23.5 幅10.7 厚9.1	研磨痕及び凹み痕あり		695.9g 砥石 支脚石?
50住-1	土師器	ほぼ完形	橙	口14.4 底9.3 高27.0	口縁部ヨコナデ、胴部以下ヘラケズリの後粗いミガキ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	破損後の二次焼成痕あり カマド構築材として転用
〃-2	土師器	ほぼ完形	にぶい褐	口17.2 高26.8	口縁部ヨコナデ・胴部以下外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→内面ミガキ	カマド内	外面の一部に粘土付着 破損後の二次焼成痕あり カマド構築材として転用
〃-3	土師器	3/4残	明赤褐	口20.6 底12.0 高26.1	口縁部ヨコナデ・胴部以下外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→全面ミガキ	カマド内	破損後の二次焼成痕あり カマド構築材として転用
51住-1	須恵器	ほぼ完形	灰黄	口14.3 底7.0 高3.7 内底7.1	回転ナデ、底部回転糸切り		
〃-2	須恵器	ほぼ完形	灰	口14.1 底8.0 高3.5 内底7.0	〃	-4cm	
〃-3	須恵器	口縁部1/4欠	浅黄	口13.9 底7.8 高3.6 内底7.4	〃		
〃-4	須恵器	ほぼ完形	黄灰	口13.6 底7.0 高3.5 内底6.4	〃	床直	
〃-5	須恵器	ほぼ完形	灰白	口13.5 底7.0 高3.8 内底6.2	〃	+3cm	
〃-6	須恵器	1/2残	灰	口14.8 高3.1	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ		
〃-7	須恵器	口縁部1/5欠	黒	口4.3 胴5.2 高11.1	回転ナデ、胴部下位外面回転ヘラケズリ	床直	
〃-8	土師器	ほぼ完形	明赤褐	口10.6 胴11.2 底5.4 高9.4	口縁部ヨコナデ、胴部以下外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	+15cm	
〃-9	土師器	口縁部1/3残	にぶい褐	口(20.7) 胴(22.2以上)	〃		外面全体に粘土付着 カマド構築材に転用?
52住-1	土師器	口縁部1/2欠	橙	口14.0 底7.7 高4.6	回転ナデ、底部回転糸切りの後周縁部手持ちヘラケズリ→内面ミガキ	+10cm	内面黒色処理
〃-2	土師器	3/4残	明赤褐	口13.3 底7.0 高5.2	回転ナデ、底部回転糸切りの後周縁部回転糸切り→体部外面ミガキ・体部内面波状暗文		甲斐型坏
〃-3	土師器	底部1/4残	明赤褐	底(7.4)	〃	カマド内	甲斐型坏
〃-4	須恵器	2/5残	黄灰	口(14.8) 底(9.6) 高4.3	回転ナデ、底部手持ちヘラケズリ	カマド内	
〃-5	須恵器	口縁部1/4欠	灰白	口14.6 高4.7 内底8.7	回転ナデ、底部回転ヘラ切り	カマド内	
〃-6	須恵器	2/5残	灰黄	口(14.3) 底(8.2) 高3.8 内底(8.2)	回転ナデ、底部回転糸切り	カマド内	
〃-7	須恵器	完形	灰オリーブ	口14.1 底9.4 高3.7 内底8.8	回転ナデ、底部回転糸切りの後手持ちヘラケズリ	床直	
〃-8	須恵器	口縁部3/4欠	灰白	口(14.0) 底7.8 高4.1 内底8.1	回転ナデ、底部回転ヘラ切りの後手持ちヘラケズリ	+6cm	
〃-9	須恵器	3/4残	灰	口13.3 底8.1 高3.8 内底6.7	回転ナデ、底部回転糸切り	カマド内	
〃-10	須恵器	2/3残	灰白	口12.4 底7.9 高3.5 内底6.6	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	カマド内	
〃-11	土師器	口縁部1/4欠	橙	口10.2 胴11.6 底3.6 高9.5	口縁部ヨコナデ、胴部以下外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	床直	
〃-12	須恵器	口縁部1/3欠	灰白	口12.2 底6.5 高4.2 内底7.7	回転ナデ、底部回転糸切り		タール付着 灯明皿転用
1坑 1	鉄斧	完形		長6.8 刃部幅4.0		覆土	
1井-1	須恵器	1/2残	灰白	口12.8 高3.7 内底7.7	回転ナデ、底部手持ちヘラケズリ		
〃-2	須恵器	完形	灰	口13.0 底8.2 高3.4 内底7.3	回転ナデ、底部回転糸切り		

挿図番号	種類	残存	色調	大きさ(cm)	特徴	出土位置	備考
〃 4	灰釉陶器	胴部下半以下完形	灰白	脚4.6	回転ナデ、胴部外面回転ヘラケズリ		産地不明
〃-5	須恵器	口縁部1/5残	灰白	口(30.0)	回転ナデ、胴部外面タタキ、胴部内面ヘラナデ		
〃 6	須恵器	口縁部1/2残	黒	口24.4	回転ナデ、胴部内面同心円文状タタキ		
2井-1	須恵器	1/2残	灰	口(9.4) 高3.5	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ		天井部外面にヘラ記号
〃-2	須恵器	1/3残	灰	口(14.0) 底7.6 高3.9 内底6.4	回転ナデ、底部回転糸切り		
〃-3	須恵器	1/12残	灰	口(17.2)	回転ナデ		
〃-4	須恵器	底部完形・頸部1/3残	灰	底15.6	回転ナデ、胴部外面タタキの後底部付近手持ちヘラケズリ、胴部内面同心円文状タタキの後ヘラナデ並びに底部付近ハケ		
〃-5	石製品	完形		長6.0 幅5.6 厚2.4			48.6g 軽石
1溝 1	須恵器	底部の一部欠	灰	口4.4 胴11.7 高12.0	回転ナデ、胴部下位外面回転ヘラケズリ	下段床面	底部を下からうちかいたものか
〃-2	土師器	脚裾部1/4欠	橙	口14.0 脚11.2 高13.7	口縁部及び脚裾部ヨコナデ・体部下半から脚部外面及び脚部上半内面ヘラケズリ・脚裾部内面ヘラナデ→口縁部外面及び坏部内面ミガキ	下段床面	坏部内面黒色処理
〃-3	土師器	胴部中位以上5/6欠	黄橙	口(24.2) 高23.5	口縁部(ハケ後)ヨコナデ、胴部外面ハケ後下位ヘラケズリ、胴部内面ハケ	下段床面	丸底甕域からの搬入品
〃-4	土師器	ほぼ完形	橙	口14.2 高4.6	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ・内面暗文	上段	鏑川流域からの搬入品
〃-5	須恵器	1/3残	暗灰	口(16.0) 底(11.9) 高(4.2)	回転ナデ、底部手持ちヘラケズリ	上段	
〃-6	須恵器	胴部下半以下完形	灰	脚10.6	回転ナデ・胴部外面一部タタキ→胴部下位外面回転ヘラケズリ→文様	上段	
〃-7	須恵器	胴部完形	灰白		回転ナデ・胴部上位外面カキ目→胴部下位回転ヘラケズリ→文様	上段	
〃-8	須恵器	口縁部3/4・底部1/2欠	灰	口(7.1) 底8.6 高12.6	回転ナデ→胴部下位外面以下手持ちヘラケズリ	上段	
〃-9	土師器	4/5残	橙	口12.5 胴14.2 底5.6	口縁部ヨコナデ、胴部以下外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	上段	
2溝-1	須恵器	2/3残	オリーブ灰	口13.2 底8.8 高3.5 内底8.7	回転ナデ、底部不明だが回転糸切りではない		
〃-2	須恵器	頸部完形	灰		回転ナデ		
〃-3	須恵器	1/2残	灰白	口16.0 底8.5 高7.4	回転ナデ、胴部下位以下外面回転ヘラケズリ		
〃-4	土師器	胴部上半以上1/3欠	橙	口10.4 胴11.3 底4.0 高10.0	回転ナデ・底部回転糸切り→胴部下半外面手持ちヘラケズリ		煮沸痕一切なし
〃 5	須恵器	胴部下半以下1/2残	灰	底14.0	胴部内外面タタキの後内面ヘラナデ		
1流-1	土師器	完形	橙	口15.2 高5.9	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→内面入念なヨコミガキ	砂層	内面黒色処理 内屈口縁坏の模倣
〃-2	土師器	1/2残	明赤褐	口(12.6) 高4.4	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ	砂層	内屈口縁坏
〃 3	土師器	1/4残	橙	口(11.8)	〃	砂層	内屈口縁坏
〃-4	土師器	ほぼ完形	橙	口13.0 底6.2 高4.3	回転ナデ→体部下位以下外面手持ちヘラケズリ・内面ミガキ	砂層	内面黒色処理
〃-5	土師器	口縁部1/3欠	にぶい黄橙	口12.4 底6.5 高3.5	回転ナデ→底部外面手持ちヘラケズリ・内面ミガキ	砂層	内面黒色処理
〃 6	土師器	完形	明黄褐	口13.8 底6.4 高4.1	回転ナデ・底部回転糸切り→内面ミガキ	砂層	内面黒色処理 墨書土器
〃 7	土師器	ほぼ完形	橙	口13.4 高4.2	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→内面暗文	砂層	鏑川流域からの搬入品
〃-8	土師器	ほぼ完形	明黄褐	口15.4 底8.4 高4.6	〃	砂層	鏑川流域からの搬入品
〃-9	土師器	完形	明褐	口14.1 底8.3 高4.0	〃	砂層	鏑川流域からの搬入品
〃-10	土師器	2/3残	橙	口15.5 底10.0 高4.5	〃	砂層	鏑川流域からの搬入品
〃-11	須恵器	1/4残	灰	口(12.4) 底(7.6) 高(4.3)	回転ナデ、底部無調整	砂層	
〃-12	須恵器	口縁部2/3欠	灰	口(13.1) 高3.8 内底8.7	回転ナデ、底部回転糸切り	砂層	
〃-13	須恵器	ほぼ完形	灰白	口13.6 底6.8 高4.1 内底7.5	〃	砂層	
〃-14	須恵器	1/2残	灰	口(14.5) 高4.6 内底7.9	回転ナデ、底部手持ちヘラケズリ	砂層	
〃-15	須恵器	ほぼ完形	暗灰黄	口14.0 高3.6 内底8.7	〃	砂層	
〃-16	須恵器	口縁部1/3欠	灰オリーブ	口12.8 底3.5 内底8.1	〃	砂層	
〃-17	須恵器	ほぼ完形	灰オリーブ	口13.8 底7.6 高4.1 内底7.5	〃	砂層	
〃-18	須恵器	ほぼ完形	灰オリーブ	口12.4 底9.0 高3.5 内底8.5	回転ナデ、底部不明だが回転糸切りではない	砂層	
〃-19	須恵器	口縁部1/5欠	灰オリーブ	口14.9 底7.9 高4.6 内底9.6	回転ナデ、底部回転糸切りの後(周縁部)手持ちヘラケズリ	砂層	
〃 20	須恵器	口縁部3/4欠	灰オリーブ	口(14.0) 底6.1 高4.2 内底6.6	回転ナデ、底部回転糸切り	砂層	
〃-21	須恵器	1/4残	灰	口(13.6) 底(6.6) 高4.2 内底(5.8)	〃	砂層	
〃-22	須恵器	口縁部1/5欠	灰オリーブ	口13.2 底6.8 高3.6 内底7.1	〃	砂層	
〃-23	須恵器	1/3残	灰オリーブ	口(13.2) 底5.8 高3.8 内底7.4	〃	砂層	
〃-24	須恵器	2/3残	灰	口13.2 底7.0 高4.0 内底7.6	〃	砂層	
〃-25	須恵器	ほぼ完形	灰オリーブ	口18.5 高2.8	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ	砂層	
〃-26	須恵器	2/5残	灰	口(18.6)	〃	砂層	
〃-27	須恵器	1/2残	灰オリーブ	口(18.1) 高4.5	〃	砂層	
〃-28	須恵器	1/4残	灰オリーブ	口(17.5) 高3.3	〃	砂層	
〃-29	須恵器	完形	灰オリーブ	口14.0 高2.6	〃	砂層	
〃-30	須恵器	口縁部1/2欠	灰	口15.3 脚9.2 高5.7	回転ナデ、脚部回転ヘラケズリ	砂層	

挿図番号	種類	残存	色調	大きさ(cm)	調整	出土位置	備考
〃-31	須恵器	口縁部7/8欠	灰	口(11.6) 脚7.0 高3.9	〃	砂層	
〃-32	須恵器	胴部2/3・口縁部欠	黒		回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ	砂層	
〃-33	須恵器	口縁部1/6残	褐灰	口(21.2)	〃	砂層	
〃-34	須恵器	口縁部1/3残	黒	口(11.0)	回転ナデ、胴部外面タタキ	砂層	
〃-35	須恵器	胴部1/4・口縁部欠	灰	胴31.6	回転ナデ、胴部一部タタキ、頸縁部外面回転ヘラケズリ	砂層	
〃-36	須恵器	胴部中位以下1/3残	灰オリーブ		回転ナデ、胴部タタキ、底部外面不明	砂層	
〃-37	須恵器	胴部中位以上1/3残	灰オリーブ	口(22.0)	回転ナデ、胴部タタキ	砂層	
〃-38	須恵器	胴部上半以上1/3残	黒	口(24.2)	〃	砂層	
〃-39	須恵器	胴部中位以下1/2残	オリーブ黒	胴14.8	回転ナデ、底部回転糸切り	砂層	
〃-40	須恵器	胴部以上3/4欠	灰	口(9.9) 胴12.6 高16.9	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ→胴部下位外面回転ヘラケズリ	砂層	
〃-41	須恵器	胴部1/4・口縁部欠	黒	胴8.2	〃	砂層	
〃-42	土師器	胴部上位以上1/3残	赤褐	口(21.5) 胴(22.4以上)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	砂層	
〃-43	土師器	口縁部1/4残	橙	口(22.0)	〃	砂層	
〃-44	土師器	口縁部1/3残	にぶい赤褐	口(13.2)	〃	砂層	
〃-45	砥石	端部片側欠		幅4.3 厚3.3		砂層	(188.6g) 凝灰岩
〃-46	須恵器	1/2残	浅黄	口(14.5) 底7.8 高4.1 内底7.5	回転ナデ、底部回転ヘラ切り	上層	
〃-47	須恵器	1/4残	灰オリーブ	口(14.8) 底(9.1) 高3.9	回転ナデ、底部手持ちヘラケズリ	上層	
〃-48	須恵器	1/4残	灰	口(12.1) 底(6.9) 高3.6	回転ナデ、底部回転糸切りの後周縁部手持ちヘラケズリ	上層	
〃-49	須恵器	1/2残	灰オリーブ	口(14.7) 底7.0 高4.4 内底8.9	回転ナデ、底部回転糸切り	上層	
〃-50	須恵器	1/3残	灰白	口(14.4) 底(8.4) 高4.0	〃	上層	
〃-51	須恵器	口縁部1/4欠	灰オリーブ	口14.4 底6.3 高4.2 内底6.6	〃	上層	
〃-52	須恵器	完形	浅黄	口14.2 底6.0 高4.5 内底6.7	〃	上層	
〃-53	須恵器	1/2 残	灰	口(13.6) 底6.0 高3.7 内底6.2	〃	上層	
〃-54	須恵器	口縁部4/5欠	灰オリーブ	口(13.4) 底5.2 高3.6 内底6.3	〃	上層	
〃-55	須恵器	1/2残	灰黄褐	口(11.6) 脚7.2 高4.6	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	上層	
〃-56	灰釉陶器	1/2残	灰白	口15.7 脚7.0 高2.9	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	上層	猿投窯(K-14)
〃-57	灰釉陶器	底部1/4残	灰白	脚(7.0)	回転ナデ、底部回転糸切り	上層	東濃窯(光ヶ丘1~大原2)
〃-58	土師器	口縁部1/3欠	にぶい黄褐	口13.8 底5.3 高4.4	回転ナデ・底部回転糸切り→内面粗いミガキ	上層	内面黒色処理
〃-59	土師器	ほぼ完形	明黄褐	口12.3 底6.4 高3.6	回転ナデ・底部回転糸切り→内面十字暗文	上層	内面黒色処理
〃-60	土師質	口縁部3/4欠	黄橙	口(14.6) 脚7.7 高6.0	回転ナデ	上層	
〃-61	土師質	口縁部5/6欠	橙	口(14.2) 底5.6 高3.8	回転ナデ、底部回転糸切り	上層	
〃-62	土師質	口縁部5/6欠	にぶい黄橙	口(8.6) 底4.3 高2.4	〃	上層	
2流-1	須恵器	口縁部1/2欠	黄褐	口12.8 高3.8 内底8.3	回転ナデ、底部無調整		
〃-2	須恵器	1/5残	灰オリーブ	口(16.6) 脚(12.6) 高3.5	回転ナデ		
〃-3	須恵器	完形	灰オリーブ	口9.4 かえり7.5 高2.6	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ		
〃-4	須恵器	口縁部欠	灰オリーブ		回転ナデ・底部手持ちヘラケズリ→文様		
〃-5	須恵器	口縁部欠	灰オリーブ		回転ナデ・胴部外面カキ目→胴部下位以下外面手持ちヘラケズリ→文様		
〃-6	土師器	坏部欠	橙	脚11.0	脚裾部ヨコナデ、ほか坏部内面を除きヘラケズリ、坏部内面ミガキ		坏部内面黒色処理
〃-7	土師器	胴部中位以上1/2欠	橙	口(10.0) 胴9.7 底4.0 高8.6	口縁部ヨコナデ、胴部以下外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ		
〃-8	石製品	一部欠		長16.1 幅12.6 厚(7.8)	3穴の凹みあり		(772.9g) 軽石
畑上-1	土師器	3/4残	橙	口11.6 高4.6	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→全面ヨコミガキ		
〃-2	土師器	口縁部1/3欠	橙	口13.0 底8.0 高4.8	回転ナデ、底部糸切りの後周縁部手持ちヘラケズリ、内面ヨコミガキ		内面黒色処理
〃-3	土師器	口縁部1/4欠	明褐	口13.2 底5.9 高5.8	回転ナデ・底部回転糸切り→体部下位外面手持ちヘラケズリ・内面ミガキ		内面黒色処理
〃-4	土師器	ほぼ完形	橙	口11.1 体10.6 高4.0	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		橙色土器
〃-5	土師器	1/3残	橙	口(10.0) 高3.3	〃		屈口縁坏
〃-6	土師器	口縁部1/5残	橙	口(14.0)	〃		屈口縁坏
〃-7	土師器	口縁部1/4欠	橙	口11.0 高3.7	口縁部ヨコナデ、ほかは無調整		屈口縁坏
〃-8	土師器	1/2残	橙	口14.2 底10.0 高4.9	口縁部ヨコナデ、体部以下外面ヘラケズリ→内面暗文		鏑川流域からの搬入品
〃-9	土師器	1/3残	橙	口(16.0) 底(8.0) 高(4.9)	〃		鏑川流域からの搬入品
〃-10	須恵器	1/3残	灰	口(13.0) 高(3.8) 内底(7.7)	回転ナデ、底部無調整		
〃-11	須恵器	1/2残	明赤褐	口(14.2) 高4.4 内底8.4	回転ナデ、底部回転ヘラ切り		
〃-12	須恵器	ほぼ完形	灰黄	口13.6 高4.3 内底7.8	〃		
〃-13	須恵器	1/3残	灰オリーブ	口(14.0) 底8.0 高3.6 内底8.6	〃		
〃-14	須恵器	1/2残	灰	口(12.6) 底8.8 高3.5 内底8.2	〃		

挿図番号	種類	残存	色調	大きさ(cm)	特徴	出土位置	備考
〃-15	須恵器	口縁部3/4欠	灰白	口13.2 底7.6 高3.8 内底8.0	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ		
〃 16	須恵器	1/4残	灰	口(12.0) 底(8.0) 高3.1	〃		
〃-17	須恵器	口縁部3/4欠	灰	口(14.0) 底8.4 高4.0 内底9.0	回転ナデ、底部回転糸切り		
〃-18	須恵器	口縁部1/2欠	灰	口(14.0) 底7.0 高4.3 内底8.0	〃		
〃-19	須恵器	口縁部7/8欠	灰	口(14.2) 底7.2 高3.8 内底7.3	〃		
〃-20	須恵器	口縁部一部残	灰		回転ナデ、底部不明		墨書土器
〃-21	須恵器	底部残	灰オリーブ	底7.9 内底8.3	回転ナデ、底部手持ちヘラケズリ		刻書土器
〃-22	須恵器	1/2残	灰	口(11.0) 口(3.5)	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ		
〃-23	須恵器	1/3残	黄灰	口(10.0) 口3.0	〃		
〃-24	須恵器	1/3残	灰	口(10.8)	回転ナデ		
〃-25	須恵器	口縁部1/2欠	灰	口9.1 かえり7.7 高2.7	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ		
〃-26	須恵器	口縁部3/4欠	灰	口(16.0) かえり(13.7) 高1.8	〃		
〃 27	須恵器	完形	オリーブ灰	口14.5 高3.1	〃		
〃-28	須恵器	口縁部2/3残	暗灰黄	口14.3	〃		
〃 29	須恵器	口縁部1/3残	オリーブ灰	口(16.0)	回転ナデ		
〃-30	須恵器	1/3残	オリーブ灰	口(13.6) 脚(9.2) 高3.2	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ		
〃 31	須恵器	胴部下半1/3・口縁部欠	灰	胴13.3	回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ		
〃-32	須恵器	胴部1/8・口縁部欠	灰白	胴14.6	回転ナデ、胴部両側面回転ヘラケズリ		
〃-33	須恵器	1/3残	灰	口(7.6)	回転ナデ、胴部下半以下外面回転ヘラケズリ		
〃 34	須恵器	口縁部1/4残	灰白	口(7.8)	回転ナデ		
〃-35	須恵器	口縁部1/4残	灰オリーブ	口(14.2)	回転ナデ、口縁部外面カキ目		
〃 36	須恵器	口縁部完形	にぶい赤	口10.0	回転ナデ		
〃-37	須恵器	1/2残	暗青灰	口(13.0) 高29.9	回転ナデ、胴部内外面タタキ		
〃 38	須恵器	胴部上半以上1/2残	にぶい黄橙	口23.8	回転ナデ、胴部外面タタキ、胴部内面不明		器表面の剥落顕著
〃-39	須恵器	口縁部1/3残	灰	口(24.0)	回転ナデ		
〃 40	須恵器	口縁部1/4残	灰	口(24.0)	回転ナデ、胴部外面タタキ		
〃-41	須恵器	胴部上半以上1/3残	暗灰黄	口(20.0)	回転ナデ		
〃-42	須恵器	胴部1/2残	褐灰		回転ナデ、胴部下位外面タタキの後底部外面回転ヘラケズリ		
〃 43	須恵器	1/3残	灰	口(10.8) 脚10.2 高13.9	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、胴部下位外面タタキ		
〃-44	須恵器	口縁部1/3残	黒	口(11.0)	回転ナデ		45と同一個体
〃-45	須恵器	胴部下半以下1/3残	黒	脚(13.8)	回転ナデ、胴部下位以下外面回転ヘラケズリ		44と同一個体
〃-46	須恵器	胴部下半以下1/3残	にぶい赤褐	底(16.8)	回転ナデ		
〃-47	土師器	口縁部1/2残	橙	口(14.2)	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→全面入念なミガキ		坏部内面黒色処理 脚部欠損部を平滑に磨耗
〃-48	土師器	脚部1/2残	にぶい黄橙	脚(9.4)	脚裾部ヨコナデ・その他脚部内外面ヘラケズリ→坏部内面及び外面ミガキ		坏部内面黒色処理
〃 49	土師器	口縁部1/4残	橙	口(14.2)	口縁部ヨコナデ、胴部内面ヘラナデ、胴部外面磨滅		金雲母混入 搬入品(地域不明)
〃-50	灰釉陶器	口縁部1/4残	灰白	口(14.0)	回転ナデ		猿投窯(K−14)
〃-51	灰釉陶器	底部完形	暗灰黄	脚5.0	回転ナデ		猿投窯(K 14)
〃 52	円面硯	上半部1/4残	暗緑灰	硯幅(10.0)	回転ナデ		須恵器
〃-53	砥石	片側残		幅(3.2) 厚(1.9)			(35.0g) 凝灰岩
〃 54	石錘	片側残		幅(5.7) 厚(3.5)	縄掛け痕あり		(222.9g) 安山岩
〃-55	砥石?	完形		長8.0 幅3.1 厚1.5	1面のみ研磨痕あり		61.1g 硬砂岩
〃 56	紡錘車?	1/3残		厚1.8			(6.4g) 軽石
〃-57	石製品	片側残		幅7.8 厚4.8	周囲に磨耗痕、表裏に凹み痕あり		(194.9g) 軽石
〃 58	石製品	完形		長15.9 幅9.2 厚6.2	表裏に凹み痕あり、部分的に磨痕あり		538.5g 軽石

第9表 野火附遺跡 古代遺物観察表

挿図番号	種類	残存	色調	大きさ(cm)	特徴	出土位置	備考
1住-1	土師器	ほぼ完形	橙	口12.0 体11.4 高3.8	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ	床直	橙色土器
〃-2	土師器	1/2残	橙	口12.4 体11.7 高(4.0)	〃	カマド内	橙色土器
〃-3	須恵器	完形	灰	口11.2 体12.6 高3.7	回転ナデ、底部外面不定方向手持ちヘラケズリ	+3cm	
〃-4	土師器	ほぼ完形	明赤褐	口14.8 脚11.3 高9.6	外面ヘラケズリ・脚部内面ヘラナデ→口唇部・脚裾部ヨコナデ→脚部内面上半を除きミガキ	+8cm	坏部内面黒色処理
〃-5	土師器	底部完形 胴部下半1/3残	明黄褐	底8.3	外面ヘラケズリ・内面ヘラナデ→外面ヘラミガキ	+8cm	実測可能
〃-6	砥石	一部残		幅(11.4)	2面に研磨痕あり	床直	(542.8g) 硬砂岩
〃-7	敲石	完形		長17.0 幅6.6 厚4.3	周囲に磨耗痕・上下に敲打痕あり	床直	836.6g 硬砂岩?
〃-8	?	完形		長11.4 幅9.8 厚8.6	上下に磨耗痕あり	床直	1365.7g 安山岩
〃-9	砥石	一部残		幅(13.0) 厚(4.3)	一面のみ研磨痕あり	床直	(760.0g) 凝灰岩?

挿図番号	種類	残存	色調	大きさ(cm)	特徴	出土位置	備考
〃-10	石錘	完形		長17.9 幅7.3 厚6.5	磨耗痕あり	床直	1015.1g 安山岩
〃-11	石錘	完形		長17.6 幅8.5 厚4.8	縄掛け痕あり	床直	955.0g 〃
〃-12	石錘	完形		長12.9 幅7.2 厚4.0	縄掛け痕あり	床直	584.3g 〃
〃-13	石錘	完形		長13.4 幅5.8 厚3.7	縄掛け痕あり	床直	348.4g 〃
〃-14	石錘	完形		長9.3 幅6.5 厚3.8	縄掛け痕あり	床直	298.4g 〃
〃-15	石錘	完形		長9.7 幅6.7 厚3.1	縄掛け痕あり	床直	247.7g 〃
〃-16	石錘	完形		長8.9 幅6.3 厚3.4	縄掛け痕あり	床直	234.4g 〃
〃-17	石錘	完形		長10.9 幅6.3 厚3.1	縄掛け痕あり	床直	245.9g 〃
〃-18	石錘	完形		長12.0 幅6.9 厚4.3	縄掛け痕あり	床直	310.0g 多孔質安山岩
〃-19	石錘	完形		長9.5 幅5.9 厚3.8	縄掛け痕あり	床直	267.6g 安山岩
〃-20	石錘	一部欠		長10.1 幅(8.4) 厚2.2	縄掛け痕あり	床直	(268.8g) 〃
〃-21	板状礫	完形		長16.6 幅16.3 厚2.8		床直	1031.4g 〃
〃-22	板状礫	完形		長13.0 幅7.3 厚2.7		床直	499.8g 〃
〃-23	板状礫	完形		長11.6 幅10.4 厚4.8		床直	739.5g 〃
〃-24	石錘	完形		長12.1 幅6.2 厚3.7		床直	328.2g 硬砂岩
〃-25	石錘	完形		長9.8 幅6.0 厚3.1		床直	344.3g 安山岩
〃-26	石錘	完形		長11.5 幅8.4 厚2.5		床直	284.9g 〃
〃-27	石錘	完形		長10.7 幅7.1 厚4.2		床直	457.5g 〃
〃-28	石錘	完形		長17.2 幅8.3 厚4.4		床直	796.6g 〃
〃-29	石錘	完形		長10.3 幅4.8 厚4.4		床直	304.3g 〃
〃-30	石錘	完形		長11.0 幅6.8 厚4.3		床直	410.9g 〃
〃-31	石錘	完形		長9.5 幅4.6 厚4.1		床直	296.7g 〃
〃-32	石錘	完形		長10.6 幅7.9 厚3.3		床直	346.4g 〃
〃-33	石錘	完形		長11.1 幅5.7 厚3.7		床直	302.2g 〃
〃-34	石錘	完形		長9.8 幅5.8 厚5.3		床直	432.6g 〃
〃-35	石錘	完形		長11.2 幅5.9 厚4.2		床直	337.3g 〃
〃-36	石錘	完形		長9.8 幅6.1 厚4.4		床直	343.1g 〃
〃-37	石錘	一部欠		長(7.6) 幅6.4 厚3.8		床直	(237.5g) 〃
〃-38	石錘	完形		長10.1 幅5.5 厚3.2		床直	235.6g 〃
〃-39	石錘	完形		長13.3 幅8.8 厚9.4		床直	844.6g 〃
〃-40	石錘	完形		長12.2 幅5.8 厚3.9		床直	410.7g 〃
〃-41	石錘	完形		長17.9 幅9.2 厚4.9		床直	883.4g 〃
〃-42	石錘	完形		長16.9 幅7.9 厚4.3		床直	637.5g 〃
〃-43	石錘	完形		長17.4 幅10.0 厚4.4		床直	882.7g 〃
〃-44	石錘	完形		長14.3 幅8.2 厚5.2		床直	723.9g 〃
〃-45	石錘	完形		長16.0 幅7.3 厚3.4		床直	423.2g 〃
〃-46	石錘	完形		長13.5 幅9.2 厚4.9		床直	963.7g 〃
〃-47	石錘	完形		長15.6 幅9.5 厚4.8		床直	1017.0g 〃
〃-48	石錘	完形		長11.3 幅5.9 厚4.1		床直	341.7g 〃
〃-49	石錘	完形		長15.4 幅7.8 厚4.3		床直	655.0g 〃
〃-50	石錘	完形		長16.8 幅9.7 厚5.2		床直	967.0g 〃
〃-51	石錘	完形		長14.9 幅8.2 厚6.0		床直	963.2g 〃
〃-52	石錘	完形		長15.3 幅7.1 厚5.5		床直	827.6g 〃
〃-53	石錘	完形		長17.1 幅9.3 厚4.6		床直	972.6g 粗粒安山岩
〃-54	石錘	完形		長15.3 幅10.4 厚5.6		床直	1051.5g 安山岩
〃-55	石錘	完形		長10.2 幅4.1 厚3.9		床直	239.1g 〃
〃-56	石錘	完形		長15.9 幅7.3 厚4.3		床直	636.6g 〃
〃-57	石錘	完形		長15.7 幅5.9 厚4.2		床直	502.4g 〃
〃-58	石錘	完形		長14.8 幅7.2 厚3.4		床直	726.4g 〃
〃-59	石錘	完形		長15.1 幅7.1 厚5.5		床直	676.4g 〃
〃-60	石錘	完形		長14.6 幅7.2 厚6.2		床直	793.1g 〃
〃-61	石錘	完形		長11.7 幅4.6 厚3.4		床直	261.9g 〃
〃-62	石錘	完形		長10.0 幅5.5 厚3.7		床直	207.7g 〃
〃-63	石錘	完形		長9.0 幅4.7 厚3.9		床直	168.4g 〃
〃-64	石錘	完形		長16.1 幅7.3 厚6.2		床直	1233.4g 〃
〃-65	石錘	完形		長11.1 幅6.3 厚4.6		床直	370.5g 〃
〃-66	石錘	完形		長16.5 幅7.0 厚5.1		床直	779.9g 〃
〃-67	石錘	完形		長13.9 幅8.5 厚4.8		床直	748.6g 粗粒安山岩
〃-68	石錘	完形		長16.1 幅8.6 厚3.8		床直	689.9g 安山岩
〃-69	石錘	完形		長13.8 幅5.8 厚4.5		床直	503.6g 〃
〃-70	石錘	完形		長12.2 幅6.5 厚4.8		床直	445.2g 〃

挿図番号	種類	残存	色調	大きさ(cm)	特徴	出土位置	備考
〃-71	石錘	完形		長12.6 幅7.0 厚2.9		床直	386.7g 〃
〃-72	石錘	完形		長13.2 幅6.8 厚4.0		床直	470.3g 〃
〃-73	石錘	完形		長11.0 幅7.3 厚4.2		床直	465.0g 〃
〃-74	石錘	完形		長10.4 幅5.5 厚4.8		床直	364.7g 〃
〃-75	石錘	完形		長11.1 幅5.9 厚5.0		床直	448.2g 〃
〃-76	石錘	完形		長8.7 幅6.8 厚3.2		床直	273.5g 〃
〃-77	石錘	完形		長17.1 幅7.5 厚3.6		床直	568.1g 〃
3住-1	土師器	1/2残	橙	口13.8 高6.1	頸部外面ハケ→全面ヨコミガキ	床直	
〃-2	土師器	ほぼ完形	明赤褐	口10.6 高6.4	口縁部ハケ→口唇部ヨコナデ→口縁部外面ヨコミガキ・その他ヨコミガキ	床直	
〃-3	土師器	脚裾部4/5・坏部欠	明黄褐	脚(11.6)	外面ヘラケズリ→脚裾部ヨコナデ→外面及び脚裾部内面ミガキ	床直	
4住-1	土師器	ほぼ完形	明赤褐	口10.6 高4.8	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→内面ミガキ	床直	内面黒色処理
〃-2	土師器	2/3残	橙	口13.6 高3.8	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ	カマド内	内屈口縁坏
〃-3	須恵器	2/3残	灰	口12.8 高3.9	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ		天井部外面にヘラ記号
〃-4	土師器	脚部完形	明黄褐	脚7.3	外面ヘラケズリ・脚部内面ヘラナデ→脚裾部ヨコナデ、坏部内面ミガキ	床直	坏部内面黒色処理
〃-5	土師器	3/4残	にぶい橙	口(14.4) 高(16.2)	胴部外面以下ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ、口縁部ヨコナデ	床直	底部に煮沸痕あり
〃-6	土師器	胴部下半以下完形	明黄褐	底5.6	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ	埋設土器	
〃-7	石錘	完形		長8.5 幅6.8 厚2.1	縄掛け痕有り		212.2g 硬砂岩
5住-1	土師器	1/4残	橙	口(13.0) 高(4.1)	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→全面ヨコミガキ	カマド内	内面黒色処理
〃-2	土師器	ほぼ完形	橙	口12.6 高4.5	口縁部ヨコナデ・体部外面下半ヘラケズリ→内面ヨコミガキ	+28cm	内面黒色処理
〃-3	土師器	3/4残	橙	口(11.4) 高3.5	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		橙色土器
〃-4	土師器	1/3残	橙	口(10.8)	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		橙色土器
〃-5	須恵器	口縁部1/3欠	灰白	口10.2 高3.7	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ	+20cm	
〃-6	須恵器	1/4残	灰白	口(10.2) 高3.1	回転ナデ、天井部外面手持ちヘラケズリ	カマド内	
〃-7	土師器	ほぼ完形	橙	口10.4 高15.4	口縁部ヨコナデ・体部以下外面ヘラケズリ・体部内面以下ヘラナデ→全面ミガキ	床直	
〃-8	土師器	口縁部1/4残	橙	口(22.0)	口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→胴部外面及び口縁部内面ミガキ	+ 4cm	
〃-9	土師器	口縁部1/3残	にぶい橙	口(23.2)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	床直	
〃-10	土師器	3/4残	黄橙	口(19.4) 底9.9 高30.7	口縁部ヨコナデ・胴部以下外面ヘラケズリ・胴部以下内面ヘラナデ→胴部内面を除きミガキ？	床直	
〃-11	土師器	胴部上半以上1/2残	浅黄橙	口22.6	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	+10cm	
〃-12	土師器	胴部上半以上1/3残	にぶい褐	口(24.8)	〃	+12cm	
〃-13	土師器	胴部上半以上1/4残	明赤褐	口(22.5)	〃	+3cm	
〃-14	土師器	胴部中位以上1/3残	にぶい赤褐	口20.4	〃	カマド内 床直	
〃-15	土師器	胴部中位以上2/3残	にぶい黄橙	口23.2	〃	〃	
〃-16	土師器	胴部中位以上4/5残	にぶい赤褐	口22.3	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ→下位ハケ	〃	胴部外面以下に粘土付着
〃-17	土師器	胴部以上1/4残	灰黄褐	口(19.6)	胴部外面上半ハケ・下半ヘラケズリ→口縁部ヨコナデ、内面ハケ→口縁部ヨコナデ	床直	胴部中位外面以下に粘土付着 長胴丸底甕地域からの搬入品
〃-18	石錘	完形		長11.6 幅5.5 厚4.1	縄掛け痕あり		293.3g 安山岩
〃-19	石錘	一部欠		長(10.2) 幅5.4 厚2.5	磨耗痕あり	床直	(165.8g) 硬砂岩
〃-20	石錘	完形		長12.0 幅4.3 厚2.6		床直	195.8g 石材不明
〃-21	石錘	完形		長13.9 幅5.0 厚2.8		床直	312.4g 硬砂岩
〃-22	石錘	完形		長8.6 幅4.8 厚2.4		床直	158.1g 安山岩
〃-23	石錘	完形		長17.9 幅6.9 厚3.3		+30cm	582.6g 〃
〃-24	石錘	完形		長13.0 幅4.5 厚2.5		+ 7cm	261.8g 硬砂岩
6住-1	土師器	2/3残	にぶい赤褐	口12.6 高4.1	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→全面ヨコミガキ		内面黒色処理
〃-2	土師器	4/5残	橙	口10.2 高3.4	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ	床直	内屈口縁坏
〃-3	土師器	1/3残	橙	口(10.8) 高(3.3)	〃		内屈口縁坏
〃-4	須恵器	ほぼ完形	灰	口10.3 体12.6 高2.0	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ	床直	
〃-5	土師器	胴部上位以上1/4残	黄橙	口(26.6)	口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→胴部外面粗いミガキ		
〃-6	土師器	口縁部1/5残	淡黄	口(26.0)	口縁部ヨコナデ、胴部ハケ→内面ヘラナデ		丸底甕地域からの搬入品
〃-7	土師器	ほぼ完形	橙	口15.2 高19.8	口縁部ヨコナデ、胴部以下外面ヘラケズリ・内面ヘラナデ		
〃-8	土師器	胴部中位以上完形	橙	口20.5	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	埋設土器	

遺物番号	種類	残存	色調	大きさ(cm)	特徴	出土位置	備考
〃-9	土師器	胴部以上3/4残	にぶい橙	口22.4	〃	床直	実測図器形は信頼度低い
〃-10	須恵器	頸部以上完形	灰白	口9.4	回転ナデ	+8cm	
〃-11 〃-	土師器	脚部完形	黄橙	脚13.6	脚部上半内外面ヘラケズリ・脚裾部ヨコナデ→外面及び坏部内面ミガキ	−18cm	坏部内面黒色処理
〃-12	土師器	脚部1/2残	橙	脚(9.6)	脚裾部ヨコナデ→内面上半を除きミガキ		
〃-13	石錘	完形		長15.8 幅9.3 厚3.0	打製石斧刃部破損品を転用	床直	633.8g ガラス質安山岩
〃-14	石錘	完形		長13.6 幅6.8 厚4.9	磨耗痕・縄掛け痕あり	床直	566.2g 安山岩
〃-15	石錘	完形		長12.7 幅6.8 厚3.8	縄掛け痕あり	−13cm	462.6g 〃
〃-16	石錘	完形		長11.3 幅6.7 厚4.2	縄掛け痕あり	+13cm	453.9g 〃
〃-17	石錘	完形		長12.4 幅7.7 厚3.7	縄掛け痕あり	+14cm	565.9g 〃
〃-18	石錘	完形		長13.3 幅8.2 厚3.1	縄掛け痕あり	床直	512.5g 粗粒硬砂岩？
〃-19	石錘	完形		長14.3 幅7.8 厚3.7	縄掛け痕あり	床直	572.6g 安山岩
〃-20	石錘	完形		長14.8 幅5.3 厚4.1	磨耗痕あり？	+13cm	491.8g 〃
〃-21	石錘	完形		長13.1 幅6.1 厚4.8	縄掛け痕あり	床直	467.9g 〃
〃-22	石錘	完形		長16.9 幅6.6 厚2.8		+25cm	471.7g 〃
〃-23	石錘	完形		長9.8 幅3.6 厚3.6		床直	211.9g 硬砂岩
〃-24	石錘	完形		長12.6 幅6.0 厚4.9		−13cm	589.6g 安山岩
〃-25	石錘	完形		長11.3 幅4.5 厚2.7		+ 5cm	228.0g 粘板岩
〃-26	石錘	完形		長13.2 幅7.0 厚4.7		床直	513.7g 安山岩
〃-27	石錘	完形		長13.2 幅5.1 厚3.8		床直	410.7g 凝灰岩か流紋岩
〃-28	石錘	一部欠？		長11.7 幅6.7 厚1.5		+15cm	199.2g ガラス質安山岩
〃-29	石錘	完形		長10.1 幅5.2 厚1.5		+8cm	158.3g 安山岩
〃-30	石錘	完形		長10.8 幅4.1 厚2.8		床直	173.5g 〃
〃-31	石錘	一部欠		長(8.7) 幅6.0 厚4.4		床直	(236.3g) 〃
〃-32	石錘	完形		長11.4 幅7.1 厚3.3		床直	381.3g 安山岩？
〃-33	石錘	完形		長14.4 幅7.4 厚5.0		床直	840.6g 安山岩
〃-34	石錘	完形		長13.3 幅8.2 厚3.3	縄掛け痕あり		545.7g 〃
7住-1	土師器	3/4残	橙	口13.0 体11.4 高(4.7)	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→ 口縁部外面を除きヨコミガキ		
〃 2	土師器	底部完形 胴部1/2残	明赤褐	底8.2	外面ヘラケズリ・内面ヘラナデ→底部を除き粗いミガキ	床直 −30cm	
〃-3	土師器	ほぼ完形	橙	口27.5 底11.2 高31.7	口縁部ヨコナデ・胴部以下外面ヘラミガキ・胴部以下内面ヘラナデ→全面粗いミガキ	床直	
〃-4	土師器	口縁部1/3残 胴部中位以下1/2残	赤褐	口(13.2) 底6.3 高(14.2)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ、底部外面木葉痕	カマド内	自立可能 実測図器高は信頼度低い
〃-5	砥石	一部欠		長(5.5) 幅(4.4) 厚(4.0)	全面に磨り面あり		(82.1g) 凝灰岩 欠損品を再利用
〃-6	打製石斧	頭部欠		長(21.7) 幅9.8 厚2.7			(651.0) 硬砂岩 石錘に転用？
〃 7	打製石斧	完形		長15.9 幅11.0 厚1.2		覆土	262.5g ガラス質安山岩 石錘に転用？
〃-8	石錘	完形		長14.8 幅7.6 厚5.0	縄掛け痕あり	覆土	622.7g 安山岩
〃-9	石錘	完形		長13.5 幅7.9 厚2.7	縄掛け痕あり	床直	349.3g 〃
〃-10	石錘	完形		長12.0 幅8.4 厚3.2	縄掛け痕あり	床直	407.3g 〃
〃-11	石錘	完形		長16.4 幅7.2 厚4.0		床直	524.3g 〃
〃-12	石錘	一部欠		長9.7 幅6.6 厚2.9		−35cm	(246.5g) 〃
〃-13	石錘	完形		長14.1 幅6.9 厚4.7		床直	684.7g 〃
〃-14	石錘	完形		長13.5 幅8.1 厚4.8		床直	623.6g 〃
〃-15	石錘	完形		長14.4 幅6.6 厚3.7		床直	380.0g 〃
〃-16	石錘	完形		長9.5 幅6.7 厚3.9		床直	392.0g 〃
〃-17	石錘	一部欠		長(13.5) 幅8.2 厚5.0		床直	(630.1g) 〃
〃-18	石錘	一部欠		長(9.8) 幅6.9 厚4.4		床直	(396.5g) 〃
〃-19	石錘	完形		長10.3 幅8.0 厚4.0		床直	351.8g 〃
〃-20	石錘	完形		長11.0 幅6.3 厚4.5		床直	407.6g 〃
〃-21	石錘	完形		長14.1 幅7.7 厚5.2		覆土	482.3g 多孔質安山岩
〃-22	石錘	完形		長11.7 幅8.2 厚5.8		覆土	532.4g 安山岩
〃-23	石錘	完形		長9.9 幅6.2 厚4.9		覆土	315.4g 〃
〃-24	石錘	完形		長10.8 幅8.1 厚3.5		覆土	453.3g 〃
〃-25	石錘	完形		長13.9 幅8.2 厚4.5		覆土	710.6g 〃
〃-26	石錘	完形		長11.8 幅7.6 厚5.1		覆土	574.0g 〃
〃 27	石錘	完形		長14.0 幅7.3 厚3.9		覆土	588.0g 〃
〃-28	石錘	完形		長13.5 幅6.5 厚4.1		覆土	560.7g 粗粒安山岩
〃 29	石錘	完形		長11.6 幅5.9 厚4.9		覆土	525.6g 安山岩
〃-30	石錘	完形		長13.3 幅5.6 厚4.7		覆土	553.4g 〃

挿図番号	種類	残存	色調	大きさ(cm)	特徴	出土位置	備考
〃-31	石錘	完形		長10.3 幅6.8 厚5.4		覆土	386.7g 〃
〃-32	石錘	完形		長11.1 幅5.2 厚4.0		覆土	414.7g 粗粒安山岩
〃-33	石錘	完形		長10.8 幅5.9 厚5.0		覆土	396.6g 安山岩
〃-34	石錘	完形		長14.6 幅6.8 厚4.3		覆土	557.9g 〃
〃-35	石錘	完形		長14.5 幅7.2 厚5.3		覆土	652.5g 〃
〃-36	石鎚	完形		長11.1 幅6.6 厚4.8		覆土	463.2g 〃
〃-37	石錘	完形		長10.7 幅5.4 厚4.1		覆土	445.9g 〃
〃-38	石錘	完形		長10.5 幅6.4 厚3.2		覆土	327.8g 〃
〃-39	石錘	完形		長10.4 幅6.0 厚3.5		覆土	328.9g 〃
〃-40	石錘	完形		長11.8 幅7.2 厚4.8		覆土	519.5g 〃
〃-41	石錘	完形		長9.9 幅6.3 厚4.3		覆土	325.6g 〃
〃-42	石錘	完形		長10.4 幅7.2 厚5.9		覆土	514.2g 〃
〃-43	石錘	完形		長12.0 幅7.5 厚6.1		覆土	829.8g 〃
〃-44	石錘	完形		長12.3 幅8.2 厚4.0		覆土	476.3g 〃
〃-45	石錘	完形		長13.6 幅5.8 厚5.1		覆土	474.1g 〃
〃-46	石錘	完形		長11.3 幅6.3 厚5.2		覆土	463.8g 〃
〃-47	石錘	完形		長9.4 幅5.3 厚4.8		覆土	332.4g 〃
〃-48	石錘	完形		長14.1 幅8.2 厚6.2		覆土	606.7g 多孔質安山岩
〃-49	石錘	完形		長13.9 幅6.8 厚6.0		覆土	724.9g 安山岩
〃-50	石錘	完形		長11.9 幅7.6 厚5.3		覆土	471.2g 〃
〃-51	石錘	完形		長8.8 幅5.4 厚4.8		覆土	282.1g 〃
〃-52	石錘	完形		長15.2 幅8.5 厚4.9			702.1g 〃
9住-1	土師器	底部2/3残	褐灰	底6.8	底部外面木葉痕、その他ヘラナデ	+23cm	自立可能
10住-1	土師器	ほぼ完形	赤	口9.3 脚12.6 高10.2	器受部内外面ヨコミガキ、脚部内面ヘラナデ・脚裾部ヨコナデ→脚部外面タテミガキ→脚裾部外面ヨコミガキ	覆土	脚部内面を除き赤彩
〃-2	土師器	坏部1/2残	淡黄	口14.5	全面入念なミガキ	覆土	
〃-3	土師器	脚中空部完形	橙		中空部ヘラケズリ→裾部外面ハケ→裾部ヨコナデ→外面ミガキ	覆土	
〃-4	土師器	脚中空部完形 脚裾部1/3残	橙	脚(11.5)	脚裾部ヨコナデ→外面ミガキ	覆土	
〃-5	土師器	口縁部1/4残	灰黄褐	口(13.0)	全面ミガキ	覆土	
〃-6	土師器	2/3残	淡黄	口12.2 体9.7 高4.0	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→全面ヨコミガキ	覆土	内面黒色処理
〃-7	土師器	3/4残	橙	口12.0 体10.6 高3.7	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ	覆土	橙色土器
〃-8	須恵器	完形	灰白	口12.2 高3.7	回転ナデ→天井部外面回転ヘラケズリ	覆土	
〃-9	須恵器	口縁部1/2残	黒	口(8.2)	回転ナデ→胴部手持ちヘラケズリ	覆土	
〃-10	土師器	胴部中位以上1/3残	にぶい黄橙	口(16.4)	口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→胴部内面を除きヨコミガキ	覆土	
〃-11	土師器	口縁部1/3欠	赤褐	口12.2 高8.6	口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ→底部内面を除きヨコミガキ	覆土	
〃-12	土師器	胴部中位以上1/2残	橙	口(11.0)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面不明	覆土	
〃-13	土師器	ほぼ完形	赤褐	口19.4 底6.4 高31.8	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ、底部外面木葉痕	覆土	自立可能
〃-14	鉄斧	刃部一部欠		長9.7		覆土	
11住-1	土師器	胴部上位以上1/3残	にぶい黄橙	口(17.6)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	床直	
〃-2	土師器	底部完形 胴部中位以下1/3残	赤褐	底9.0	外面ヘラケズリ・内面ヘラナデ→底部外面を除きヨコミガキ	床直	
12住-1	土師器	1/2残	橙	口11.3 体10.6 高4.1	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		橙色土器
〃-2	土師器	胴部下半以下完形 胴部上半1/3残	にぶい橙	底6.5	外面ヘラケズリ・内面ヘラナデ→胴部外面雑なミガキ		
〃-3	土師器	口縁部1/2欠	赤褐	口(14.7) 底6.5 高11.0	口縁部ヨコナデ、胴部以下外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	床直	底抜き痕跡
〃-4	土師器	ほぼ完形	橙	口13.2 高14.7	〃	床直	
〃-5	土師器	胴部上半完形	にぶい褐		〃	床直	
13住-1	土師器	完形	灰黄褐	口12.0 体11.6 高6.4	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→内面入念なミガキ	床直	黒色処理(外面は偶然によるものか)
〃-2	土師器	口縁部1/3欠	橙	口(12.0) 体10.8 高3.8	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ	床直	橙色土器
〃-3	土師器	口縁部1/4残	橙	口(30.4)	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→内面入念なミガキ・体部外面雑なミガキ		
〃-4	土師器	口縁部1/2欠	灰赤	口10.2 高8.0	口縁部ヨコナデ・体部外面以下ヘラケズリ・体部内面ヘラナデ→底部内面を除きヨコミガキ	床直	内面黒色処理
〃-5	土師器	1/2残	橙	口9.7 底5.4 高3.7	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラナデ、底部外面木葉痕		
〃-6	土師器	口縁部1/4残	橙	口(20.8)	口縁部外面ハケ→ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ハケ	床直	

挿図番号	種類	残存	色調	大きさ(cm)	特徴	出土位置	備考
〃-7	土師器	口縁部完形	橙	口17.6	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヨコナデ	床直	外面に粘土付着
〃-8	土師器	脚部上半完形	浅黄橙		脚裾部ヨコナデ・中空部外面ハケ・中空部内面ヘラケズリ→外面ミガキ	床直	しぼり痕有り 何らかに転用
〃-9	土師器	脚部上半完形	浅黄橙		〃	床直	〃
〃-10	鉄製品	一部残					刀子でないことは確実
〃-11	石鏃	完形		長13.0 幅7.3 厚3.5	縄掛け痕有り	床直	444.3g 安山岩
15住-1	土師器	完形	橙	口11.5 高3.8	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		内屈口縁坏
〃-2	土師器	胴部ほぼ完形	橙		口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→外面ミガキ・内面一部ミガキ	床直	
〃-3	須恵器	口縁部完形	オリーブ灰	口18.4	回転ナデ、胴部外面タタキ、胴部内面ヘラナデ	床直	
16住-1	土師器	ほぼ完形	橙	口12.7 体12.3 高4.8	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		煤けた黒色処理
〃-2	土師器	3/4残	明褐	口13.0 高3.8	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→全面ミガキ		内面黒色処理
〃-3	土師器	一部欠	橙	口11.0 体10.5 高3.3	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		橙色土器
〃-4	土師器	口縁部1/5残	明赤褐	口(24.0)	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ・体部内面ヘラナデ→体部外面雑なミガキ		内面黒色処理
〃-5	土師器	口縁部3/4欠	赤	口(6.2) 高8.3	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ・体部内面ヘラナデ→全面ミガキ	北東隅柱穴内	
〃-6	土師器	口縁部1/4残	にぶい黄褐	口(24.0)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ		
〃-7	土師器	胴部中位以上1/2残	橙	口(13.4)	口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→胴部外面ミガキ	－4cm	煮炊き痕顕著
〃-8	土師器	口縁部完形 底部1/2残	赤褐	口14.6 底6.4	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ、底部外面ミガキ		自立可能 実測図器高は信頼できず

第10表　前田遺跡　古代遺物観察表

挿図番号	種類	残存	色調	大きさ(cm)	特徴	出土位置	備考
1住-1	土師器	底部中央欠	橙	口13.5 高5.0	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ	カマド内	二次焼成痕あり 甑に転用か？ 内屈口縁坏
〃-2	土師器	1/2残	橙	口12.6 高(3.8)	〃	カマド内	内屈口縁坏
〃-3	土師器	胴部上中以上10/9残	明赤褐	口15.0	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	頸部外面に粘土付着
〃-4	土師器	口縁部完形 胴部1/2残	にぶい橙	口21.7	〃	カマド内	
2住-1	須恵器	口縁部1/2欠	灰	口13.6 脚8.6 高4.0	回転ナデ、底部回転糸切り	＋3cm	
〃-2	土師器	胴部中位以上2/3残	明赤褐	口20.0 胴(22.4)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	煙道部	
〃-3	土師器	ほぼ完形	赤褐	口22.0 胴23.2 底4.0 高28.0	口縁部ヨコナデ、胴部外面以下ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	破損後の二次焼成痕あり
4住-1	須恵器	1/3残	にぶい黄橙	口(14.6) 高3.3 内底(9.4)	回転ナデ、底部手持ちヘラケズリ	カマド内	
〃-2	須恵器	口縁部1/4欠	灰	口13.7 高3.6 内底8.1	〃	＋3cm	
〃-3	須恵器	1/3残	灰オリーブ	口(32.0)	回転ナデ、胴部外面叩き	床直	
〃-4	土師器	完形	橙	口15.2 胴17.2 高15.0	口縁部ヨコナデ、胴部以下外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	床直	
〃-5	土師器	底部欠 胴部中位以上一部欠	橙	口22.2 胴21.3	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	床直 カマド内	貯蔵穴に転用 胴下半部はカマド内
5住-1	土師器	1/3残	褐	口(14.8) 底7.6 高4.6	回転ナデ、底部外面手持ちヘラケズリ、内面ミガキ	貯蔵穴内	内面黒色処理
〃-2	須恵器	1/2残	灰	口13.4 底7.6 高4.0 内底6.5	回転ナデ、底部回転糸切り	覆土	
〃-3	須恵器	完形	灰	口13.2 底6.4 高4.0 内底6.1	〃	床直	
〃-4	須恵器	1/3残	灰	口(14.0) 底(6.6) 高3.8 内底(6.6)	〃	北内隅柱穴内	軟質須恵器
〃-5	須恵器	口縁部1/4欠	灰黄	口13.8 底6.0 高4.0 内底5.7	〃	貯蔵穴内	軟質須恵器
〃-6	須恵器	1/3残	灰白	口(10.2) 脚(7.0) 高6.0	回転ナデ	貯蔵穴内	
〃-7	須恵器	口縁部完形	黒	口13.4	回転ナデ	覆土	
〃-8	土師器	胴部上位以上2/3残	にぶい黄橙	口20.2 胴22.1	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド左袖内	
〃-9	土師器	底部完形	赤褐	底4.8	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ	カマド内	
6住-1	土師器	口縁部2/3欠	黄橙	口(15.3) 底7.0 高4.6	回転ナデ、底部回転糸切り後体部下位及び底部周縁手持ちヘラケズリ、内面ミガキ	左側貯蔵穴内	内面黒色処理
〃-2	土師器	完形	橙	口14.5 底6.6 高4.0	〃	〃	内面黒色処理
〃-3	須恵器	口縁部2/3欠	灰白	口(12.8) 底7.2 高3.6 内底7.1	回転ナデ、底部回転ヘラ切り	覆土	
〃-4	須恵器	1/2残	灰白	口13.4 底6.7 高4.0 内底6.6	回転ナデ、底部回転糸切り	床直	軟質須恵器
〃-5	須恵器	1/4残	灰	口(16.0)	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ	覆土	
〃-6	須恵器	1/4残	にぶい黄橙	口(16.2)	〃	カマド内	
〃-7	土師器	底部完形 胴部1/5残	浅黄	底6.3	回転ナデ、胴部下位外面以下手持ちヘラケズリ	床直	
〃-8	土師器	口縁部4/5残 胴部1/6残	赤褐	口20.4 胴(20.8)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	
〃-9	土師器	胴部中位以上1/4残	明褐	口(17.8) 胴(20.7)	〃	カマド内 床直	

第11表　宮ノ反A遺跡群　古代遺物観察表

挿図番号	種別	残存	色調	大きさ(cm)	特徴	出土位置	備考
遺構外-1	石鏃	先端部・脚部欠		幅1.8 厚0.2			0.54g 黒曜石
〃-2	石鏃	先端部・脚部欠		長2.6 厚0.4			0.93g 黒曜石
〃-3	石鏃	先端部欠		幅1.6 厚0.4			1.44g ガラス質安山岩
〃-4	打製石斧	両端欠		幅9.1			312.75g 千枚岩質凝灰岩
〃-5	打製石斧	基部欠		幅3.5 厚1.8			51.16g 千枚岩質凝灰岩
〃-6	打製石斧	基部欠		幅4.7 厚1.3			65.16g 粘板岩？
1住 1	土師器	1/3 残	橙	口(11.2) 体(9.7) 高3.5	口縁部ヨコナデ、体部外面へラケズリ		橙色土器
〃-2	砥石	一部残			上下2面に磨り面あり		860.9g 安山岩
2住 1	土師器	1/2 残	橙	口(11.8) 体(11.0) 高3.1	口縁部ヨコナデ、体部外面へラケズリ		橙色土器
〃-2	土師器	胴部以下1/5欠	橙	口21.8 高(30.7)	口縁部ヨコナデ、胴部外面へラケズリの後粗いミガキ、胴部内面へラナデ	覆土最上層	煮沸痕あり
〃-3	土師器	口縁部1/3残	浅黄橙	口(13.4)	全面ハケ→口縁部ヨコナデ		丸底甕城からの搬入品
〃-4	土師器	口縁部2/3 残	明赤褐	口18.0	口縁部ヨコナデ、胴部外面へラケズリ、胴部内面へラナデ	+18cm	
〃-5	土師器	胴部上位以上完形	橙	口18.3	〃	貯蔵穴内	
〃-6	土師器	胴部上位以上完形	橙	口21.0	〃	床直 火床部内	胴部外面に粘土付着 カマドに転用？
〃-7	土師器	底部欠	にぶい褐	口23.1	〃	左袖密着 +30cm	全面に粘土付着 カマド芯材に転用
〃-8	土師器	胴部上位以上完形	橙	口20.4	〃	貯蔵穴内	外面全体に粘土付着
3住-1	土師器	1/3 残	橙	口(11.8) 体(11.0) 高3.4	口縁部ヨコナデ、体部外面へラケズリ		橙色土器
〃-2	須恵器	1/3 残	灰	口(10.0) 体(12.2)	回転ナデ、底部外面回転へラケズリ		
〃-3	石製品	完形		長10.9 幅5.9 厚3.6	磨り面あり		367.6g 安山岩
〃-4	石製品	完形		長9.8 幅5.3 厚3.6	磨り面あり		301.8g 〃
〃-5	石製品	完形		長7.0 幅8.7 厚3.7	磨り面あり		348.8g 〃
4住-1	土師器	完形	明赤褐	口13.6 高7.7	口縁部ヨコナデ・体部外面へラケズリ・体部内面へラナデ→ミガキ	+28cm	
〃-2	土師器	1/4残	明赤褐	口(16.0) 底8.0 高17.6	口縁部ヨコナデ・胴部内外面ミガキ・底部外面へラケズリ→胴部下半外面ミガキ	−15cm	金雲母・石英混入 関東地方からの搬入品？
〃-3	土師器	口縁部1/5欠	浅黄	口14.4 脚11.6 高8.6	口縁部及び脚裾部ヨコナデ・坏脚接合部外面及び脚部上半内面へラケズリ→坏部内面ミガキ→暗文		全面煤けた黒色処理 有段口縁坏
〃-4	土師器	脚部欠	橙	口14.2	口縁部ヨコナデ・その他口縁部内面を除きへラケズリ→脚部内面を除きミガキ	+45cm	
〃-5	石製品	完形		長8.6 幅7.2 厚7.1	磨り面あり		155.0g 軽石
〃-6	石製品	完形		長10.9 幅6.3 厚3.1	磨り面あり		272.8g 砂岩
6住-1	土師器	底部1/4残	明褐	底(8.0)	胴部外面へラケズリ・内面へラナデ→外面ミガキ		直立可能
〃-2	土師器	口縁部1/4残	橙	口(16.0)	口縁部ヨコナデ・胴部外面へラケズリ→全面ミガキ		
〃-3	土師器	底部完形	明赤褐	底7.1	外面へラケズリ、内面へラナデ	床直	外面全体に粘土付着 直立可能
〃-4	土師器	胴部上半以上1/4残	橙	口(22.4)	口縁部ヨコナデ、胴部外面へラケズリ、胴部内面へラナデ		胴部外面に粘土付着
〃-5	土師器	胴部上半以上1/4残	にぶい橙	口(23.0)	〃	床直	
〃-6	石製品	完形		長12.4 幅6.8 厚5.4	磨り面あり	床直	306.5g 多孔質安山岩
7住-1	土師器	口縁部1/4 欠	黄褐	口13.0 高4.8	口縁部ヨコナデ・体部外面へラケズリ→内面ミガキ		内面黒色処理
〃-2	土師器	2/3残	橙	口12.2 体11.4 高3.1	口縁部ヨコナデ、体部外面へラケズリ		内面煤けた黒色処理？ 橙色土器
〃-3	土師器	口縁部1/8残	赤	口(10.4)	ヨコナデ→暗文		飛鳥坏C
〃-4	土師器	脚部完形	橙	脚6.6	裾部ヨコナデ、その他外面へラケズリ、内面ミガキ		内面黒色処理
〃-5	土師器	胴部中位以上1/3残	明褐	口(8.2)	口縁部ヨコナデ、胴部外面へラケズリ、胴部内面へラナデ		
〃-6	土師器	底部完形	橙		外面へラケズリ、内面へラナデ		
〃-7	土師器	胴部中位以下1/2残	赤	底6.3	全面へラナデ		搬入品だが地域不明
〃-8	砥石	一端欠		長(14.7) 幅9.5 厚7.5	2面に磨り面あり	床直	2169.1g 安山岩
〃-9	砥石	完形		長4.1 幅3.1 厚1.4	全面に磨り面あり		23.5g 凝灰岩
8住 1	土師器	口縁部1/4残	にぶい黄橙	口(27.8)	口縁部ヨコナデ・胴部外面へラケズリ・胴部内面へラナデ→外面ミガキ	+36cm	
〃-2	土師器	口縁部1/4残	浅黄	口(16.8)	口縁部ヨコナデ、胴部外面へラケズリ、胴部内外面へラナデ	+40cm	
〃-1	須恵器	口縁部3/4欠	灰	口(12.4) 高4.4 内底7.8	回転ナデ、底部外面回転へラケズリ		
〃-2	砥石？	完形		長15.4 幅5.6 厚3.6	磨り面あり	床直	396.0g 砂岩
〃-3	砥石？	完形		長11.6 幅6.2 厚2.3	磨り面あり	床直	290.3g 〃
10住-1	土師器	底部3/4残	橙	底5.6	外面へラケズリ、内面へラナデ	火床部内	
11住-1	須恵器	口縁部1/3欠	灰	口12.2 体14.3 高4.0	回転ナデ、底部外面回転へラケズリ		

遺物番号	種別	残存	色調	大きさ(cm)	特徴	出土位置	備考
12住-1	須恵器	口縁部1/3欠	灰	口13.8 底6.5 高3.9 内底7.0	回転ナデ、底部回転糸切り	カマド内	
〃-2	須恵器	口縁部1/8欠	灰オリーブ	口13.6 底7.2 高3.9 内底7.5	〃		
〃-3	須恵器	完形	オリーブ灰	口13.4 底7.0 高3.6 内底7.5	〃	床直	
〃-4	須恵器	口縁部1/2欠	灰	口13.2 底7.3 高3.8 内底6.8	〃	床直	
〃-5	須恵器	口縁部1/2欠	灰	口12.2 底6.1 高3.6 内底6.9	〃	カマド内	
〃-6	須恵器	口縁部・底部一部欠	灰	口14.3 台9.1 高4.0	回転ナデ、底部回転糸切りの後周辺部回転ヘラケズリ	−8cm	
〃-7	須恵器	口縁部2/3欠	灰	口(13.8) 台10.0 高4.0	〃	カマド内	
〃-8	須恵器	胴部上位以上1/5残	黄灰	口(31.0)	回転ナデ、口縁部外面ハケ、胴部内外面タタキ	カマド内 床直	
〃-9	土師器	口縁部1/3残	橙	口(21.0) 胴(21.0 以上)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ		
13住-1	土師器	1/2残	橙	口(14.0) 高3.9	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→外面ミガキ・内面暗文	+16cm	搬入品だが地域不明
〃-2	金環	完形		外横2.2 外縦2.2 装幅0.2			
〃-3	石製品	一部欠		長(7.5) 幅(6.8) 厚(3.8)	上下2面に磨り面あり		(295.7g) 安山岩
〃-4	石製品	完形		長12.3 幅7.5 厚2.5			301.3g 〃
〃-5	石製品	完形		長12.0 幅4.6 厚2.8	磨り面あり		217.0g 〃
14住-1	須恵器	1/3残	オリーブ灰	口(12.6) 高(4.3)	回転ナデ、底部手持ちヘラケズリ		
-2	鉄鏃	茎部欠		鏃身部長2.4 刃部幅3.1		+20cm	レントゲン撮影
16住-1	須恵器	天井部ほぼ完形	灰		回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ		
17住-1	土師器	口縁部1/2欠	橙	口16.2 底8.7 高5.2	回転ナデ、底部手持ちヘラケズリ、内面ヨコミガキ	+5cm	内面黒色処理
〃-2	須恵器	高台部完形	灰	脚8.2	回転ナデ、底部回転糸切り後周縁部回転ヘラケズリ	床直	
〃-3	土師器	胴部上以上ほぼ完形	褐	口32.4 胴16.0	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ		
〃-4	土師器	胴部上位以上1/3残	橙	口22.3 胴21.0	〃	煙道内	
〃-5	土師器	ほぼ完形	橙	口21.2 胴20.9 底4.1 高27.1	〃	+12cm	
18住-1	土師器	口縁部1/6欠	橙	口10.0 高3.5	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		内屈口縁坏
〃-2	土師器	口縁部1/3欠	橙	口13.2 高4.3	〃	床直	内屈口縁坏 煮沸痕あり
〃-3	土師器	完形	明褐	口15.0 高4.6	〃	カマド内	内屈口縁坏
〃-4	土師器	底部完形	にぶい黄橙	底10.2	外面ヘラケズリの後ミガキ、内面不明	+5cm	一線で欠損 この状態で再利用か?
〃-5	土師器	口縁部1/3残	にぶい赤褐	口(16.8)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	
〃-6	土師器	底部完形	橙	底8.3	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ		在地品だが器種不明
〃-7	土師器	胴部以上1/2残	にぶい橙	口(26.2)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	
〃-8	土師器	胴部上位以上1/4残	にぶい黄橙	口(24.2)	〃	床直	外面全体に粘土付着
〃-9	砥石	一部欠		長10.4 幅7.1 厚5.3	磨り面あり	床直	(522.3g) 凝灰岩
〃-10	石製品	完形		長15.7 幅9.0 厚7.5	磨り面あり	+12cm	1057.0g 安山岩
〃-11	石製品	完形		長14.4 幅8.4 厚7.4	磨り面あり	+8cm	752.9g 〃
〃-12	石製品	完形		長12.9 幅7.3 厚6.0	磨り面あり	+12cm	507.5g 〃
19住-1	土師器	胴部中位以上2/3残	暗赤褐	口11.7	口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→全面ミガキ	+8cm	東海系鉢類
〃-2	土師器	口縁部2/5残	にぶい黄褐	口(17.1)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	内面に粘土痕 カマド構築材に転用
〃-3	土師器	底部1/3残	黒褐	底(7.0)	胴部外面ヘラケズリ、底部外面不明、内面ヘラナデ		直立可能
〃-4	土師器	胴部中位以上完形	にぶい赤褐	口17.2	〃	床直	外面全体に粘土付着 貯蔵穴に転用?
20住-1	土師器	胴部上半以上1/2残 底部完形	橙	口(19.5) 底6.8	口縁部ヨコナデの後内面ハケ、胴部外面ハケの後下位以下ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	床直 火床部内	中信地方からの搬入品?
〃-2	石製品	完形		長9.4 幅6.5 厚5.5	磨り面あり		418.8g 安山岩
21住-1	土師器	1/2残	橙	口14.0 高4.1	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		内屈口縁坏
〃-2	土師器	胴部上位以上1/4残	にぶい黄橙	口(12.2)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケ後ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ		丸底甕域からの搬入品
〃-3	土師器	胴部上位以上1/3残	灰白	口(14.8)	口縁部内面ハケ後口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケ、胴部内面ヘラナデ		丸底甕域からの搬入品
〃-4	土師器	胴部上位以上1/4残	明褐	口(22.0)	口縁部ヨコナデ、胴部ハケ		丸底甕域からの搬入品
〃-5	土師器	底部2/3残	橙		外面ハケ、内面ヘラナデ		丸底甕域からの搬入品
23住-1	土師器	ほぼ完形	黒褐	口13.8 体12.6 高5.1	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→ミガキ	床直	全面(煤けた)黒色処理
24住-1	須恵器	口縁部1/3欠	灰	口13.4 底9.5 高3.8 内底8.8	回転ナデ、底部手持ちヘラケズリ	+3cm	
〃-2	須恵器	ほぼ完形	灰	口13.4 底9.7 高3.4 内底9.6	〃	床直	
〃-3	須恵器	胴部上半完形	灰白		回転ナデ	周溝内	
〃-4	土師器	胴部以上1/2残	にぶい赤褐	口23.2 胴(20.2)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	

挿図番号	種類	残存	色調	大きさ(cm)	特徴	出土位置	備考
〃-5	土師器	口縁部1/3残	橙	口(22.2)	〃	カマド内	
〃-3	土師器	口縁部1/2残	橙	口15.7 胴(16.4)	〃	カマド内	
26住 1	石製品	完形		長13.4 幅7.6 厚5.3	磨り面・敲打痕あり		846.0g 安山岩
28住-1	土師器	口縁部1/4 残	橙	口(19.0)	回転ナデ→内面ヨコミガキ		内面黒色処理
〃 2	土師器	口縁部1/4 欠	橙	口14.4 高4.2	〃	床直．	内面黒色処理
〃-3	土師器	1/3残	橙	口(13.6) 底(9.4) 高4.0	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→暗文		鶴川流域からの搬入品
〃 4	須恵器	口縁部7/8欠	灰	口(14.0) 高4.2 内底9.2	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ		
〃-5	須恵器	口縁部1/10欠	灰白	口14.0 底9.6 高4.1 内底9.6	〃	床直	
〃-6	須恵器	1/2残	灰	口13.0 高3.2 内底9.3	回転ナデ、底部回転糸切りの後周縁部回転ヘラケズリ	+12cm	
〃 7	須恵器	2/3残	灰	口14.8 台11.9 高3.5	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	カマド袖方上段	
31住-1	土師器	2/3残	褐	口13.4 高6.2	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→ミガキ	+14cm	内面黒色処理
〃-2	土師器	完形	にぶい黄橙	口12.4 高4.8	〃	カマド内	全面黒色処理？
〃-3	土師器	底部完形	赤褐	底6.8	外面ヘラケズリ(後ミガキ？)、内面ヘラナデ	カマド内	直立可能 壺形土器
〃-4	土師器	胴部以上1/3欠	にぶい赤褐	口21.7 底7.8 高31.2	口縁部ヨコナデ・胴部以下外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→胴部外面ミガキ	床直	破損後の二次焼成痕あり
〃 5	砥石	完形		長4.7 幅3.3 厚2.1	全面に磨り面あり		51.0g 凝灰岩
〃-6	カマド構築材	一部欠		長18.3 幅15.2 厚8.8		袖先端	(980.0g)軽石
32住 1	土師器	胴部中位以上2/3残	赤褐	口19.7 胴19.5	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	+14cm	
〃 2	土師器	底部完形	明赤褐	底6.0	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ		
33住-1	土師器	口縁部1/3欠	黒褐	口12.5 高5.7	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→ミガキ	床直	全面黒色処理
〃 2	土師器	口縁部1/3欠	橙	口13.5 体12.1 高5.2	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→内面ミガキ	床直	内面黒色処理
〃-3	土師器	2/3残	橙	口13.1 体11.3 高4.4	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		橙色土器
〃-4	土師器	坏部1/2残	橙	口13.8	口縁部ヨコナデ・その他外面及び脚部内面ヘラケズリ→坏部内面ミガキ		
〃-5	土師器	坏口縁部欠 脚裾部1/3 欠	明赤褐	脚11.0	口縁部及び脚裾部ヨコナデ・その他外面及び脚部内面ヘラケズリ→坏部内面ミガキ	+13cm	坏部内面黒色処理
〃 6	土師器	ほぼ完形	橙	口17.6 底7.0 高13.6	口縁部ヨコナデ・体部以下外面ヘラケズリ・体部内面ヘラナデ→内面(外面もか？)ミガキ	+8cm	
〃-7	土師器	胴部中位以上完形	にぶい赤褐	口16.3	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内 + 4cm	胴部中位外面に粘土付着
〃-8	土師器	胴部中位以上完形	にぶい黄褐	口18.8	口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→胴部外面及び口縁部内面ミガキ	+12cm	
〃-9	鉄製品	一端欠		長8.4			レントゲン撮影 鎌・鏃先か？
〃-10	石製品	完形		長11.2 幅6.6 厚5.8	磨り面あり		626.2g 安山岩
〃-11	石製品	一部欠		長9.9 幅5.8	磨り面あり		(442.8g) 粘板岩
34住-1	須恵器	完形	灰	口10.3 かえり8.6 高3.1	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ	床直	
〃-2	土師器	胴部上位以上1/2残	にぶい黄橙	口(23.2)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	床直	
35住-1	土師器	口縁部1/3 欠	にぶい黄	口13.0 高4.2	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→ミガキ	床直	内面黒色処理 見込み明瞭
〃-2	土師器	口縁部1/3残	橙	口(12.0) 体(11.1)	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		橙色土器
〃-3	土師器	口縁部1/3欠 脚裾部2/3 欠	黄橙	口13.0 脚(9.8) 高10.5	口縁部及び脚裾部ヨコナデ・その他外面及び脚部内面ヘラケズリ→脚部内面を除きミガキ	床直	坏部内面黒色処理
〃-4	土師器	胴部上位以上1/4残	にぶい褐	口(16.5)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	+8cm	
〃-5	土師器	胴部以上2/3欠	橙	口(18.3) 底5.4 高29.0	口縁部ヨコナデ、胴部以下外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	
36住-1	土師器	胴部中位以上1/4残	橙	口(23.4) 胴(20.8)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ		
〃 2	土師器	底部完形	橙	底7.7	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ		
〃-3	紡錘車	完形？		長2.5 幅2.5 厚0.7			6.6g 滑石
38住 1	土師器	1/3残	明赤褐	口(12.0) 底(5.6) 高3.9	回転ナデ、底部静止糸切り、口縁部ヨコナデ	カマド内	模倣な土器
〃-2	須恵器	1/3残	橙灰	口(14.4) 高4.6 内底8.1	回転ナデ、底部手持ちヘラケズリ		
〃-3	須恵器	2/5残	灰褐	口(13.0) 底(9.2) 高3.7 内底(8.2)	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ		
〃-4	須恵器	口縁部1/2 欠	灰	口13.6 底10.0 高3.2 内底10.0	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	床直	
〃 5	土師器	胴部中位以上1/2残	明赤褐	口21.2 胴(21.0)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ		胴部中位外面に粘土付着
〃-6	土師器	胴部中位以上1/2残	橙	口23.7 胴(21.7)	〃		胴部中位外面に粘土付着
39住-1	土師器	1/4残	橙	口(14.0) 高(10.2)	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→内面及び体部外面ミガキ	柱穴内	内外面煤けた黒色処理
40住 1	土師器	口縁部1/3残	赤	口(13.2)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ		
42住-1	土師器	1/5欠	褐橙	口13.8 高4.7	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ	床直	内屈口縁坏
〃 2	土師器	1/4残	橙	口(13.8) 高4.2	〃	カマド内	内屈口縁坏
〃-3	土師器	体部中位以上1/2残	赤褐	口19.4	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→内面入念なミガキ	床直	

挿図番号	種類	残存	色調	大きさ(cm)	特徴	出土位置	備考
〃-4	土師器	胴部下半1/3欠	にぶい赤褐	口12.5 高16.4	口縁部ヨコナデ、胴部外面へラケズリ、胴部内面ヘラナデ	+5cm	
〃-5	土師器	胴部以上2/3残	赤褐	口24.6	〃	カマド内	
45住 1	須恵器	1/4残	暗灰	口(11.2) 体(13.4)	回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ	床直	
〃-2	土師器	口縁部ほぼ欠	橙	口(12.8) 高9.5	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→全面ミガキ	カマド内	内面黒色処理?
〃-3	土師器	1/4残	明黄褐	口(20.0) 底(7.2) 高(11.9)	〃	-4cm	
〃 4	土師器	1/2残	にぶい褐	口(20.2) 底6.6 高34.6	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、底部外面木葉痕、胴部内面ハケ	+6cm	
46住-1	須恵器	口縁部1/4残	灰	口(18.0) かえり(15.4)	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ	床直	
〃-2	土師器	胴部中位以上1/2残	橙	口23.0 胴(19.5)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	
〃-3	土師器	胴部中位以上1/2残	橙	口(24.5)	〃	床直 カマド内	
〃 4	鎌	刃部欠		基部幅3.1			レントゲン撮影
〃-5	砥石	一部残			磨り面あり		1177.3g 砂岩
47住 1	土師器	2/3残	橙	口12.8 高4.1	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ	+7cm	橙色土器
〃-2	土師器	口縁部3/4欠	橙	口(18.3) 脚11.4	口縁部及び脚裾部ヨコナデ・脚部上半内面ヘラケズリ→脚部内面を除き入念なミガキ	床直	坏部内面黒色処理
〃-3	土師器	ほぼ完形	にぶい橙	口14.1 高18.4	胴部内面ハケ→口縁部ヨコナデ・胴部外面ハケ・胴部内面ヘラナデ	床直	胴部外面剥落顕著
48住-1	土師器	1/4欠	明褐	口13.6 高4.3	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→内面ミガキ	カマド内	内屈口縁坏の模倣
〃 2	土師器	口縁部7/8欠	橙	口(11.7) 高3.8	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		内屈口縁坏
〃-3	土師器	口縁部1/3欠	明褐	口16.6 高11.4	口縁部ヨコナデ、体部以下外面ヘラケズリ、体部内面ヘラナデ	+15cm	内面黒色処理
〃-4	土師器	底部完形	橙	底11.0	外面及び内面下位ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→外面ミガキ	床直	
〃-5	土師器	底部完形	赤褐		外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ	カマド内	胎土は在地
〃-6	土師器	ほぼ完形	橙	口24.1 底6.3 高34.8	口縁部ヨコナデ、胴部以下外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	床直	胴部中位外面に粘土付着 直立可能
〃-7	土師器	口縁部2/3及び胴部中位以下きれいに欠	赤褐	口(18.8)	口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→胴部外面ミガキ	床直	外面全体に粘土付着
49住-1	土師器	2/3残	にぶい黄橙	口7.4 高4.3	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→ミガキ		内面黒色処理
〃-2	土師器	胴部以上1/2残	橙	口(8.4)	口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→ミガキ	床直	内(外)面保けた黒色処理
〃-3	須恵器	胴部上位以上1/4残	灰	口(18.2)	回転ナデ、胴部中位以下外面回転ヘラケズリ	カマド内	
〃-4	土師器	口縁部ほぼ完形	橙	口20.2	胴部外面ヘラケズリ・その他ハケ→口縁部ヨコナデ→胴部外面及び口縁部内面ミガキ	床直	精製土器
〃-5	土師器	口縁部ほぼ完形	明黄褐	口18.2	口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→胴部外面ミガキ	床直	
〃-6	土師器	体部下半1/5残	にぶい橙	底(10.6)	外面ハケ、内面ヘラナデ(後ミガキ?)		西方からの搬入品
〃-7	土師器	口縁部1/2残	橙	口24.6	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ		
〃 8	土師器	胴部以上2/3残	にぶい赤褐	口(23.6)	〃		
〃-9	土師器	口縁部1/2残	橙	口(22.1)	〃		
〃 10	土師器	口縁部完形	にぶい橙	口17.3	〃	床直	
〃-11	土師器	口縁部1/6残	橙	口(17.6)	口縁部ヨコナデ、胴部内外面ハケ		丸底甕域からの搬入品
〃 12	土師器	口縁部完形	橙	口17.4	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	床直	
〃-13	土師器	胴部上位以上完形	橙	口21.6	〃	床直	
50住-1	土師器	完形	にぶい黄橙	口11.6 体10.5 高4.0	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→内面ミガキ	+15cm	内面黒色処理
〃-2	土師器	1/4残	橙	口(10.7) 高3.2	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		内屈口縁坏
〃-3	土師器	4/5残	橙	口13.0 高4.3	〃		内屈口縁坏
〃-4	土師器	1/3残	灰黄褐	口(12.0) 体9.8 高(4.1)	〃	床直	有段口縁坏 全面保けた黒色処理
〃-5	土師器	口縁部1/8残	橙	口(17.0)	ヨコナデ→暗文		飛鳥皿Bか?
〃-6	土師器	口縁部1/2残	橙	口22.4	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド袖岩盤	
〃-7	土師器	口縁部1/3残	橙	口(20.0)	胴部外面及び頸部内面ハケ→口縁部ヨコナデ・胴部内面ヘラケズリ	カマド内	丸底甕域からの搬入品
〃-8	土師器	口縁部1/10残	橙	口(16.0)	ヨコナデ		丸底甕域からの搬入品
53住 1	土師器	完形	橙	口13.0 口5.0	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→内面ミガキ→暗文	床直	内面黒色処理
〃-2	土師器	1/3 残	橙	口(12.0) 高4.2	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		内屈口縁坏
〃-3	須恵器	ほぼ完形	灰	口13.3 かえり11.2 高2.5	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ		
〃-4	須恵器	口縁部2/3欠	灰	口(17.8) かえり15.6 高4.8	回転ナデ、天井部外面カキ目	カマド内	煙道部に転用
〃-5	土師器	胴部上位以上4/5残	橙	口23.0	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	煙道部に転用
〃-6	土師器	胴部上位以上完形	明赤褐	口23.4	〃	床直	製作者左利き

挿図番号	種類	残存	色調	大きさ(cm)	特徴	出土位置	備考
〃-7	紡錘車	一部欠?		長4.1 幅3.7 厚(1.3)		床直	(27.1g) 滑石
〃-8	石製品	先端部欠		長(10.0) 幅6.4 厚5.4	磨り面あり		(156.0g) 砂岩
55住-1	土師器	口唇部1/2欠	橙	口11.1 高5.7	口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ→ミガキ	+5cm	稚拙な土器
〃-2	土師器	口縁部1/3残	灰黄褐	口(13.8)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ		
〃-3	土師器	口縁部1/3残	橙	口(21.4)	〃		
〃 4	土師器	底部完形 胴部下位1/2残	灰褐	底5.8	口縁部ヨコナデ、胴部外面以下ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	+8cm	底部外面に粘土付着 直立可能
56住-1	土師器	1/2残	橙	口(12.0) 体11.4 高3.8	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		橙色土器
〃-2	土師器	口縁部1/2欠	橙	口11.4 体10.9 高3.4	〃		橙色土器
〃 3	土師器	1/4残	橙	口(13.0)	〃	カマド内	内屈口縁坏
〃-4	土師器	1/2残	明黄褐	口(13.0) 体(9.8) 高3.7	口縁部ヨコナデ→全面細いヨコミガキ		内湾口縁坏
〃-5	須恵器	完形	灰	口10.0 高3.3	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ		
〃-6	須恵器	完形	灰	口9.4 体11.4 高3.4	回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ	床直	歪みの著しい土器
〃-7	土師器	脚中空部完形 脚裾部1/8残	浅黄	脚(11.6)	脚裾部下位内面ハケ・外面ヘラケズリ→脚裾部ヨコナデ→外面ミガキ	支脚に転用	
〃 8	土師器	胴部上半1/3残	橙		外面及び頸部内面ハケ	袖内	丸底甕域からの搬入品
57住-1	土師器	1/3残	橙	口(13.0) 体(12.0) 高(3.5)	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		橙色土器
〃 2	土師器	1/4残	橙	口(10.6) 体(10.0) 高(3.5)	〃		橙色土器
〃-3	土師器	口縁部1/3残	橙	口(11.0) 体(10.6)	〃		橙色土器
〃-4	土師器	1/2残	橙	口11.6 高(3.3)	〃		橙色土器
〃-5	土師器	完形	橙	口12.0 高4.2	〃	床直	橙色土器
〃-6	土師器	口縁部1/3欠	明褐	口14.6 高5.6	〃	袖密着	内屈口縁坏
〃-7	須恵器	胴部以上1/4残	灰	口(6.4)	回転ナデ		実測図器形は信頼度低い
〃-8	土師器	完形	にぶい赤褐	口12.6 高11.0	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラナデ	−8cm	煮沸痕顕著
〃 9	土師器	胴部上半以上1/4残	橙	口(25.4)	〃	カマド内	
〃-10	土師器	胴部中位以上1/3残	にぶい黄橙	口(30.3)	口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→胴部外面ミガキ	床直	
〃-11	土師器	底部欠	橙	口18.2	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド袖	外面全体に粘土付着 稚拙な土器
〃-12	土師器	底部1/4残	暗灰黄	底(6.0)	胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ、底部外面木葉痕		直立可能
〃 13	土師器	底部完形	橙	底5.8	〃		直立可能
〃-14	土師器	口縁部1/2残			口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ		
58住-1	土師器	1/4残	橙	口(13.0) 高4.5	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→全面ヨコミガキ→暗文	+8cm	内面黒色処理
〃 2	土師器	胴部中位以上1/2残	にぶい橙	口(19.8)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデの後ハケ	+12cm	
〃-3	土師器	底部1/4残	橙	底8.2	外面ミガキ、内面ヘラナデ	床直	直立可能
〃-4	土師器	胴部中位以上1/2残	橙	口16.3	口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→胴部内面を除きミガキ	+ 8cm	
〃 5	土師器	口唇部1/3及び胴部下半以下欠	橙	口18.3	〃	床直	
〃-6	土師器	ほぼ完形	にぶい赤褐	口17.0 底9.0 高32.4	口縁部ヨコナデ・胴部外面以下ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→胴部内面及び底部外面を除きミガキ	+5cm	
〃-7	砥石	一部欠		幅12.5 厚3.7	磨り面あり	床直	(940.8g) 安山岩
〃-8	石製品	完形		長14.6 幅8.2 厚5.1	磨り面・敲打痕あり	+ 5cm	831.4g 〃
〃-9	石製品	完形		長10.0 幅6.0 厚4.0	磨り面・敲打痕あり	+20cm	314.0g 硬砂岩
59住-1	土師器	1/4残	にぶい黄橙	口(10.0) 高4.8	口縁部ヨコナデ→全面ミガキ	カマド内	全面黒色処理
〃-2	土師器	1/2残	にぶい黄橙	口(13.0) 高(4.7)	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→内面ミガキ	カマド内	内面黒色処理
〃-3	土師器	完形	橙	口11.3 体10.8 高3.7	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ	+4cm	橙色土器
〃 4	土師器	完形	橙	口10.4 高3.5	〃	床直	3枚重ねの最上段 内屈口縁坏
〃-5	土師器	2/5残	橙	口(13.6) 高(4.7)	〃	カマド内	内屈口縁坏
〃-6	土師器	1/3残	橙	口(13.0)	〃		内屈口縁坏
〃-7	土師器	完形	明褐	口15.0 高5.3	〃	床直	3枚重ねの最下段 内屈口縁坏
〃-8	土師器	完形	橙	口10.8 体10.8 高5.2	〃	床直	
〃 9	須恵器	完形	灰	口12.0 高3.4	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ	床直	
〃-10	須恵器	完形	灰白	口11.0 高3.9	〃	床直	3枚重ねの中段
〃 11	須恵器	つまみ部欠	灰	口13.4 かえり11.4	〃		
〃-12	須恵器	ほぼ完形	灰	口15.8 かえり13.4 高4.3	〃	+40cm	
〃 13	須恵器	1/3残	灰白	口(13.8) 高(4.5)	回転ナデ、底部外面手持ちヘラケズリ		
〃-14	土師器	口縁部1/8残	赤褐	口(13.6)	ヨコナデ→暗文		飛鳥坏C
〃-15	土師器	1/4残	赤褐	口(17.2) 高6.0	口縁部ヨコナデ・体部以下外面ヘラケズリ→体部内外面ミガキ→暗文		飛鳥坏A

挿図番号	種類	残存	色調	大きさ(cm)	特徴	出土位置	備考
〃-16	須恵器	口縁部一部欠 胴部1/5 欠	灰黄	口22.1 高(42.5)	回転ナデ・底部付近ヘラナデの後胴部タタキ→文様	床直	
〃 17	須恵器	口縁部1/2・脚裾部1/3 欠	灰	口(8.0) 脚12.0 高25.9	回転ナデ、胴部下位外面回転ヘラケズリ	床直 +30cm	
〃-18	土師器	2/3残	明黄褐	口(7.5) 高(5.9)	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→ミガキ		内面黒色処理
〃-19	土師器	脚裾部完形	橙	脚11.2	ヘラケズリ→脚裾部ヨコナデ	床直	
〃-20	土師器	脚部ほぼ完形	淡黄	脚10.4	脚裾部ヨコナデ・中空部ヘラケズリ→外面及び坏部内面ミガキ		坏部内面黒色処理
〃-21	須恵器	脚部上半完形	灰		回転ナデ	床直	
〃-22	須恵器	口縁部1/4残	灰白	口(12.0)	回転ナデ		
〃-23	須恵器	脚裾部2/5・坏部欠	灰白	脚(7.6)	回転ナデ		
〃-24	土師器	胴部上位以上1/2残	黄橙	口22.4	口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→胴部外面及び口縁部内面ミガキ	床直	
〃-25	土師器	ほぼ完形	にぶい赤褐	口25.7 高(37.6)	口縁部ヨコナデ、胴部以下外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	天井部内	外面に粘土付着
〃-26	土師器	ほぼ完形	赤褐	口22.6 底5.0 高34.6	〃	カマド左	
〃-27	土師器	ほぼ完形	橙	口23.0 底4.4 高36.0	〃	天井部内	外面に粘土付着
〃-28	土師器	ほぼ完形だが胴部と底部は接合せず	橙	口23.5 底4.6 高(36.5)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ、底部外面木葉痕	カマド構築材	外面に粘土付着 直立可能
〃-29	土師器	口縁部一部欠 胴部下半以下欠	にぶい橙	口22.6	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	床直	外面全体に粘土付着 貯蔵穴に転用？
〃-30	土師器	口縁部1/2残	にぶい赤褐	口22.4	〃		
〃-31	土師器	口縁部1/3残	明赤褐	口(23.2)	〃	カマド内	
〃 32	土師器	胴部以上3/4残	にぶい黄橙	口(21.6)	〃	カマド構築材	
〃-33	土師器	胴部中位以上3/4残	にぶい黄橙	口23.5	〃	カマド内 ・25cm	胴部中位外面に粘土付着
〃-34	土師器	完形	橙	口15.3 底4.6 高27.0	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、底部外面不明、胴部内面ハケ後下位ヘラケズリ	カマド右	
〃-35	土師器	底部1/2欠	橙	口11.2 底5.3 高18.5	口縁部ヨコナデ、胴部外面以下ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ後ミガキ	床直	
〃-36	土師器	完形	にぶい赤褐	口14.4 高13.6	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	床直	
〃 37	土師器	口縁部欠 胴部～頸部1/4・底部3/4 残	黄灰	高(18.5)	口縁部内面ハケ後口縁部ヨコナデ、胴部以下外面ヘラケズリの後胴部上半外面ハケ、胴部内面ヘラナデ		西方からの搬入品
〃-38	土師器	胴部上位以上1/3残	橙	口(18.0)	口縁部ヨコナデ、胴部ハケ		丸底甕域からの搬入品
〃-39	土師器	胴部以上4/5残	黄橙	口15.4	外面及び口縁部内面ハケ後口縁部ヨコナデ、胴部内面ヘラケズリ		丸底甕域からの搬入品
〃-40	土師器	胴部以上2/3残	にぶい黄橙	口(14.4)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケ後下半ヘラケズリ、胴部内面ハケ後ヘラナデ		丸底甕域からの搬入品
〃-41	砥石	完形		長6.8 幅4.5 厚4.0	磨り面あり		138.9g 凝灰岩
〃-42	石製品	一部欠		長15.2 幅10.7 厚7.9	磨り面あり		(742.1g) 多孔質安山岩
〃-43	石製品	完形		長16.0 幅7.8 厚4.0	磨り面あり		774.0g 安山岩
〃-44	石製品	一部欠		幅6.8 厚5.3	磨り面・凹み痕あり	床直	(520.3g) 〃
〃-45	石製品	完形		長9.4 幅6.1 厚4.1	磨り面あり	床直	248.3g 〃
60住-1	土師器	口縁部1/5残	にぶい黄	口(13.2) 体(11.2)	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→ミガキ	床直	内面黒色処理
〃-2	土師器	口縁部1/4残	赤褐	口(22.6)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	床直	
〃-3	土師器	胴部中位以下2/3残	橙	底6.2	胴部外面ヘラケズリ・底部外面ユビナデ？・胴部内面ヘラナデ→胴部外面ミガキ	床直	
61住-1	石製品	一端欠		幅7.1 厚6.9	磨り面・敲打痕あり	−10cm	574.0g 安山岩
62住-1	土師器	2/5残	にぶい赤褐	口(21.4) 底(9.4) 高22.7	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデの後底部付近ヘラケズリ	+4cm	
63住-1	土師器	1/3残	橙	口(23.0) 底(11.0) 高26.8	口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデの後底部付近ヘラケズリ→ミガキ	カマド内	破損後の二次焼成痕あり
〃 2	土製品	周縁部一部欠	明赤褐	長(6.9) 厚1.4	ユビナデ	カマド内	(55.8g)
64住-1	土師器	完形	橙	口12.4 高4.0	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ	カマド内	内屈口縁坏
〃 2	土師器	1/4残	橙	口(12.4) 高4.0	〃		内屈口縁坏
〃-3	土師器	口縁部1/4残	橙	口(13.0)	〃		内屈口縁坏
〃 4	土師器	口縁部1/2欠	橙	口13.7 高4.1	〃		内屈口縁坏
〃-5	土師器	口縁部1/4残	橙	口(17.2)	〃		内屈口縁坏
〃 6	土師器	口縁部1/4残	にぶい黄橙	口(16.0)	ヨコナデ→外面ミガキ・内面暗文	貯蔵穴	搬入品だが地域不明
〃-7	須恵器	1/4残	灰白	口(10.0) 底(7.6)	回転ナデ、底部外面手持ちヘラケズリ		
〃 8	須恵器	1/3残	灰	口(10.0)	回転ナデ、底部回転ヘラ切り		
〃-9	須恵器	口縁部一部欠 つまみ部欠	灰	口14.3 かえり11.4	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ		
〃-10	須恵器	口縁部欠	灰		〃		
〃-11	須恵器	口縁部1/2欠	灰	口(20.4) かえり(18.0) 高4.0	〃	床直	
〃-12	須恵器	2/5残	灰	口(21.6) かえり(18.6) 高2.8	〃		

挿図番号	種別	残存	色調	大きさ(cm)	特徴	出土位置	備考
〃-13	土師器	口縁部4/5残	橙	口24.6	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	
〃-14	土師器	胴部中位以上4/5残	にぶい褐	口22.7	〃	床直	
〃-15	土師器	胴部以上4/5残	橙	口22.3	〃	床直	頸部外面に粘土付着 貯蔵穴に転用？
〃-16	鎌	刃部欠		基部幅3.3			レントゲン撮影
〃-17	石製品	完形		長16.1 幅6.9 厚3.5	磨り面・敲打痕あり		663.3g 安山岩
65住-1	土師器	1/5残	橙	口(14.2) 高(4.2)	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→ミガキ		内面黒色処理
〃-2	土師器	2/3残	にぶい赤褐	口11.0 高3.2	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		内屈口縁坏
〃-3	土師器	完形	橙	口11.4 高3.2	〃	カマド内	内屈口縁坏
〃-4	土師器	1/4残	橙	口(11.8) 高3.6	〃		内屈口縁坏
〃-5	土師器	口縁部1/6欠	橙	口12.8 高4.3	〃		内屈口縁坏
〃-6	土師器	1/6残	橙	口(17.0) 高(6.5)	〃	カマド内	構築材に転用 内屈口縁坏
〃-7	須恵器	口縁部1/2残	灰	口(20.0) かえり(17.2)	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ		
〃-8	須恵器	1/4残	灰白	口(15.8) 高(4.8)	回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ		
〃-9	須恵器	口縁部1/4欠	灰	口16.0 台10.8 高4.1	〃		
〃-10	須恵器	1/2残	灰	口(13.0) 台9.4 高3.8	〃		
〃-11	土師器	脚裾部1/3・坏部欠	橙	脚7.4	坏部内面を除きヘラケズリ・脚裾部ヨコナデ→坏部内面ミガキ		坏部内面黒色処理
〃-12	土師器	口縁部1/4残	にぶい黄橙	口(13.0)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	
〃-13	土師器	胴部上位以上4/5残	橙	口14.4	〃		
〃-14	土師器	胴部中位以上完形	橙	口15.9	〃	支脚転用	
〃-15	土師器	口縁部2/3残	褐	口21.5	〃	カマド内	
〃-16	土師器	口縁部3/5残	橙	口22.2	〃	カマド内	外面に粘土付着 カマド構築材に転用？
〃-17	土師器	胴部中位以上4/5残	明赤褐	口22.0	〃	カマド内	
67住-1	土師器	坏部1/2残	橙	口13.8	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→ミガキ		内面黒色処理
〃-2	土師器	脚部完形	橙	脚12.2	脚裾部ヨコナデ・その他外面及び脚部上半内面ヘラケズリ→脚部内面を除きミガキ	支脚に転用	脚部下半外面に粘土付着
〃-3	土師器	胴部以上ほぼ完形	にぶい赤褐	口27.6	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	−15cm	甑形土器
〃-4	土師器	胴部以上1/3残	にぶい赤褐	口(23.5)	口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→ミガキ	床直	北武蔵型甕
〃-5	土師器	胴部上位以上1/2残	褐	口25.4	口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→胴部外面ミガキ	+5cm	
〃-6	土師器	底部完形	赤褐	底4.0	胴部外面ヘラケズリ、底部外面不明、胴部外面ヘラナデ	床直	自立可能
〃-7	土師器	胴部上位以上1/5残	にぶい黄橙	口(13.4)	胴部ハケ→口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ		丸底甕域からの搬入品
70住-1	須恵器	口縁部完形 胴部上半1/3残	灰	口29.4	回転ナデ・外面及び胴部内面タタキ→胴部内面ハケ	床直	
〃-2	須恵器	1/6残	灰白	口(14.0) 高(4.4) 内底(9.2)	回転ナデ、底部外面手持ちヘラケズリ	カマド内	
71住-1	土師器	胴部下半ほぼ完形	橙		外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ	床直	外面全体に粘土付着 貯蔵穴に転用
〃-2	土師器	底部完形	にぶい赤褐	底6.1	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ	床直	
72住-1	須恵器	口縁部完形	黒	口21.4	回転ナデ、口縁部外面ハケ、胴部内面タタキ	ピット内	
〃-2	須恵器	口縁部完形	灰	口11.4	回転ナデ	床直	
73住-1	土師器	1/3残	赤褐	口(12.0) 高3.8	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→ミガキ		内面黒色処理
〃-2	土師器	口縁部1/2欠	浅黄橙	口11.3 高4.7	〃	＋4cm	内面黒色処理
〃-3	土師器	口縁部1/3残	橙	口(11.5)	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		
〃-4	須恵器	1/3残	黄灰	口(12.0) 高(4.5)	回転ナデ、底部外面手持ちヘラケズリ		
〃-5	土師器	口縁部1/3・脚裾部欠	橙	口15.8	口縁部ヨコナデ・体部以下外面及び脚部内面ヘラケズリ→口縁部外面及び坏部内面ミガキ	床直	坏部内面黒色処理
〃-6	土師器	胴部中位以上1/4残	浅黄	口(26.0)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	煙道部	外面に粘土付着 実測図器形は信頼度低い
〃-7	土師器	口縁部1/3残	橙	口(18.6)	〃		
〃-8	土師器	口縁部1/2残	橙	口22.4	〃		
〃-9	土師器	胴部中位以上4/5残	橙	口(17.9)	〃	+18cm	胴部中位外面に粘土付着 実測図器形は信頼度低い
〃-10	土師器	口縁部1/8残	橙	口(15.8)	ハケ→ヨコナデ		丸底甕域からの搬入品
〃-11	土師器	胴部中位以上1/4残	にぶい黄橙	口(14.2)	胴部ハケ→胴部内面ヘラナデ・口縁部ヨコナデ		丸底甕域からの搬入品
74住-1	土師器	胴部中位以上3/4残	にぶい黄橙	口22.8	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内	+25cm	胴部外面に粘土付着
75住-1	石製品	破片部一部欠		幅15.6 厚9.6	研磨された円面あり		(809.0g) 軽石
76住-1	土師器	1/3残	橙	口(21.4) 高4.0	口縁部ヨコナデ・体部から底部外面ヘラケズリ→体部外面及び内面ミガキ		須恵器鉢の模倣
〃-2	土師器	胴部以上1/3残	にぶい赤褐	口(16.0)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ		

挿図番号	種類	残存	色調	大きさ(cm)	特徴	出土位置	備考
〃-3	土師器	胴部以上ほぼ完形	明褐	口22.3	〃	床直	胴部中位外面に粘土付着
〃-4	砥石	完形		長11.1 幅7.8 厚4.1	磨り面あり		321.8g 凝灰岩
〃-5	鉄斧	刃部一部欠		長5.3 刃部幅(2.2) 着柄部幅2.3			
77住 1	土師器	口縁部1/3残	橙	口(14.0)	口縁部ヨコナデ・底部外面ヘラケズリ→ミガキ		内面黒色処理
〃-2	土師器	口縁部1/3残	明褐	口(14.0) 体(12.4)	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		内外面煤けた黒色処理 有段口縁坏
〃-3	土師器	底部1/3残	橙	底8.0	外面ヘラケズリの後ミガキ、内面ヘラナデ	貯蔵穴内	自立可能
〃 4・5	丸玉	完形	黒	径0.7 ~0.8 厚0.5 ~0.6			0.75g(2個)
78住-1	土師器	口縁部欠	橙		口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		内面黒色処理
〃 2	土師器	口縁部一部残	赤	口(11.2)	ヨコナデ		比企型坏・赤彩 実測図口径は信頼度低い
〃-3	土師器	胴部下半以下1/2残	にぶい橙	底8.4	外面ヘラケズリ・内面ヘラナデ→ミガキ	床直	
〃-4	土師器	底部完形	橙	底6.0	外面ヘラケズリ・内面ハケ→底部外面を除きミガキ	床直	煮沸痕あり
〃-5	土師器	底部1/2残	明赤褐	底7.5	外面ヘラケズリ・内面ヘラナデ→ミガキ		自立可能
〃-6	土師器	胴部下半以下4/5残	にぶい赤褐	底6.0	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ		外面全体に粘土付着 貯蔵穴に転用？ 自立可能
〃-7	砥石	一端欠		幅2.9 厚2.5	磨り面あり		(107.9g) 凝灰岩
〃-8	砥石	一端欠		幅3.7 厚2.0	磨り面あり		(68.7g) 〃
79住 1	土師器	口縁部1/4残	赤褐	口(14.0)	回転ナデ、底部付近外面ヘラケズリ、内面ミガキ	カマド内	内面黒色処理
〃-2	須恵器	口縁部1/4欠	灰	口13.6 底6.8 高3.7 内底7.1	回転ナデ、底部回転糸切り		軟質須恵器
〃-3	土師器	胴部中位以上2/3残	赤褐	口20.7 胴22.5	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	煙道部に転用
〃 4	土師器	口縁部完形	橙	口21.2 胴21.5	〃	カマド内	煙道部に転用
〃-5	土師器	口縁部4/5残	橙	口19.7 胴21.8以上	〃	カマド内	煙道部に転用
80住-1	土師器	2/5残	明赤褐	口(14.0) 体(13.0) 高(4.8)	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→ミガキ		
82住-1	土師器	ほぼ完形	浅黄	口15.0 高4.2	口縁部ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ→内面ミガキ	床直	
〃-2	土師器	口縁部1/5残	橙	口(13.8) 体(13.0)	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		全面煤けた黒色処理 搬入品か？
〃-3	須恵器	口将部欠	灰		回転ナデ、底部外面手持ちヘラケズリ→ハケ		
〃-4	土師器	完形	橙	口5.6 高5.3	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ・体部内面ヘラナデ→外面ミガキ	床直	
〃-5	鉄製品	一部欠		長4.8			レントゲン撮影
〃-6	砥石	一部欠		長18.4 幅16.0 厚4.5	磨り面・凹み痕あり	床直	(2132.9g) 安山岩
〃-7	須恵器	口縁部1/3欠	灰白	口13.3 高3.8 内底8.2	回転ナデ、底部回転糸切りの後周縁部手持ちヘラケズリ		
〃-8	須恵器	口縁部3/5欠	灰	口(14.4) 脚9.0 高4.2	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ		
〃 9	須恵器	天井部完形	灰		回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ		
83住-1	須恵器	口縁部2/5欠	灰	口11.7 かえり9.6 高3.0	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ		
〃-2	土師器	口縁部完形 胴部1/2 残	明赤褐	口20.6	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヨコナデ	−4cm カマド内	
84住 1	土師器	口縁部1/5欠	黒	口12.2 高6.8	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→ミガキ	床直	全面黒色処理
〃-2	土師器	脚部欠	赤褐	口9.6	口縁部ヨコナデ、体部以下外面ヘラケズリ、体部内面及び脚部内面ヘラナデ	床直	内面黒色処理
〃-3	土師器	ほぼ完形	橙	口11.2 高10.6	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→ミガキ	床直	全面煤けた黒色処理
〃-4	須恵器	口縁部7/8欠	オリーブ灰	口(7.4) 高10.9	回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ	+30cm	
〃-5	須恵器	口縁部1/2残	赤灰	口(10.0)	回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ	+14cm	
85住-1	土師器	胴部上位以上4/5残	暗赤	口13.6	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	床直	
〃-2	土師器	胴部上位以上1/4残	暗赤褐	口(16.2)	〃		
〃 3	土師器	底部完形	にぶい褐	底6.3	胴部外面ヘラケズリ、底部外面ナデ、胴部内面ヘラナデ	床直	自立可能 外面全体に粘土付着
〃-4	鉄製品	両端欠		厚0.4			
89住-1	土師器	口縁部2/5残	赤褐	口19.2	口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→胴部内面を除き入念なミガキ		
〃 2	土師器	胴部中位以上4/5残	にぶい赤褐	口20.0	口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→外面入念なミガキ	床直	
90住 1	土師器	2/3残	橙	口12.0 体10.8 高4.1	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		橙色土器
〃-2	土師器	ほぼ完形	赤褐	口16.3 底8.0 高16.5	口縁部ヨコナデ・胴部以下外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→胴部内面を除き入念なミガキ	床直	自立可能 貯蔵穴に転用？
〃-3	土師器	胴部以上1/2残	にぶい赤褐	口25.4	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	口縁部に刻み目あり カマド構築材に転用？
〃 4	土師器	胴部下半ほぼ完形	にぶい赤褐		外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ	カマド内	胴部中位外面に粘土付着
〃-5	土師器	胴部中位以上1/2残	にぶい赤褐	口(19.6) 底6.4 高22.0	口縁部ヨコナデ、胴部以下外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	
〃-6	土師器	口縁部1/3残	にぶい黄褐	口(21.6)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	

挿図番号	種類	残存	色調	大きさ(cm)	特徴	出土位置	備考
91住-1	土師器	2/3残	橙	口12.3 体13.6 高4.3	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		全面煤けた黒色処理
〃-2	土師器	坏部欠 脚裾部1/3欠	明赤褐	脚10.2	脚裾部ヨコナデ・その他坏部内面を除きヘラケズリ→坏部内面ミガキ		坏部内面黒色処理
〃 3	土師器	口縁部1/2残	にぶい黄橙	口16.0	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	
〃-4	砥石	一端欠		幅4.2 厚3.5	磨り面あり		(178.8g) 凝灰岩
1井戸-1	須恵器	1/3残	灰	口(13.0) 高4.5	回転ナデ、底部回転ヘラ切り		
〃 2	須恵器	口縁部1/3欠	灰	口13.0 底8.2 高3.4 内底7.7	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ		
1溝-1	土師器	1/3残	浅黄	口(13.0) 高4.6	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→内面ヨコミガキ→内面暗文		内面黒色処理
〃-2	土師器	口縁部1/8残	橙	口(14.0)	口縁部ヨコナデ→外面ミガキ・内面暗文		西方からの搬入品
〃 3	土師器	脚部1/8残	橙	脚(14.0)	内外面ヨコナデ→内面暗文		西方からの搬入品
〃-4	須恵器	口縁部1/4残	灰	口(11.4)	回転ナデ		
〃 5	須恵器	1/4残	灰	口(14.8) 高2.8	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ		
〃-6	須恵器	口縁部1/4残	灰赤	口(10.0)	回転ナデ		
〃-7	土師器	脚部完形	橙	脚8.8	脚裾部ヨコナデ・その他脚部内外面ヘラケズリ→坏部内面ミガキ		坏部内面黒色処理
〃 8	石製品	完形		長12.4 幅6.6 厚4.3	上下2面に磨り面あり		499.6g 安山岩
2溝-1	土師器	1/2残	にぶい黄橙	口(12.6) 高4.7	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→内外面ヨコミガキ		
3溝-1	土師器	口縁部1/5残	橙	口(23.8)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ		
〃-2	土師器	坏部1/3破片	橙	口(14.6)	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→全面ミガキ		内面黒色処理
〃-3	須恵器	口縁部2/5残	灰	口(16.0)	回転ナデ		
〃-4	須恵器	1/2残	灰	口(14.0) 台10.0 高4.0	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ		
4溝-1	土師器	1/4残	橙	口(12.0) 高(3.7)	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→内面ミガキ		内面黒色処理
〃-2	須恵器	底部3/5残	灰	台14.8	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ		
1流-1	土師器	1/3残	浅黄	口(14.0) 高4.0	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→内面ミガキ		内面黒色処理
〃-2	石製品	完形		長7.0 幅6.6 厚2.5	全面に研磨痕あり		73.6g 砥石

第12表 下前田原遺跡群 古代遺物観察表

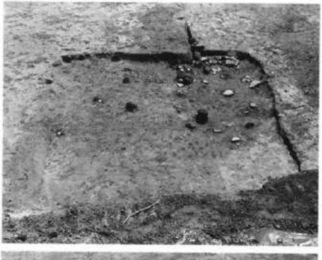
挿図番号	種類	残存	色調	大きさ(cm)	特徴	出土位置	備考
1住-1	土師器	口縁部2/3残	橙	口17.0 体11.4	口縁部ヨコナデ・体部外面ヘラケズリ→体部外面を除きヨコミガキ→内面暗文		
〃-2	土師器	1/3残	浅黄	口(11.8) 高4.8	口縁部ヨコナデ・底部外面ヘラケズリ→全面雑なヨコミガキ		
〃-3	土師器	口縁部1/3・底部欠	橙	口30.0	口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→胴部外面ミガキ	I 12cm	
〃-4	土師器	1/2残	橙	口(13.2) 高(19.8)	口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・胴部内面ヘラナデ→胴部内面を除きミガキ	床直	
〃-5	土師器	1/4残	明赤褐	口(13.2) 底(6.6) 高12.2	口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ・底部外面木葉痕・胴部内面ヘラナデ→底部外面を除きミガキ		直立可能 整然き飯溜若
〃-6	土師器	ほぼ完形	赤	口13.9 底5.3 高20.9	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、底部外面木葉底の後ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	床直	直立可能
〃 7	石製品	完形		長6.7 幅3.7 厚1.3	上端に研磨痕、表裏及び一側面に磨耗痕有り		50.2g 粘板岩?
〃-8	石製品	完形		長16.5 幅9.0 厚4.1	二側面に磨耗痕有り	床直	995.4g 安山岩
〃 9	耳環	完形(芯材のみ)		外縦(1.4) 外横(1.6)			
2住-1	土師器	底部完形	明黄褐	底8.6	胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ、底部外面木葉痕	床直	直立可能
3住-1	須恵器	坏部1/4残	灰	口(12.0)	回転ナデ、外面下半回転ヘラケズリ		

写 真 図 版

西方上空から見た遺跡全景

左　1号竪穴住居跡

右　同　カマド



左　2号竪穴住居跡

右　同　カマド

左　3号竪穴住居跡
遺物出土状態

右　3号竪穴住居跡

左　3号竪穴住居跡
カマド天井部

右　同　基部

左　4号竪穴住居跡

右　5号竪穴住居跡

左　溝状遺構

右　同　断面

1号竪穴住居跡出土土器

1

3

4

11

5

6

7

12

13

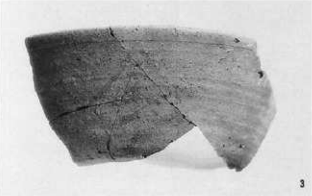
3 号竪穴住居跡出土土器

1

5

2

8


3

10

4 号竪穴住居跡出土土器

2

6

12

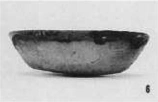
3

7

5 号竪穴住居跡出土土器

1

4

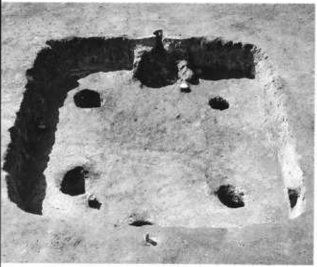

6

7

8

西方上空から見た栗毛坂遺跡群・長土呂遺跡群全景

遺跡全景



左　1号竪穴住居跡

右　同　カマド

左　1号竪穴住居跡
　　掘方

右　2号竪穴住居跡

左　3号竪穴住居跡

右　同　掘方

左　3号竪穴住居跡
　　カマド

右　4号竪穴住居跡
　　カマド

左　4号竪穴住居跡

右　同　掘方

左　5号竪穴住居跡

右　同　掘方

左　同　カマド

右　同　カマド掘方

同　遺物出土状態